富士市埋蔵文化財調査報告　第74集

静岡県　富士市

須津 千人塚古墳

2022年3月

富士市教育委員会

千人塚古墳　出土遺物集合

千人塚古墳を上空から望む（南から）

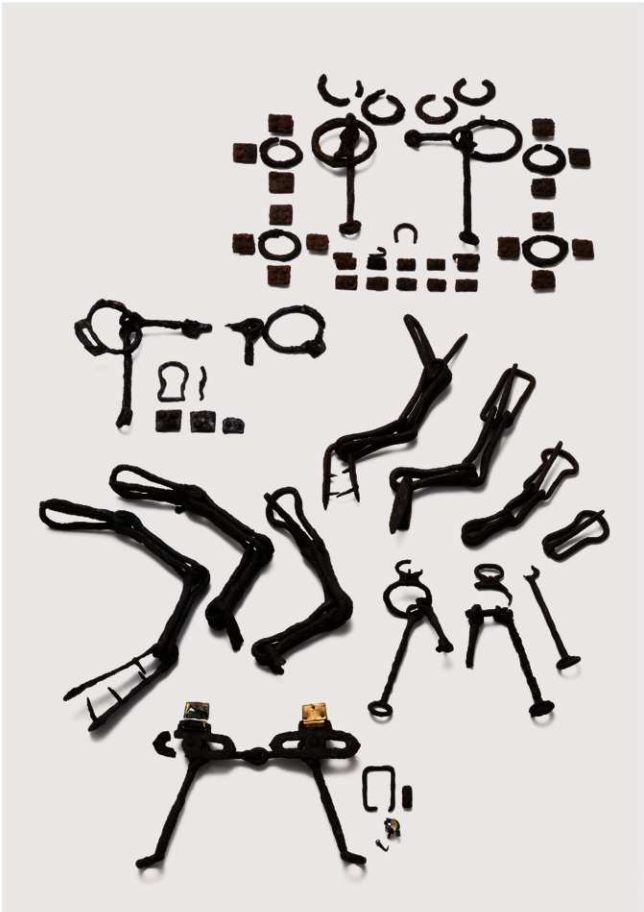
千人塚古墳　石室内部（開口部側から）

千人塚古墳　石室内部（奥壁側から）

中里大久保古墳（K-95 号墳）、中里 K-97・98・99 号墳　出土遺物集合

中里大久保古墳（K-95 号墳）　出土遺物集合

中里 K-99 号墳　出土遺物集合



千人塚古墳、中里大久保古墳（K-95 号墳）、中里 K-98・99 号墳　出土馬具集合

中里大久保古墳（K-95 号墳）、中里 K-97・98・99 号墳　出土土器集合

例　言

1　本書は、静岡県富士市神谷字大塚において実施した富士市指定史跡・千人塚古墳の発掘調査にかかわる報告である。
発掘調査は住宅建設に先立つ確認調査（1次調査）および史跡の保存整備のための保存活用目的調査（2～4次調査）として、富士市教育委員会が実施した。

2　発掘調査は、1次調査を平成9年（1997年）7月1日から7月3日、2次調査を平成14年（2002）8月1日から平成15年（2003）2月3日、3次調査を平成18年（2006）7月14日から7月25日、4次調査を平成19年（2007）2月5日から2月28日にかけて実施した。
調査面積は1次調査が122㎡、2次調査が17㎡、3次調査が12㎡、4次調査が20㎡である。

3　本報告書刊行に向けた整理作業は、令和3年（2021年）4月1日に開始し、本書の刊行をもって終了した。

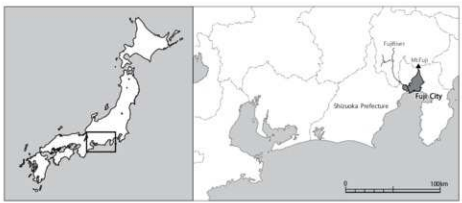
4　本書の編集は藤村　翔（富士市市民部文化振興課主査）・若林美希（同文化財調査員）がおこなった。
執筆は、第1～4章、第5章第2節、第6章を藤村が担当した。第5章では大谷宏治（静岡県スポーツ・文化観光部文化局文化財課：第1節）、井上卓哉（富士市市民部文化振興課：第3節）の各氏より玉稿を賜った。

5　現地調査における記録写真撮影は調査担当者による。
整理作業における遺物写真は、遺物単体写真を佐藤祐樹（富士市市民部文化振興課主査）、集合写真を藤村が撮影した。

6　本書で報告した調査に関わる記録図面・出土遺物等の資料は、すべて富士市教育委員会で保管している。
今後、富士山かぐや姫ミュージアム（富士市立博物館）に移管する予定でいる。

7　本書の作成にあたり、次の方々にご協力とご指導を賜りました。厚く御礼申し上げます。（敬称略、五十音順）

阿部 泰郎	阿部 美香	大高 康正	小田 裕樹	河合　修	河内 一浩	菊池 吉修
金　宇大	木村　聡	栗林 誠治	小崎　晋	小林　淳	狭川 真一	庄田 慎矢
鈴木 一有	滝沢　誠	田村 隆太郎	寺前 直人	豊島 直博	中岡 敬善	仁藤 敦史
深澤 敦仁	堀内 秀樹	三舟 隆之	宮代 栄一	村瀬　陸	森川　実	若狭　徹



静岡県富士市の位置

凡　例

1　千人塚古墳の埋蔵文化財包蔵地管理上の正式な古墳群名称は神谷古墳群、古墳名称は須津 J- 第 10 号墳（千人塚古墳）である。ただし、学術的・研究史的には第 2 章第 3 節で示した通り、広義の「須津古墳群」に属すると考えている。したがって古墳名の前に「須津」を付して表現する場合もあるが、基本的には煩雑を避けて単に「千人塚古墳」と表記する。また、富士市内の須津 J- 第○号墳、船津 L- 第○号墳などが正式名称の古墳を参照する場合、第 1 ～ 4 章、第 5 章 2 節、第 6 章の本文中では「第」を省略し、須津 J- ○号墳、船津 L- ○号墳と表記する。

2　座標は任意座標を使用した調査であるが、全体図等は平面直角座標第Ⅶ系を用いた国土座標、世界測地系（平成 14 年 4 月施行）を使用している。

3　挿図の縮尺は、各図に添付したスケールで示す。写真図版の縮尺はすべて任意である。

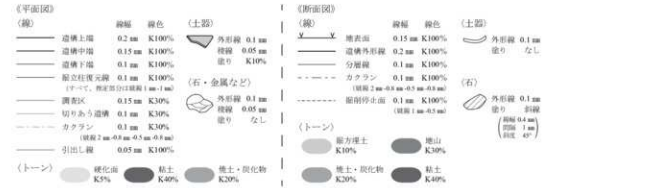
4　土器の実測図では、断面を以下のように表現することで種類の違いを示した。

土師器　□　須恵器　■　陶器　▨

5　土層・遺物の色調は『標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議局監修）に準拠した。

6　遺構・遺物ともに、法量の（　）は残存値、〔　〕は推定値である。また、土器の残存率は図示中での残存率を示した。

7　遺構図は、以下の基準に則り記載した。



8　古墳時代から奈良時代の土器の評価については、主として次の文献に基づいて検討した。

佐藤祐樹　2021「東駿河における古墳時代の土器様相」『向坂鋼二先生米寿記念論集―地域と考古学Ⅱ』向坂鋼二先生米寿記念論集刊行会

鈴木敏則　1998「古墳時代土器編年の概要」『梶子北遺跡』遺物編（本文）　静浜松市文化協会

鈴木敏則　2004「静岡県下の須恵器編年」『有玉古窯』浜松市教育委員会

田辺昭三　1981『須恵器大成』角川書店

奈良文化財研究所・歴史上器研究会　2019『飛鳥時代の土器編年再考』奈良文化財研究所・歴史土器研究会共催シンポジウム

藤村　翔　2021「駿河国富士郡における土器様相」『向坂鋼二先生米寿記念論集―地域と考古学Ⅱ』向坂鋼二先生米寿記念論集刊行会

9　古墳出土遺物については、上記文献に依拠した以下の時期区分を基に記述した。なお、帰属時期を表記する場合、在地的な須恵器や金属製品は遠江編年、土師器は駿河東部編年を用い、陶邑編年・宮都編年を併記している。

年代	475	500	550	600	650	700	750	800
時期区分	TK23・47	MT15	TK10	TK43	TK209	飛鳥Ⅰ（後）	飛鳥Ⅱ	飛鳥Ⅲ・Ⅳ	富士Ⅰ	富士Ⅱ	富士Ⅲ
土師器	安久Ⅱ	安久Ⅲ	安久Ⅳ	沢東Ⅰ	沢東Ⅱ	富士Ⅰ	富士Ⅱ	富士Ⅲ
遠江	Ⅰ後	Ⅱ	Ⅲ前	Ⅲ中	Ⅲ後	Ⅲ末	Ⅳ前／Ⅳ後／Ⅳ末	Ⅴ前・後
陶邑	TK23・47	MT15	TK10	TK43	TK209	（TK217・46）
宮都	飛鳥Ⅰ	飛鳥Ⅱ／Ⅲ／Ⅳ	平城Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ・Ⅶ

目　次

例　言
凡　例
目　次

第 1 章　調査経緯と経過
第 1 節　発掘調査の経緯と経過 …… 1
第 2 節　整理作業の経緯と経過 …… 5
第 3 節　調査の体制 …… 6

第 2 章　立地と環境
第 1 節　地理的環境 …… 7
第 2 節　歴史的環境 …… 8
第 3 節　須津古墳群の概要 …… 12

第 3 章　千人塚古墳の調査成果
第 1 節　墳丘 …… 25
第 2 節　埋葬施設 …… 29
第 3 節　出土遺物 …… 39

第 4 章　中里 K 支群の再整理
第 1 節　古墳をめぐる環境 …… 53
第 2 節　中里大久保古墳（中里 K-95 号墳） …… 53
第 3 節　中里 K-97 号墳 …… 68
第 4 節　中里 K-98 号墳 …… 72
第 5 節　中里 K-99 号墳 …… 80
第 6 節　出土地不明の遺物 …… 90

第 5 章　考　察
第 1 節　須津古墳群における馬具副葬古墳被葬者の性格　（大谷 宏治） …… 93
第 2 節　愛鷹山古墳群の被葬者集団とその生産基盤　（藤村 翔） …… 113
第 3 節　千人塚古墳石室奥壁の刻文について　（井上 卓哉） …… 131

第 6 章　総　括 …… 135

出土遺物観察表

写真図版

報告書抄録

挿図目次

第1章　調査経緯と経過

第1節　発掘調査の経緯と経過

第1図　千人塚古墳　位置図 …… 1

第2図　須津古墳群　古墳分布図 …… 2

第3図　須津古墳群　周辺古墳分布図 …… 3

第4図　調査トレンチ配置図およびボーリング柱状図 …… 4

第3節　調査の体制

第5図　千人塚古墳全景（直上、北から）…… 6

第6図　4次調査　現地視察の様子 …… 6

第2章　立地と環境

第1節　地理的環境

第7図　地形区分図 …… 7

第2節　歴史的環境

第8図　浅間古墳　墳丘測量図 …… 9

第9図　愛鷹山南麓古墳・集落分布図（西）…… 10

第10図　愛鷹山南麓古墳・集落分布図（東）…… 11

第3節　須津古墳群の概要

第11図　中里・神谷支群　調査履歴図 …… 12

第12図　天神塚古墳・寺屋敷古墳・琴平古墳 …… 15

第13図　千人塚古墳　墳丘全景 …… 16

第14図　千人塚古墳　開口部 …… 16

第15図　千人塚古墳　石室実測図 …… 16

第16図　須津古墳群　石室と出土遺物実測図（1）…… 17

第17図　中里・神谷支群古墳分布図（西）…… 18

第18図　中里・神谷支群古墳分布図（東）…… 19

第19図　須津古墳群　石室と出土遺物実測図（2）…… 20

第3章　千人塚古墳の調査成果

第1節　墳丘

第20図　墳丘と3次・4次調査トレンチ　平面図・セクション図 …… 26

第21図　トレンチ配置図および1次調査セクション図 …… 27

第22図　3次調査1Tr・4次調査2Tr　平面図・セクション図 …… 28

第2節　埋葬施設

第23図　石室内土層模式図 …… 29

第24図　石室展開図 …… 31

第25図　石棺1　平面図・断面図 …… 33

第26図　石棺2・3　平面図・断面図 …… 34

第27図　4次調査1Tr　平面図・セクション図 …… 35

第28図　遺物出土位置図 …… 37

第29図　A　検出状況 …… 38

第30図　B・C　検出状況 …… 38

第3節　出土遺物

第31図　出土遺物実測図（1）…… 39

第32図　出土遺物実測図（2）…… 40

第33図　鉄鏃5の旧状 …… 41

第34図　出土遺物実測図（3）…… 41

第35図　出土遺物実測図（4）…… 42

第36図　出土遺物実測図（5）…… 44

第37図　出土遺物実測図（6）…… 45

第38図　出土遺物実測図（7）…… 47

第39図　出土遺物実測図（8）…… 49

第40図　千人塚古墳出土　近世遺物集合 …… 50

第41図　千人塚古墳出土遺物の編年的位置 …… 50

第42図　千人塚古墳出土遺物一覧 …… 51

第4章　中里K支群の再整理

第2節　中里大久保古墳（中里K-95号墳）

第43図　『旧報告』掲載遺物実測図 …… 54

第44図　中里大久保古墳　天井石検出状況 …… 55

第45図　中里大久保古墳　石室実測図 …… 55

第46図　中里大久保古墳　遺物出土状況図 …… 56

第47図　中里大久保古墳　出土遺物実測図（1）…… 57

第48図　中里大久保古墳　出土遺物実測図（2）…… 58

第49図　第2次床面　大刀の出土状況 …… 59

第50図　中里大久保古墳　大刀の復原 …… 59

第51図　中里大久保古墳　出土遺物実測図（3）…… 61

第52図　中里大久保古墳　出土遺物実測図（4）…… 62

第53図　中里大久保古墳　出土遺物実測図（5）…… 63

第54図　中里大久保古墳　出土遺物実測図（6）…… 63

第55図　中里大久保古墳　出土遺物実測図（7）…… 64

第56図　中里大久保古墳　出土遺物実測図（8）…… 66

第57図　中里大久保古墳　出土遺物の編年的位置 …… 66

第58図　中里大久保古墳　出土遺物一覧 …… 67

第3節　中里K-97号墳

第59図　中里K-97号墳　出土遺物実測図（1）…… 68

第60図　中里K-97号墳　出土遺物実測図（2）…… 68

第61図　中里K-97号墳　出土遺物実測図（3）…… 69

第62図　中里K-97号墳　出土遺物実測図（4）…… 70

第63図　中里K-97号墳　出土遺物実測図（5）…… 70

第64図　中里K-97号墳出土遺物の編年的位置 …… 71

第65図　中里K-97号墳　出土遺物一覧 …… 71

第4節　中里K-98号墳

第66図　中里K-98号墳　出土遺物実測図（1）…… 73

第67図　中里K-98号墳　出土遺物実測図（2）…… 73

第68図　中里K-98号墳　出土遺物実測図（3）…… 74

第69図　中里K-98号墳　出土遺物実測図（4）…… 76

第70図　中里K-98号墳　出土遺物実測図（5）…… 77

第71図　中里K-98号墳　出土遺物実測図（6）…… 78

第72図　中里K-98号墳出土遺物の編年的位置 …… 78

第73図　中里K-98号墳　出土遺物一覧 …… 79

第5節　中里K-99号墳

第74図　中里K-99号墳　出土遺物実測図（1）…… 80

第75図　中里K-99号墳　出土遺物実測図（2）…… 81

第76図　中里K-99号墳　出土遺物実測図（3）…… 82

第77図　中里K-99号墳　出土遺物実測図（4）…… 83

第78図　中里K-99号墳　出土遺物実測図（5）…… 84

第79図　中里K-99号墳　出土遺物実測図（6）…… 85

第80図　中里K-99号墳　出土遺物実測図（7）…… 85

第81図　中里K-99号墳　出土遺物実測図（8）…… 87

第82図　中里K-99号墳　出土遺物実測図（9）…… 88

第83図　中里K-99号墳　出土遺物一覧 …… 89

第84図　中里K-99号墳出土遺物の編年的位置 …… 90

第6節　出土地不明の遺物

第85図　出土地不明遺物実測図 …… 91

第5章　考　察

第1節　須津古墳群における馬具副葬古墳被葬者の性格

第86図　中里古墳群出土馬具 …… 94

第87図　円形金具の類例 …… 96

第88図　環状辻金具・雲珠と中里98号墳出土例と類似する馬具の組合せ（西洞山6号墳）…… 97

第 89 図　円形金具が用いられた可能性が高い馬装が
表現される馬形埴輪 …… 98
第 90 図　中里 98 号墳の馬装を復原するための参考事例 …… 98
第 91 図　中里 98 号墳出土馬具から復原する馬装 …… 99
第 92 図　千人塚古墳出土馬具 …… 101
第 93 図　横長心葉形鏡板付轡と剣付花弁形杏葉の変遷 …… 103
第 94 図　東駿河における修理された可能性のある馬具と
地域的特色のある刀 …… 104
第 95 図　東海地方における鉄製轡の形式別出土数 …… 106
第 96 図　東駿河における環状鏡板付轡・
鉄製横長心葉形轡の編年的位置づけ …… 108
第 2 節　愛鷹山古墳群の被葬者集団とその生産基盤
第 97 図　愛鷹山南麓周辺の古墳群と関連集落の分布 …… 113
第 98 図　横穴式石室墳の法量ヒストグラム
（富士川西岸～愛鷹山南麓） …… 115
第 99 図　愛鷹山古墳群と周辺の大型横穴式石室 …… 116
第 100 図　須津古墳群の横穴式石室 …… 117
第 101 図　船津古墳群の横穴式石室 …… 118
第 102 図　横穴式石室の平面類型（1） …… 119
第 103 図　横穴式石室の平面類型（2） …… 120
第 104 図　愛鷹山古墳群周辺の装飾付大刀 …… 121
第 105 図　愛鷹山古墳群周辺の農工・生産関連具 …… 122
第 106 図　愛鷹山古墳群周辺の特殊な装身具・銅製品 …… 123
第 107 図　中原遺跡の集落変遷と主要遺物（1） …… 124
第 108 図　中原遺跡の集落変遷と主要遺物（2） …… 125
第 109 図　駿河中・東部地域の擬似両袖形指向の石室 …… 127
第 3 節　千人塚古墳石室奥壁の刻文について
第 110 図　千人塚古墳　奥壁刻文と関連遺物 …… 131
第 111 図　富士山禅定図（部分） …… 133
第 112 図　八葉九尊図（大宝院秋山家資料） …… 133
第 113 図　富士山禅定図 …… 133
第 114 図　千人塚古墳と多門坊関連史跡 …… 133

第 6 章　総　括
第 115 図　本書で報告した須津古墳群の遺構と遺物 …… 136

挿表目次

第 2 章　立地と環境
第 3 節　須津古墳群の概要
第 1 表　中里・神谷支群　調査履歴一覧表 …… 13
第 2 表　須津古墳群一覧表 …… 21

第 5 章　考　察
第 1 節　須津古墳群における馬具副葬古墳被葬者の性格
第 3 表　円形金具の類例 …… 96
第 4 表　横長心葉形鏡板付轡一覧 …… 102
第 5 表　東駿河における環状鏡板付轡出土古墳とその出土遺物 … 107

巻頭図版目次

巻頭図版 1
千人塚古墳　出土遺物集合
巻頭図版 2
千人塚古墳を上空から望む（南から）
巻頭図版 3
千人塚古墳　石室内部（開口部側から）
千人塚古墳　石室内部（奥壁側から）
巻頭図版 4
中里大久保古墳（K-95 号墳）、
中里 K-97・98・99 号墳　出土遺物集合
巻頭図版 5
中里大久保古墳（K-95 号墳）　出土遺物集合
巻頭図版 6
中里 K-99 号墳　出土遺物集合
巻頭図版 7
千人塚古墳、中里大久保古墳（K-95 号墳）、
中里 K-98・99 号墳　出土馬具集合
巻頭図版 8
中里大久保古墳（K-95 号墳）、
中里 K-97・98・99 号墳　出土土器集合

写真図版目次

表紙
千人塚古墳　出土須恵器
PL.1　千人塚古墳　調査
1. 千人塚古墳　全景（南から）
2. 千人塚古墳　全景（東から）
PL.2　千人塚古墳　調査
1. 1 次調査 1Tr（南東から）
2. 1 次調査 1Tr 北壁土層（南から）
3. 1 次調査 2Tr（東から）
4. 1 次調査 2Tr（南東から）
5. 1 次調査 2Tr（西から）
6. 1 次調査 2Tr 中央落ち込み部（北西から）
7. 1 次調査 2Tr 東側落ち込み部（南東から）
8. 1 次調査 2Tr 東側落ち込み部
南壁土層（北から）
PL.3　千人塚古墳　調査
1. 3 次調査 1Tr（東から）
2. 3 次調査 1Tr（北西から）
3. 3 次調査 1Tr 落ち込み部南壁土層（北から）
4. 4 次調査 2Tr（西から）
5. 4 次調査 2Tr（東から）
6. 4 次調査 2Tr 周溝検出（西から）
7. 4 次調査 2Tr 周溝（西から）
8. 4 次調査 2Tr 周溝土層堆積状況（南西から）
PL.4　千人塚古墳　調査
1. 石室内全景（開口部側から）
PL.5　千人塚古墳　調査
1. 石室内全景（奥壁側から）
PL.6　千人塚古墳　調査
1. 石室西壁（開口部側から）
2. 石室東壁（奥壁側から）
PL.7　千人塚古墳　調査
1. 石室東壁（開口部側から）
2. 石室西壁（奥壁側から）
PL.8　千人塚古墳　調査
1. 奥壁の仏名刻文（南から）
PL.9　千人塚古墳　調査
1. 奥壁側床面（南から）
2. 開口部側床面（北西から）
PL.10　千人塚古墳　調査
1. 石棺 1（北から）
PL.11　千人塚古墳　調査
1. 石棺 1（南小口部分、北から）
2. 石棺 2・3（北から）
PL.12　千人塚古墳　調査
1. 石棺 2・3（南から）
2. 石棺 2（北から）
PL.13　千人塚古墳　調査
1. 石棺 3（南西から）
2. 石棺 3（西から）
PL.14　千人塚古墳　調査
1. 開口部（南から）
2. 閉塞石（南から）
PL.15　千人塚古墳　調査
1. 閉塞石（南から）
2. 閉塞石（北から）
PL.16　千人塚古墳　調査
1. 4 次調査 1Tr（南東から）
2. 4 次調査 1Tr　前庭部（南東から）
PL.17　千人塚古墳　調査
1. 4 次調査 1Tr　前庭部（南から）
2. 4 次調査 1Tr　前庭部（南東から）
PL.18　千人塚古墳　調査
1. 遺物（14・49）出土状況（西から）
2. 遺物（13・23）出土状況（東から）
PL.19　千人塚古墳　調査
1. 遺物（10）出土状況（西から）
2. 遺物（37・38・A）出土状況（東から）
PL.20　千人塚古墳　調査
1. 遺物（72）出土状況（南から）
2. 遺物（5・6・8・9・74・76 ～ 80・B・C）
出土状況（東から）
PL.21　千人塚古墳　調査
1. 遺物（81・85 ～ 87）出土状況（西から）
2. 遺物（81・87）出土状況（西から）
PL.22　千人塚古墳　調査
1. 遺物（85）出土状況（西から）
2. 遺物（85・86）出土状況（西から）
PL.23 ～ 28　千人塚古墳　出土遺物
PL.29 ～ 37　中里大久保古墳　出土遺物
PL.38 ～ 40　中里 K- 第 97 号墳　出土遺物
PL.41 ～ 45　中里 K- 第 98 号墳　出土遺物
PL.46 ～ 53　中里 K- 第 99 号墳　出土遺物
PL.54　中里不明古墳　出土遺物

第1章　調査経緯と経過

第1節　発掘調査の経緯と経過

1　千人塚古墳をめぐる既往の調査

本書で報告する千人塚古墳（須津J-10号墳）は、富士市神谷字大塚に所在する横穴式石室を主体部とする古墳である。本墳は富士市須津地域の愛鷹山南斜面の尾根沿いに分布する古墳群の一つである神谷古墳群に所在する古墳であり、同古墳群の中では大型の石室が良好に残存することから、昭和51年（1976）7月23日に富士市指定史跡に指定された。

千人塚古墳に関連する既往の調査は、平成9年（1997）から平成18年（2006）までの全4次にわたる。そのうち、1次調査は民間開発（住宅建設）に伴う確認調査であり、2～4次調査は史跡整備に伴う保存目的調査である。

2　住宅建設に伴う調査

調査の経緯　平成9年（1997）、事業者（個人）は、富士市神谷字大塚846番1（244㎡）において住宅建設工事を計画した。当該地が周知の埋蔵文化財包蔵地である「神谷古墳群」に含まれること、さらに富士市指定史跡・千人塚古墳の北側隣接地にあたることから、平成9年（1987）6月6日、土地所有者（個人）は富士市教育委員会へ埋蔵文化財分布確認調査依頼書を提出した。これを受けて、6月10日に文化振興課職員が現地踏査を行ったところ、当該地には千人塚古墳の周溝が存在する可能性が高いこと、また消滅古墳である須津J-11号墳の可能性がある石材が地中に存在することが判明したため、着手前に埋蔵文化財の発掘調査と千人塚古墳の保全についての協議を行う旨を回答した（平成9年6月12日付富教文発第50号）。6月18日、事業者より埋蔵文化財試掘確認調査依頼書、事業者および土地所有者より発掘調査承諾書がそれぞれ提出された。

1次調査の経過　平成9年（1997）6月26日、富士市教育委員会は試掘調査を計画し、「埋蔵文化財の試掘調査の通知について」を静岡県教育委員会教育長に提出した（平成9年6月26日付富教文発第57号）。試掘調査は7月1日から7月3日まで実施した。調査の結果、分布調査で確認された石材は古墳ではないこと、また溝状遺構が検出されたものの、千人塚古墳の周溝とは認められないことが確認され、平成9年7月11日、事業者および静岡県教育委員会に対して「埋蔵文化財発掘調査終了の報告について」を提出した。その後、静岡県教育委員会より「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等

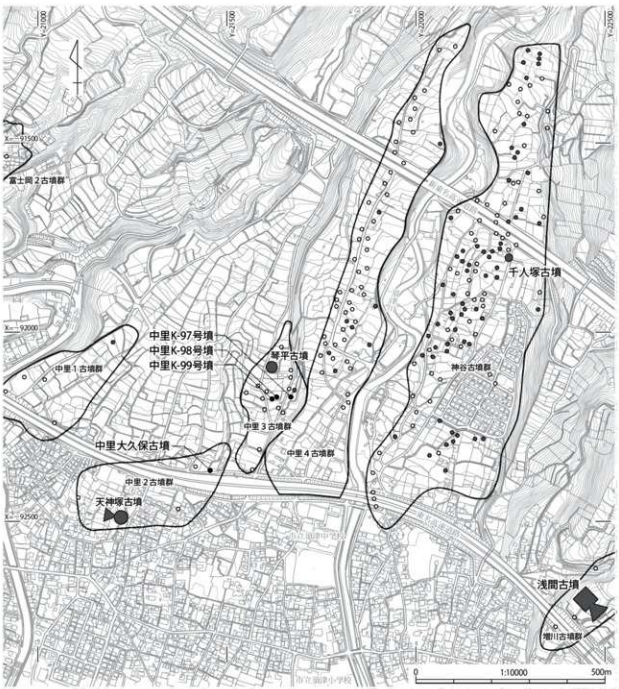
第1図　千人塚古墳　位置図

について」が事業者および富士市教育委員会に通知され（平成9年8月6日付教文第3-47号）、住宅建設が慎重に施工された。

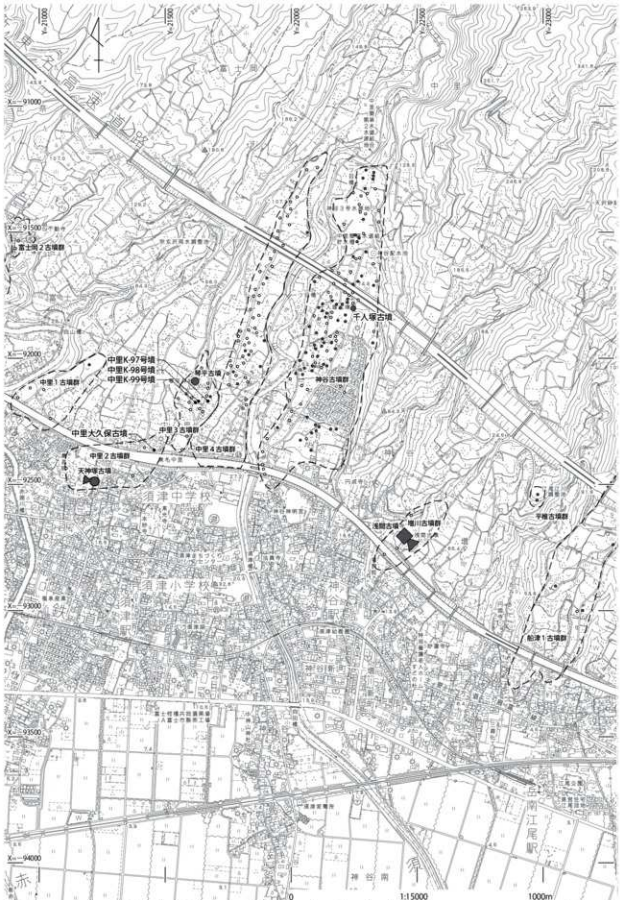
3 保存整備事業に伴う調査

2次調査 一方、富士市指定史跡としての千人塚古墳は、近年墳丘の流出が著しく、石室本体の一部が露出していることから、富士市教育委員会において石室崩壊の事態を回避する方策が検討された。

その結果、古墳を保存・整備し活用を図ることを視野に入れた整備事業が立ち上がり、平成10年(1998)11月18日には株式会社荒井研究所により「富士市指定史跡　千人塚古墳（須津古墳群J-10号墳）保存計画概要書」がまとめられた。保存計画概要書では、現状の墳丘の残存状況や規模に関わる調査の必要性とともに、石室の緊急保存措置を講じるための調査の必要性が確認され、特に後者の調査が緊急性からも重視されるに至った。



第２図　須津古墳群　古墳分布図



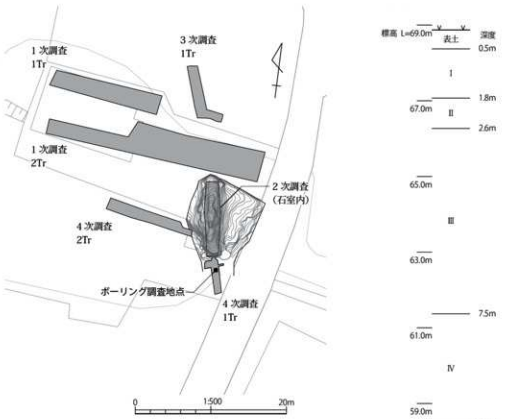
第3図　須津古墳群　周辺古墳分布図

調査の内訳は、まず考古学調査として、石室内の床面発掘や実測図作成を目的とした石室調査及び史跡測量図作成を、そして工学的調査として石室現状構造物調査や地質調査の必要性が挙げられた。

その後、平成14年（2002）7月頃より、古墳の復元整備に伴い現状を的確に把握し、周囲の安全確保とともに記録保存を行うことを目的として、富士市教育委員会を調査主体に、株式会社東日を調査担当とする2次調査を計画した。委託業務内容の主な内訳は基準点測量、水準測量、境界確定測量、空中写真撮影、写真図化、古墳石室調査、古墳保存処理（石室内の補強等）、調査ボーリング、調査報告書作成であり、受託者は3社の見積合わせによって決定した（平成14年7月31日付業務委託契約書）。

市指定史跡の発掘調査がどのような経緯を経て民間調査組織に委託されることになったのかについては、残念ながら文書が残っておらず、定かではない。平成14年度には宮添遺跡G地区、赫夜姫2号墳、花川戸2・3号墳、上ノ山1号墳、ジンゲン沢遺跡2地区といった市教育委員会主体による中・小規模の記録保存のための本発掘調査が平行して実施されており、業務多寡のため、千人塚古墳の調査がやむを得ず委託に至ったものと考えられる。

2次調査は石室内を主たる対象とし、平成14年8月1日から平成15年（2003）2月3日に実施した（平成15年2月6日付富教文発第337号・発掘調査結果概要）。調査では古墳時代の土器や金属製品、ガラス製品からなるコンテナ3箱分の遺物が出土した



表土	黒褐色		粘性土主体、腐植物混入。全体に少量の礫含む。
I	暗褐～暗茶色	ローム	上部黒ボク混じる。下部10mm以下の礫混入。少量の軽石含む。
II	暗褐灰色	礫混じり砂	礫混じり火山灰。10mm大の礫混入。
III	褐灰～暗褐灰色	玉石混じり砂礫	30mm以下の礫および火山砂主体。マトリクスは少量の細粒分含む。 100～200mm大の玉石点在する。 玉石は比較的硬質で、精密なものとやや多孔質のものとがある。 5m以深より礫分多くなる。7m付近より色調若干変化する。
IV	暗茶～暗褐色	凝灰角礫岩	50mm以下の礫および火山灰からなる。礫はやや角張ったものが多い。 マトリクスは自立性有り。玉石の混入は少ない。

第4図　調査トレンチ配置図およびボーリング柱状図

ため、埋蔵物の発見届及び埋蔵文化財保管証を富士警察署長・静岡県教育委員会教育長にそれぞれ提出した（平成15年2月6日付富教文発第335号）。

3・4次調査　2次調査の終了後、平成15年度には既存の保存整備計画の見直しが行われたようであり、富士市教育委員会において新たな計画の検討が始まっている。平成16年度には保存整備計画策定のため、専門委員3名からなる「千人塚古墳保存整備に関する検討会」を設置し、古墳の修理、復元方針の調査、検討、設計及び史跡としての公開・活用を視野に入れた検討を行った。その中で、現況の千人塚古墳は官地である石室範囲のみが市指定史跡として指定されており、古墳隣接地においても墳丘や周溝範囲を確認する必要性が提起されたため、史跡範囲変更を視野に入れた確認調査を計画した。

3次調査は墳丘北側を対象に、平成18年（2006）7月14日から7月25日に実施した（平成18年9月29日付富教文発第179号・発掘調査結果概要）。結果概要では遺物・遺構なしとの所見であった。続く4次調査は墳丘西側および南側を対象に、平成19年（2007）2月5日から2月28日まで実施し、遺物は得られなかったものの、西側周溝と石室前庭部を検出した（平成19年3月30日付富教文発第299号・発掘調査結果概要）。

検討会は平成19年度まで開催し、平成20年（2008）3月には「平成19年度　富士市指定史跡『千人塚古墳』整備基本計画」を策定した。この「基本計画」では、3次調査時に遺構と判断しなかった落ち込みについて、周溝の可能性のある落ち込みとして再評価している。なお、3・4次調査は2008年3月刊行の『平成17･18年度　富士市内遺跡発掘調査報告書』において概要を報告した。

その後の整備計画　富士市教育委員会は平成20年3月策定の「基本計画」に基づき、平成20年度から整備のための用地交渉を進めた。しかし、売買交渉の難航等により進捗をみなかったことから、改めて整備の進め方の見直しを実施し、平成21年度には事業の一時休止に至った。

平成28年度になり、富士市議会の一般質問や市民団体の要望を契機として、国指定史跡・浅間古墳も含めた須津古墳群全体の保存活用に向けた機運が改めて高まった。富士市は平成30年度に新たに学識経験者、市文化財保護審議会委員、須津地区代表者からなる「千人塚古墳保存活用計画検討会」を組織し、平成31年（2019）3月に「富士市指定史跡千人塚古墳保存活用計画」を策定した。以後、この「保存活用計画」に基づき、富士市では整備のための用地交渉を進めている。

第2節　整理作業の経緯と経過

発掘調査報告書（本書）刊行のための整理作業は、発掘調査終了後に土器の洗浄や注記、金属製品の保存処理などを富士市教育委員会が進めていたが、千人塚古墳の整備がすべて完了した時点で本報告書を刊行するという当初の工程を重視し、本格的な整理作業は長らく棚上げされていた。

そのような状況の中、平成31年（2019）3月に先述した「保存活用計画」が策定されたことで、古墳そのものの特徴や年代的な位置づけ、被葬者の性格、当時の地域社会に与えた影響などについて、実施設計に着手する前に整理しておく必要が生じたことから、令和3年（2021）4月より整理作業を再開することとなった。

その後、出土遺物の接合や復原、図化、写真撮影、発掘記録図面類・観察表等の整理、遺構・遺物図のトレース作業、報告原稿の執筆等を行い、これらを編集して報告書を作成した。

また同じ須津古墳群内に位置し、1975年に報告書が刊行された中里大久保古墳（K-95号墳）・K-97・98・99号墳の出土遺物についても、長年の収蔵・管理のなかで現況の資料と旧報告書との細部の照合ができなくなっていたことから、今回改めて整理を行い、千人塚古墳と合わせて報告することで、須津古墳群総体としての評価を目指した。

令和4年3月31日、千人塚古墳の発掘調査に関わる一連の作業は、本書の刊行をもって終了した。

第3節　調査の体制

千人塚古墳（神谷古墳群第5地区）に関する一連の調査は、以下の体制で実施した。

平成9年度（1次調査）

〔調査主体〕

富士市教育委員会	教育長	太田　均
	教育次長	大竹庄二
文化振興課	課長	遠藤貞幸
	課長補佐	平野孝雄
文化財係	係長	池田晴夫
調査担当	主査	志村　博
	指導主事	田中淳一

平成14年度（2次調査）

〔調査主体〕

富士市教育委員会	教育長	平岡彦三
文化スポーツ課	課長	石井邦敏
調査担当	主幹	渡井義彦
	主査	志村　博
	主査	岩辺　均
	上席主事	前田勝己
	指導主事	渡邉　豊

〔担当機関〕

株式会社　東日	代表取締役	竜野輝夫
文化財調査室	室長	小金澤保雄

平成18年度（3・4次調査）

〔調査主体〕

富士市教育委員会	教育長	平岡彦三
文化振興課	課長	村田　猛
調査担当	主幹	志村　博
	主査	岩辺　均
	主査	前田勝己
	指導主事	三上　聡

令和3年度（整理作業）

〔調査主体〕

富士市教育委員会	教育長	森田嘉幸

〔担当機関〕

富士市役所市民部	部長	有川一博
文化振興課	課長	久保田伸彦
文化財担当	統括主幹	植松良夫
	参事補	石川武男
調査担当者	主査	佐藤祐樹
	主査	藤村　翔
	文化財調査員	若林美希
整理作業員	文化財整理員	井上尚子
		金田純子
		小田貴子
		伊藤純子
	報告書事務補助	渡辺美規子

第5図　千人塚古墳全景（直上、北から）

第6図　4次調査　現地視察の様子

第2章　立地と環境

第1節　地理的環境

須津古墳群が所在する静岡県富士市は、北に富士山、東に愛鷹山、南に駿河湾、西に富士川と豊かな自然と景観に恵まれており、年間平均気温は17.7℃（令和2年度）と比較的温暖な地域である。富士市は人口251,616人（令和3年4月1日現在）、面積244.95km^{2}を測り、静岡県東部における中心都市の一つである。古墳群が位置する現在の富士市中里・神谷の行政区分は、現在の富士市（1966年～）から、吉原市（1955年～）、須津村（1889年～）と遡っていき、町村制施行以前は駿河国富士郡に帰属する。

富士市域は、富士・愛鷹両火山系である山地と、富士川河口付近のデルタ地帯から浮島ヶ原低湿地帯にかけて形成されている平野部に大きく分けられる。平野部は、富士川の運搬した物質が堆積して形成された扇状地型デルタである富士（加島）平野、富士川河口から沼津市の狩野川左岸に位置する牛臥山までの田子の浦砂丘によって挟まれた東西約15km、南北約2km、海抜高度平均5m以下の低地である浮島ヶ原などの地形区に大別される。本古墳群の南に位置する浮島ヶ原には、6,000～5,000年前から近世にかけ、赤淵川や須津川、春山川、さらには沼津市域の高橋川や大川から注ぎ込まれる豊かな水を湛えた広大な沼湖（浮島沼）が存在し、この沼湖や周辺の低地部が長年に亘って生産基盤や交通路として利用された。

本古墳群の立地する愛鷹（火）山は、富士市・沼津市・裾野市にまたがる最高点海抜1,504mの成層火山であるが、約10万年前に活動を停止している。その後は箱根火山や富士火山等から飛来したテフラが山体に厚く堆積し、愛鷹ローム層が形成された。なかでも富士火山起源テフラを主体とする上部ローム層は、腐食質土層である黒色帯と、激しい噴火によって短期間で堆積したスコリア層が交互に折り重なり、その標識的な層位状況から、旧石器時代研究のフィールドとしても著名である。

愛鷹山麓の主峰・位牌岳の直下、蕉ヶ谷から流れ来る須津川は、深い渓谷を形成しながら西南西に向かい、神谷・須津の北方で幅500m、長さ1.2kmの谷河原を形成する。さらにこの谷河原を再浸食して、東西に小規模な河岸段丘を形成した。河岸段丘は、高位段丘（琴平段丘）、中位段丘（綿帽子段丘）、低位段丘（大塚段丘）の3段存在し、本古墳群の中心となる中里・神谷支群は、この河岸段丘上から扇状地の標高25～116mほどに立地する。

第7図　地形区分図

第2節　歴史的環境

旧石器時代　矢川上C遺跡においてナイフ形石器主体の複数の文化層が確認されており、一定の集落として位置付けられている。古木戸B遺跡では第Ⅲスコリア帯～休場層までの複数段階の石器ブロックが認められたほか、古木戸A遺跡・天ヶ沢東遺跡においてもナイフ形石器や尖頭器、細石刃が見つかっている。前の原遺跡や向山遺跡でも、ナイフ形石器や尖頭器が出土する。近接する沼津市域ではさらに調査例も豊富であり、渕ヶ沢遺跡や秋葉林遺跡、的場遺跡などで、当該期の重層的な遺跡の拡がりが確認されている。

縄文時代　草創期の遺跡は愛鷹山東南麓で確認されているものの、愛鷹山南麓では天ヶ沢東遺跡等で当該期の尖頭器の存在が確認されるが、土器や遺構は未だ確認されていない。早期は陣ヶ沢A遺跡や矢川上C遺跡、春山遺跡、鵜無ヶ淵遺跡、峰山遺跡、百間遺跡などで押型文系土器が、春山遺跡、境丸山遺跡、烏帽子形遺跡、(江尾)中尾遺跡、愛鷹遺跡、百間遺跡、峰山遺跡、花川戸遺跡などで条痕文系土器が採集されている。また向山遺跡では発掘調査の結果、竪穴建物にともなって多くの条痕文系土器の破片が出土しているほか、富士岡中尾遺跡で野島式土器が出土している。中尾沢遺跡で早期末の無文土器、向山遺跡で清水柳E類土器、前の原遺跡で表裏縄文土器や押型文土器、野島式土器が出土した。天ヶ沢東遺跡、古木戸A・B遺跡でも当該期の土器が出土している。いずれの遺跡も比較的高所である丘陵上を中心に立地しており、遺跡の密度も低い。前期は早期からの継続で捉えられる遺跡がほとんどで、規模も小さい。峰山遺跡、花川戸遺跡、前の原遺跡などで木島式土器が採集または発掘されている。天ヶ沢東遺跡や富士岡中尾遺跡では前期前半の清水ノ上Ⅱ式のほか、搬入品とみられるものを含む北白川下層式土器が見つかっており、特筆される。中尾沢遺跡、前の原遺跡、向山遺跡、富士岡中尾遺跡、古木戸A遺跡、コーカン畑遺跡では諸磯b～c式や十三菩提式、中期初頭の五領ヶ台式が確認されている。中期中葉から後期は、富士山南麓の天間沢遺跡や宇東川遺跡を中心に集落の内容が充実する一方で、愛鷹山南西麓の実態は不明な点が多い。上ノ段遺跡では曽利式を主体とする土器や石棒などとともに配石遺構が検出されているほか、向山遺跡で曽利式期の石囲い炉を有する竪穴建物が確認されている。後期後葉以降は周辺地域と同様に遺跡の数が激減し、田子の浦砂丘上に新たに成立する三新田遺跡において晩期の土器片が出土している程度である。

弥生時代　弥生時代になると、遺跡の立地がそれまでの丘陵上から浮島沼に隣接した丘陵先端部や低地部へと変化をみせる。浮島沼西岸の沖田遺跡や宇東川遺跡、北岸の寺の上遺跡において、中期後葉の原添式や有東式の土器が出土している。特に沖田遺跡は中・後期の土器とともに矢板や大足・竪杵といった木製品が大量に出土しており、浮島沼沿岸に根を下ろした水稲農耕が漸く軌道に乗り始めたことが窺える。後期以降は、向山遺跡や宮添遺跡、的場遺跡などの集落が、浮島沼を南面して見下ろす愛鷹山南麓の丘陵上から丘陵端部にかけて成立する。そうした動きの一方で、浮島沼や根方街道から離れた愛鷹山丘陵上にも、山側に「環濠」を伴い、外来系土器も出土する集落である平椎遺跡が立地するほか、南東麓には同じく複数の「環濠」を有する足高尾上遺跡群が展開する。

古墳時代　古墳時代前期初頭を前後する頃に丸ヶ谷戸周溝墓や高尾山古墳といった前方後方形の首長墳が築かれるなか、少し遅れて、愛鷹山南西麓に駿河東部地域では最大級となる全長90.8ｍの前方後方墳である浅間古墳が築造される。また前期の方形周溝墓も富士川西岸の中野遺跡や愛鷹山南西麓の富士岡1古墳群、宮添遺跡でみられる。続く前期末頃には粘土床の主体部から仿製内行花文鏡・四獣鏡、琴柱形石製品、石鋸などを出土した前方後円墳である東坂古墳が築造される。続く中期の前方後円墳としては愛鷹山南西麓の船津ふくべ塚古墳が想定されるが、明確ではない。その他の墳形には船津薬師塚古墳（円墳）や間門松沢1号墳（楕円形墳？）があるが、前・後期と比べると低調である。後期になると、

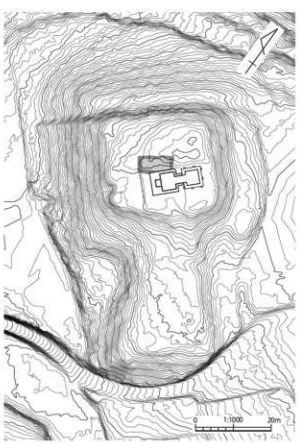
富士山南麓に全長 54 m以上の大型円墳とされる伊勢塚古墳が築造される。富士市域の古墳で初めて埴輪を採用し、その規模や立地、墳形から、新時代を印象づける古墳といえる。同時期には、愛鷹山南西麓の天神塚古墳や寺屋敷古墳、琴平古墳、愛鷹山南麓の長塚古墳、田子の浦砂丘上の山の神古墳、庚申塚古墳といった小型の前方後円墳や円墳等が各小地域単位で築かれる。一方、後期初頭には富士山の噴火により大淵スコリアが富士山南麓から愛鷹山南西麓の限られた範囲に降灰したことが明らかになっており、当該期における中小首長墳の台頭も、自然災害への対応の一環として捉えられる可能性がある。6 世紀後葉までには前方後円墳の築造は停止し、有力層の古墳には、横穴式石室を内包した円墳が選ばれるようになる。また、小規模な円墳が密集する形態をとるいわゆる古式群集墳が潤井川流域の沢東A遺跡や滝戸遺跡で確認され、愛鷹山麓にも広がる可能性がある。

横穴式石室を採用した新式群集墳については、富士市域に 800 基前後、愛鷹山南麓では 1,000 基以上が展開したことが知られている。その嚆矢の一つとなるのが、6 世紀後葉に富士山南麓に築かれた中原 4 号墳である。主体部の段構造を有する無袖形横穴式石室からは、銀象嵌剣や銀象嵌大刀、鉄製馬具といった副葬品のほか、U字形鍬先や鍤を含む各種農工具や東海地域では珍しい鉄鉗も出土しており、渡来人を含む技術者を率いて地域開発を主導した被葬者の性格が窺える。中原 4 号墳周辺ではこれ以降、横沢古墳、東平 1 号墳、国久保古墳といった豊富な副葬品を有する小型円墳が集中して築かれ、伝法古墳群を形成する。

伝法古墳群以外にも、富士山南麓から愛鷹山南麓には大型の横穴式石室を有する実円寺西 1 号墳を筆頭に、方頭大刀が出土した大坂上古墳、銀装圭頭大刀が出土した花川戸 4 号墳、金銅装圭頭大刀が出土した中里大久保古墳や秋葉林 1 号墳、鋼鋺が出土した道東古墳、鉄針が出土した須津 J-6 号墳、鉄鐸の出土した的場 3 号墳など、際立った副葬品を有する小型古墳が数多い。これらの古墳の多くは駿河東部地域に顕著に分布する段構造の無袖形横穴式石室を主体部とし、豊富な鉄製馬具や特徴的な副葬品を有するものも多いことから、馬匹生産や鉄器生産、その他の手工業生産等の技術を有した複数の集団が当該地周辺に存在したことが想定されている。

古墳造営の母体となった前期の集落には、富士山南麓の宇東川遺跡、愛鷹山南西麓の赤淵川西岸に位置する祢宜ノ前遺跡や浅間古墳に南接する宮添遺跡、また境の的場遺跡などのほか、田子の浦砂丘上の三新田遺跡が挙げられる。当該期の中心となる集落は浮島沼の周縁部に分布が集中し、弥生時代から継続する遺跡も多い。中期以降になると、前代までに遺跡密度の薄かった富士山南麓の富士川東岸の沢東A遺跡や中桁・中ノ坪遺跡、東平遺跡に集落が形成される。特に、5 世紀代の須恵器を出土する先進的な集落は、沢東A遺跡のほかには愛鷹山南西麓の宮添遺跡などごく限られており、後期以降に伊勢塚古墳を嚆矢とした伝法古墳群が形成されていく上での母体となった集落として評価できる。

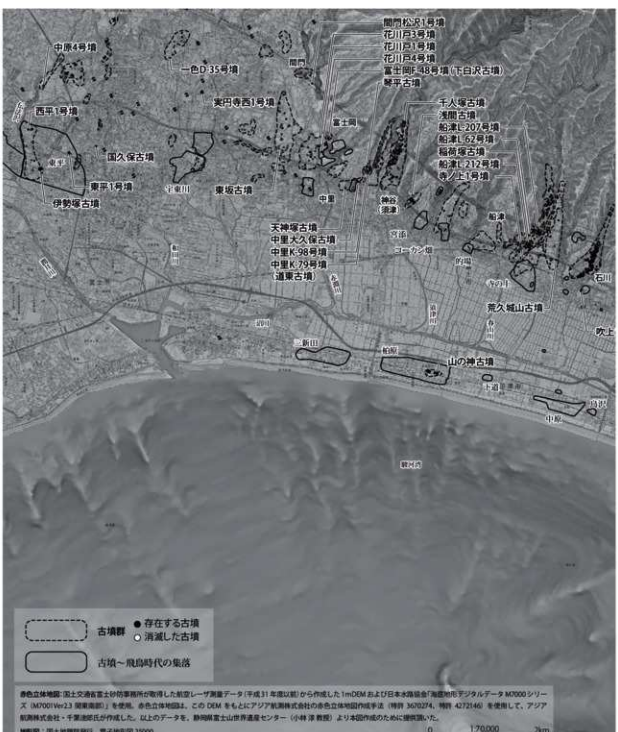
愛鷹山南麓に広がる群集墳については宮添遺跡やコーカン畑遺跡といった根方街道沿いに散在した集落との関わりも想定できるものの、それだけでは古



第 8 図　浅間古墳　墳丘測量図

墳の数には遠く及ばない。むしろ、6世紀後葉から7世紀にかけて発展する三新田遺跡や柏原遺跡、下道遺跡、中原遺跡、鳥沢遺跡といった田子の浦砂丘上の集落の急成長には目を見張るものがあり、愛鷹山南麓の大型群集墳との関連が推定される。

奈良・平安時代　奈良・平安時代になると、市内全域において集落遺跡の数や内容が充実する。富士川東岸の東平遺跡では遠江や西駿河、甲斐などの諸地域との交流を示す土師器のほか、「布自」や「厨」などの墨書土器、中央との関係を考える上で重要な銙帯金具が出土しており、官衙的性格の濃厚な計画的集落であった可能性が示されている。また遺跡の南東部には「寺」墨書土器や布目瓦が出土した三日市廃寺跡が位置し、『日本三代実録』所載の定額寺



第9図　愛鷹山南麓古墳・集落分布図（西）

「法照寺」の有力候補地と考えられている。墳墓には、東平遺跡内に占地し方頭大刀、麻手刀、銅製腰帯具が出土した西平1号墳のほか、富士川西岸に妙見古墳群や山王古墳群が展開する。愛鷹山南麓では、依然として宮添遺跡や的場遺跡などの伝統的な集落が勢力を維持しており、特に根方街道沿いの遺跡については富士郡の玄関口として中世まで機能していたであろうことが想定できる。田子の浦砂丘上では三新田遺跡が依然有力であるほか、柏原遺跡や中原遺跡でも集落が継続する。田子の浦砂丘上には『日本三代実録』貞観6年（864）に廃された「柏原駅」が存在したとみられ、根方街道とともに、砂丘上の古代東海道の整備も進んでいたことが窺われる。

第10図　愛鷹山南麓古墳・集落分布図（東）

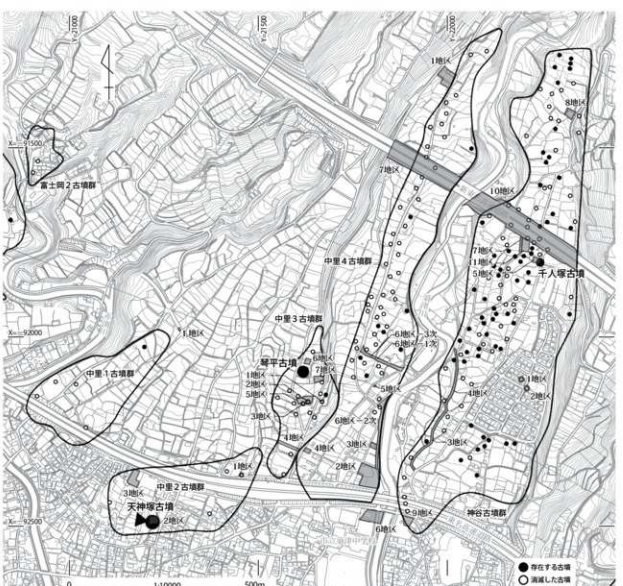
第3節　須津古墳群の概要

1　須津古墳群の呼称と範囲

本書で扱う須津古墳群とは、富士市域の東側に位置し、愛鷹山南西麓を流れる須津川によって形成される河岸段丘やその下部の扇状地にかけて築かれた古墳によって構成される古墳群を指す。消滅したものを含めると総数209基（中里支群82基、神谷〔須津〕支群123基、増川支群4基）を数える。

須津古墳群の名称とその範囲については、中野国雄が『吉原市の古墳』において、須津川を挟む東西の河岸段丘上や丘陵上の古墳を「増川群（I群）」、「神谷群（J群）」、「中里群（K群）」に分け、それらをまとめて「須津古墳支群」と捉えたことに端を発す（中野 1970）。

須津川を隔てた古墳をまとめてグルーピングすることについては異論の余地はあろうが、地形上は須津川断層に沿って発達した須津川渓谷とその河岸段丘や扇状地が両岸一体的に形成されており、景観的にも須津川によって古墳群が分断されるというよりは、両岸の古墳が川を共有して立地しているという表現が適切である。



第 11 図　中里・神谷支群　調査履歴図

富士市制移行後の分布調査においてもその理解は踏襲され、中里～増川古墳群の総称として「須津古墳群」と呼称された（渡井 1988）。現在の埋蔵文化財分布地図では須津川西岸を西から中里 1 ～ 4 古墳群、東岸を神谷古墳群、増川古墳群と細分して登録・管理しており、総数は 209 基を数える。

本書では冒頭に示したように、『吉原市の古墳』以来の「須津古墳群」の認識を踏襲しつつ、個々の包蔵地については「古墳群」（向坂 1964、水野 1970）の名称を用いるには煩雑となることから、中里 1 ～ 4 古墳群を「中里支群」、神谷古墳群を「神谷（須津）支群」、増川古墳群を「増川支群」と捉える。個々の古墳名は過去の報告書等との混乱を避けるため、中里 K-97 号墳、須津 J-6 号墳等とアルファベットを併記した従来の名称を使用する。

2　中里・神谷支群の概要

須津古墳群を構成する古墳のうち、その大多数は古墳時代後期後葉以降から飛鳥時代の古墳と考えられるが、古墳後期前半以前に遡るとみられる古墳も存在しており、両者は分布上も違いをみせている。ここでは須津古墳群のうち、中里・神谷（須津）支群の古墳について、立地、時期を整理してその概要を示す。尚、各古墳の参考文献および図の出典については第 1 表を参照されたい。

中里支群　中里支群は、須津川西岸の中位段丘から扇状地上と、その西側の高位段丘や赤淵川東岸の丘陵上に立地する古墳によって構成される。当支群の形成は、5 世紀末頃から 6 世紀中頃にかけて丘陵上や高位段丘面に相次いで築かれた中小規模の首長墳によって始まる。

第 1 表　中里・神谷支群　調査履歴一覧表

調査年度	遺跡No.	遺跡名 地区・次	調査種類 調査主体	旧地区名・古墳名 [古墳番号]	所在地 調査の規模	調査期間	遺構	遺物	報告書
H20	196	中里 1 古墳群 1 地区	試掘 県		中里地先 地域活性化農道整備 2 期地区	200808**	なし	なし	
S46	197	中里 2 古墳群 1 地区 -1 次	試掘 市	[266] 中里 K- 第 95 号墳（大久保古墳）	中里字大久保 1658-1 土取工事	19710919 ～ 19710926			A 本書
S46	197	中里 2 古墳群 1 地区 -2 次	本調査 市	[266] 中里 K- 第 95 号墳（大久保古墳）	中里字大久保 1658-1 土取工事	19711017 ～ 19711019	横穴式石室 1.5m 範囲の裏込め		A 本書
S47	197	中里 2 古墳群 1 地区 -3 次	本調査 市	[266] 中里 K- 第 95 号墳（大久保古墳）	中里字大久保 1658-1 土取工事	19720401 ～ 19720508	横穴式石室 1.5m 範囲の裏込め		A 本書
S47	197	中里 2 古墳群 1 地区 -4 次	本調査 市	[266] 中里 K- 第 95 号墳（大久保古墳）	中里字大久保 1658-1 土取工事	19720924 ～ 19721010	横穴式石室 1.5m 範囲の裏込め		A 本書
H11	197	中里 2 古墳群 2 地区 -1 次	試掘 県	[269] 中里 K- 第 91 号墳（天神塚古墳）	中里字天念寺 1466 県内南方後円墳発掘調査等事業	20000201 ～ 20000225	周溝		C
H12	197	中里 2 古墳群 2 地区 -2 次	試掘 市	[269] 中里 K- 第 91 号墳（天神塚古墳）	中里字天念寺 1466 天神社拝殿改築	20000625 ～ 20000804 20001120 ～ 20001130	前方後円墳	土師器	I
H31	197	中里 2 古墳群 3 地区 -1 次	確認 市		中里 1474-1 ほか 集合住宅新築	20190522	竪穴建物跡・土坑・ピット	土器	M
S34	198	中里 3 古墳群 1 地区	発見 市	[257] 中里 K- 第 97 号墳	中里字大塚道東 土取工事	195908**			A 本書
S42	198	中里 3 古墳群 2 地区	発見 市	[258] 中里 K- 第 98 号墳	中里字大塚道東 土取工事	1967****			A 本書
S42	198	中里 3 古墳群 3 地区	発見 市	[259] 中里 K- 第 99 号墳	中里字大塚道東 土取工事	19680107			A 本書
H20	198	中里 3 古墳群 4 地区	試掘 県		中里地先 地域活性化農道整備 2 期地区	200808**	なし	なし	
H24	198	中里 3 古墳群 5 地区	試掘 市		中里大塚道東 2150-1 農地改良	20130326	なし	なし	K
H29	198	中里 3 古墳群 琴平古墳	墳丘測量 市		中里地先 記録保存	201802**			L
H30	198	中里 3 古墳群 6 地区 -1 次	確認 市	[250] 琴平古墳（中里 K- 第 2 号墳）	中里 2164-9 ほか 送電鉄塔敷地塔内舗装工事	20190124 ～ 20190201	古墳の周溝	土師器	L
H30	198	中里 3 古墳群 7 地区 -1 次	確認 市		中里 2162-2 個人住宅建設	20190307	なし	なし	L
H10	199	中里 4 古墳群 1 地区	試掘 市		中里字三枚畑 2049-1 外 墓地用地	19980526 ～ 19980528			
H15	199	中里 4 古墳群 2 地区	試掘 市		中里 1760-20 外 保育園	20030827 ～ 20030908			E

調査年度	遺跡No.	遺跡名 地区 - 次	調査種類 調査主体	旧地区名・古墳名 〔古墳番号〕	所在地 調査の契機	調査期間	遺構	遺物	報告書
H17	199	中里4古墳群 3地区	試掘 市		中里字愛鷹 1760-14 個人住宅建設	20050929 ～20051003			D
H20	199	中里4古墳群 4地区	試掘 県		中里地先 地域活性化農道愛鷹2期地区	200808**	なし	なし	
H23	199	中里4古墳群 5地区	試掘 市		中里 農道改良	20120214	なし	なし	J
H10	199	中里4古墳群 6地区 -1次	試掘 県	第二東名 CR13地点その1	中里 第二東名建設	19981105 ～19981125	なし	縄文土器・ 須恵器	G
H10	199	中里4古墳群 6地区 -2次	試掘 県	第二東名 CR14地点	中里 第二東名建設	19981214 ～19981224	なし	土器片	
H11	199	中里4古墳群 6地区 -3次	試掘 県	第二東名 CR13地点その2	中里 第二東名建設	19991122 ～19991203	なし	須恵器	G
H10	199	中里4古墳群 7地区	試掘 県	第二東名 No.46地点	中里 2078～2026 第二東名建設	19980601 ～19980707	なし	縄文土器・ 石器・陶磁器	G
S49	200	神谷古墳群	確認 市		中里字中塚地内	19750208	古墳3基		
S49	200	神谷古墳群 1地区	本調査 市	〔378〕大塚団地第1号墳 （須津J-139号墳）	川尻字赤坂口 468-17 外 大塚団地	19750315 ～19750403	横穴式石室	ガラス丸玉・ 須恵器・鉄器	B
S49	200	神谷古墳群 2地区	本調査 市	〔379〕大塚団地第2号墳 （須津J-140号墳）	神谷字中塚 807 大塚団地	19750315 ～19750403		鉄鏃・須恵器・ 土師器	B
H05	200	神谷古墳群 3地区	試掘 市	〔394〕須津J-第25号墳	中里字間瀬口 734-1 外 農道改良	19930913 ～19930929	周溝らしきもの		
H06	200	神谷古墳群 4地区	試掘 市		中里字間瀬口 1776 外 農道改良	19941017 ～19941024	溝		
H09	200	神谷古墳群 5地区 -1次	試掘 市	〔322〕千人塚古墳 （須津J-10号墳）	神谷字 846-1 住宅	19970701 ～19970703	溝状遺構		本書
H14	200	神谷古墳群 5地区 -2次	試掘 市	〔322〕千人塚古墳 （須津J-10号墳）	神谷 824-7　地先官地 千人塚古墳復元整備事業	20020801 ～20030203	横穴式石室	須恵器・馬具・ 鉄鏃・玉類	本書
H18	200	神谷古墳群 5地区 -3次	試掘 市	〔322〕千人塚古墳 （須津J-10号墳）	神谷 847-1 学術調査	20060714 ～20060721			本書 D
H18	200	神谷古墳群 5地区 -4次	試掘 市	〔322〕千人塚古墳 （須津J-10号墳）	神谷 846-2　および官地 学術調査	20070205 ～20070228			本書 D
H11	200	神谷古墳群 6地区	試掘 市		中里字的場 1157-1 須津中学校プール改築	19991025			I
H15	200	神谷古墳群 7地区	試掘 市		神谷 845-2 外 農道	20030916 ～20030918		須恵器	E
H20	200	神谷古墳群 8地区	試掘 市		中里 1898-2　外 さく井工事	20080715	なし	なし	F
H24	200	神谷古墳群 9地区	試掘 市		中里 1763-1 不動産売買	20130305	なし	なし	K
H10	200	神谷古墳群 10地区 -1次	試掘 県	第二東名 No.45地点 〔320〕須津J-5号墳 〔318〕須津J-162号墳 〔319〕須津J-6号墳 〔317〕須津J-118号墳 〔636〕須津J-159号墳	中里 1938-4　外 第二東名建設	19980604 ～19980805	古墳5基	縄文土器片・ 黒曜石片・ 打製石斧	G
H10	200	神谷古墳群 10地区 -2次	本調査 県	第二東名 No.45地点Ⅰ期 〔319〕須津J-6号墳 〔317〕須津J-118号墳	神谷字大塚 865-4　ほか 第二東名建設	19990126 ～19990331	須津J-第6号墳 （墳丘・周溝・ 横穴式石室） 須津J-第118号墳 （横穴式石室）	玉類・耳環・ 馬具・鉄刀・ 刀装具・ 須恵器片・ 土師器片ほか	H
H11	200	神谷古墳群 10地区 -3次	本調査 県	第二東名 No.45地点Ⅱ期 〔636〕須津J-159号墳	神谷字大塚 865-4　ほか 第二東名建設	19990401 ～19990609	須津J-第159号墳 （墳丘・周溝・ 横穴式石室）	須恵器・玉類・ 耳環・馬具・ 大刀・刀装具・ 鉄鏃・刀子・ 弓金具	H
H30	200	神谷古墳群 11地区 -1次	確認 市		川尻 480-1 ほか 水源地新設	20180910 ～20181009	古墳・不明遺構	土器	L
H31	200	神谷古墳群 11地区 -2次	確認 市		川尻 480-1 ほか 水源地新設	20190513 ～20190520	なし	土器	M

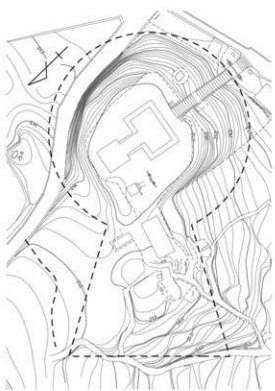
【報告書】

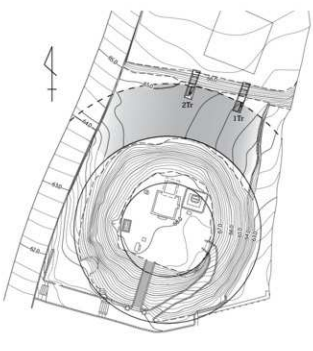
A 『中里大久保（K第95号）古墳 【付載】K第97・98・99号墳の副葬品』（1975）
B 『中里大塚団地古墳』（1976）
C 「富士市天神塚古墳確認調査報告」『静岡県の前方後円墳 - 個別報告編 -』静岡県埋蔵文化財報告書第55集　静岡県教育委員会（2001）
D 『平成17・18年度　富士市内遺跡発掘調査報告書』富教委（2008）
E 『平成15・19年度富士市内遺跡発掘調査報告書』（2009）
F 『平成14・20年度富士市内遺跡発掘調査報告書』（2010）
G 静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告　第230集『富士山・愛鷹山麓の遺跡』中日本高速道路㈱・財団（2010）
H 静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告　第231集『富士山・愛鷹山麓の古墳群』中日本高速道路㈱・財団（2010）
I 『富士市内遺跡発掘調査報告書　－平成11・12年度－』富士市埋蔵文化財調査報告　第53集（2012）
J 『富士市内遺跡発掘調査報告書　－平成22・23年度－』富士市埋蔵文化財調査報告　第54集（2013）
K 『富士市内遺跡発掘調査報告書　－平成24・25年度－』富士市埋蔵文化財調査報告　第57集　（2015）
L 『富士市内遺跡発掘調査報告書　－平成30年度－』富士市埋蔵文化財調査報告　第67集（2019）
M 『富士市内遺跡発掘調査報告書　－令和元年度－』富士市埋蔵文化財調査報告　第70集（2021）

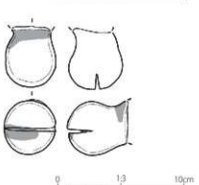
TK47 ～ MT15 型式併行期頃の築造とみられる天神塚古墳は、墳丘の発掘調査から、墳丘長約 51m の前方後円墳または径約 32m の円墳と推定されているが、埴輪はみられない。また、天神塚古墳の北西約 400m、赤潤川を見下ろす丘陵上にかつて存在した寺屋敷古墳は、伝承によれば主体部はベンガラが敷き詰められた幅 4 尺、長さ 13 尺の「大石室」とされ、大刀、剣、鉄器といった副葬品が出土している。富士山かぐや姫ミュージアム所蔵資料のなかには当古墳出土の形象埴輪片（馬形埴輪の鈴部分）があり、天神塚古墳に後続する首長墳とみてよい。

また、丸山古墳も調査例はないものの、現況から径 50m、高さ 6m の円墳と考えられており、天神塚古墳、寺屋敷古墳と近接した時期の首長墳とみられる。一方、須津川西岸の周辺より一段高い丘陵尾根上に TK10 ～ TK43 型式併行期頃に築かれたとみられるのが、琴平古墳である。近年実施した墳丘北側のトレンチ調査の結果、径 29.7m、周溝幅 8.5 m の円墳と推定されている。

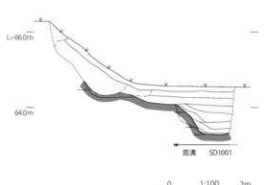
6 世紀後葉から 7 世紀代には、横穴式石室を内包する径 10m 前後の小型の円墳群が、中位～低位段丘面から扇状地にかけて多数築かれるようになる。







寺屋敷古墳出土埴輪片（馬形埴輪の鈴部分）



琴平古墳　1Tr 東壁　周溝　南北セクション図

第 12 図　天神塚古墳・寺屋敷古墳・琴平古墳

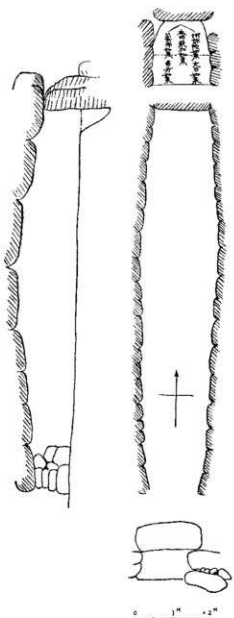
琴平古墳の周囲には、玉類や耳環、銅椀、砥石が出土した道東古墳（中里 K-79 号墳）、乳文鏡や馬具（轡・鉸具）、大刀 3 本、須恵器が出土したアガリット古墳（中里 K-78 号墳）のほか、本書で再報告する中里大久保古墳（K-95 号墳）や中里 K-97 ～ 99 号墳が近接して展開しており、中里支群の中核的集団の墓域となっていったことが窺える。

神谷（須津）支群　神谷（須津）支群は、須津川東岸の河岸段丘及び東側丘陵斜面に立地する古墳によって構成される。現在までに確認できる古墳はすべて 6 世紀末～ 7 世紀代のものである。当支群の中核をなすのが、本書で報告する千人塚古墳である（須津 J-10 号墳）。10m 以上を測る石室規模などから古来注目されていたようであり、『吉原市の古墳』では「神谷群の主をなすもの」と位置付けられている（中野 1958）。

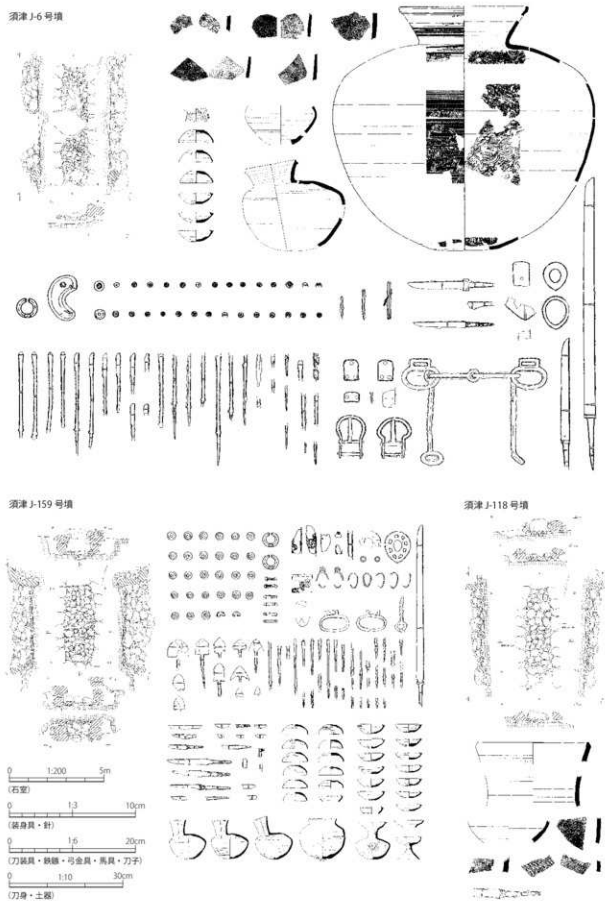
神谷（須津）支群の南端、千人塚古墳の約 750m 南にかつて存在した神谷大塚古墳からは、玉類や耳環、大刀、金銅製鐙、甲冑、馬具、須恵器（高坏、瓶、提瓶等）が出土していることが伝わっている。このほか、神谷大塚古墳出土の可能性のある遺物のなかには毛彫馬具の金銅製辻金具があり、墳丘や石室の詳細は不明ながら、こちらも当支群の中核的古墳の一つであった蓋然性は高い。千人塚古墳の北西に位置し、6 世紀末頃～ 7 世紀前葉の築造とみられる須津 J-6 号墳では組合式箱形石棺のある横穴式石室内から、玉類や大刀、小刀、鉄鏃、馬具（轡・鉸具など）、須恵器のほか、希少な鉄針（縫針）が出土した。7 世紀中頃築造の須津 J-159 号墳では玉類や大刀、豊富な鉄鏃、刀子、馬具、須恵器等のまとまった副葬品が出土している。また、石室上面の調査で

第 13 図　千人塚古墳　墳丘全景［文献 B］

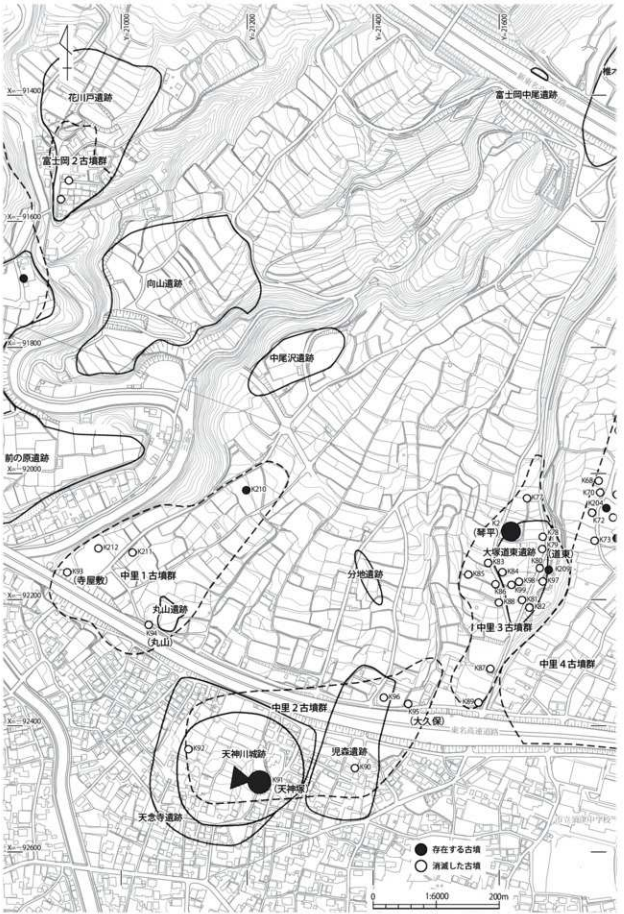
第 14 図　千人塚古墳　開口部［文献 A］



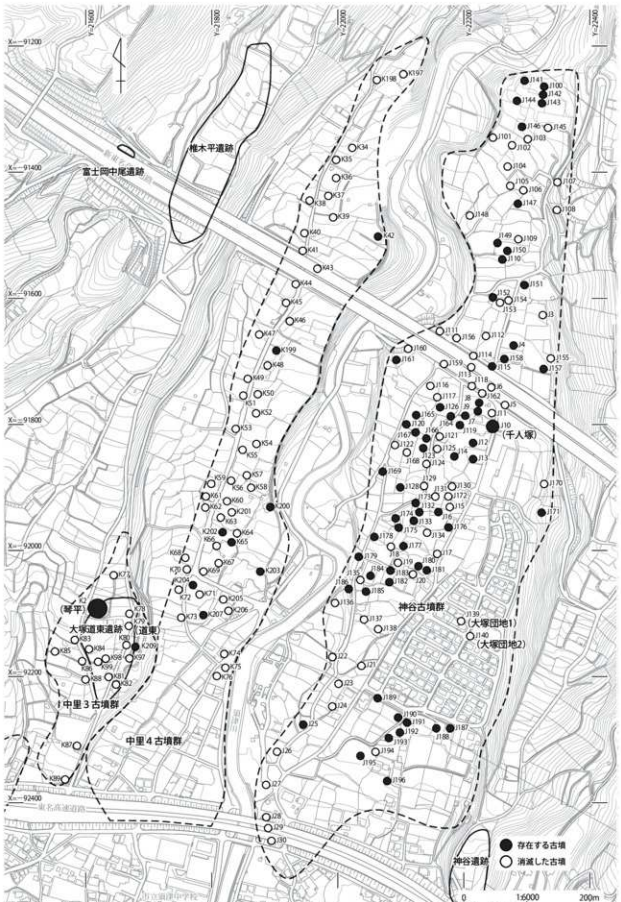
第 15 図　千人塚古墳　石室実測図［文献 A］



第 16 図　須津古墳群　石室と出土遺物実測図（1）



第 17 図　中里・神谷支群古墳分布図（西）

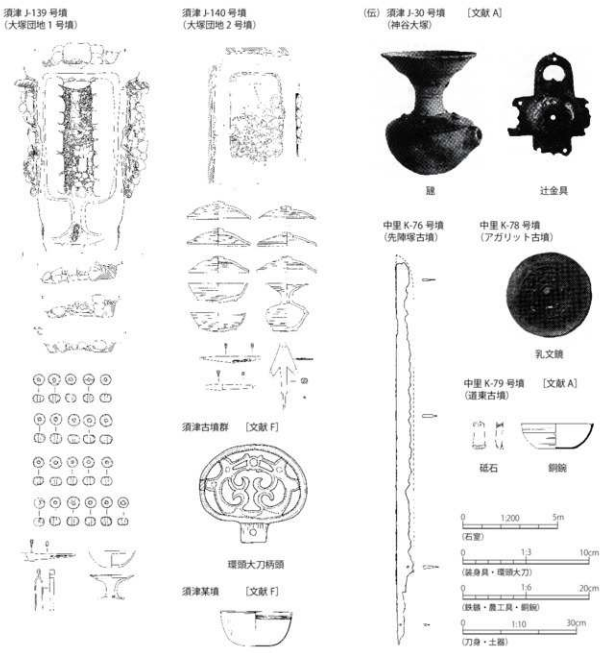


第18図　中里・神谷支群古墳分布図（東）

はあるが、千人塚古墳の西側に位置する須津 J-7・9 号墳はともに全長が 6m を超える横穴式石室が遺存していることが判明しており、千人塚古墳一帯の群構造を考える上で重要である。一方、千人塚古墳の約 300m 南に位置する大塚団地 1 号墳（J-139 号墳）では、横穴式石室内から 2 基の組合式箱形石棺が検出されている。

出土地不明遺物　須津古墳群内から出土した資料のうち、金銅製の双龍環頭大刀柄頭（東京国立博物館蔵）や銅鋺（富士山かぐや姫ミュージアム蔵）が注目されるが、いずれも出土地が不明である。

また、富士市立須津小学校にはかつての開墾によって出土した多量の大刀や須恵器が集積されていたようであり（富士市教育委員会 1988）、現在その多くは富士山かぐや姫ミュージアムで保管している。旧『静岡県史』（静岡県 1930）によれば、中里道東古墳や神谷大塚古墳の出土品の一部も同小学校に保管されており、その中には前述の毛彫馬具や粒状装飾のある鐙といった希少な品もあったようであるが、現状の資料群の中には見当たらない。



第 19 図　須津古墳群　石室と出土遺物実測図（2）

第２表　須津古墳群一覧表

古墳名	古墳番号	現状	標高(m)	墳形	墳長(m)	内部主体	開口方向	築造年代	参考文献	主な出土遺物	備考
中里K-第２号墳 琴平古墳	250	存在	64	円墳（周溝幅8.5m）	29.7	不明		6c（TK10～TK43）	B・E・H		昭和33年県指定
中里K-第34号墳	195	消滅	105	円墳		横穴式石室			B・E	須恵器破片	
中里K-第35号墳	196	消滅	104			（横穴式石室）			B・E	須恵器破片	
中里K-第36号墳	197	消滅	102	（円墳）		（横穴式石室）			B・E	周辺から須恵器破片採集	
中里K-第37号墳	198	消滅	100	（円墳）		（横穴式石室）			B・E	周辺から須恵器破片採集	
中里K-第38号墳	199	消滅	96	（円墳）		（横穴式石室）			B・E	周辺から須恵器破片採集	
中里K-第39号墳	200	消滅	97	（円墳）		（横穴式石室）			B・E	周辺から須恵器破片採集	
中里K-第40号墳	201	消滅	92	（円墳）					B・E	須恵器破片	
中里K-第41号墳	202	消滅	91	（円墳）					B・E	須恵器破片	
中里K-第42号墳	203	存在	90			横穴式石室 長5.5、外幅3.6			B・E	周辺から須恵器破片採集	
中里K-第43号墳	204	消滅	91	（円墳）		（横穴式石室）			B・E	須恵器破片	
中里K-第44号墳	205	消滅	88	（円墳）		（横穴式石室）			B・E		
中里K-第45号墳	206	消滅	86	（円墳）		（横穴式石室）			B・E		
中里K-第46号墳	207	消滅	82	（円墳）		（横穴式石室）			B・E	周辺から須恵器破片採集	
中里K-第47号墳	208	消滅	80	（円墳）		（横穴式石室）			B・E	周辺から須恵器破片採集	
中里K-第48号墳	210	消滅	76	（円墳）		（横穴式石室）			B・E	周辺から須恵器破片採集	
中里K-第49号墳	211	消滅	74						B・E	須恵器破片	
中里K-第50号墳	212	消滅	72	（円墳）		（横穴式石室）			B・E		
中里K-第51号墳	213	消滅	70						B・E		
中里K-第52号墳	214	消滅	69						B・E		
中里K-第53号墳	215	消滅	66	（円墳）		（横穴式石室）			B・E		
中里K-第54号墳	216	消滅	66	（円墳）		（横穴式石室）			B・E		
中里K-第55号墳	217	消滅	64	（円墳）		（横穴式石室）			B・E		
中里K-第56号墳	218	消滅	60	（円墳）		（横穴式石室）			B・E		
中里K-第57号墳	219	消滅	62	（円墳）		（横穴式石室）			B・E		
中里K-第58号墳	220	消滅	60						B・E		
中里K-第59号墳	221	消滅	58	（円墳）		（横穴式石室）			B・E		
中里K-第60号墳	222	消滅	58	（円墳）		（横穴式石室）			B・E		
中里K-第61号墳	223	消滅	56	（円墳）		（横穴式石室）			B・E		
中里K-第62号墳	224	消滅	54	（円墳）		（横穴式石室）			B・E		
中里K-第63号墳	227	消滅	56	円墳	径11				B・E		
中里K-第64号墳	228	消滅	56	（円墳）		（横穴式石室）			B・E		
中里K-第65号墳	230	存在	54	（円墳）		（横穴式石室）			B・E		
中里K-第66号墳	231	消滅	52	（円墳）		（横穴式石室）			B・E		
中里K-第67号墳	233	消滅	50						B・E		
中里K-第68号墳	232	消滅	49	（円墳）		（横穴式石室）			B・E		
中里K-第69号墳	235	消滅	48	（円墳）		（横穴式石室）			B・E		
中里K-第70号墳	236	消滅	47	（円墳）		（横穴式石室）			B・E		
中里K-第71号墳	238	消滅	46						B・E		
中里K-第72号墳	239	消滅	45						B・E		
中里K-第73号墳	243	消滅	43						B・E		
中里K-第74号墳	244	消滅	37						B・E		
中里K-第75号墳	245	消滅	37						B・E		
中里K-第76号墳 先陣塚	246	消滅	36			（横穴式石室）		後期	B・E	（直刀・鉄製鍔・馬具鏡板残片・須恵器）	
中里K-第77号墳	248	消滅	65	（円墳）		（横穴式石室）			B・E		
中里K-第78号墳 アガリット古墳	249	消滅	58			（横穴式石室）			A・B・E	鏃（乳文鏃）1、耳環、大刀3、馬具（轡1、鏡具）、須恵器（壺、瓶）	大正6年調査
中里K-第79号墳 道東古墳	251	消滅	57	円墳		（横穴式石室）（長5.4m・幅1.61m・高1.21m）			A・B・E	装身具（勾玉10、耳環2）、大刀1、銅碗1、砥石1	明治36年調査 昭和30年採土により消滅
中里K-第80号墳	252	消滅	56	（円墳）		（横穴式石室）（組合式箱形石棺）	（南東）		B・E		
中里K-第81号墳	262	消滅	48			（横穴式石室）			B・E		
中里K-第82号墳	263	消滅	46			（横穴式石室）			B・E		
中里K-第83号墳	255	消滅	58						B・E		
中里K-第84号墳	254	消滅	58						B・E		
中里K-第85号墳	256	消滅	54						B・E		
中里K-第86号墳	260	消滅	54	（円墳）		（横穴式石室）			B・E	（周囲から須恵器採集）	
中里K-第87号墳	264	消滅	40	（円墳）		（横穴式石室）			B・E	（周囲から須恵器採集）	
中里K-第88号墳	261	消滅	50						B・E		
中里K-第89号墳	265	消滅	33			（横穴式石室）	（南）		B・E		
中里K-第90号墳	268	消滅	26						B・E	（周囲から土師器・須恵器採集）	
中里K-第91号墳 天神塚古墳	269	存在	26	前方後円墳or円墳	51.5m or 32m			6c初頭 TK47～MT15	E・H		

古墳名	古墳番号	現状	標高(m)	墳形	墳長(m)	内部主体	開口方向	築造年代	参考文献	主な出土遺物	備考
中里K-第92号墳 慶昌院古墳	270	消滅	25	(円墳)	(直径8m)	(横穴式石室)		後期	B・E	(大刀、鉾、須恵器)	
中里K-第93号墳 寺屋敷古墳	272	消滅	28	(前方後円墳) or (円墳)		(幅4尺、長13尺ペンガラ敷き石室)	(東南)		A・B・E・H	(大刀、剣) 馬形埴輪	
中里K-第94号墳 丸山古墳	271	消滅	39	(円墳)	(直径50m?)				B・E		
中里K-第95号墳 中里大久保古墳	266	消滅	36	(円墳)	(直径12 m)	横穴式石室 長6 m＋	南東	6c末	C・E・本書	装身具(耳環6, 切子玉1, 丸玉19, 小玉7)、大刀1, 刀装具(圭頭柄頭1, 責金具3, 足金物1, 鞘尻金具2)、鉄鏃30+, 馬具(轡1, 吊金具3, 鉸具2)、刀子4, 須恵器(平瓶1, 瓶1, フラスコ瓶2)、土師器(坏1)	
中里K-第96号墳	267	消滅	36						B・E		
中里K-第97号墳	257	消滅	52					6c末	C・E・本書	大刀2, 刀装具(責金具1)、鉄鏃4+, 刀子2, 須恵器(提瓶1)	昭和34年8月発見
中里K-第98号墳	258	消滅	54					6c末	C・E・本書	大刀2, 刀装具(鐔1)、鉄鏃16+, 馬具(轡1, 飾金具25, 鉸具1, 素環辻金具?8)、須恵器(提瓶1)	昭和42年秋発見
中里K-第99号墳	259	消滅	54					6c末	C・E・本書	装身具(耳環2+2, 切子玉3+1, 丸玉8+6, 小玉4)、大刀6～7, 刀装具(鐔1, 責金具3+)、鉄鏃21+, 馬具(轡1, 飾金具3, 鉸具1)、刀子3～4, 須恵器(坏蓋4, 坏身4, 横瓶1, 提瓶1, フラスコ瓶1, 瓶3)、土師器(高坏4, 坏2)	昭和43年1月7日発見
中里K-第197号墳	193	消滅	112			(長5+)			E		
中里K-第198号墳	194	消滅	116			(長8.5、幅1.5)			E		
中里K-第199号墳	209	存在	79			(横穴式石室 外長6 m、外幅3 m)	(南)		E		
中里K-第200号墳	225	存在	55						E		
中里K-第201号墳	226	消滅	57						E		
中里K-第202号墳	229	存在	55			横穴式石室			E		
中里K-第203号墳	234	存在	47	(円墳)	(径15)	(横穴式石室)			E		
中里K-第204号墳	237	存在	46						E		
中里K-第205号墳	240	消滅	41						E		
中里K-第206号墳	241	消滅	39						E		
中里K-第207号墳	242	存在	44						E		
中里K-第209号墳	253	存在	52			(横穴式石室)			E		
中里K-第210号墳	273	存在	53						E		
中里K-第211号墳	274	消滅	33						E		
中里K-第212号墳	275	消滅	31						E		
須津J-第3号墳	301	消滅	83	(円墳)		(横穴式石室)			B・E	周辺に須恵器破片散乱	
須津J-第4号墳	304	存在	77	(円墳)		(横穴式石室 全長6.2 m、幅3.7 m)			B・E		
須津J-第5号墳	320	消滅	71	(円墳)		(横穴式石室)			B・E	周辺に須恵器破片散乱	
須津J-第6号墳	319	消滅	72	円墳	径13 m	横穴式石室 全長6.5 m以上、玄室幅1.3 m	南	7c前半	B・E・G	組合式箱形石棺 玉類(勾玉1・丸玉1・小玉28以上)・耳環1・馬具(轡1・鉸具2・帯金具3)・鋲1・鉄刀2・平成11年発掘調査 刀装具・刀子3・鉄鉾4以上・鉄鏃13以上・須恵器(坏身3・坏蓋3・甕片)・土師器鍔付椀1	
須津J-第7号墳	327	存在	71	(円墳)		横穴式石室　全長6 m以上、幅1.1 m			B・E・I	周辺に須恵器破片散乱	
須津J-第8号墳	324	存在	72	(円墳)		(横穴式石室 全長6 m、幅3 m)			B・E	須恵器破片	
須津J-第9号墳	325	存在	70	(円墳)		横穴式石室　全長6.7 m以上、幅0.95 m			B・E・I	周辺に須恵器破片散乱	
須津J-第10号墳 千人塚古墳	322	存在	70	円墳	径21 m	横穴式石室 長11.4m以上、幅1.5～2.1	南	7c	A・B・E・本書	組合式箱形石棺 須恵器(蓋・長頸壺・瓶)・轡・鐙吊金具・鉄鏃	市指定史跡 (昭和51年7月23日)
須津J-第11号墳	323	消滅	71	(円墳)		(横穴式石室)			B・E		

古墳名	古墳番号	現状	標高(m)	墳形	墳長(m)	内部主体	開口方向	築造年代	参考文献	主な出土遺物	備考
須津J-第12号墳	335	存在	68	(円墳)		(横穴式石室)			B・E	須恵器破片	
須津J-第13号墳	337	存在	66	(円墳)		(横穴式石室)			B・E		
須津J-第14号墳	338	存在	66						B・E		
須津J-第15号墳	350	消滅	60	(円墳)		(横穴式石室)			B・E		
須津J-第16号墳	351	存在	60	(円墳)		(横穴式石室)			B・E		
須津J-第17号墳	360	消滅	56	(円墳)		(横穴式石室)			B・E		
須津J-第18号墳	366	消滅	57	(円墳)		(横穴式石室)			B・E	須恵器破片	
須津J-第19号墳	365	消滅	55	(円墳)		(横穴式石室)			B・E	須恵器破片	
須津J-第20号墳	363	消滅	53	(円墳)		(横穴式石室)			B・E	須恵器破片	
須津J-第21号墳	380	消滅	43	(円墳)		(横穴式石室)			B・E	須恵器破片	
須津J-第22号墳	381	消滅	40	(円墳)		(横穴式石室)			B・E	須恵器破片	
須津J-第23号墳	382	消滅	40	(円墳)		(横穴式石室)			B・E	須恵器破片	
須津J-第24号墳	393	消滅	39	(円墳)		(横穴式石室)			B・E	須恵器	
須津J-第25号墳	394	存在	36	(円墳)		(横穴式石室)			B・E	須恵器破片	
須津J-第26号墳	395	消滅	33	(円墳)		(横穴式石室)			B・E	須恵器	
須津J-第27号墳	396	消滅	31	(円墳)		(横穴式石室)			B・E		
須津J-第28号墳	397	消滅	29	(円墳)		(横穴式石室)			B・E		
須津J-第29号墳	398	消滅	28	(円墳)		(横穴式石室)			B・E		
須津J-第30号墳 神谷大塚	399	消滅	27	円墳		(横穴式石室)		後期	A・B・E	(伝)玉類(勾玉・管玉・切子玉・小玉・琥珀玉)・金環・銅環・直刀・金銅製冑・甲冑・馬具・須恵器(高坏・瓶・横瓶)	
須津J-第100号墳	277	存在	110						E		
須津J-第101号墳	285	消滅	100						E		
須津J-第102号墳	284	消滅	100						E		
須津J-第103号墳	283	消滅	104						E		
須津J-第104号墳	286	消滅	98						E		
須津J-第105号墳	289	消滅	98						E		
須津J-第106号墳	288	消滅	98						E		
須津J-第107号墳	287	消滅	109						E		
須津J-第108号墳	290	消滅	108						E		
須津J-第109号墳	293	消滅	92						E		
須津J-第110号墳	296	存在	91			(全長6.8 m、外幅3 m)			E		
須津J-第111号墳	312	消滅	78						B・E		
須津J-第112号墳	307	消滅	80						E		
須津J-第113号墳	309	消滅	78						E	黒曜石片採集	平成10年試掘調査により消滅確認
須津J-第114号墳	308	消滅	79						E		
須津J-第115号墳	306	存在	77						E		
須津J-第116号墳	315	消滅	74						B・E		
須津J-第117号墳	316	消滅	74						B・E		
須津J-第118号墳	317	消滅	73			横穴式石室 全長5.3 m以上、玄室幅1.25 m (全長7 m)	南	7c前半	B・E・G	須恵器片・刀子	平成11年発掘調査
須津J-第119号墳	329	存在	69						E	須恵器破片	
須津J-第120号墳	331	存在	64			(全長6 m、幅4 m)			E		
須津J-第121号墳	334	消滅	68						E		
須津J-第122号墳	343	消滅	68						E		
須津J-第123号墳	341	存在	68						E		
須津J-第124号墳	340	消滅	66						E	須恵器破片	
須津J-第125号墳	339	消滅	66						E		
須津J-第126号墳	326	存在	72			(横穴式石室 全長7.5 m、幅3.5 m)			E		
須津J-第128号墳	345	存在	64						E		
須津J-第129号墳	346	消滅	64						E		
須津J-第130号墳	347	消滅	61						E		
須津J-第131号墳	352	消滅	63	(円墳)		(横穴式石室)			E	須恵器破片	
須津J-第132号墳	354	存在	62			(横穴式石室 全長7 m、幅3.5 m)			E		
須津J-第133号墳	356	存在	60			(全長9 m、幅2.5 m)	(南)		E	土師器破片	
須津J-第134号墳	359	消滅	58	(円墳)		(横穴式石室)			E		
須津J-第135号墳	373	消滅	52						E		
須津J-第136号墳	375	消滅	42						E		
須津J-第137号墳	376	消滅	48						E		
須津J-第138号墳	377	消滅	48						E		
須津J-第139号墳 大塚団地第1号墳	378	消滅	50	円墳 (径11)		横穴式石室 全長5.75、幅1.4～1.6	南	7c	D・E	Y字状鉄器・刀子・須恵器・丸玉	昭和50年発掘調査 組合式箱形石棺
須津J-第140号墳 大塚団地第2号墳	379	消滅	50	円墳		横穴式石室	南	後期	D・E	鉄鏃・刀子・須恵器	昭和50年発掘調査
須津J-第141号墳	276	存在	108	(円墳)					E		
須津J-第142号墳	278	存在	109						E		

古墳名	古墳番号	現状	標高(m)	墳形	墳長(m)	内部主体	開口方向	築造年代	参考文献	主な出土遺物	備考
須津J-第143号墳	279	存在	109						E		
須津J-第144号墳	280	存在	106						E		
須津J-第145号墳	281	消滅	106						E		
須津J-第146号墳	282	存在	104						E		
須津J-第147号墳	291	存在	75						E		
須津J-第148号墳	292	消滅	94						E		
須津J-第149号墳	294	存在	92						E		
須津J-第150号墳	295	存在	92			(全長7m、外幅3.8m)			E		
須津J-第151号墳	297	存在	88			(全長4.5m、幅2mの石列)			E		
須津J-第152号墳	298	存在	84			(全長3mの石列)			E		
須津J-第153号墳	299	消滅	82						E		
須津J-第154号墳	300	消滅	82						E		
須津J-第155号墳	302	消滅	80						E		
須津J-第156号墳	311	消滅	79						E		
須津J-第157号墳	303	存在	77						E		
須津J-第158号墳	305	存在	76		(径12m)				E		
須津J-第159号墳	636	消滅	77	円墳	径10m	横穴式石室 全長4.75m、玄室幅1.6m	南	7c前半	G	須恵器(坏蓋11・坏身15・高坏1・甕2・広口壺1・平瓶3)・丸玉29・耳環2・平成11年新規発見馬具(轡1)・大刀1・刀・発掘調査装具・鉄鏃19・刀子11・弓金具6	
須津J-第160号墳	313	消滅	74						E		
須津J-第161号墳	314	存在	73						E		
須津J-第162号墳	318	消滅	73						E	須恵器破片	
須津J-第164号墳	328	存在	71			(横穴式石室 全長6.5m、幅3m)			E	須恵器破片	
須津J-第165号墳	330	存在	70						E		
須津J-第166号墳	333	存在	69						E		
須津J-第167号墳	332	存在	70						E		
須津J-第168号墳	342	消滅	69						E	須恵器破片	
須津J-第169号墳	344	存在	63						E		
須津J-第170号墳	336	消滅	74						E		
須津J-第171号墳	348	存在	76	(円墳)		(横穴式石室)			E		
須津J-第172号墳	349	消滅	62	(円墳)		(横穴式石室)			E		
須津J-第173号墳	353	存在	62						E		
須津J-第174号墳	355	存在	62			(全長6.5m、幅4.5m)	(南)		E	須恵器破片	
須津J-第175号墳	358	存在	59			(全長5m、幅2.5m)			E		
須津J-第176号墳	357	存在	58						E		
須津J-第177号墳	364	存在	57			(全長5.5m、幅2m)	(南)		E		
須津J-第178号墳	367	存在	58						E		
須津J-第179号墳	368	存在	54						E		
須津J-第180号墳	362	存在	54						E		
須津J-第181号墳	361	存在	54						E		
須津J-第182号墳	369	存在	53			(横穴式石室 全長6.9m、幅3.5m)			E		
須津J-第183号墳	370	存在	53						E		
須津J-第184号墳	371	存在	53						E		
須津J-第185号墳	372	存在	53						E		
須津J-第186号墳	374	存在	48						E		
須津J-第187号墳	385	存在	37						E		
須津J-第188号墳	384	存在	37						E		
須津J-第189号墳	383	存在	39						E	須恵器破片	
須津J-第190号墳	386	存在	39						E		
須津J-第191号墳	387	存在	39						E		
須津J-第192号墳	388	存在	37						E		
須津J-第193号墳	389	存在	35						E		
須津J-第194号墳	390	消滅	34						E		
須津J-第195号墳	391	存在	33			(横穴式石室)			E		
須津J-第196号墳	392	存在	33						E		

【参考文献】

A 静岡県 1930『静岡県史 第1巻』
B 中野国雄 1958「古原市域の古墳」『古原市の古墳』
C 富士市教育委員会 1975『中里大久保(K第95号)古墳 付載 K第97・98・99号墳の副葬品』
D 富士市教育委員会 1976『中里大塚団地古墳』
E 富士市教育委員会 1988『富士市の埋蔵文化財(古墳編)』
F 静岡県 1992『静岡県史 資料編3 考古三』
G 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 2010『富士山・愛鷹山麓の古墳群』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第231集
H 富士市教育委員会 2012『富士市内遺跡発掘調査報告書－平成11・12年度－』
I 富士市教育委員会 2019『富士市内遺跡発掘調査報告書 －平成30年度－』富士市埋蔵文化財調査報告 第67集

第3章　千人塚古墳の調査成果

第1節　墳丘

1　古墳の現況

千人塚古墳（須津J-10号墳）は須津川東岸の河岸段丘上、標高70mに立地する円墳である。現在の径12m、高さ3.6mを測る。墳丘は耕作や道路によって周囲を削られており、横穴式石室が露出する。江戸時代前期には開口していたようであり、石室の奥壁には「承応四乙未年」（1655）の紀年銘のある仏名が陰刻されている。発掘調査以前に出土遺物の存在は知られていないが、周辺では須恵器の破片が散布していたようである（中野1958など）。

2　1次調査トレンチ

個人住宅建設に伴い、墳丘北側に東西方向のトレンチを2箇所設定した。その結果、2トレンチ（1次調査2Tr）中央部の耕作土直下において、幅5.2m、深さ0.2mの半円状の浅い落ち込みが検出された。

覆土は発泡したスコリアを多量に含む黒色土であるが、土層図上では「Ⅱ層」として落ち込み以外の部分にも広がる自然堆積層的な表現となっており、判然としない。

3・4次調査の所見から、平成19年2月13日に開催された千人塚古墳保存整備に関する検討委員会配付資料ではこの落ち込みが周溝の一部であった可能性も指摘されているが、検討を要する。

3　3次調査トレンチ

古墳整備に伴う第1期周溝確認調査として、墳丘北側の石室主軸延長上にL字形のトレンチを1箇所設定した（3次調査1Tr）。その結果、トレンチの南端の耕作土直下において、深さ0.2m程度の緩やかな落ち込みが検出された。覆土は大淵スコリアを含んでおり、周溝の外側の立ち上がりの一部と考えられる。

4　4次調査トレンチ

古墳整備に伴う第2期周溝確認調査および前庭部確認調査として、墳丘西側に東西方向のトレンチを1箇所設定した。その結果、西側周溝確認トレンチ（4次調査2Tr）の西端の耕作土直下において、周溝とみられる落ち込みが検出された。覆土は新期スコリア（大淵スコリアと同義か）を多く含んでいる。周溝幅は北壁で2.0m、南壁で2.7mであり、最深部の深さは0.35mを測る。限られた部分の調査所見ではあるが、周溝は墳丘側の方がやや立ち上がりが急であり、中央よりやや東寄りが最深部となっている。最深部から外側への立ち上がりは、中段に平坦な面が形成されており、2段掘りのような様相を呈する。

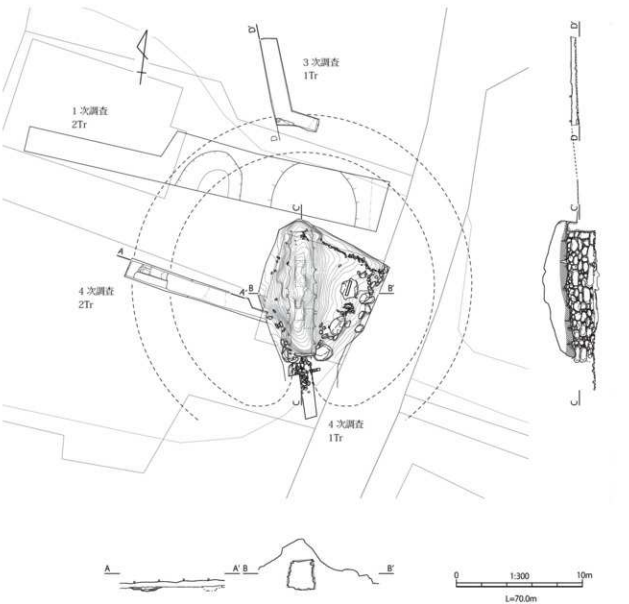
5　墳丘と周溝の形状

上記の墳丘周辺の確認調査成果を基に、千人塚古墳の墳丘と周溝の形状を復元してみたい。これまで当古墳の墳丘については、『吉原市の古墳』時の復元径17mの円墳（中野1958）という指摘が重視され、昭和51年（1976）の富士市指定史跡としての指定書もこの見解が踏襲された。続いて、4次調査までの確認調査所見が整理される中で、3次調査1Trおよび4次調査2Trで検出された周溝を基に、周溝幅2.2～2.7m、墳径20mの円墳とされている（若林編2008）。ただし、この時の復元図は石室平面図が合成されたものにはなっておらず、復元過程を示す文章もないことから、正確な石室の位置やその主軸を勘案した復元とは言い難い点に課題があった。

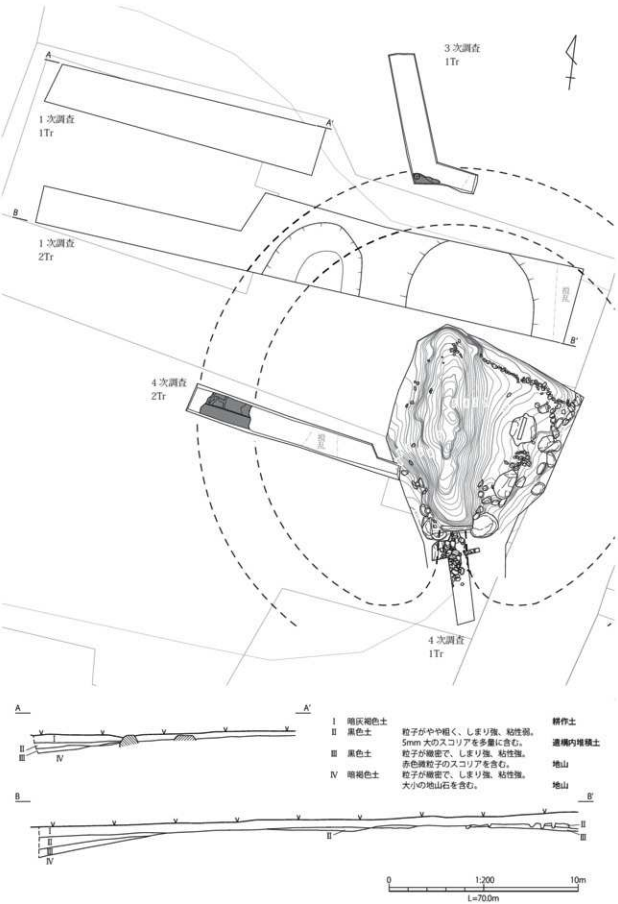
今回の報告に伴い、改めて2次調査時の石室平面図をトレースし、1～4次調査の平面図をイラストレーター上で合成した。さらに、石室奥壁幅の中心と開口部幅の中心を結んだ線を石室主軸と設定し、3・4Trで検出された周溝との位置関係を検証した。すると、石室主軸に直交する線と、4次調査2Trで

検出された周溝の墳丘側立ち上がりの交点までの距離は約 10.5 m となる。これを墳丘の半径として、3 次調査 1Tr の落ち込みを周溝の一部と考えた際に矛盾のない周溝幅は約 3.0 m という数値に復元され、さらに墳丘中心点はちょうど石棺 1 の南端あたりにくることになる。また、前庭部側の平面形については 4 次調査 1Tr の成果だけでは知り得ないが、時期・規模共に近い存在である原分古墳（長泉町）の調査成果等を参考にすれば（井鍋編 2008）、ハの字状に開放する構造であったと考えるのが妥当であろう。

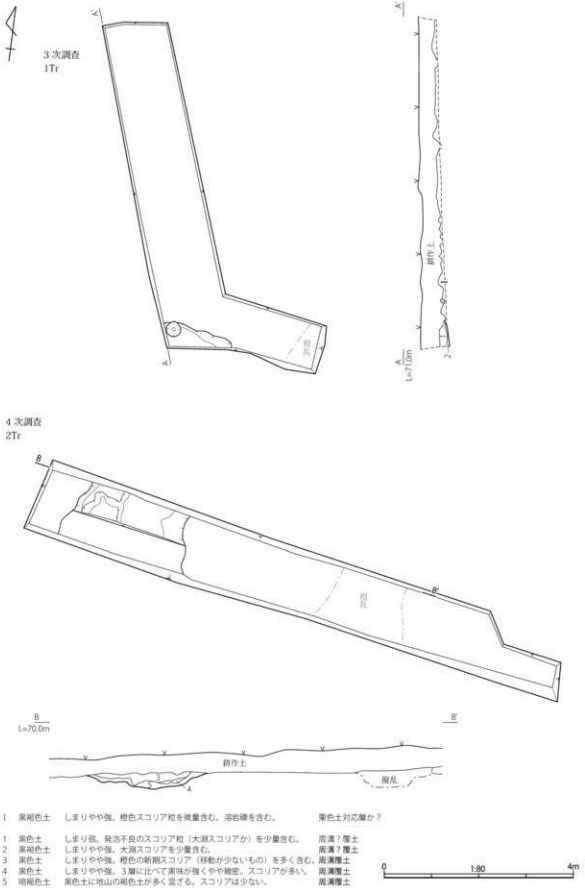
以上のことから、限られたトレンチ調査からの復元ではあるものの、現状では千人塚古墳の墳丘については、直径約 21.0 m、周溝幅約 3.0 m の円墳と考えておきたい。



第 20 図　墳丘と 3 次・4 次調査トレンチ　平面図・セクション図



第 21 図　トレンチ配置図および 1 次調査セクション図



第 22 図　3 次調査 1Tr・4 次調査 2Tr　平面図・セクション図

第2節　埋葬施設

1　基本層序

『業務委託報告書』における層序　株式会社東日が平成15年（2003）3月20日に富士市教育委員会へ提出した『千人塚古墳―平成14年度　千人塚古墳調査業務委託―調査報告書』（以下、『業務委託報告書』）によれば、土層の実測図はないものの、石室内には奥壁側、開口部側ともに約1.2 mの厚さで土砂が堆積していたとされる。

石室内の基本層位は4層に大別されるようであり、1層は緩い黒色土でガラスやビニールを含む、近現代の堆積土である。この層を除去すると、昭和56年（1981）設置の旧看板掲載の計測値（奥壁高1.27 m、開口部高0.90 m）とほぼ同じ規模となる。2層は締まった黒褐色土でスコリアを多く含む堆積土であるが、これもガラスやビニールが混じるとの記述がある。3層は目の細かい黒褐色土で、30cmほどの礫を多く含むほか、ガラス片が若干混じり、古墳に関わる遺物は出土しなかったようである。4層は締まった黒褐色土でスコリアを多く含む、床面を覆っていた層である。開口部側の須恵器などは4層から出土した。この堆積土を掘削していくと、奥壁側の一部と側壁際に礫床が検出され始めたため、この面で精査および床面の検出が行われている。

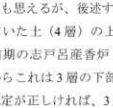
石室の開口と近世堆積層　上記の記述を信用すれば、ガラス片等を含む1～3層は近現代の堆積土のようにも思えるが、後述する開口部側石棺の側板を覆っていた土（4層）の上面からキセル（112）や近世前期の志戸呂産香炉（114）が出土しており、層厚からこれは3層の下部に該当するとみられる。この想定が正しければ、3層は近世から近代にかけて堆積した層と判断され、石室内堆積土の3/4が近世以降の堆積ということになる。そうであれば、閉塞石の一部除去による石室開口行為が近世に行われた結果、その後急速に石室内に土砂が流入する状況に至ったとみなすのが妥当である。石棺材の抜き取り行為も、棺材が見えていることが前提であり、石室開口後間もない時期に行われた蓋然性は高い。3層中の礫も、閉塞石の撤去や石棺材の抜き取り行為に伴って礫床の一部を掘削したことに起因するものとみられる。後述するように、奥壁の仏名陰刻の紀年銘は承応4年（1655）であり（2節2項）、石室内部の信仰施設化がこの時期であるならば、石室の開口時期は17世紀前半頃とみられる。さらに出土遺物の項で述べるように、114の香炉は17世紀後半の製品とみられることから、石室内部が信仰施設化されて間もない時期に、香炉を用いた祭祀行為が執り行われたものと推定される（3節6項）。

以上の想定が正しければ、床面直上の4層は、埋葬儀礼終了後から古代・中世を経て、石室開口直前までの自然堆積層と判断される。

2　横穴式石室

(1) 横穴式石室の構造

千人塚古墳の埋葬施設は、南南東に開口する無袖形の横穴式石室である。石室主軸はN-7.247°-Wで、前庭部の詳細は不明ながらも、墓体から天井が良好に遺存する。石室石材には、須津川周辺で採取された安山岩を用いている。開口部には近代に門扉が設置されており、その周囲の掘削や石室石材の図化に制限があるなかで調査が進められた。



1　ゆるい黒色土。ガラス・ビニールなど含む。
2　締まった黒褐色土。スコリアを多く含む。掘削中にガラス片・ビニールなど含む。
3　目の細かい黒褐色土。30cmほどの礫を多く含む。ガラス片などを若干含む。古墳に関わる遺物は出土しない。
4　締まった黒褐色土。スコリアを多く含む。開口部側の須恵器などはこの層から出土。床面を最初に覆った土。

第23図　石室内土層模式図

規模・形状　石室は前庭部側壁を含めた全長が11.4 m以上を測り、駿河東部地域では最大級の規模を誇る。平面形は中央部がやや胴張り状に広がる長方形を呈し、石室幅は奥壁部1.55 m、中央部（最大）2.05 m、開口部1.42 mを測る。主軸上における石室高は奥壁部2.21 m、中央部2.35 m、開口部1.51 mを測り、後述するように石室高の高い奥壁側から天井石3石分までが、「玄室」的な空間として設計・利用されたと考えられる。

墓　坑　石室下部が未調査であるため墓坑の形状は不明であるが、墳丘トレンチにおける基盤層の検出レベルから推察するならば、奥壁側では石室下半部が収まる程度の深さがある一方で、中央部から開口部付近では基底石一段分程度が収まる浅い墓坑の存在が想定される。また段構造が認められない点から、開口部側は開放した形状とみてよい。したがって、当古墳の墓坑形態は、平面「コ」の字状で山側を深めにカットする、いわゆる山寄せ式の墓坑と考えられる。

壁面構成　奥壁は1段で構成され、推定長約2.5 m、幅約2 m、厚さ0.75 m程の大型石材を鏡石として樹立させている。

奥壁表面上半には、「八」形とその下部中央に「本師釋迦如來」、向かって右手に「阿弥陀如來」・「大日如來」、左手に「薬師如來」・「多寶如來」の仏名と、「于時承応四乙未年六月吉日」の紀年銘が陰刻される。「多寶如來」の左下には「□□造之」とあり、仏名を刻んだ人物の名が記されたとみられるが、判読できない。承応4年（1655）の紀年銘から、江戸時代前期に石室内が信仰関連施設として再利用されていたことが窺える。

側壁は、両側壁共に基底石に大型石材を用いて、天井石までの要所毎に目地を揃えながら、横位に3～5段程度積み上げることを基本に構成される。

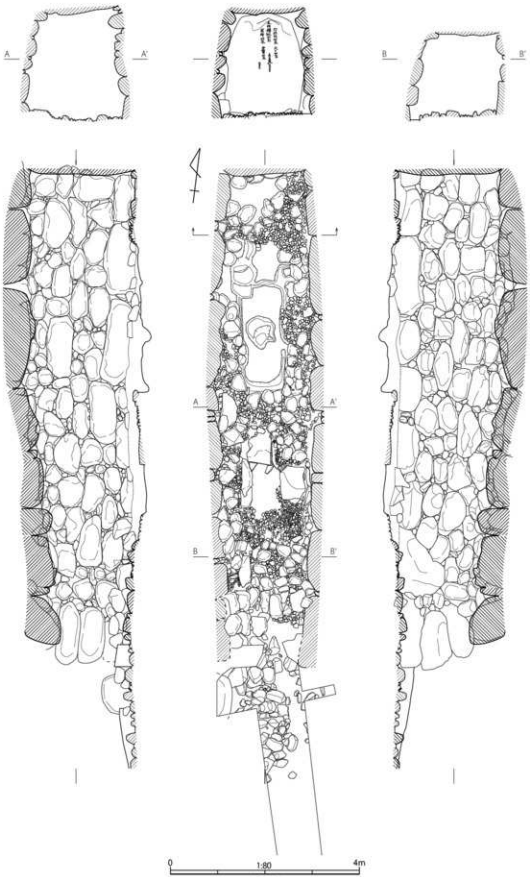
東側壁は、まず基本的に上端を揃えて基底石が設置されるが、開口部から2石目の基底石はいわゆる立石として縦位に立てて据えられており、構築工程上の指標となっていた蓋然性が高い。続いて、立石の上端から奥壁角部の2段目上端にかけて高さが揃えられ、間に落とし込むように小型の石材が積み上げられていったと考えられるが、立石上端や中程を起点に石室奥半部に向かって斜めに上昇する目地も目立つ。「玄室」側の石室高を高くするために、開口部側から徐々に高さを増すようにして壁面が構築されたと考えられる。天井石との間には、高さ調整のための小型石材が詰められている。

西側壁も奥壁から3石目までの基底石は上段よりも大型の石材が用いられるが、それより手前は小型の石材が用いられる。壁面中程から上部では奥壁角部の2段目上端や4段目上端を目標に、奥側に向かって斜めに上昇する目地が通っており、こちらも東側壁と同様、「玄室」側を徐々に高くするようにして構築されたものと判断される。一方西側壁では、奥壁直上から3石目の天井石下方の大型石材のように、壁面上部にやや大型の石材が配置される傾向にある。

天井石　天井石は、8石の大型石材とその間隙を埋める小型石材によって構成される。奥壁直上の天井石から3石目までが平天井気味に高さを揃えて架構される一方で、4石目からは、開口部に向かって徐々に低くなるように架構されている。天井部に明確な段差はないものの、主たる埋葬空間である「玄室」と、そこへ至る通路であり付属的な埋葬空間でもある「羨道」を、天井の高さによって区別していたことが想定される。

石室の「歪み」と構築工程　現状の石室壁体は、開口部付近で大きく東側に傾いていることが『業務委託報告書』で指摘されており、この「石室の歪み」は、その後の保存活用計画でも史跡整備上の課題として度々言及されている。『業務委託報告書』によると、現開口部直上の天井石については、石室床面の主軸線から東へ30cmほどずれており、開口部から3石目の天井石あたりで主軸上にもどるという。これについて、後世の自然災害、墳丘周辺の開削等による経年変化により、石室壁体に歪みが生じた状況が考えられているが、この現状の壁体自体が、そもそも石室構築工程に起因する問題であった可能性も想起される。

前述のとおり、東側壁の開口部から2石目の基底石は縦位に立てた大型石材が使用され、この「立石」が、石室構築工程上の指標となったことが壁面に観察される斜め方向の目地からも推定される。



第 24 図　石室展開図

この想定が正しければ、「立石」より開口部側の壁体や開口部から1・2石目までの天井石が、いわゆる「付加羨道」（土生田2003）として石室構築の後半の工程において、墳丘盛土等とともに追加された構造物の可能性を指摘できる。そうであれば、開口部付近の「歪み」が、経年変化によるものなのか、それとも石室構築当初からの形態であったかどうかの判断は難しい。さらに合わせ技で、「付加」された部分の壁体であったがために、構造的な弱点となった結果、現在のような「歪み」が生じた可能性も考えられる。

いずれにせよ、現状の石室の構造物としての強度は残された図面類や写真記録からは判断ができないため、改めて科学的調査を実施する必要がある。

(2) 床面と石棺の構造

床面の概要　今回の発掘調査では、石室開口後・再利用時の流入土（3層以上）とそれ以前の自然堆積土（4層）を除去して検出された礫床を最終床面と捉え、この検出までを行っている。この面は、後述する土器の年代観から、7世紀末～8世紀初頭頃における石室の最終使用時の状況である。史跡保護のため、これより下部の調査は行っていない。以下、床面および石棺等の認識について、『業務委託報告書』に記された所見を重視して記述を行う。

床面は、後世の抜き取りによる攪乱部分を除くと、全面に大小の礫が敷き詰められている。そのうち、大型の礫が30cmほどの河原石で、調査者が「礫」とするものである。小型の礫は5～10cmほどの河原石で、調査者が「玉石」とするものであるが、以下の記述では小礫とした。上記の礫によって構成された最終使用時の床面を、礫床と呼称している。調査者によれば、礫床は奥壁側と開口部側でその構造が異なるようであり、最終使用時の状況と言っても、あくまで複数次にわたる局所的な礫床敷設の複合的産物である可能性を想起させる。

礎　床　奥壁および石棺1の周辺では、30cmほどの礫を面を揃えて並べて配置し、その上に5～10cmほどの小礫を敷き詰めている。これが床の造り直しによるものか、当初からこのような構造をしていたのかについては、判別がついていない。

開口部付近では、石棺石材の抜き取り部分で観察すると、小礫による礫床設置後、その上部に30cmほどの礫を面を揃えて置いているようである。現状では小礫による礫床の下部に大型の礫は確認できないことから、奥壁側とは異なる構造であったと調査者は判断している。開口部付近では、この30cmほどの礫の上より須恵器の完形に近い一群（81・85～87）が出土しているが、礫床中にも遺物が検出されるため（出土状況図中、点のみが落ちているもの。おそらくは採り上げないで現地に残してきているものと考えられる。）、礫床の敷設が複数次にわたって行われたことが想定される。

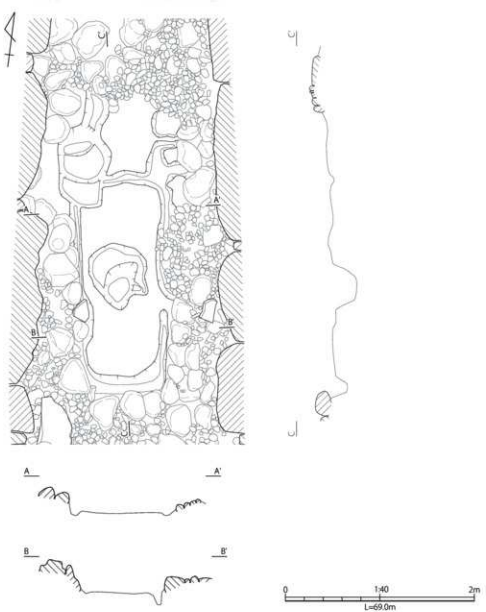
石棺の概要　床面には奥壁側に1基、開口部側で2基の組合式箱形石棺（箱式石棺／シスト）の痕跡が検出された。いずれの石棺も石室主軸に並行して設置されたとみられるが、後世の石棺石材抜き取りによる攪乱が著しく、抜き取り痕やわずかに原位置を留めている石棺材、石棺の裏込め礫などからそれぞれの形状を推定するほかはない。奥壁側の石棺1は、その位置から中心的な棺であったとみられるが、現状ではそのほとんどの石材が抜き取られている。開口部側の2基（石棺2・3）は隣接して設置されているが、層位的な前後関係は明らかではない。ただ、東側の石棺3が西側の石棺2と東側壁の間に挟まったような状況をみれば、石棺3がより新しい時期に設置されたものと判断される。石室内堆積土中からは石棺材の破片とみられる板状石材が多数出土したため、コンテナ7箱分の小型石材を持ち帰り、遺物とともに収蔵・保管しているが、大型の石材については現状保存を優先したため採り上げず、原位置に残している。

石棺1　奥壁側の石棺を石棺1とした。床面礫床下部の基盤面において、幅10～20cmほどで長方形に巡る石棺石材の掘方と石棺裏込め礫が検出されたことから、組合式箱形石棺の痕跡と判断した。石棺中央部や北辺にみえる円形や方形の掘り込みは、石材抜き取りの際の攪乱とされ、覆土は床面の小礫を若干含んでいる。石棺石材の掘方は幅10～20cm、深さ5～15cm程度と非常に幅狭であり、石棺材には後述する石棺2・3と同様、厚さ10cm前後の板石が用いられていたとみられる。

掘方の覆土は周囲を埋めていた土と変わらず、床面由来の小礫を含むことから、棺材抜き取りの際に流入した土と判断された。掘方南半部の背後には幅30～40cm前後の礫がコ字状に並んでおり、石棺側石を支持する裏込め礫と評価されている。北半部では同種の裏込め礫が検出されていないが、こちらは石棺材抜き取りの際に除去されたとみられる。

掘方から推定される石棺の法量は、外法長2.2 m、同幅0.8～1.1 m、内法長2.0 m、同幅0.7～0.85 mを測り、北側が幅広になるよう設置されていたと考えられる。なお『業務委託報告書』には、南西の隅において石棺材が原位置を留めて出土したとの記述があるが、図面や写真からはどの石材を指すのかを明らかにし得なかった。石室内における位置とその規模から、千人塚古墳の築造契機となった中心的被葬者（初葬者）の棺であった蓋然性が高い。

石棺2　開口部側の石棺のうち、西側のものを石棺2とした。石棺石材は北側で床石とみられるものが検出されたが、北端は礫が上に載っているため、全体の形状は確認していない。東側石は北側で1枚が残存するほか、西側石も南側で倒れた状態のものが残る。南側の倒れた側石について、調査所見では抜き取りの際、その南西隅にある立った石材から剥離して倒れ込んだものとされている。

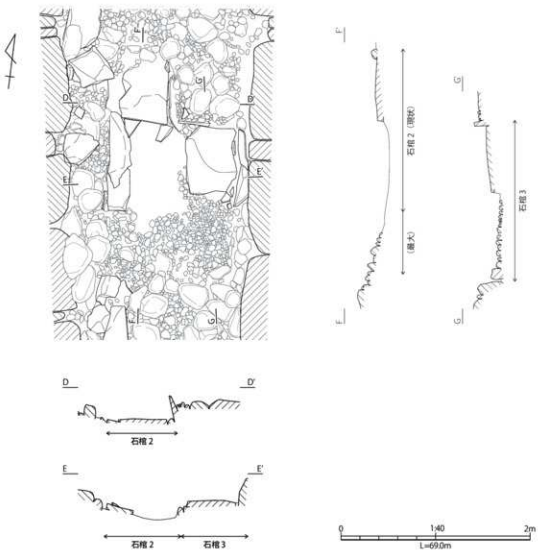


第25図　石棺1　平面図・断面図

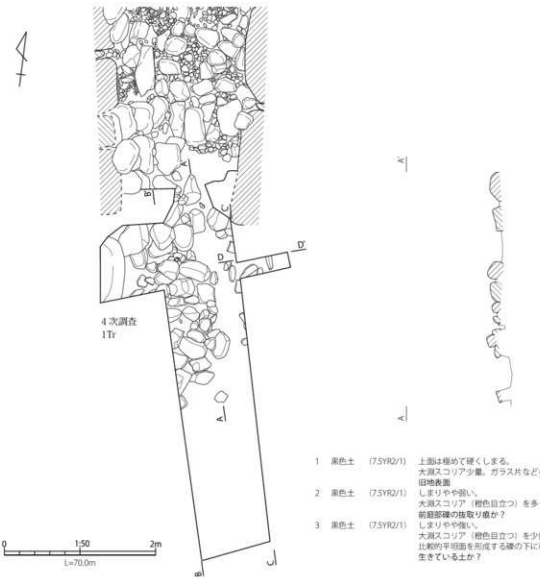
またこの石の南端で小礫が面をなして並ぶ部分があり、石棺石材の裏込めの残りと考えられる。床面および南小口付近は石棺石材抜き取りの際に大きく壊され、基盤面まで掘削が及んでいたため、石棺の形状を推定することができなかった。

現状の石棺法量は、外法長 1.7 m、同幅 0.8 m、内法長 1.5 m、同幅 0.6 m を測り、石棺 3 とほぼ同規模のものを想定しておいてもよいが、南側に広がる礫がすべて床石等の裏込めとなる場合は、最大で外法長 2.4m 程となり、石棺 3 と南小口を揃えて据えられていた可能性もある。石棺 1 の主軸上で開口部側に設置された状況から、石棺 1 に準じる立場あるいは次世代の追葬者の棺とみられる。

石棺 3　開口部側の石棺のうち、東側のものを石棺 3 とした。石棺石材は北側で床石 1 枚と東側石 2 枚、北小口 1 枚が残存する。北小口、東側石には厚さ 10cm 程度の板石が用いられている。南側は床石、側石ともに抜き取られているが、床石の下に敷かれた礫床と東側石の裏込め石、南小口の裏込めが残存する。南小口の裏込めは、10cm ほどの小礫を 3 段ほど積み、その上に 30cm ほどの礫を置くことで形成されている。上記の状況から推定される石棺法量は、外法長 1.7 m、同幅 0.7 m、内法長 1.5 ～ 1.6 m、同幅 0.5 ～ 0.55 m を測る。石棺 2 と東側壁の隙間に設置された状況から、石棺 2 に準じる立場あるいはさらに新しい世代の追葬者の棺とみられる。



第 26 図　石棺 2・3　平面図・断面図



第 27 図　4 次調査 1Tr　平面図・セクション図

(3) 閉塞と前庭部の構造

閉　塞　石室の閉塞は、30～45cmほどの縦長の円礫を俵積み状にして行われたとみられるが、近世の石室開口後の造作や近代の門扉の設置などにより、閉塞石自体は両壁際や床面付近にしか遺存していない。特に西側壁際は比較的良好に石積みが残っており、石材抜き取り等の後世の再利用時の進入時には、主として東側の閉塞石が除去されたことが窺える。

閉塞の範囲について、石室内では俵積み状の石積みが現状で最大2段程度、高さ40cm、長さ（奥行き）60cm程の範囲で検出されている。一方、前庭部トレンチ（4次調査1Tr）の西側拡張区北壁付近にも、40cmの礫による石積みが若干検出されており、これも閉塞の一部とみれば、閉塞の全長は2.0m程に復元できると考えられる。

なお、駿河東部地域の横穴式石室でよくみられる開口部床面の段構造について、この閉塞石の下部がそれに対応する可能性も想定されるが、現状の礫床とのレベル差は主軸断面図上ほとんどなく、判断が難しい。今後、第一次埋葬時の床面の状況やその下部構造の調査を経ることで、判断できるとみられる。

前庭部　前庭部トレンチの調査（4次調査1Tr）によって、埋没した西側壁の基底石1石が新たに確認されたほか、東側壁も基底石の抜き取り痕が検出され、いまだ地中に側壁石材等が埋没していることが明らかになった。東側壁の抜き取り痕の下部には、基底石を安定させるために据えられたとみられる20cm大の小礫も検出されている。しかし、限られた調査範囲であったため、前庭部側壁が直線的に伸びる形態であるのか、あるいは両側壁がハの字形に開くのかについては明らかでない。

また前庭部床面には、30cm程度の礫からなる敷石が西側壁側を中心にみられた。東側は、側壁石材の抜き取りや閉塞の除去に伴い、攪乱を受けているようである。この敷石の上面高は、閉塞石最下段から石棺2・3の南側の礫床までほぼ同じ高さで揃っており、一連の造作であったことが窺える。以上のことから、開口部周辺から前庭部にかけては一連の礫床が広がっており、その上部に閉塞石が推定長（奥行）2.0mの範囲で天井石付近まで俵上に積み上げられることで、石室が閉塞された状況が想定される。

(4) 石室内遺物出土状況　（第28図）

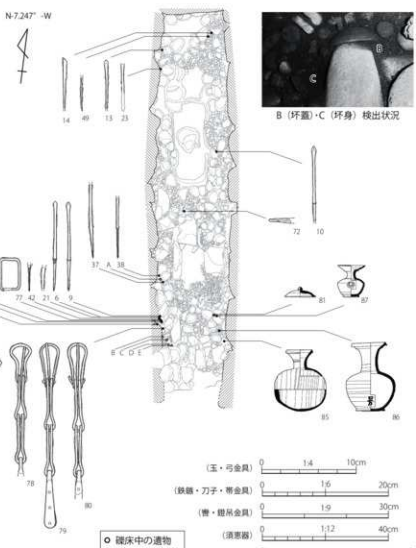
概　要　石室内の最終床面直上から石室内堆積土中においては、古墳被葬者や埋葬儀礼に伴う装身具や武器、工具、緊結金具、馬具、土器が出土した。石室内の発掘調査において、最終床面（礫床）直上から出土した遺物は、基本的には出土位置が点で記録されたようであり、成果図面には計25点の遺物の出土位置が落とされた平面図が残されていた。一方で、堆積土中から出土した遺物については、その層位名やおおよその出土位置が遺物ラベルに記入された程度である。ただし、奥壁礫床や調査終盤の開口部側石棺（石棺2・3）、開口部周辺ではその直上や埋土・清掃土より、点で出土位置が示されていない遺物が一定量採り上げられており、それらについても出来うる限り出土概要を提示することで、床面に近い位置の出土状況の傾向をくみ取ることが可能であると考えられる。

以上の状況から、ここでは出土位置が点で判明する床面出土遺物を中心にしつつ、位置が点で判明しない遺物についても副次的に扱うことで、記述を進める。なお床面出土遺物の位置は概して、奥壁と石棺1の間、石棺1から石棺2・3周辺、開口部周辺の3箇所に分けて捉えることができる。以下、その区画毎に遺物の品目や種別を重視して報告したい。

奥壁と石棺1の間　奥壁と石棺1の間からは、位置が特定できる遺物として鉄鏃4点（13・14・23・49）が出土したほか、礫床上やその清掃土より、多数の鉄鏃片や弓金具が出土している。調査時の「奥壁礫床」の範囲が厳密にどこまでを含むのかが分かりかねるものの、この空間に鉄鏃や弓金具がまとまりられていた蓋然性は高い。

石棺周辺　石棺1から石棺2・3周辺では、位置が特定できる遺物として鉄鏃3点（10・37・38）、刀子1点（72）、馬具1点（A）が出土したほか、開口部側石棺（石棺2・3）の埋土から鉄鏃や弓金具、釘が出土している。石棺周辺が石材抜き取りの影響のためか、床面出土遺物が少ない印象を受ける一方で、西側壁と石棺2に挟まれた礫の間に馬具や鉄鏃が集中しており、注目できる。特に馬具（A）は床面の礫の下部に挟まれるようにして検出されており、採り上げに至っていない。

A検出状況（南から）



B（坏蓋）・C（坏身）検出状況

遺物検出状況（すべて東から）

第 28 図　遺物出土位置図

現状の床面は追葬時の敷き直し後の床面と考えられるので、この馬具Aが初期の埋葬に伴う副葬品の可能性は高い。石棺1が当古墳の中心的被葬者（初葬者）の棺とすれば、片付け等による移動を考慮する必要はあるものの、駿河東部地域でよく見られる馬具を被葬者からやや離して配置する傾向（田村2016）にも合致する。

開口部周辺　開口部周辺では、位置が特定できる遺物として鉄鏃6点（5・6・8・9など）、馬具6点（74・76～80）、須恵器4点（81・85～87）が出土したほか、開口部付近の清掃土等からガラス丸玉（1）、大刀片（4）、鉄鏃、弓金具が出土している。この空間が千人塚古墳の最終床面では最も遺物が集中するエリアであり、東側壁際に須恵器、西側壁際に馬具と鉄鏃が集積されている。

西側壁際でまず目を引くのが、馬具の集積である。下から鐙（79）、轡（74）、さらに上に鐙（78・80）が折り重なり、側壁基底石と床面の礫の隙間に詰め込まれていた。帯金具（76・77）もすぐ脇から検出されているので、ここに一定量の馬具がまとめて置かれていたことは疑いない。これらの馬具については、古相の鐙（78）の存在から、①元々は馬具A周辺にあった石棺1の初葬者に伴う2セットの馬具（74・78・A・79・80）を、石棺2設置に先立つ片付け行為によって、さらに開口部側へと離して再配置した結果とみるか、あるいは②石棺2の追葬者のために新たに用意した轡（74）と新相の鐙（79・80）のセットを出土地点に配置する際に、初葬者の馬具の一部（78）もここへ移動したとみる、大きく2通りの考え方が想定できる。

現状では金銅装である74の轡と補修痕のない78の鐙が初葬者（石棺1）に伴うメインの馬具セットである可能性が高いとみられることから、①の想定を支持しておきたい。馬具集積の南側では、床面礫の間から須恵器の坏蓋（B）と坏身（C）が顔をのぞかせている。こちらも礫の下部にあることから、現地に残された遺物とみられる。東側壁際の完形土器群よりも明らかに古相の須恵器であり、初期の埋葬に伴う土器とみられる。

東側壁際の須恵器の内、81・86・87は完形品である。81の蓋は逆位にして身のように置かれ、87の蓋は立てられていたが、86の長頸壺は倒れていた。85のフラスコ瓶は、一度割った後に、この場所へ大きな破片を集めているようである。石室前半部や開口部付近に土器を配置する傾向は駿河東部地域において顕著に見られるが（田村2016）、上記土器群は後述するように遠江Ⅳ期後葉～Ⅴ期初頭（飛鳥Ⅲ～平城Ⅰ）頃に位置づけられることから、最終埋葬あるいは石室使用の終焉行為（中嶋2021）に関連するものと判断できる。

第29図　A　検出状況

第30図　B・C　検出状況

第3節　出土遺物

千人塚古墳では、横穴式石室内から装身具、大刀、鉄鏃、弓金具、工具、馬具、土器などの副葬品を主体とする古墳関連遺物群のほか、古代以降の石室の再利用に伴う遺物が出土した。本節で報告する出土遺物の種類と総数は、以下のとおりである。

装身具	丸玉	1点	
武器	大刀	1点	
	刀装具	2点	
	鉄鏃	49点	（鏃身13点、茎関8点）
	弓金具	16点	
工具	砥石	1点	
	鎌	1点	
	刀子	1点	
緊結金具	釘	1点	
馬具	轡	2点	（採り上げ未了1点）
	帯飾金具	2点	
	腹帯金具	1点	
	鐙	3点	
土器	須恵器	31点	（採り上げ未了2点）
	土師器	1点	

1　装身具

（1）玉　類　（第31図）

玉類は1点のみ出土した。1はガラス製の丸玉で、長さ0.73cm、幅1.18cmで色調は濃紺色不透明である。表面観察から、巻き付け法によって成形されたものとみられる。

2　武　器

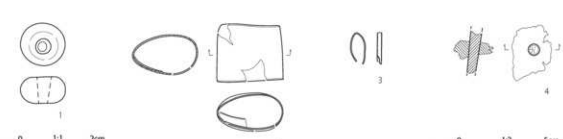
（1）大刀・刀装具　（第31図）

刀装具　刀装具は2点出土した。2は金銅製の鞘口金具であり、径長軸3.5cm、同短軸2.0cmで、佩表面の全長は3.1cmを測る。内側には、堰板を有する閉塞式の鉄製鍔の一部が錆着している。なお、鍔の内面には柄の木質が遺存する。付着した鍔の堰板が刀身部関に接していたとすれば、図示した配置の下方に刀部が存在したものと判断される。法量や金銅の付着状況から、4の茎部と一体の金銅装大刀であった可能性も考えられよう。

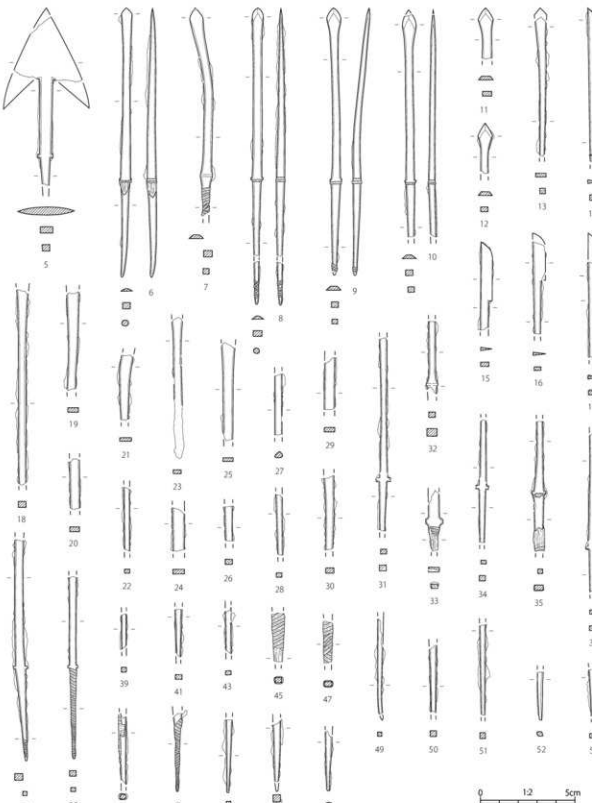
3は銅製の責金具片であり、厚さは0.25cmを測る。現状の頂部が大きく屈曲しており、一見すると装飾付刀子の鍔や責金具のようにも見えるが、これが二次的な屈曲であれば、大刀の責金具と判断される。その場合、3は銅製なので、2の金銅製鞘口金具を伴う金銅装大刀とは別の大刀の存在を想定する余地もある。

大　刀　大刀は茎部の破片が1点出土した。4は幅2.0cm以上の茎部片であり、長さ2.2cm以上、径0.6cmの目釘が遺存する。4と同じ遺物番号で採り上げられた同一個体とみられる鉄片に、錆化した金銅が付着するものがあることから、金銅装大刀の一部であった可能性がある。

金銅装大刀の帰属時期については、駿河東部地域における盛行時期から、TK209型式併行期～飛鳥Ⅳ（遠江Ⅲ期後葉～Ⅳ期末葉）に収まるとみられる。



第31図　出土遺物実測図（1）



第 32 図　出土遺物実測図（2）

(2) 鉄　鏃　(第32図)

概　要　本書で報告する鉄鏃のうち、鏃身部の形状が確認できるものは13点ある。このうち、平根系1点、尖根系（長頸鏃）が12点である。鏃身部の形状は、平根系では腸抉三角形式1点、尖根系では鏨箭式7点以上、片刃箭式4点である。床面を完掘していないため、現状での鉄鏃組成の評価は慎重に行う必要があるものの、おおよそ千人塚古墳の副葬鏃群については、少量の平根鏃と少種・多量の尖根鏃によって構成されるものとみてよいだろう。

平根腸抉三角形式　5は現状では三角形式のようにも見えるが、『業務委託報告書』の写真から、腸抉三角形式と判断した。揉り上げ時には両側に腸抉が伸びる形状であったが（第33図）、保存処理時の切断により、現状の形態になったと考えられる。切先や両腸抉、茎部の一部が欠損している。写真トレースを基にした復原法量は、鏃身部長5.3cm、幅4.5cmとなる。茎関は刺関である。

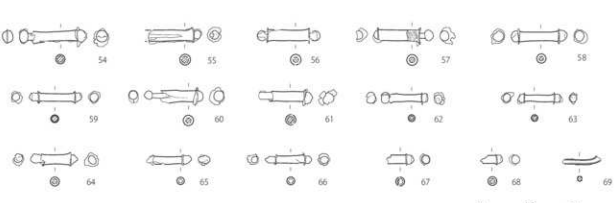
鋭角的で長い腸抉を有する類例については、周辺地域では遠江Ⅳ期後葉（飛鳥Ⅲ～Ⅳ）頃の大塚団地2号墳（須津J-139号墳）のほか、やや時期が下るが遠江Ⅴ期前葉（平城Ⅰ）の妙見12号墳で確認されている。本例は大塚団地2号墳例よりもふくらが張る形態であり、古相を呈することから、飛鳥Ⅱ～Ⅳ（遠江Ⅳ期前葉～後葉）の時間幅で捉えておきたい。

尖根鏨箭式　6～13は尖根鏨箭式である。全長の判明するものは14～16cm程の範囲に収まるほか、鏃身部から頸部の長さはいずれも9.0cm前後となっており、総じて規格性の高い形態といえる。鏃身部形態には、端刃造（6）のほか、ふくらの張る片丸造（7）・片鎬造（8～12）の3種類がある。前1者が新相、後2者が古相の特徴を有する。刃部の研ぎ出し範囲は6が浅く、鏃身の先端から0.3cmであるのに対し、7～12は深く、先端から0.5～1.0cm程となる。茎関はいずれも刺関である。茎部長は5.0cm前後のもの（6・9）のほか、6.5cm前後の長いもの（8）も存在する。

第33図　鉄鏃5の旧状

有機質が遺存する資料も多く、6は矢柄の木質が、6～10には棘関下部に矢柄の樹皮巻き（口巻き）の一部が残るほか、8・9の茎部下端に下巻きが認められる。なお、鏃身部は遺存しないものの、18や23、25も頸部先端の広がり具合から、鏨箭式になる可能性がある。

帰属時期については、駿河東部地域における鏨箭式の編年観（井鍋2003a・大谷2010）から、7～12がTK209型式併行期～飛鳥Ⅱ（遠江Ⅲ期後葉～Ⅳ期前葉）、6が飛鳥Ⅱ～Ⅳ（遠江Ⅳ期前葉～後葉）の時間幅に収まるとみられる。



第34図　出土遺物実測図（3）

尖根片刃箭式　14 ～ 17 は尖根片刃箭式である。いずれも鏃身関が直角関であるが、14 が上端部のみ刃が形成される一方で、15 ～ 17 は下半まで刃が形成されている。前者が新相、後者が古相の特徴である。鏃身部の全容が判明するものは、鏃身部長が 3.1 ～ 3.3cm であり、一定のまとまりがみられる。なお、14 は頸部下端に下巻きとみられる繊維質が認められるが、その位置から矢柄装着に伴う造作であるか不明である。

帰属時期については、駿河東部地域における片刃箭式の編年観（井鍋 2003・大谷 2010）から、15 が TK209 型式併行期～飛鳥Ⅱ（遠江Ⅲ期後葉～Ⅳ期前葉）、14 が飛鳥Ⅱ～Ⅳ（遠江Ⅳ期前葉～後葉）の時間幅に収まるとみられる。

頸部～茎部片　鏃身部形態が判明するもの以外に、頸部や茎部のみで出土した資料も数多く存在する。本書では、茎関が遺存する破片のほか、残存長が 1.0cm 以上の破片についてすべて図化した。

18 ～ 30 は頸部片であり、断面形は方形のものから長方形のものが認められる。18 は頸部としては際立って長く、本来は下半部に茎関があった可能性もある。

31 ～ 38 は茎関が遺存するものである。いずれも棘関で、頸部と茎部の境で直角的に突出するものや台形状のものが目立っており、撫角状に張り出すものは認められない。39 ～ 48 は茎部片である。茎部長は 37・38 のような 4.5 ～ 5.0cm 程のものが多いようであるが、51 のような長いものも一部に認められる。

有機質は 33・35・40 で矢柄の木質と樹皮巻き（口巻き）、47 で樹皮巻きまたは下巻き、37・38・40・42・47 で下巻きが確認できる。40 は樹皮による下巻きの上に矢柄の木部が付着している。

多くは尖根系鉄鏃の頸部～茎部片であるが、幅広な作りの 24・29・33 は平根系となる可能性がある。

（3）弓金具　（第 34 図）

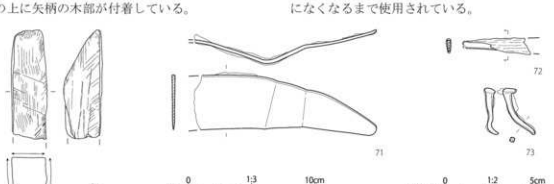
54 ～ 69 は弓金具（両頭金具）である。芯棒・筒状部ともにすべて鉄製であり、16 点が出土している。法量は、全長 3.5 ～ 2.5cm 前後、弓幅（筒金長）2.5 ～ 1.5cm 前後、同径 0.55 ～ 0.35cm である。おそらくは木製の弓本体に筒状金具を挿入後、その両端に切り込みを入れて花弁状に開き、その筒内部に一方を小さく挿入できるようにした芯棒を差し込んでもう一方を打ち敲き、端部が球形になるようにかしめたものである。花弁は欠損したものが多いが、61 は方形で 4 ～ 5 弁あったと考えられる。57 は筒状部に弓本体とみられる木質が遺存し、木目は軸に対して直交する。69 は芯棒の軸部と判断した。

8 点以上の弓金具は複数の飾り弓が存在した蓋然性が高いとする考え（井鍋 2003b）を参考にすれば、千人塚古墳には 2 本以上の飾り弓が副葬されたものと判断される。帰属時期については、遠江・駿河・伊豆地域における弓金具の盛興時期から、TK43 型式併行期～飛鳥Ⅳ（遠江Ⅲ期中葉～Ⅳ期後葉）の範囲に収まるものである。

3　工具・緊結金具

（1）砥　石　（第 35 図）

70 は凝灰岩製の砥石である。平面形は長方形で、残存長 8.6cm、幅 3.05cm、厚さ 2.70cm、重量 108.47g を測る。図示した位置で、下方が欠損する。側面をなす 4 面すべてに多くの磨痕が認められるが、特に正面上半部の研ぎ減りが著しく、角が完全になくなるまで使用されている。



第 35 図　出土遺物実測図（4）

(2) 鎌 (第35図)

71は鉄製の直刃鎌である。刃部中央から刃先まで直線形をなし、現状では基部が欠損するほか、刃部の2箇所が屈折している。残存長10.3cm、刃部幅2.9cm、厚さ0.15cmを測る。

(3) 刀子 (第35図)

72は鉄製刀子の茎部片である。茎部には木質が遺存しており、刀子は木柄に装着された状態で副葬されたことがわかる。残存長3.6cm、茎部幅0.6cm、同厚さ0.2cmを測る。

(4) 釘 (第35図)

73は開口部側の石棺埋土内より出土した鉄釘である。釘頭部はL字形に折り曲げて形成される。釘身の断面は方形で、全長は3.0cm程に復原される小型の釘とみられる。

4 馬具

(1) 轡 (第36図)

概要 74は横長心葉形鏡板付轡である。立聞に装着された帯状吊金具は金銅製で、表面に毛彫りによる文様が存在する。鏡板と轡本体は鉄製である。図面上での長さは19.0cm、幅は17.0cmを測る。鏡板は遊環を介して銜に連結されるが、引手は直接銜に連結されることから、「遊環リベット留・銜介在型」(大谷2018)に分類される。轡本体の遺存状態は良好であり、保存修復によって、鏡板、銜、引手のすべてが可動する状態になっている。図示した左側の金銅製帯状吊金具(74a)は上半部が一部欠損しており、復原して図化した。

鏡板 鏡板は横長心葉形で、肩などは丸みを帯びた形状であるが、両側辺と下辺に突起を設けることで、「心葉形」としての形状を強く強調した形態となっている。上辺に大型矩形(回字形)の立聞が形成される。鏡板は左右に透かしがあり、中央にある直径0.8cmの丸鋲によって遊環にリベット留めされる。遊環の直径は2.2～2.3cmである。

立聞に取り付けられた帯状吊金具(74a・b)は金銅製であり、この金具を介して面繋の繋(革帯)に装着されたと考えられる。本例は毛彫り文の施された断面コ字形の方形帯飾金具に、別造の金銅製吊脚を3点で鋲留めしている。鋲も金銅製である。方形帯飾金具の表面には、鋲に接して3単位の連弧文と光芒文の組み合わせが、毛彫りによって線刻される。

銜 銜は二連銜で、幅0.8cm程度の断面隅丸方形の鉄棒を用いている。全長14.1cm、左銜の長さ7.7cm、右銜の長さ7.6cmである。銜先環の外法直径は2.9～3.0cm、鏡金外法直径は2.0～2.1cmであり、鏡金が左右ともに銜先環よりも小さく成形されている。

引手 引手は、幅0.7cm程度の断面隅丸方形の鉄棒を用いている。左側は引手の長さ14.1cm、引手壺直径3.3cm、引手円環直径2.3cmで、右側は引手の長さ14.3cm、引手壺直径3.4cm、引手円環直径2.4cmであり、左右でほぼ同形・同大に成形されている。引手壺は引手本体と鈍角に連接される。なお肉眼観察の限りにおいては、銜や引手の各円環内に接合痕等の成形技法を知る手掛かりは得られなかった。

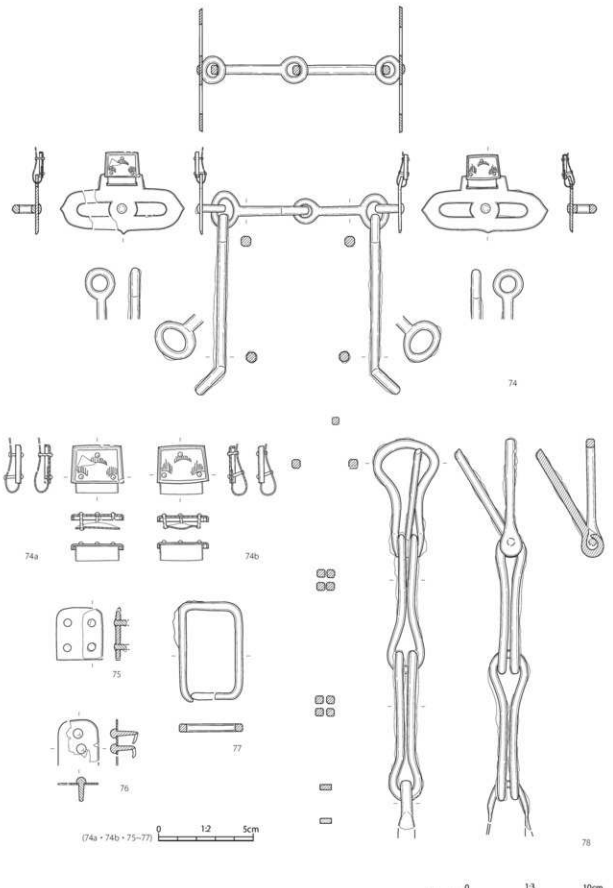
帰属時期 第5章の大谷宏治の分析から、飛鳥II(遠江IV期前葉)に位置づけられる。

採り上げ未了の轡 今回は報告できなかったが、現地の礫床中に残しているとみられる鉄製轡(第28・29図A)が1点存在する。残された写真から観察すると、形式は鉸具造立聞環状鏡板付轡であり、完形とみられる。鏡板の形態は、円環上部が直線的な蒲鉾形を呈する在地的なタイプと推定される。同じ写真に写しこまれた37・38の鉄鏃から法量を推定すれば、鏡板の幅は6.0～7.0cm程度となる。帰属時期については、第5章の大谷宏治の分析から、飛鳥II(遠江IV期前葉)とみられる。

(2) 帯金具 (第36図)

帯飾金具 75は爪形となる鉄製の板状金具に、鉄製の鋲で革帯を留めていたとみられる帯飾金具である。図示した左半部が欠損しており、現状鋲は2点しか認められないが、本来は4鋲であったと推定した。表面に鉄錆が付着し定かではないが、本来は金銅装であった可能性も考えられる。残存長は2.6cm、幅1.0cmである。

76は金銅製の帯飾金具である。爪形の金銅製板状金具に、金銅製鋲で2箇所を留めている。図示し



第 36 図　出土遺物実測図（5）

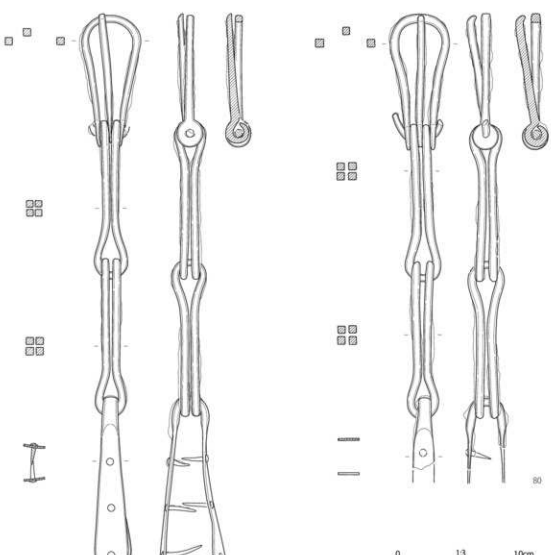
た左半部と下部が欠損する。アマルガム法によるとみられる鍍金範囲は、板状金具が表面のみで、鋲が鋲頭のみである。残存長 2.2cm、推定幅 2.1cm、金銅板から鋲脚屈折部までの長さは 0.8cm である。76は材質の共通性から、74 の轡とセットになる蓋然性が高い。

腹帯金具　77 は断面方形の細い鉄棒を長辺 5.2cm、短辺 3.3cm の長方形になるように折り曲げ、端部を接着させた製品である。用途は検討の余地もあるが、ここでは馬具の腹帯金具として報告する。駿河地域周辺では、駿河丸山古墳（静岡市教委 1962）で長方形のものがあるほか、原分古墳（井鍋編 2008）や船津 L-62 号墳（藤村・石川編 2013）、東平 1 号墳（佐藤編 2018）で方形のものがみられる。

(3)　鐙（第 36・37 図）

鐙吊金具は 3 点出土しており、いずれも、鋲具と兵庫鎖、そして木製の鐙を装着する吊金具によって構成されるものである。また 3 点の鐙吊金具は、鋲具基部に挿入した別造の横軸に蕨手状に刺金を巻き付け、兵庫鎖が 2 連となる点で共通するが、鋲具尻・基部の形態や各部の法量によって 2 種に分類可能である。以下、分類毎に特徴を示す。

鐙吊金具 A　78 は鋲具尻が鍵穴形を呈するものであり、これを鐙吊金具 A とした。鋲具は断面が幅 0.7cm ほどの方形を呈し、鋲具長 9.3cm、基部幅 1.8cm、尻幅 5.2cm、刺金長 9.5cm を測る。鋲具基部の側面は半円形を呈する。兵庫鎖は 2 連式で、全長 21.2cm、上側の鎖の長さ 11.0cm、下側の鎖の長



第 37 図　出土遺物実測図（6）

さ 11.9cm であり、下側に長い鎖を用いている。断面は方形で、上下ともに幅 0.6cm である。吊金具は兵庫鎖に通す部分（吊部）と木製鐙を固定する部分（固定部）からなるが、本例は固定部の大半が欠損する。吊部は断面が扁平な長方形で、幅 0.9cm、厚さ 0.4cm を測る。

鐙吊金具 B　79・80 は鉸具尻が半円形を呈するものであり、これらを鐙吊金具 B とした。全形の判明する 79 は、全長 44.0cm である。

79・80 ともに鉸具の断面は幅 0.7cm ほどの方形を呈し、鉸具長 10.5cm/10.8cm（79/80、以下同）、基部幅 1.7cm/2.0cm、尻幅 4.7cm/4.7cm、刺金長 10.2cm/10.5cm を測る。鉸具基部の側面は整った円形を呈し、基部横軸には径 0.5cm ほどの断面円形の鉄棒を挿入して用いるが、80 は左右ともに 1.5 ～ 2.0cm 程度はみ出した端部を上方に折り曲げて固定している。79 は端部が欠損するが、80 と同じ構造であろう。これらは通有の同種の鐙吊金具では見られない粗い仕上げであり、補修痕とみてよい。

兵庫鎖は 2 連式で、全長 23.5cm/23.3cm、上側の鎖の長さ 12.6cm/12.5cm、下側の鎖の長さ 12.5cm/12.5cm であり、上下でほぼ同じ長さの鎖を用いている。断面は方形で、上下ともに幅 0.6cm である。

吊金具はほぼ全体が判明する 79 をみると、吊部の断面が扁平な長方形であるが、固定部はさらに薄く伸ばした板状を呈し、鉄製鋲を片側 3 箇所、計 6 箇所に打つことで木製鐙を固定していたとみられる。鋲は上方が短く、下方が長い。擬似鋲は見られない。全長 13.7cm、吊金具最大幅 2.6cm で、固定部の先端は半円形である。鋲頭の直径 0.6cm、鋲長は 2.0cm ～ 3.3cm である。80 の吊金具は固定部の上部に 1 箇所の鋲を残し、他を欠損する。

帰属時期　78・79・80 はいずれも木芯鉄装三角錐形壺鐙であるが、斎藤弘によって、吊金具（U 字形金具）は長いものから短いものへ、兵庫鎖の連数は多いものから少ないものへと変遷することが明らかになっている（斎藤 1986）。本例は鐙吊金具 A・B ともに吊金具が短く、兵庫鎖が 2 連であることから、斎藤の三 E 式に該当し、TK209 型式併行期から飛鳥 I に編年される。ただ、本例の兵庫鎖は 78 が（上）11.0cm/（下）11.9cm、79・80 が（上）12.5 ～ 12.6cm/（下）12.5cm と長めであり、兵庫鎖が極端に長く、三 E 式に後出する三 F 式として斎藤が例示した白砂ヶ谷 D-10 号墳（八木ほか 1980、飛鳥 II / 遠江 IV 期前葉）例の（上）12.5cm/（下）12.0cm に近似した法量となることから、飛鳥 I ～ II（遠江 III 期末葉～ IV 期前葉）の範囲に収まる時期と考えられる。

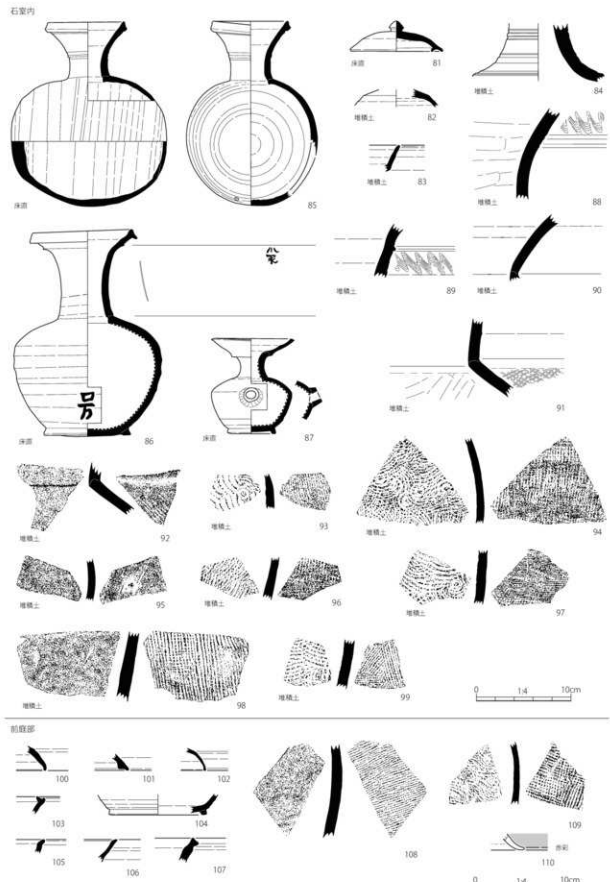
5　土　器

(1) 須恵器（第 38 図）

蓋　蓋は破片も含めて 5 点出土した。床面出土の 81 は完形品で、口径 9.6cm、器高 3.1cm である。天井部には宝珠形の摘みが付く。いわゆる杯 G に伴う返り蓋の可能性もあるが、やや口径が小さく、扁平な体部の形態から、口縁部が直線的に開くタイプの有蓋長頸壺の蓋とみられる。82 は天井部ヘラ切り未調整の坏蓋、100 は天井部と口縁部の境界に浅い沈線を入れる坏蓋、101 は三角形状の返りを有する坏蓋とみられる。102 は非常に薄手で精緻な作りの蓋とみられ、玉縁状の口縁端部を有する。短頸壺などに付属する蓋であろうか。81・82、100・101 は遠江 IV 期前葉～後葉（飛鳥 II ～ IV）頃に位置づけられる。このほかに、採り上げ未了の坏蓋（第 30 図 B）があり、こちらは天井部と口縁部の境に稜や沈線が認められない形態である。写真や図面から推定される最大径は 11.0 ～ 12.0cm 前後であり、遠江 III 期末葉（飛鳥 I）頃に帰属するとみられる。

坏　身　坏身は破片で 3 点出土した。103 は口縁部の立ち上がりの短い坏身であり、遠江 IV 期前葉（飛鳥 II）頃に位置づけられる。83 は体部の浅い有台坏身、104 は底部の突出する有台坏身であり、ともに遠江 V 期前葉（平城 I ～ IV）とみられる。このほかに、採り上げ未了の坏身（第 30 図 C）があり、こちらは内傾して短いながら、103 よりもしっかりとした立ち上がりを有した坏身である。写真から推定される最大径は 11.0 ～ 12.0cm 前後であり、遠江 III 期末葉（飛鳥 I）頃に帰属するとみられる。

高　坏　高坏は破片で 3 点出土した。84 は脚部で、中段と下段に 2 条ずつ浅い沈線が巡る。器壁が分厚く、高坏以外の脚付器種となる可能性もあり得る。



第 38 図　出土遺物実測図（7）

105・106は半球形坏部高坏の口縁部であり、105は口縁端部が短く開くもの、106は口縁端部に内傾面を有するものであり、ともに遠江Ⅳ期前葉～Ⅴ期初頭（飛鳥Ⅱ～平城Ⅰ）に収まるとみられる。

フラスコ瓶　85は床面から出土した湖西窯産のフラスコ瓶である。口径8.0cm、体部最大径16.5cm、器高19.4cmを測る。頸部から口縁部は外反しながら開き、端部は断面三角形状に成形され、口唇部外側は鋭い稜を成している。端部の状態からは、経年使用による摩耗は想定されず、ほぼ新品の状態で副葬されたと考えられる。頸部は中ほどに2条の浅い沈線が巡る。体部は横長の球胴状である。体部成形時の底部側は、強い回転ヘラケズリが施され、反対側の内外面には円形の粘土板による閉塞痕（擬口縁）がみられる。また、体部正面中央には、縦方向の2条の沈線がある。頸部を接続する際の当たり線であろうか。底部には焼台痕が僅かに残る。自然釉の付着状況から、焼成時には図示した位置の右斜め後方に傾けた状態で窯入れされていたとみられる。帰属時期は、遠江Ⅳ期後葉～末葉（飛鳥Ⅲ～Ⅳ）に位置づけられる。

長頸壺　床面から出土した86は完形品で、湖西窯産の長頸壺である。口径10.5cm、体部最大径15.6cm、底径9.1cm、器高21.7cmを測る。口縁部は二重口縁状に外反し、端部は断面三角形に成形される。肩部から体部は丸みを帯びた形態であり、体部下半には回転ヘラケズリが施される。底部は高台よりもやや突出し、ヘラ切り後は未調整とみられる。また、頸部に窯記号［｜］が認められるほか、頸部と体部下半の2箇所に墨書が残る。頸部上端の墨書は細筆で小さく2字が書かれる。「小家」のように読めるが、定かでない。体部下半の墨書は太筆で大きく2字で「口万」と書かれているように見える。想像をたくましくすれば、液体の容量を示す「口合一勺」の一部がこのように見えている可能性のほか、あるいは、「酒」のつくりの「酉」を簡略化した字にもとれるかもしれない。いずれも検討を要する。帰属時期は、遠江Ⅳ期末葉～Ⅴ期初頭（飛鳥Ⅳ～平城Ⅰ）に位置づけられる。

107も長頸壺か瓶類の口縁部片である。口縁端部断面は三角形状を呈する。

甕　床面から出土した87は湖西窯産の有台甕である。口径8.0cm、体部最大径8.5cm、高台径5.1cm、器高10.1cmを測る。口頸部長は体部長を下回り、比率は0.7：1.0である。口縁部は二重口縁状に外反する。肩部は若干張り、体部断面形は逆三角形状を呈する。体部下半はドーナツ状に回転ヘラケズリが施される。注口部は突出する形態であり、貼り付け時のヘラナデ痕が注口部側面に残る。底部には断面方形の高台が付く。帰属時期は、遠江Ⅳ期末葉～Ⅴ期初頭（飛鳥Ⅳ～平城Ⅰ）に位置づけられる。

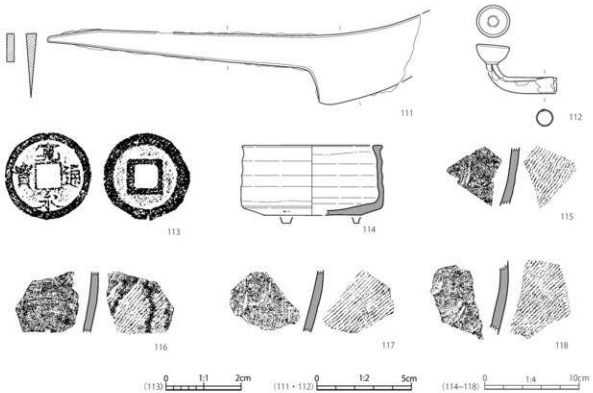
甕・大型瓶類　88～99、108・109は甕または大型瓶類の破片である。いずれも石室内堆積土中もしくは前庭部からの出土である。88～92・98は湖西窯産の大型甕の破片であり、同一個体を含んでいるものとみられる。88～92は頸部片であり、88・89は頸部を突帯によって区画し、その内部に波状文を施すものである。90・91から径を推定するならば、頸部最小径が30cmを超える大型甕になるものと考えられる。

一方、93～97・99・108・109は駿河・甲斐地域の在地窯製品とみられる甕または大型瓶類の破片である。内面に同心円文当て具痕を残すもの（93・94・96・97・99・109）や断面内部の色調が暗赤褐色を呈するもの（97・99）、外面が黒味がかった光沢のあるもの（108）といった諸特徴がみられる。

帰属時期は、湖西窯産のものが遠江Ⅲ期末葉～Ⅴ期初頭（飛鳥Ⅰ～平城Ⅰ）、その他の在地窯産のものが、湖西窯製品の大規模流通以前の遠江Ⅲ期後葉～Ⅳ期前葉（TK209型式併行期～飛鳥Ⅱ）頃の時間幅に収まるものと考えられる。

(2) 土師器　（第38図）

高　坏　土師器は前庭部から高坏の破片が1点出土したのみである。110は前庭部から出土した高坏の脚部片であり、外面ヨコナデ調整後、赤彩が施される。帰属時期は、沢東Ⅰ～Ⅱ（TK209型式併行期～飛鳥Ⅳ）に収まるものと考えられる。



第 39 図　出土遺物実測図（8）

6　古代以降の遺物

(1) 金属製品　（第 39 図）

包　丁　111 は石器室内堆積土中より出土した大型の包丁とみられる鉄製の刃物である。直線的な茎部に対し、刃部は大きく湾曲する。関はほぼ直角である。残存長 19.7cm、刃部幅 3.5cm、茎部長 3.8cm を測る。帰属時期は不明であるが、他の石室内混入遺物から、近世のものと推定される。

キセル　112 も石器室内堆積土中より出土した銅製キセルの雁首である。火皿の下部には補強体が設けられている。管は銅板を巻いて成形されており、合わせ目には明瞭に接合痕が認められる。残存長 4.2cm、火皿口径 1.6 ～ 1.75cm を測る。帰属時期は、江戸時代のものと推定される。

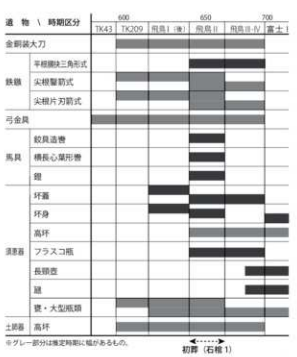
銭　貨　113 も石器室内堆積土中より出土した寛永通寶である。「寶」字、最終 2 画が「ハ」字状を呈することから、寛文 8 年（1668）以降に作られたいわゆる「新寛永」と判断される。全長 2.3cm、厚さ 0.1cm、重量 1.89g を測る。

(2) 陶　器　（第 39 図）

114 は石室内堆積土中より出土した志戸呂産の香炉である。本資料の観察所見や帰属時期については、堀内秀樹氏、河合 修氏よりご教示をいただいた。口唇部は上面が平らに面取りされており、底部は回転ヘラケズリが施される。底部の大部分が欠損し、剥離痕などはみられないものの、三足が付く形態と考えられる。全体的に硬質に焼成されており、連房式登窯で焼かれた製品とみられる。口縁部内外面から体部外面にかけて灰釉が施され、口縁端部には釉を拭い取ったような痕が見えることから、窯内で伏せ焼されていた可能性がある。いわゆる神仏具であり、形態から 17 世紀後半のものと推定される。

115 ～ 118 はいずれも石室内堆積土中から出土した甕の体部片で、外面のみ酸化焔気味の焼成により、色調が暗赤灰や赤灰色を呈する。外面タタキ、内面は同心円文当て具痕をケズリやナデによって消している。帰属時期は富士Ⅵ（9 世紀後葉）以降のものと考えられるが、石室内堆積土の流入時期を考えると、近世以降に石室内へ混入したものとみられる。

第 40 図　千人塚古墳出土　近世遺物集合



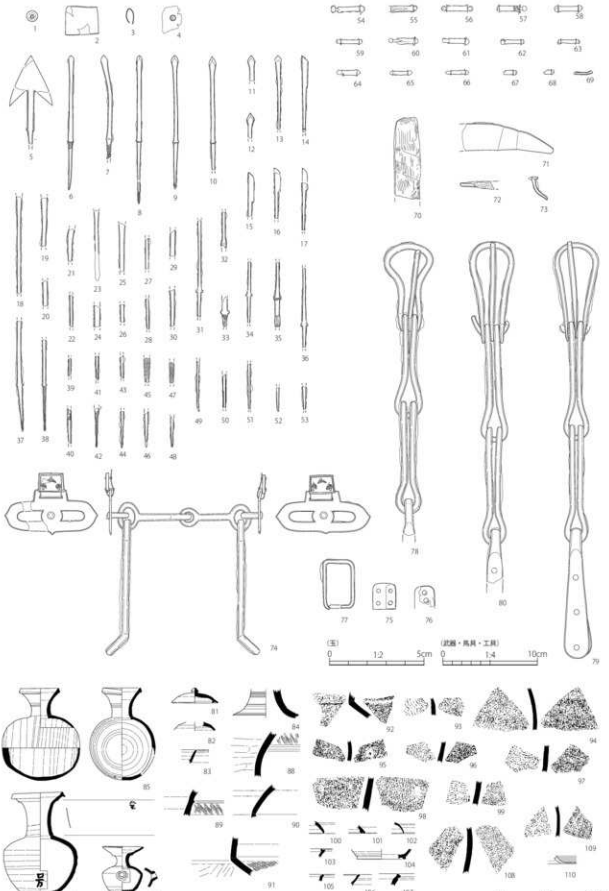
第 41 図　千人塚古墳出土遺物の編年的位置

7　小　結

(1) 古墳出土遺物からみた埋葬時期

ここまで見てきたように、千人塚古墳から出土したそれぞれの副葬品の推定時期を示したものが第41図である。時期比定がし難い遺物は除外している。この図から判断するに、飛鳥Ⅰ～Ⅱ（遠江Ⅲ期末葉～Ⅳ期前葉）の時期と、飛鳥Ⅲから富士Ⅰ（遠江Ⅳ期後葉～Ⅴ期初頃）の大きく2時期に遺物を区分することが可能である。本章第2節2（4）で見たとおり、金銅装の横長心葉形轡を中心とする馬具セットを、千人塚古墳築造の契機となった被葬者（石棺1）に伴う副葬品とみれば、馬具の年代から飛鳥Ⅱを初葬の時期と捉えられる。やや古い飛鳥Ⅰの様相の土器については、まとめて飛鳥Ⅱの時期に副葬されたものとみられる。初葬に伴う副葬品としては、金銅装大刀（2）、2セットの馬具（74～79、第29図A）、古相の鉄鏃（7～12、15など）、多量の弓金具、土器類（第30図B・C、103・110など）が挙げられる。

続いて、飛鳥Ⅲから富士Ⅰまでのやや幅のある時期において、追葬（石棺2・3など）が行われたと考えられる。追葬に伴う副葬品としては、新相の鉄鏃（6・14）や土器類（81・83・85・86・87・104）が挙げられる。



第 42 図　千人塚古墳出土遺物一覧

千人塚古墳の横穴式石室（奥壁側から）

中里大久保古墳　調査参加者（1972 年撮影）

第4章　中里K支群の再整理

第1節　古墳をめぐる環境

本章で主に報告するのは、1975年に富士市教育委員会によって報告書『中里大久保（K第95号）古墳　付載　K第97・98・99号墳の副葬品』（以下、『旧報告』）が刊行されている中里大久保古墳、中里K-97・98・99号墳の出土遺物である。そのうち、中里大久保古墳は宅地化のための土取り工事に先立ち、富士市教育委員会によって昭和46年（1971）9月19日から昭和47年（1972）10月10日までの期間に断続的に発掘調査が行われた古墳であり、主体部である横穴式石室から装身具や武器、馬具、土器などの豊富な遺物が出土している。また、『旧報告』時の整理作業では、過去の土取り工事によって発見・破壊され、小川賢之輔（須津中学校校長※当時）・鈴木富男（富士市史編纂室※同）両氏によって遺物が須津中学校に保管されていた中里K-97号墳（昭和34年〔1959〕8月発見）、K-98号墳（昭和42年〔1967〕秋発見）、K-99号墳（昭和43年〔1968〕1月7日発見）についても合わせて整理作業と主要な遺物の図化・撮影が実施され、『旧報告』内にてその概要が報告されるに至っている（第43図）。

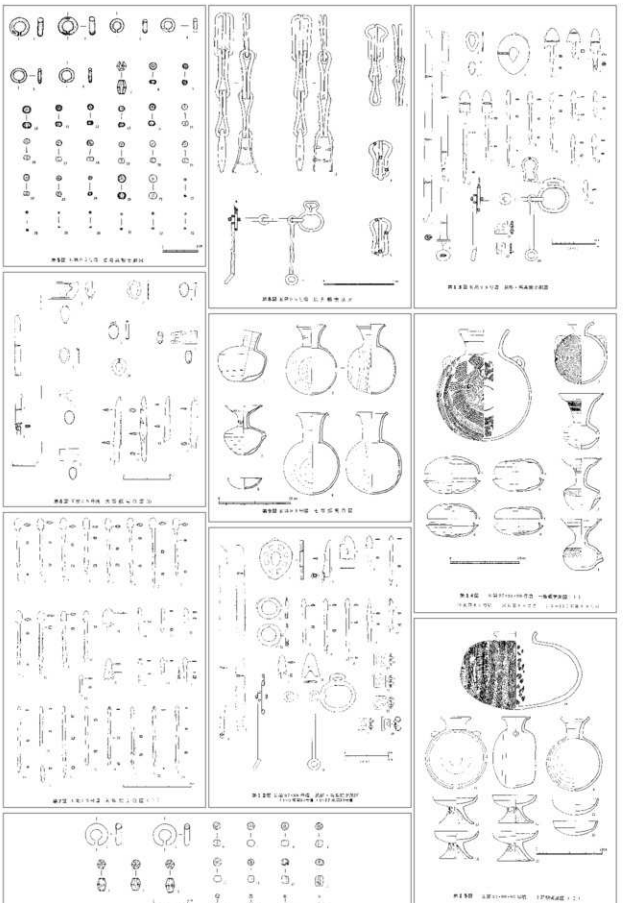
その後、報告書刊行から50年近い歳月が経過するなかで、遺物の劣化が進行するとともに、収蔵施設である富士市立博物館（富士山かぐや姫ミュージアム）では現況の資料と『旧報告』との細部の照合ができなくなっていたほか、『旧報告』で報告されなかった重要遺物が多数存在することも認識されていた。また、平成30年（2018）1月16日に富士山かぐや姫ミュージアムに寄贈された鈴木富男氏旧蔵資料（寄贈番号3038）中にも、新出資料の中里大久保古墳出土の金銅製刀装具（第48図42）が含まれていた。そこで、過去の未報告資料も含めて今回改めて遺物の再報告を実施することで、須津古墳群中里支群の中枢域とみられる古墳群の実態解明に寄与することとしたい。

第2節　中里大久保古墳（中里K-95号墳）

1　古墳の概要

墳　丘　中里大久保古墳は、土取りによって発見時既に石室周辺と墳丘北側を残す状態となっており、石室が露出していた。『旧報告』によれば、残存する墳丘の石室主軸方向および直交方向にてトレンチ調査を実施したところ、石室中心部から6mほどの主軸方向北側で2個、直角方向東側で3個の径40cm内外の扁平な円礫が数10cmほどの間隔で並んでいたとのことであり、これらを墳丘裾部と認定している。また北側トレンチの円礫の外側には幅1.0mほど、深さ0.5mほどの黒色土の落ち込み検出されたようであり、周溝の可能性を指摘している。なお、これらのトレンチは調査不十分のまま削平されたようであり、図面や写真は残っていない。以上の調査担当者の知見から、中里大久保古墳の墳丘については、直径約12.0m前後、周溝幅約1.0mの円墳とみられる。

埋葬施設　中里大久保古墳の埋葬施設は、南東に開口する無袖形の横穴式石室である。石室主軸はN-49°-Wで、開口部側が側道工事によって大きく失われていた。残存部分においては壁体から天井まで良好に遺存しており、天井石は5石分が確認された。石室石材は、写真で見る限りは須津川周辺で採取された安山岩とみられるが、定かでない。墓坑についても『旧報告』に直接的な記述はないが、『旧報告』図版第1Bや本書52頁下段の写真を見るに、

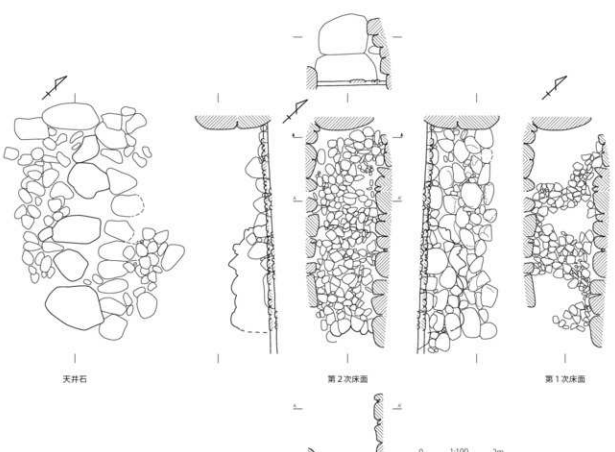


第 43 図 『旧報告』掲載遺物実測図

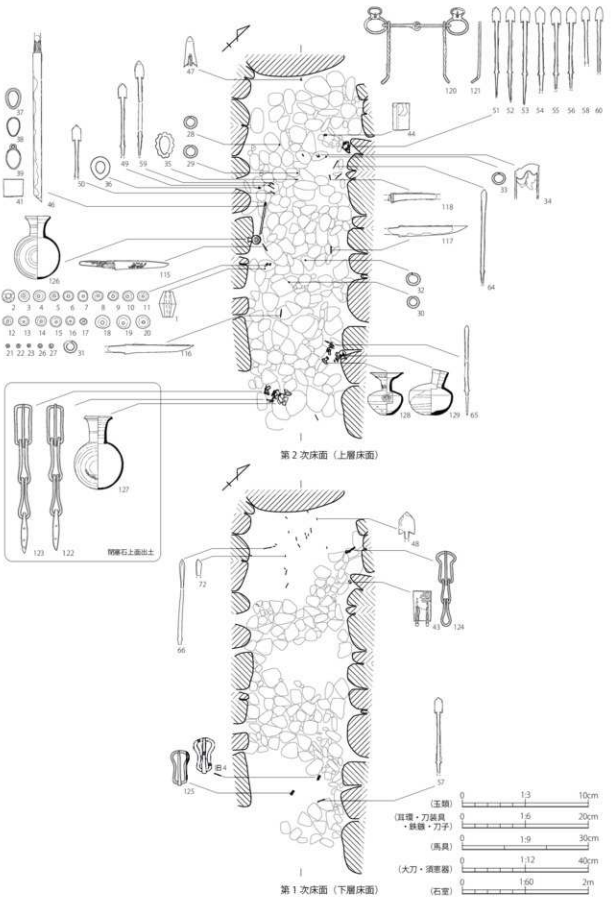
側壁の大部分が収まるほどの深い墓坑で、墓坑内に裏込として礫を多く充填する形式のものと判断される。石室は開口部側が削平されているものの、残存長 6.0 mを測る。平面形は中央部がやや胴張り状に広がる長方形を呈し、石室幅は奥壁部 1.45 m、中央部（最大）1.6 m、開口部 1.4 mを測る。天井石は断面図がないものの、主軸上における石室高は 1.7m 以上あったと推定される。奥壁は大型石材の 2 段積み、側壁は中・小型石材を 5 段程度積んで構築される。東側壁の奥壁から 3.5 m程にはやや大型の基底石が配置されるが、その石より奥壁側に向かって斜めに上昇する目地が通ることから、この石材が石室構築上の指標となっていたことが窺える。床面は 2 面検出され、上層床面（第 2 次床面※『旧報告』第 I 面）は石室全体に及ぶ敷石であるが、下層床面（第 1 次床面※『旧報告』第 II 面）は一部に敷石がなく、黒色土からなる部分が存在する。閉塞石は、人頭大の礫を奥壁から 2.55 mの箇所から石室南端付近までの範囲に山形に積み上げることで形成していた。

遺物出土状況　『旧報告』では遺物出土状況図と遺物実測図との対照がし難かったため、今回改めて遺物実測図を挿入した出土状況図を作成した。出土状況の所見は『旧報告』に譲るが、後述するように装飾付大刀の復原等に再検討を要する記述もある。少なくとも、最終床面である第 2 次床面上の遺物に、下層の第 1 次床面から動かされたものが一定量含まれる点は留意すべきであろう。

第 44 図　中里大久保古墳　天井石検出状況



第 45 図　中里大久保古墳　石室実測図



第 46 図　中里大久保古墳　遺物出土状況図

2　出土遺物の概要

中里大久保古墳では、横穴式石室内から装身具、大刀、鉄鏃、工具、馬具、土器などの副葬品を主体とする古墳関連遺物群が出土した。本節で報告する出土遺物の種類と総数は、以下のとおりである。なお、このほかに第6節で報告する斑点文ガラス玉を含む玉類4点が、本古墳に伴う蓋然性が高いとみられる。

装身具	切子玉	1点	
	丸玉	19点	
	小玉	7点	
	耳環	6点	
武器	大刀	1点	
	刀装具	12点	
	鉄鏃	68点	
		（鏃身30点、茎関31点）	
工具	刀子	5点	
馬具	轡	2点	
	鐙	3点	
	鈑具	2点	（所在不明1点）
土器	須恵器	3点	
	土師器	1点	

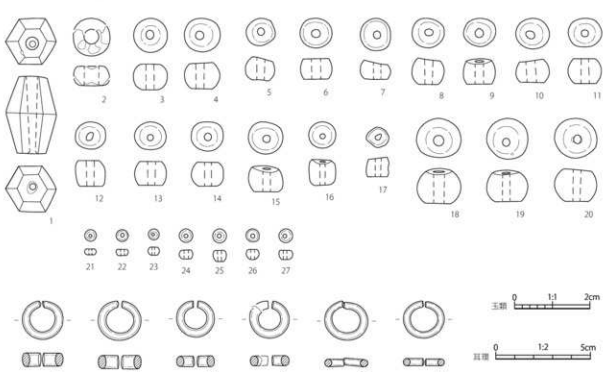
3　装身具

(1) 玉　類　（第47図）

玉類は27点出土した。1は水晶製の切子玉で、長さ2.02cm、幅1.305cmを測る。片面穿孔で、底面に剥離欠損が生じている。2～20はガラス丸玉であり、長さ0.55～0.92cm、径0.56～1.20程を測る。全体的に濃青色透明のものが目立つが、2・3は風化により淡黄～灰白色を呈す。成形法は、4～18が引き伸ばし法、19・20が巻き付け法によるものと判断される。21～27はガラス小玉で、長さ0.17～0.30cm、径0.29～0.37cmを測る。色調は淡青色～濃青色、すべて透明である。すべて鋳型法によって成形されたものとみられる。

(2) 耳　環　（第47図）

耳環は6点出土した。法量はいずれも全長1.9～2.1cm、幅2.0～2.3cmに収まる。28・29は鍚地金張とみられる耳環であり、重量10～11gを測る。表面にはアマルガム法による鍍金がみとめられる。30～32は銅地金張、33が銅地銀張とみられる耳環であり、32・33には小口部に金箔巻付けの際の皺が残る。

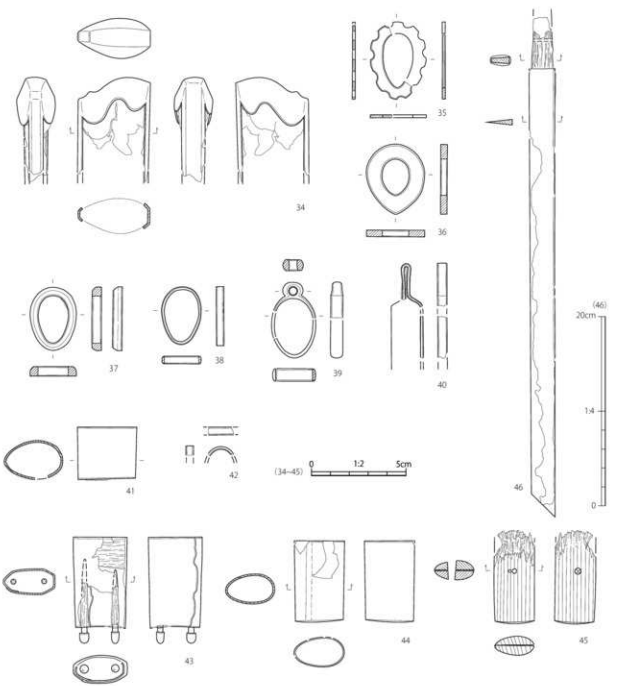


第47図　中里大久保古墳　出土遺物実測図（1）

4 武 器

(1) 大刀・刀装具 (第48図)

刀装具 刀装具は12点出土した。34は覆輪式の圭頭大刀柄頭である。覆輪が金銅製であるが、平は銀製とみられ、懸通孔周辺から下半を欠損する。残存長5.5cm、幅3.9cm、厚さ2.1cmを測る。覆輪の頂部は「へ」字形を呈し、刃側の中ほどで突起状に小さく屈曲しつつも、全体的には刃側に向かって緩やかにカーブした形態をとる。側面は幅広で、台形状に面取りがなされている。35は鉄地金銅装の花形切羽金具である。図示した右上部が欠損する。通有の倒卵形の切羽の外縁部に、半円形の切り込みを加えることで花形に成形している。36は小型の鉄製鍔である。無窓で、やや幅広な倒卵形を呈する。37・38・42は金銅装の責金具である。37は鉄地で、厚みがあり側面に稜がめぐるものであり、46に装着された状況から、喰出鍔とみられる。38も鉄地とみられるが、37よりも細身の作りである。こち

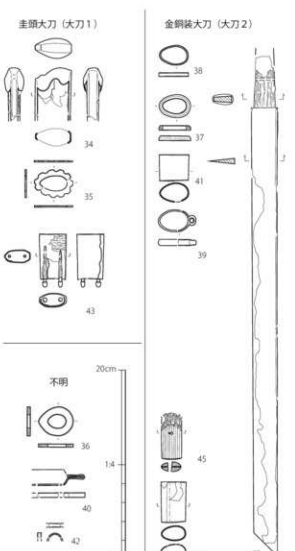


第48図 中里大久保古墳 出土遺物実測図 (2)

らも 46 に装着された状況から、柄縁金具とみられる。42 は鈴木富男旧蔵資料で、金銅製の大刀責金具の破片とみられるが、金銅装刀子の鐏の可能性もある。39 は鉄地金銅装の足金具である。『旧報告』時には欠損は 1/6 ほどであったが、現状では 2/3 弱が欠損する。推定鞘幅は 2.9cm、厚さ 2.0cm である。40 は鉄製足金具としたが、工具の鐏子の可能性もある。幅 0.5cm の板状の素材を 5 ヶ所屈折させることで成形している。41 は金銅製の鞘口金具である。断面は倒卵形である。43・44 は金銅製の鞘尻金具である。43 は蟹目釘の付く鞘尻金具であり、筒金具部分に蟹目釘が錆着した遺存状態であったが、蟹目釘は本来の位置に復原して図化している。筒金具は厳密な八角形には成形されておらず、刃部側が丸みを帯びた形状となっている。鐏付けの際の接合痕が佩裏面に明瞭に残る。また筒金具の内面には樹皮とみられる木質が付着することから、鞘木を樹皮巻きによって固定した後に、鞘口金具に挿入していたと考えられる。蟹目釘は鉄製で、釘頭は縦長の半球形を呈する。釘部には鞘木の木質が付着するが、釘頭の段差から鞘木が付着する釘部の間には、鞘木とは直交方向の木目痕が残る。おそらくは、鞘尻に厚さ 0.3 ～ 0.4cm 程度の底板が存在したと考えられる。44 も金銅製の鞘尻金具であるが、こちらは筒金具、底板ともに金銅製で、断面形態は倒卵形である。筒金具には佩表側に鐏付けの際の接合痕とみられる僅かな段差が看取される。45 は 44 の内部に挿入されていた鞘木であり、現状では鞘尻金具よりも一回り小さくなってはいるが、同じ形状を保っている。2 枚合わせで目釘孔とみられる穴が佩表側に 2 つ、佩裏側に 1 つあり、内部で繋がっている。樹種は不明である。

大　刀　46 は大刀で、反りのない直刀である。残存長 51.5cm、刀身部幅 2.7cm を測り、小刀とは言い難いかもしれないが、大刀としては小ぶりである。切先から刀身部の刃部側、茎部の先端が欠損する。『旧報告』でカマス切先に復原されていることから、これを踏襲して図化した。関は直角両関で、茎は先端に向かって中細となる形態とみられる。茎部には柄木の木質が遺存するほか、その一部に幅 0.2cm のリング状の緑錆が付着することから、柄部に金銅装責金具（38 か）が装着されていたことが窺える。『旧報告』によると、37・38 が柄部に装着された状態で検出されたほか、39・41 も同位置から採り上げられている。

第 49 図　第 2 次床面　大刀の出土状況



第 50 図　中里大久保古墳　大刀の復原

大刀の復原 『旧報告』では46の大刀と37・38・39・41の一括刀装具に加え、大刀から0.6m離れた35、1.1m離れた34、1.45m離れた44までを含めて一連の主頭大刀として復原している。

しかし、2点の鞘尻金具の存在から、複数の大刀の副葬を想定すべき状況の中で、床面の広範囲に広がる刀装具を無理に46の刀身に結び付ける必然性も積極的には肯定しがたい。46の大刀に装着されていた38の責金具は、その装着位置から主頭大刀であれば柄縁金具となるが、34の幅との差は0.8cmとなり、一連の刀装具とするには疑問が残る。特に46は小ぶりの大刀であることから、出土状況から一連と判断できる装具以外は、法量を基にその帰属を峻別するべきであろう。

そのように整理すれば、46の大刀に伴う装具は37～39・41・44と考えるのが妥当であり、主頭柄頭の34に伴う装具は35・43と考えられる。前者を金銅装大刀（大刀2）、後者を主頭大刀（大刀1）と呼称したい。

主頭大刀（大刀1）は、鞘尻金具の43が第1次床面から出土している点から、初葬にともなう大刀とみられる。比較的形状をとどめた金銅装大刀（大刀2）は、第2次床面形成後の追葬に伴う大刀と位置付けられる。なお、残った36・40・42の帰属は不明である。

帰属時期 主頭大刀（大刀1）の帰属時期については、柄頭が西澤正晴のⅡ類2段階（西澤2000）、菊地芳朗のC1類1～2式／Ⅰb～Ⅱ期（菊地2010）に位置付けられることから、TK209型式併行期～飛鳥Ⅱ（遠江Ⅲ期後葉～Ⅳ期前葉）の範疇で捉えられる。菊池分類では柄頭頂部刃側の内反度が強いものを1式、緩やかなカーブのものを2式としており、本例は刃側の中ほどに突起があるものの、全体的な頂部のカーブは緩く、1式と2式の中間的様相を呈すると判断できることから、Ⅰb～Ⅱ期相当と幅をもたせて理解している[註1]。なお、蟹目釘付の鞘尻金具と花形切羽を伴う主頭大刀は珍しい。

金銅装大刀（大刀2）は均等両関で中細となる茎部の形態から（臼杵1985）、7世紀代のものとして捉えられる。

(2) 鉄 鏃 （第51・52図）

概 要 中里大久保古墳の鉄鏃のうち、鏃身部の形状が確認できるものは30点、茎関が判明する資料が31点あり、副葬鏃の全体の本数としては、茎関数に短茎鏃1点分を足した32点以上という数に一定の信頼性がある。鏃身部の残る資料の内訳は、短茎鏃1点、平根系1点、尖根系（長頸鏃）が28点である。鏃身部形態の詳細は、短茎鏃が腸抉柳葉式1点、平根系が五角形式1点、尖根系が五角形式10点、柳葉式5点、鑿箭式7点、片刃箭式6点である。以上のことから、中里大久保古墳の副葬鏃群については、総量が32本以上であり、内訳が少量の短茎鏃・平根鏃と、多種・多量の尖根鏃によって構成されるものと位置付けられる。

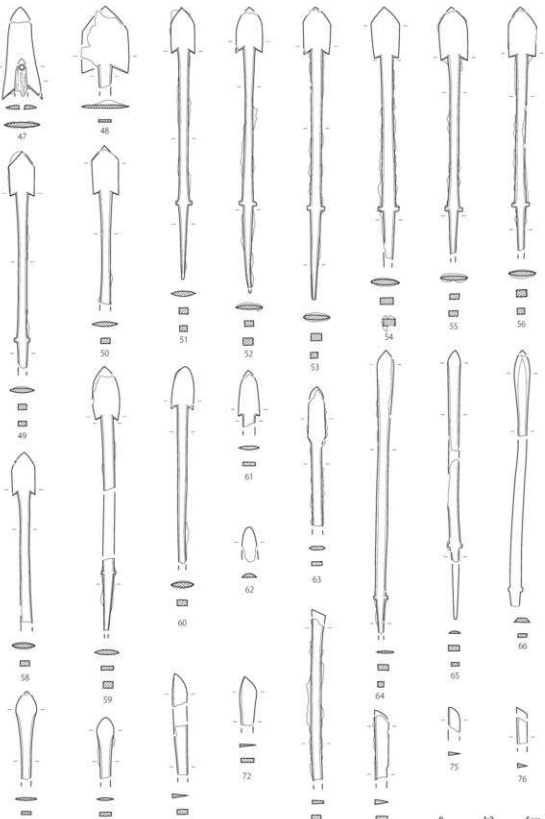
短茎腸抉柳葉式 47は短茎腸抉柳葉式である。鏃身先端が欠損するものの、鏃身が腸抉が長い鏃身部形態をとる。鏃身中央よりやや茎寄りに円孔が穿たれて、その部分まで矢柄が遺存する。矢柄によって茎部は不明瞭であるが、短い茎部がつくものと判断した。

平根五角形式 48は平根五角形式であり、現状では鏃身縁辺部が欠損するが、『旧報告』の写真等も勘案し、復原して図示した。ふくらの張る丸みをもった鏃身で、短い腸抉を有する。

尖根五角形式 49～58は尖根五角形式である。茎部長には若干のばらつきがみられるが、鏃身部長は2.5cm前後、頸部長は8.0cm前後にまとまりがある。鏃身部はいずれも浅い腸抉を有し、ふくらの張るもの（51～56・58）を主体としつつ、直線的なもの（49・50・57）もみられる。茎関はいずれも棘関である。

尖根柳葉式 59～63は尖根柳葉式である。鏃身部は浅い腸抉を有し、ふくらの張るもの（59・60・61）が主体であるが、細身で撫関のもの（63）も存在する。茎関の判明する59は棘関である。

尖根鑿箭式 64～70は尖根鑿箭式である。65・66は『旧報告』時から欠損するが、当時の図面を基に復原図化した。頸部長は9.7～12.4cmまでばらつきがある。鏃身部形態には、端刃造（64）のほか、片丸造（65・69・70）・片鎬造（66・67）の3種類がある。前1者が新相、後2者が古相の特徴を有する。



第 51 図　中里大久保古墳　出土遺物実測図（3）

66・67 は刃部の研ぎ出し範囲も深い。茎関の判明するものはいずれも刺関である。

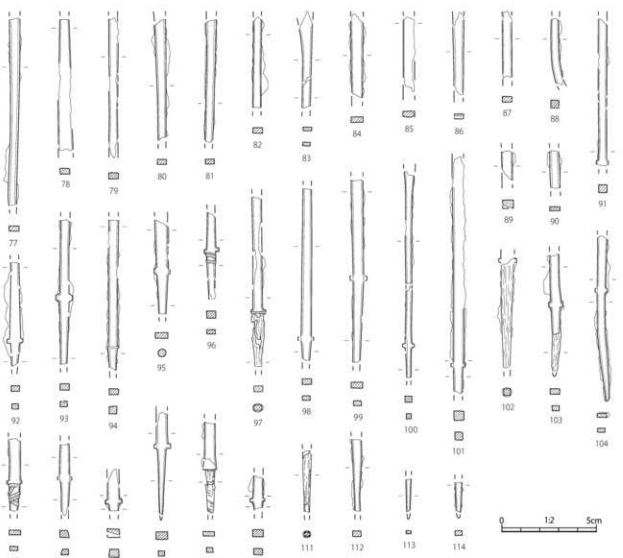
尖根片刃箭式　71 ～ 76 は尖根片刃箭式である。多くは明確な鏃身関をもたず、上部にふくらの張る刃が形成される端刃造とみられるが、74 は撫関とみられ、上半部に刃が形成される。

頸部～茎部片　77 ～ 90 は頸部片であり、断面形は方形のものから長方形のものが認められる。91 ～ 110 は茎関が遺存するものである。94 が類円形関（藤村 2018）、109 が台形関とみられるが、ほかは棘関で、頸部と茎部の境が直角的に突出するものや台形状のものが目立つ。111 ～ 114 は茎部片で、茎部長は 3.5 ～ 5.0cm 程のものが多いとみられる。

有機質は 97・109・111 で矢柄の木質と樹皮巻き（口巻き）、96・105 で樹皮巻きまたは下巻き、102・103・109 で矢柄の木質が確認できる。

多くは尖根系鉄鏃の頸部～茎部片であるが、幅広な作りの 95・105 は平根系の可能性がある。

帰属時期　短茎式については、大谷宏治の集成によると、駿河東部地域の横穴系埋葬施設出土例では TK43 型式併行期～飛鳥Ⅱにみられる（大谷 2011）。本例はそのうち、TK209 型式併行期～飛鳥Ⅰの秋葉林 1 号墳例を粗雑化したような形態をとることから、飛鳥Ⅰ～Ⅱに収まると考えられる。また、尖根系のうち、腸抉を有する五角形式や柳葉式については、駿河東部地域周辺では飛鳥Ⅰ～Ⅱ（遠江Ⅲ期末葉～Ⅳ期前葉）にかけて展開しており（藤村 2018）、本例も同時期のものとみてよい。



第 52 図　中里大久保古墳　出土遺物実測図（4）

一方、端刃造の鏃箭式や片刃箭式の存在から、追葬に伴う飛鳥Ⅱ～Ⅳ（遠江Ⅳ期前葉～末葉）の時期の資料も存在するとみられる。

5 工 具

(1) 刀 子 （第 53 図）

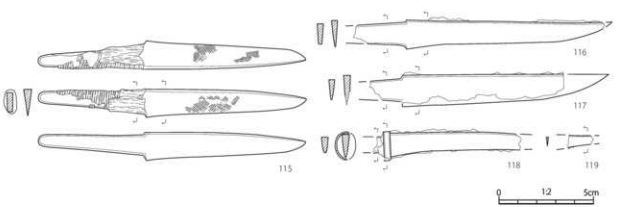
115 ～ 119 は鉄製刀子で、破片含めて 4 点出土した。115 は完形品で、全長 14.2cm、刃部長 8.6cm を測る。関は刃部側が突起関、棟側が撫関の不均等両関で、茎は茎尻に向かい中細となり、栗尻である。茎には樹皮による下巻きと、その上に木柄の一部が残存する。刃部には両面に布目が付着しており、抜身の状態で布に巻いて副葬されたものとみられる。116 ～ 118 は刃部と茎部が欠損するが、いずれも両関である。118 は鉄製の鎹の一部が遺存し、関は不均等関とみられる。刃部は非常に先細りしており、研ぎ減りの可能性がある。119 は刃部片である。

6 馬 具

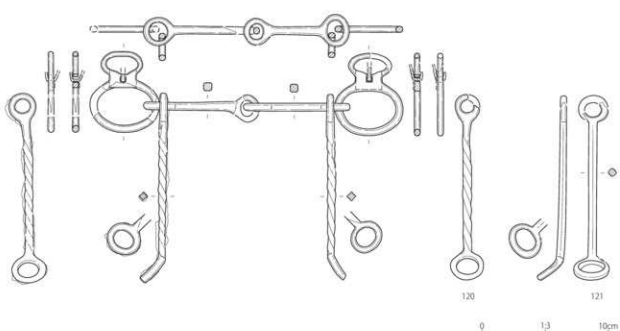
(1) 轡 （第 54 図）

120 は鉸具造立聞環状鏡板付轡である。鉄製で、図面上での長さは 18.3cm、復原幅は 24.9cm を測る。本体は 5 片に分離しているため、復原して図化した。

鏡板は鉸具造の円環であり、左鏡板は復原全高 6.4cm、同幅 5.5cm、右鏡板は全高 6.55cm、幅 5.4cm を測る。刺金は一本の鉄棒を用い、円環と鉸具の連結部にあけられた小孔に蕨手状に巻き付けている。

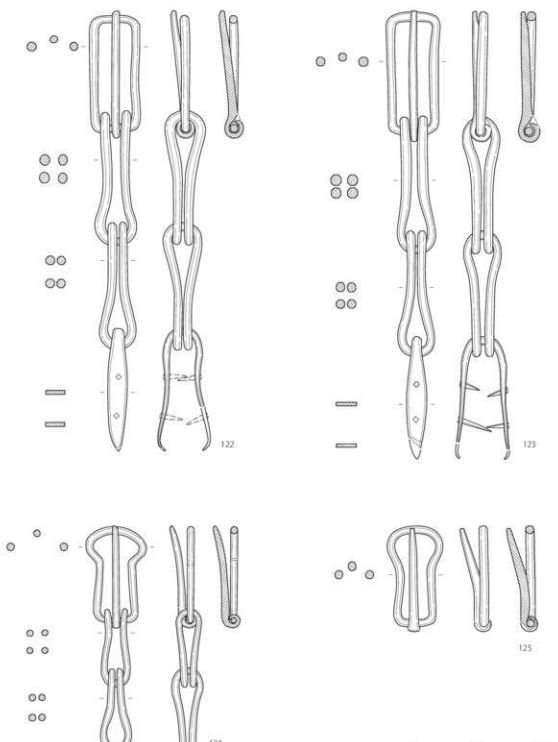


第 53 図 中里大久保古墳 出土遺物実測図（5）



第 54 図 中里大久保古墳 出土遺物実測図（6）

また、両鏡板の連結部には幅 2.2cm、高さ 1.5cm の範囲で板状の鉄素材の一部やその剥離痕が表裏ともに認められる。鉸具と円環の連結部補強のため、板状の鉄素材を巻き付けていた可能性が考えられる。衝は二連衝で、全長 16.4cm、左衝の長さは復原値で 9.2cm、右衝の長さ 8.4cm である。鞘金は左右ともに衝先環よりも小さく成形されている。引手は、一条の鉄棒を捩じることで成形されている。捩じりは左右ともに右撚りで、衝先環付近では捩じりが弱くなる。左側は引手の長さ 15.05cm、右側は引手の長さ 14.7cm であり、左右でほぼ同形・同大に成形されている。引手壺は引手本体と鈍角に連接される。



第 55 図　中里大久保古墳　出土遺物実測図（7）

120の帰属時期については、第5章の大谷宏治の分析から、飛鳥Ⅱ（遠江Ⅳ期前葉）に位置づけられる。

121は鉄製轡の引手である。こちらは捩じりがなく、断面方形の鉄棒が使用される。長さは復原値で14.6cmである。ほかに組み合う轡の部材は見当たらないが、鐙同様、馬具が本来2セット存在したことを示すものとみられる。

(2) 鐙 （第55図）

鐙吊金具は、3点出土している。それらは鉸具尻の形態や兵庫鎖の法量によって2種に分類可能である。以下、分類毎に特徴を示す。

122・123は鉸具尻が方形で、個々の兵庫鎖が長く2連となるものである。鉸具基部には蕨手状に刺金が巻き付く。兵庫鎖は2連式で、全長18.9cm/19.0cm（122/123、以下同）、上側の鎖の長さ10.7cm/10.9cm、下側の鎖の長さ10.1cm/10.0cmであり、上側の鎖が長い。吊金具は吊部の断面が扁平な長方形であるが、固定部はさらに薄く伸ばした板状を呈し、その先端が内側に屈曲する。鉄製鋲は上方が短く、下方が長い形態であり、片側2箇所、計4箇所に打つことで木製鐙を固定していたとみられる。擬似鋲はない。帰属時期は、吊金具が短く、兵庫鎖が2連であることから、斎藤弘の三E式に該当し（斎藤1986）、TK209型式併行期～飛鳥Ⅰに比定されているが、ここでは千人塚古墳例なども参考に後ろに幅をもたせて、TK209型式併行期～飛鳥Ⅱにおさまる時期（遠江Ⅲ期後葉～Ⅳ期前葉）と考えたい。

124は鉸具尻が鍵穴形で、個々の兵庫鎖は短く3連に復原されるものである。鉸具基部には蕨手状に刺金が巻き付く。兵庫鎖は現状2連分しか遺存しないが、上側の鎖の長さ6.2cm、下側の鎖の長さ6.6cmであり、さらに下方に鎖が付き、3連になるとみてよい。帰属時期は、斎藤の三D式に相当することからTK43～209型式併行期に比定されるが、こちらも幅を持たせて、TK43型式併行期～飛鳥Ⅰにおさまる時期（遠江Ⅲ期中葉～末葉）と考えたい。

(3) 鉸 具 （第55図）

鉸具は2点出土しているが、1点が行方不明である。125は鉸具尻が鍵穴形の鉸具であり、円形の基部に蕨手状の刺金が巻き付く。一見すると124の鐙吊金具の鉸具と類似するが、『旧報告』には125とほぼ同形同大の鉸具（『旧報告』第8図4）が掲載されており、こちらは残念ながら所在不明となっている。出土状況を勘案すれば、125はこの行方不明の鉸具と対となり、共通する部位に使用されたものとみられる。

7 土 器

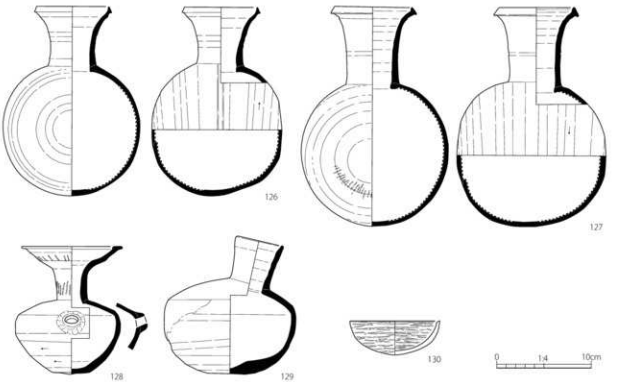
(1) 須恵器 （第56図）

フラスコ瓶 126・127は湖西窯産のフラスコ瓶である。頸部から口縁部は外反しながら開き、端部は断面三角形状に成形され、口唇部外側は鋭い稜を成している。体部は球形で、成形時の底部側は、ドーナツ状に回転ヘラケズリが施され、反対側の内外面には円形の粘土板による閉塞痕（擬口縁）がみられる。140には粘土板の周囲を外面からヘラで押さえた痕が残る。126の体部正面中央には、頸部接続位置の当たり線の可能性がある縦方向の2条の沈線がある。いずれも口縁部から体部上半にかけて、自然釉が付着する。帰属時期は、遠江Ⅳ期前葉～末葉（飛鳥Ⅱ～Ⅳ）におさまる。

壺 128は湖西窯産の壺である。口頸部長は体部長を下回り、比率は0.7：1.0である。口縁部は緩やかな二重口縁状に外反し、頸部にかけて縦位の列点文が施される。肩部は若干張り、体部断面形は逆三角形状を呈する。体部下半はドーナツ状に回転ヘラケズリされている。注口部は突出する形態であり、貼り付け時のヘラナデ痕が注口部側面に残る。帰属時期は、遠江Ⅳ期前葉～末葉（飛鳥Ⅱ～Ⅳ）におさまる。

平 瓶 129は湖西窯産の平瓶である。やや肩の張る偏球形の体部に短い口縁部がつく。図示した裏側には肩部に浅い沈線が巡っている。底部はドーナツ状に回転ヘラケズリが施される。肩部には自然釉が付着する。帰属時期は、遠江Ⅲ期末葉（飛鳥Ⅰ）頃に位置づけられる。

なお図示したもののほかに、甕の破片が出土している。



第 56 図　中里大久保古墳　出土遺物実測図（8）

（2）土師器（第 56 図）

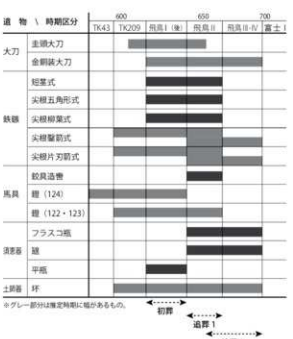
坏　130 は坏である。須恵器坏蓋を模倣した半球形の体部で、口唇部内側は僅かに肥厚させる。内外面ともに密なヨコヘラミガキが施される。口径は 9.4cm である。帰属時期は、沢東Ⅰ～Ⅱ（TK209 型式併行期～飛鳥Ⅳ）に収まると考えられる。

8　小　結

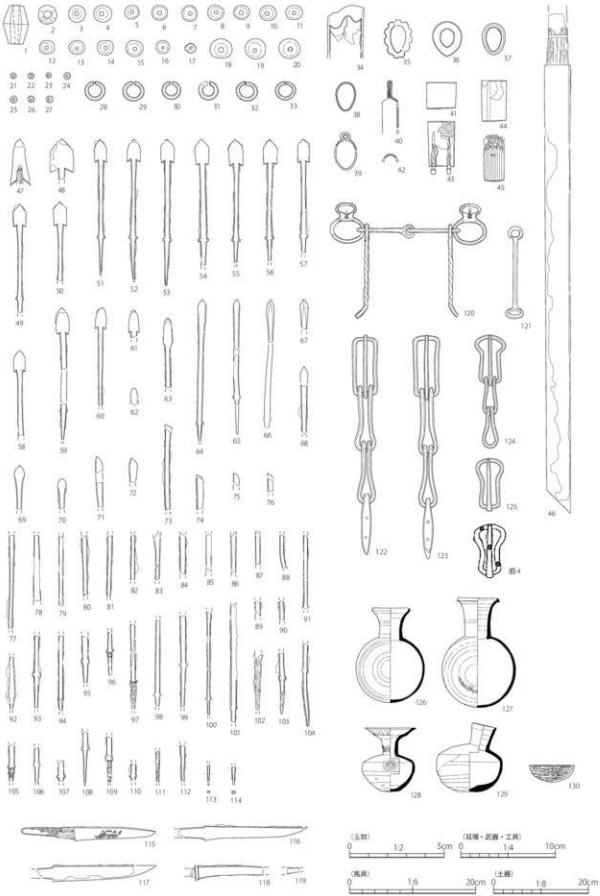
（1）古墳出土遺物からみた埋葬時期

ここまでの所見をまとめ、中里大久保古墳から出土したそれぞれの副葬品の時期を示したものが第 57 図である。時期比定がし難い遺物は除外している。この図から判断するに、飛鳥Ⅰ（遠江Ⅲ期末葉）の時期と、飛鳥Ⅱ～Ⅳ（遠江Ⅳ期前葉～末葉）の大きく 2 時期に遺物を区分することが可能である。6 点の耳環の存在から最低 3 人の埋葬を想定すれば、1 人目の埋葬（初葬）を飛鳥Ⅰ、2 ～ 3 人目の埋葬（追葬）を飛鳥Ⅱ～Ⅳの時期とみることができる。

初葬に伴う副葬品としては、圭頭大刀（34・35・43）、古相の鉄鏃（47 ～ 61・66・67・74）、古相の馬具（121・124・125・旧 4）、土器類（129 など）が挙げられる。追葬に伴う副葬品としては、金銅装大刀（38 ～ 39・44 ～ 46）、新相の鉄鏃（64・65・69 ～ 72 など）、新相の馬具（120・122・123）や土器類（126 ～ 128 など）が挙げられる。



第 57 図　中里大久保古墳　出土遺物の編年的位置



第 58 図　中里大久保古墳　出土遺物一覧

第3節　中里K-97号墳

1　出土遺物の概要

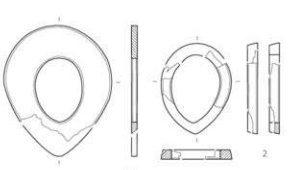
中里K-97号墳では、土取り工事の際に大刀、鉄鏃、工具、土器からなる副葬品を主体とする古墳関連遺物群が出土した。本節で報告する出土遺物の種類と総数は、以下のとおりである。

武　器	大　刀	14点
	刀装具	1点
	鉄　鏃	45点
		（鏃身16点、茎関10点）
工　具	刀　子	7点
土　器	須恵器	1点

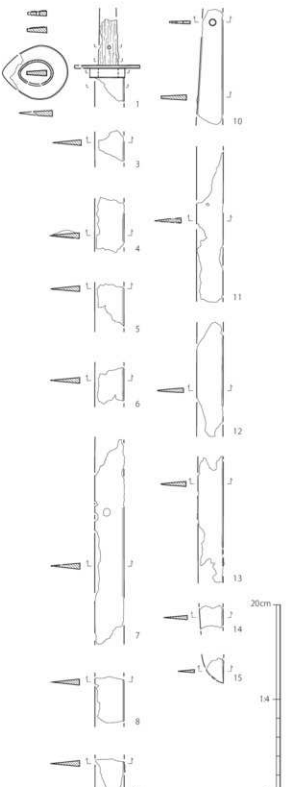
2　武　器

（1）大刀・刀装具　（第59・60図）

大　刀　大刀は14点図化した。『旧報告』の記述および現況の刀身部幅や厚さから、2振りの大刀が存在したと考えられる。1・3～9は刀身部幅3.0cm、厚さ0.6cmに復原できる大刀の破片である。『旧報告』には実測図は未掲載であるが、「図版第12　AK第97・98号墳　大刀身」内の最上段掲載の大刀片が、現状では欠損もあるものの、左から1・3・4・5・6・7に該当する。1の関は直角両関で、茎は先端に向かって中細となる形態とみられる。茎部には目釘孔があり、柄木の木質も遺存する。関部には鉄製の縁と鐏が装着されている。鐏（1A）は倒卵形の無窓鐏であり、図示した下端部が欠損する。10は大刀の茎部とみられ、先端に目釘孔がある。



第59図　中里K-97号墳　出土遺物実測図（1）



第60図　中里K-97号墳　出土遺物実測図（2）

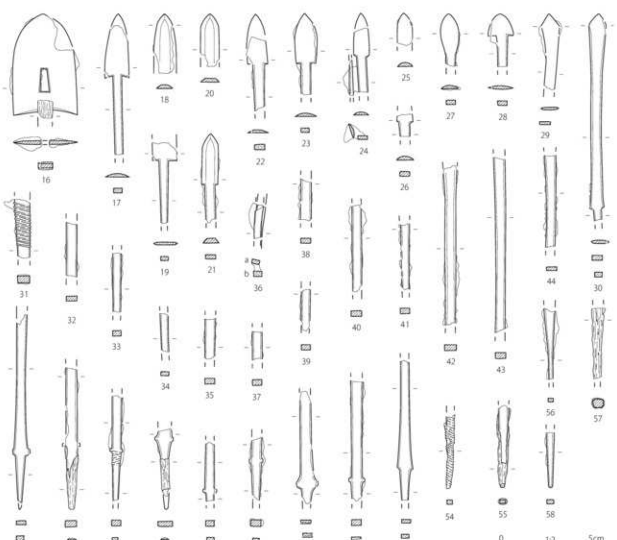
他の破片と比べて重量が重く、古代以降の鉄製品の一部の可能性もある。11 ～ 15 は刀身部幅 2.8cm 程度、厚さ 0.5cm に復原できる大刀の破片である。14・15 は切先付近の破片であり、ややふくらの張る形態であったと考えられる。

刀装具　刀装具は 1 点出土した。2 は大刀の鉄製責金具である。倒卵形で厚みがあり、断面形は内側が直角となる台形を呈する。1 の鍔の柄側に剥離痕らしき箇所が僅かにみとめられることから、この大刀に装着されていた喰出鍔とみられる。

(2) 鉄　鏃　（第 61 図）

概　要　中里 K-97 号墳の鉄鏃のうち、鏃身部の形状が確認できるものは 16 点、茎関が判明する資料は 10 点あり、副葬鏃の全体の本数としては、鏃身部数を重視して 16 点以上と考えておきたい。鏃身部の残る資料の内訳は、短茎鏃 1 点、尖根系（長頸鏃）が 15 点である。鏃身部形態の詳細は、短茎鏃が長三角形式 1 点、尖根系が柳葉式 11 点、三角形式 1 点、鏨箭式 3 点である。以上のことから、中里 K-97 号墳の副葬鏃群については、総量が 16 本以上であり、内訳が単独の短茎鏃と、少種・多量の尖根鏃によって構成されるものと位置付けられる。

短茎長三角形式　16 は短茎長三角形式である。一部欠損するものの、腸抉が短くふくらの張る鏃身部形態をとる。鏃身中央よりやや茎寄りに細長台形の孔が穿たれて、茎部に矢柄の木質が遺存する。

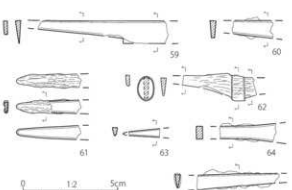


第 61 図　中里 K-97 号墳　出土遺物実測図（3）

尖根柳葉式　17～26は尖根柳葉式である。鏃身部関は直角関で、ふくらの張るもの（21・23・24）が主体とみられるが、細身で短い腸抉を有するもの（17）も存在する。18・19・21は鏃身部先端から側面全体に鏑を作り出す。24は2個体が錆着するが、ともに柳葉式と判断した。

尖根鑿箭式　27・29・30は尖根鑿箭式である。鏃身部形態の詳細は、保存処理時のクリーニングによるためか全体的に平坦な形状となっているため、判然としない。茎関の判明する30は台形関であり、鏃身部にも本来は鏑があった可能性もある。

尖根三角形式　28は尖根三角形式である。ふくらの張る鏃身部形態で、直角関を有する。

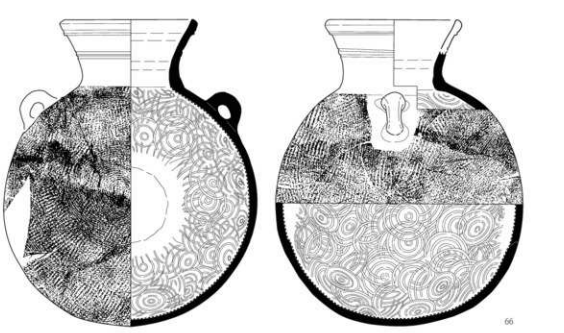


第62図　中里K-97号墳　出土遺物実測図（4）

頸部～茎部片　31～44は頸部片であり、断面形は長方形である。31は幅広の頸部の表面に木質と口巻きがあり、平根系鏃あるいは鍬等の工具の一部となる可能性がある。45～53は茎関が遺存するものである。53は台形関であるが、ほかは棘関で、頸部と茎部の境で直角的に突出するものや台形状のものが目立つが、撫関状に鈍角的に張り出すもの（48）もある。54～58は茎部片である。

有機質は47・54で樹皮巻き（口巻き）または下巻き、46・48・55・57で矢柄の木質が確認できる。

帰属時期　短茎式については、大谷宏治の集成によると、駿河東部地域の横穴系埋葬施設出土例ではTK43型式併行期～飛鳥Ⅱにみられる（大谷2011）。本例はそのうち、TK209型式併行期～飛鳥Ⅰの的場3号墳例に類似することから、同時期に収まると考えられる。また、尖根系のうち、鏑のある直角関の柳葉式や台形の茎関については、駿河東部地域周辺ではTK43～209型式併行期（遠江Ⅲ期中葉～後葉）におおよそ収束する特徴とみられ、本例も同時期のものとみられる。一方、端刃造の可能性がある尖根鑿箭式や短小な尖根三角形式のほか、棘関にも台形状や撫関状を呈する簡略形態がある点から、追葬に伴う飛鳥Ⅰ～Ⅱ（遠江Ⅲ期末葉～Ⅳ期前葉）頃の時期の資料も存在するとみられる。



第63図　中里K-97号墳　出土遺物実測図（5）

3 工 具

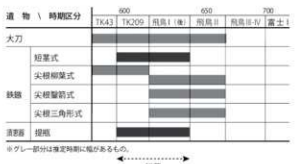
(1) 刀 子 (第 62 図)

59 ～ 65 は鉄製刀子で、すべて破片で 7 点出土した。59 は片関で、茎部は茎尻に向かい中細となる。62 は刀身部の根本から茎部にかけての破片であり、鉄製の鎺が装着される。関は片関とみられる。茎部には柄木、鎺から刀身部には鞘木の木質が遺存している。60・61・63・64 は茎部片、65 は刀身部片である。61 も柄木の木質が遺存する。

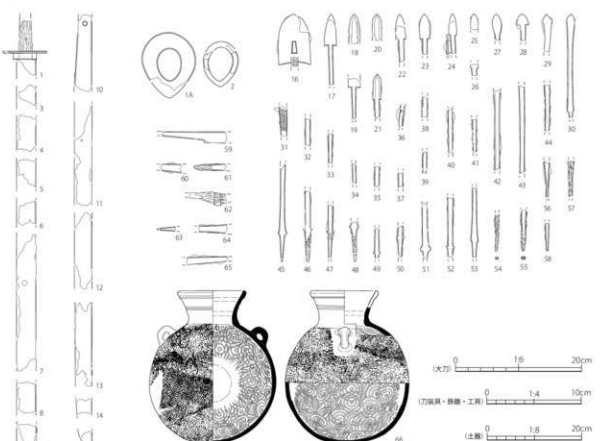
4 土 器

(1) 須恵器 (第 63 図)

提 瓶 66 は提瓶である。頭部から口縁部は広口状に開き、口唇部外面は丸く収めるが、口縁部下端は突出する。頭部は中段に 2 条の沈線が巡るが、やや粗雑で 1 条は全周しない。体部は球形で、成形時の底部側は、内面に粘土紐立ち上げの際の段差がみえる。反対側の内面には円形の粘土板による閉塞痕 (掘口縁) がみられる。把手は太くしっかりとした環状を呈し、下側は下方へやや伸ばして撫で付けられる。把手の片側が欠損する。体部外面は格子目状タタキ、内面は同心円文当て具によって成形されるが、閉塞部の内面に当て具痕はみられないことから、閉塞後の外面調整はタタキをせずに乱雑なカキメによって仕上げられたとみられる。帰属時期については、しっかりとした体部や把手を有しつつも、体部に前後の別がなく、球形化している点を重視すれば、遠江Ⅲ期後葉～末葉 (TK209 型式併行期～飛鳥Ⅰ) に位置づけられる。



第 64 図 中里 K-97 号墳出土遺物の編年的位置



第 65 図 中里 K-97 号墳 出土遺物一覧

5 小 結

(1) 古墳出土遺物からみた埋葬時期

ここまでの所見をまとめ、中里K-97号墳から出土したそれぞれの副葬品の時期を示したものが第64図である。時期比定がし難い遺物は除外している。この図から判断するに、TK209型式併行期～飛鳥Ⅰ（遠江Ⅲ期後葉～末葉）の時期と、飛鳥Ⅰ～Ⅱ（遠江Ⅲ期末葉～Ⅳ期前葉）の大きく2時期に遺物を区分することが可能である。限られた資料からではあるが、初葬をTK209型式併行期～飛鳥Ⅰ、追葬を飛鳥Ⅰ～Ⅱの時期とみておきたい。

初葬に伴う可能性がある副葬品としては、いずれかの大刀と古相の鉄鏃（16～21）、須恵器（66）が挙げられる。追葬に伴う可能性がある副葬品としては、いずれかの大刀のほか、新相の鉄鏃（25～30）が挙げられる。

第4節 中里K-98号墳

1 出土遺物の概要

中里K-98号墳では、土取り工事の際に大刀、鉄鏃、工具、馬具、土器からなる副葬品を主体とする古墳関連遺物群が出土した。本節で報告する出土遺物の種類と総数は、以下のとおりである。なお、このほかに第6節で報告する帯飾金具1点および円形金具1点が、本古墳に伴う蓋然性が高いとみられる。

武　器	大　刀	2点	
	刀装具	1点	
	鉄　鏃	57点	
		（鏃身21点、茎関22点）	
工　具	刀　子	2点	（所在不明1点）
馬　具	轡	1点	
	鈹　具	2点	
	円形金具	9点	
	帯飾金具	25点	
土　器	須恵器	1点	

2 武 器

(1) 大刀・刀装具 （第66・67図）

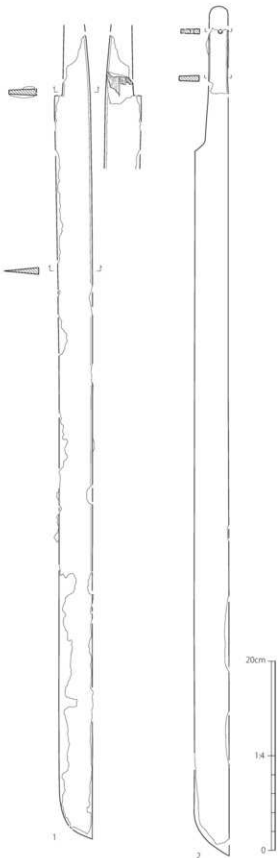
大　刀　大刀は2点図化した。1は大型の大刀であり、切先や刃部、茎部を一部欠損する。ふくらの張る切先に、関は直角片関で、茎は先端に向かって中細となる形態とみられる。茎部には柄木の木質が遺存する。刀身部長は復原値で78.5cm、幅3.7cmを測る。2は大刀の茎部片である。図示した上端に径0.35cmの目釘孔がある。茎部の幅に変化が少ない、直（スグ）とみられる。2はその形状から、『旧報告』記載の残存長88.5cm、刀身部長79.0cm、刀身部幅3.6cmの大刀（『旧報告』第12図4）の茎部と推定される。刀身部は現在所在不明である。

旧図によれば、ふくらの張る切先に関は撫角片関で、茎尻は栗尻となっている。

刀装具　刀装具は1点出土した。3は鉄製八窓鍔である。倒卵形で厚みがあり、断面形は長方形を呈する。透窓はほぼ均等に配置される。内孔の外側に鉄製縁の一部が付着する。縁の厚さは0.25cmである。帰属時期について、本例は西澤正晴の有窓鍔B類に該当することから、TK209型式併行期（遠江Ⅲ期後葉）以降に盛興する形態と判断されるが（西澤2002）、その下限は整った透窓の形態から、飛鳥Ⅱ（同Ⅳ期前葉）頃までに収まるものと推定される。

(2) 鉄　鏃 （第68図）

概　要　中里K-98号墳の鉄鏃のうち、鏃身部の形状が確認できるものは21点、茎関が判明する資料は22点あり、副葬鏃の全体の本数としては、茎関数に無茎鏃1点分を足した23点以上という数に信頼性がある。鏃身部の残る資料の内訳は、無茎鏃1点、平根系が3点、尖根系（長頸鏃）が15点である。鏃身部形態の詳細は、無茎鏃が腸抉柳葉式1点、平根系が腸抉柳葉式1点、長三角形式2点、尖根系が柳葉式16点、片刃箭式1点である。以上のことから、中里K-98号墳の副葬鏃群については、総量が23本以上であり、内訳が少量の短茎鏃・平根鏃と、



第 66 図　中里 K-98 号墳　出土遺物実測図（1）

少種・多量の尖根鏃によって構成されるものと位置付けられる。

無茎腸抉柳葉式　4 は無茎腸抉柳葉式である。一部欠損するものの、長く幅広な腸抉の先端に重抉を有し、ふくらの張る鏃身部形態をとる。鏃身中央よりやや茎寄りには、方形の孔が 2 点並んで穿たれる。

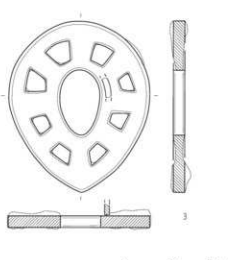
平根腸抉柳葉式　5 は平根腸抉柳葉式である。腸抉先端が欠損するが、本来は長く鋭い腸抉に、ふくらの張る鏃身部形態であったとみられる。

平根長三角形式　6 は平根長三角形式である。鏃身部先端と茎部が欠損するが、ふくらの張る細く鋭角的な鏃身部に、台形状に突出する関を有する。頸部は幅広で短く、茎関は刺関である。7 は鏃身部の一部しか残っていないが、厚みなどから 6 と同形式と判断した。

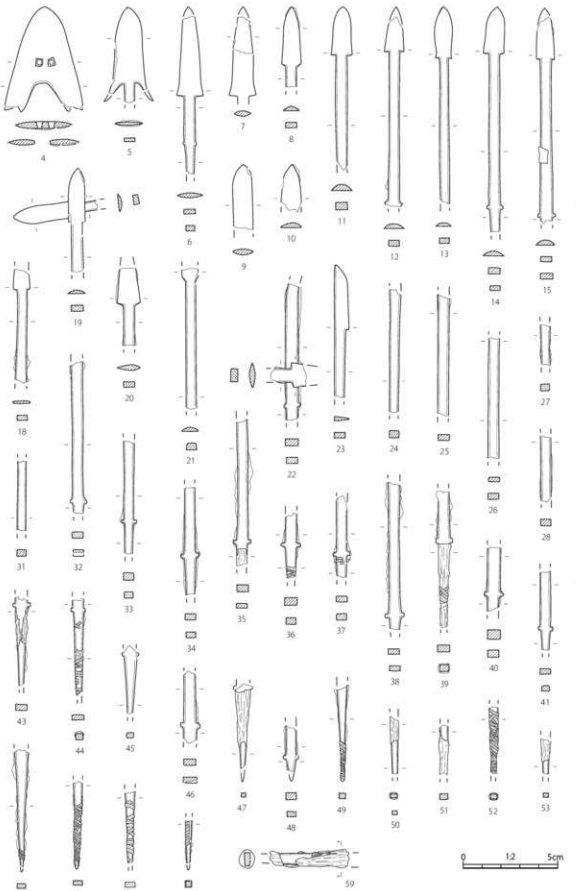
尖根柳葉式　8 ～ 22 は尖根柳葉式である。鏃身部形態は多様であり、ふくらが張り、鏃身関が直角関となるもの（11・12・14・15・17 ～ 20・22）が主体とみられるが、鏃身関が撫関となるもの（8・16・21）やくびれのあるもの（13）も存在する。茎関の判明するものはすべて棘関である。

尖根片刃箭式　23 は尖根片刃箭式である。鏃身部先端はふくらが張り、側面まで刃が形成される。鏃身関は直角関である。

頸部～茎部片　24 ～ 31 は頸部片であり、断面形は方形のものから長方形のものが認められる。32 ～ 48 は茎関が遺存するものである。すべて棘関で



第 67 図　中里 K-98 号墳　出土遺物実測図（2）



第 68 図　中里 K-98 号墳　出土遺物実測図（3）

あるが、頸部と茎部の境で直角的に突出するものや台形状のものが目立つ。48は短小な茎部と判断した。49～58は茎部片である。

有機質は39・44で矢柄の木質と樹皮巻き（口巻き）、36・37・49・52・55～58で樹皮巻きまたは下巻き、35・43・47・50・51・53・54で矢柄の木質が確認できる。

多くは尖根系鉄鏃の頸部～茎部片であるが、幅広な作りの40・46は平根系の可能性がある。

帰属時期　無茎式については、大谷宏治の集成によると、駿河東部地域の横穴系埋葬施設出土例ではTK43型式併行期～飛鳥Ⅱにみられる（大谷2011）。幅広な作りで長い腸抉や重抉りを有する形態は、古相の特徴を残すものと推定されることから、TK43～209型式併行期（遠江Ⅲ期中葉～後葉）の範疇で捉えたい。また平根長三角形式は類例が少ないものの、TK209型式併行期の清水柳北2号墳（鈴木裕ほか1990）に類例があり、本例も同時期と考えられる。尖根系のうち、腸抉のない直角関の柳葉式はTK43型式併行期～飛鳥Ⅰ（遠江Ⅲ期後葉～末葉）によく見られ、本例も同時期のものと考えておきたい。一方で短小な茎部（48）は国久保古墳（藤村・若林編2011）や東平1号墳（佐藤編2018）、船津L-62号墳（藤村・石川編2013）といった飛鳥Ⅰ～Ⅱ（遠江Ⅲ期末葉～Ⅳ期前葉）の古墳に類例があり、追葬に伴う鏃群が一定量存在する可能性もある。

3　工　具

（1）刀　子　（第68図）

鉄製刀子は『旧報告』によると2点出土しているが、1点しか現存しない。59は刀子の茎部片であり、樹皮による下巻きと木柄が遺存する。『旧報告』第12図4の刀子は所在不明である。

4　馬　具

（1）轡　（第69図）

60は大型矩形立聞環状鏡板付轡である。鉄製で、図面上での復原長19.9cm、幅は30.2cmを測る。本体は4片に分離しているため、復原して図化した。

鏡板は、大型矩形（回字形）の立聞が楕円形の円環に鍛接される。左鏡板は復原全高8.2cm、同幅8.1cm、右鏡板は復原全高8.2cm、幅8.05cmを測る。銜は二連銜で、全長17.0cm、左銜の長さは9.4cm、右銜の長さ8.7cmである。啣金は左右ともに銜先環よりも小さく成形されている。引手は一条線引手で、引手壺が鈍角に連接される。左側は引手の長さ16.9cm、右側は引手の長さ18.0cmであり、右側の引手が1.1cm長いほか、円環や引手壺も右側は小さい。補修により、片側の引手が交換された可能性がある。

120の帰属時期については、第5章の大谷宏治の分析から、TK209型式併行期（遠江Ⅲ期後葉）に位置づけられる。

（2）鈹　具　（第69図）

61は鉄製鈹具の輪金とみられる。刺金と基部が欠損し、鈹具尻は円形で、鉄棒の断面は円形である。

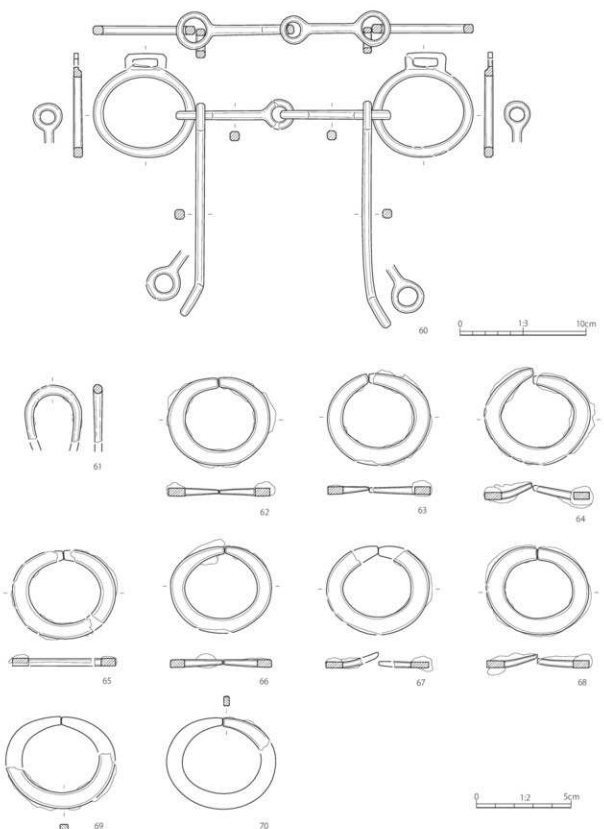
（3）円形金具　（第69図）

円形金具（素環金具）は破片を含めて9点出土した。62～70はいずれも鉄製で、幅0.9cm程の扁平な鉄棒をC字形に加工することで成形される。環の法量はいずれも全長4.7cm前後、幅5.5cm前後であり、規格性が高い。表面に皮革等の有機質は肉眼観察では確認できない。第5章の大谷宏治の分析から、面繋の辻金具に使用されたものと考えられる。

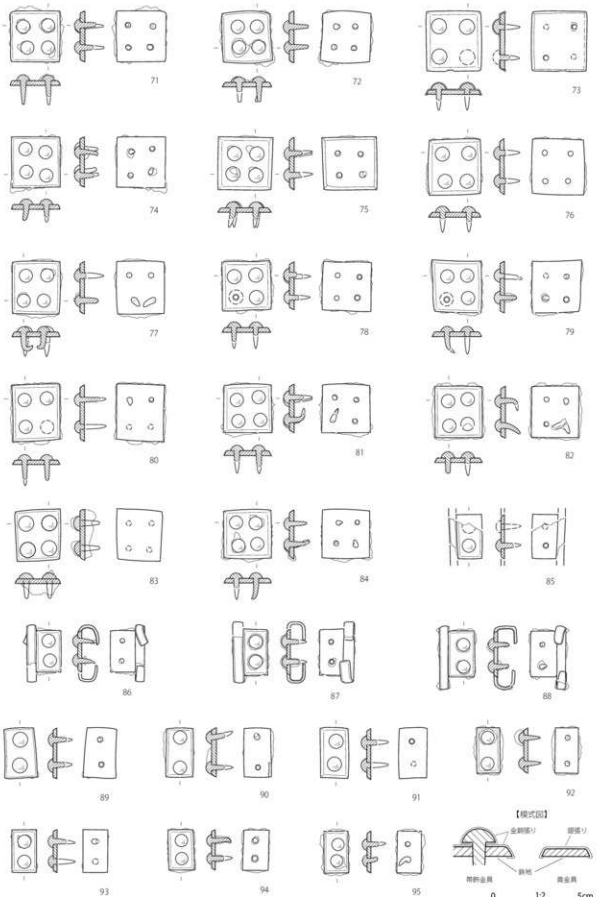
（4）帯飾金具　（第70図）

帯飾金具は25点出土した。部分的に金銅装の痕跡が残るものが複数例確認されることから、いずれも鉄地金銅装であったと考えられる。方形で4鋲のものと、長方形で2鋲のものに大別できる。第5章の大谷宏治の分析から、面繋の辻金具周辺の帯を留める金具として使用されたものと考えられる。

方形4鋲　71～84は方形で4鋲となる鉄地金銅張の帯飾金具であり、計14点存在する。法量は全長2.7～3.0cm程度、幅2.5～3.0cm程度である。4辺が斜めに落とされた金銅張の方形鉄板の4箇所を穿孔し、金銅張の鋲によって革帯等を留めるものである。鋲頭は円形で、鋲脚まで完存するものは0.2～0.3mm程のところで折り曲げている。73・75・76・78・82・83は金銅張の痕跡が残る。



第 69 図　中里 K-98 号墳　出土遺物実測図（4）



第 70 図　中里 K-98 号墳　出土遺物実測図（5）

長方形2鋲　85～95は長方形で2鋲となる鉄地金銅張の帯飾金具であり、計11点存在する。法量は全長2.2～2.7cm程度、幅1.3～1.7cm程度である。4辺が斜めに落とされた金銅張の長方形鉄板の2箇所を穿孔し、金銅張の鋲によって革帯等を留めるものである。89～91・93は金銅張の痕跡が残る。85～88は帯飾金具の長辺1辺に鉄製責金具が付属する。86の責金具は鉄地銀張とみられることから、他の責金具もすべて鉄地銀張の可能性がある。

5　土　器

(1) 須恵器　(第71図)

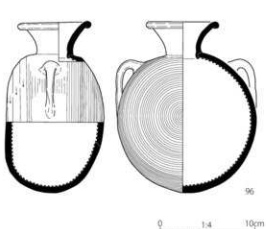
提　瓶　96は提瓶である。頸部から口縁部は外反して開き、口縁端部は下方へ丸く折り返している。体部は成形時の底部側が平坦であり、反対側の内面には円形の粘土板による閉塞痕（擬口縁）がみられる。把手はやや細く三角形状を呈し、下側は下方へやや伸ばして撫で付けられる。把手の片側が欠損する。体部外面は底部側が回転ヘラケズリ、閉塞部側はカキメによって仕上げられる。外面は黒みがかった光沢のある自然釉がかかっており、駿河・甲斐地域の在地窯製品とみられる。帰属時期は、在地窯製品であることから後ろに幅を設け、遠江Ⅲ期中葉～後葉（TK43～209型式併行期）に位置づけたい。

6　小　結

(1) 古墳出土遺物からみた埋葬時期

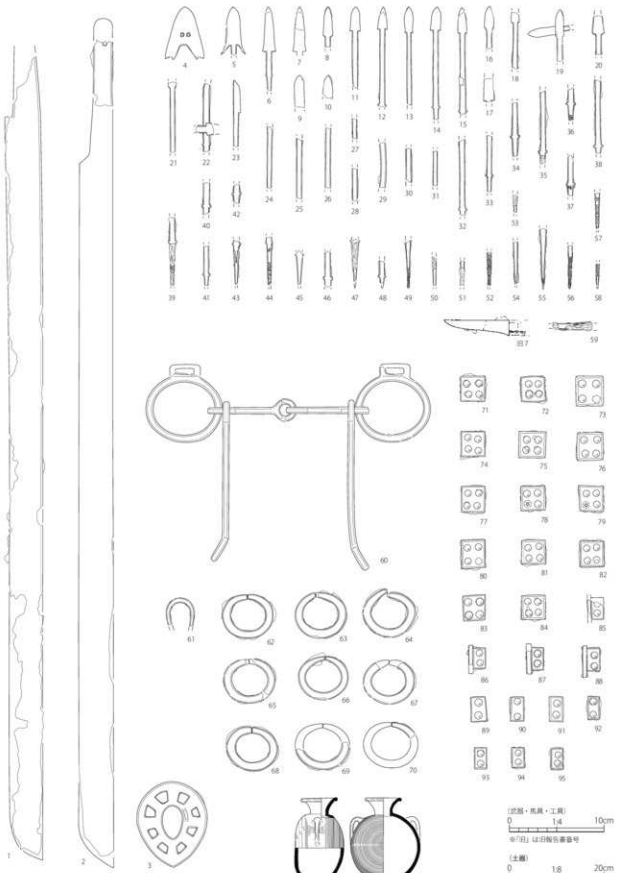
ここまでの所見をまとめ、中里K-98号墳から出土したそれぞれの副葬品の時期を示したものが第72図である。時期比定がし難い遺物は除外している。この図から判断するに、TK209型式併行期（遠江Ⅲ期後葉）の時期に初葬が行われたことは疑いない。一方で、鉄鏃には飛鳥Ⅰ（遠江Ⅲ期末葉）頃の可能性を残すものも存在することから、この時期に追葬が行われた可能性もある。限られた資料からではあるが、初葬をTK209型式併行期、追葬を飛鳥Ⅰの時期とみておきたい。

初葬に伴う可能性がある副葬品としては、いずれかの大刀と古相の鉄鏃（4～15など）、馬具（60～95）、須恵器（96）が挙げられる。追葬に伴う可能性がある副葬品としては、いずれかの大刀のほか、新相の鉄鏃（16・21・48）が挙げられる。



第71図　中里K-98号墳　出土遺物実測図（6）

第72図　中里K-98号墳出土遺物の編年的位置



第 73 図　中里 K-98 号墳　出土遺物一覧

第5節　中里K-99号墳

1　出土遺物の概要

中里K-99号墳では、土取り工事の際に装身具、大刀、鉄鏃、工具、馬具、土器などの副葬品を主体とする古墳関連遺物群が出土した。本節で報告する出土遺物の種類と総数は、以下のとおりである。『旧報告』によれば、これ以外にも古墳発見以降に持ち出された遺物が複数あったようであるが、それらはカウントしていない。その内訳は、発見当初に持ち出された遺物が須恵器完形品1点（器種不明）、土師器高坏1点、紛失した遺物が切子玉1点、耳環2点、丸玉6点である。

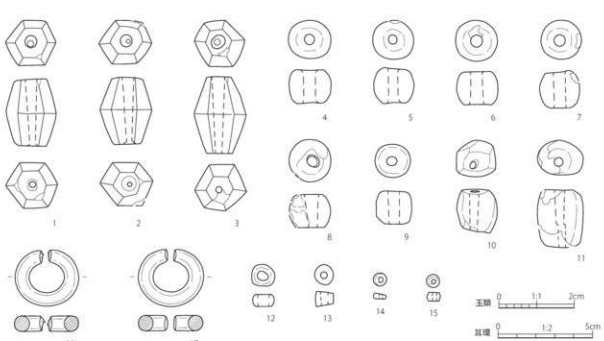
装身具	切子玉	3点
	丸玉	6点
	棗玉	2点
	小玉	4点
	耳環	2点
武器	大刀	31点
	刀装具	5点
	鉄鏃	72点
工具	刀子	13点
	鉇	3点
馬具	轡	1点
	帯飾金具	3点
	鈸具	2点
土器	須恵器	14点
	土師器	6点

（鏃身20点〔所在不明6〕、鏨関22点〔所在不明5〕）

2　装身具

(1) 玉類　（第74図）

玉類は15点出土した。1～3は水晶製の切子玉である。片面穿孔で、底面に剥離欠損が生じている。4～9は丸玉であり、色調は浅黄色～灰黄色不透明を呈する。風化のため肉眼では判別し難いが、ガラス製あるいは蛇紋岩製とみられる。10・11は琥珀製の棗玉で、長さ1.15～1.5cmを測る。12～15はガラス小玉で、色調は12・13が濃青色透明、14・15が黄緑色半透明である。いずれも引き伸ばし法によって成形されたものとみられる。



第74図　中里K-99号墳　出土遺物実測図（1）

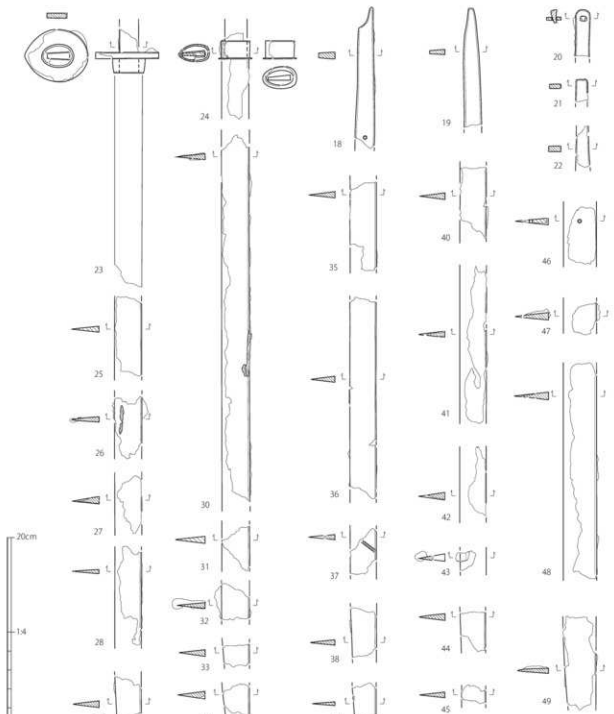
(2) 耳　環　(第74図)

耳環は2点出土した。16・17は錫地金張とみられる耳環である。表面に緑錆が付着することから銅も含んでいるとみられるが、特に17は地金が黒光りしており、錫の含有量が多いと判断した。重量25～30gを測る。16は小口部に金箔巻付けの際の皺が残るが、通有の金箔と比べ、分厚く強張っている。

3　武　器

(1) 大刀・刀装具　(第75・76図)

大　刀　大刀はすべて破片であり、31点を図化した。『旧報告』によると、元々は6～7振が存在したと考えられているが、現存資料で茎尻が残るものは4点である。18～22は茎部片である。18は中細の隅抉尻であり、目釘孔を有する。20は栗尻で



第75図　中里K-99号墳　出土遺物実測図 (2)

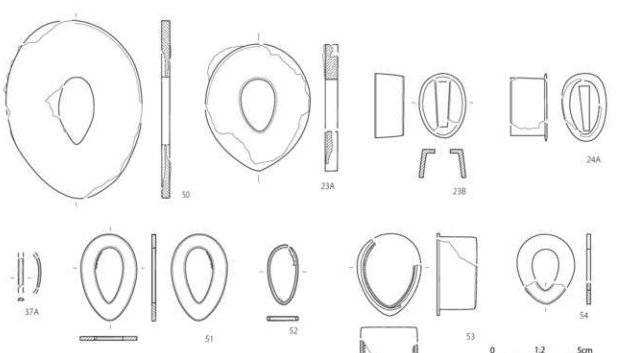
あり、目釘が遺存する。23 ～ 34 は刀身部幅 3.0cm、厚さ 0.7cm 程に復原できる大刀片である。『旧報告』第 13 図 2・3 の大刀がこれに相当するとみられる。23 は茎部と鉄製の鍔・鍔が遺存する。『旧報告』では両関式の刀身部が一部残っていたが、現在は失われている。鍔（23A）は外縁部が欠損するが、厚みのある倒卵形の無窓鍔とみられる。鍔（23B）は堰板のある閉塞式である。24 は鉄製の鍔と刀身部・茎部の一部が遺存するが、欠損が著しく、図示した前後が逆となる可能性もある。断面 L 字形となる鍔の内側には、柄木の木部が残る。鍔の端部に緑錆が付着しており、金銅装大刀の一部とみられる。26・30 の刀身部には鞘木の木質が付着する。29・33・34 は切先の周辺とみられる。35 ～ 45 は刀身部幅 2.8cm、厚さ 0.7cm 程に復原できる刀身部片である。37 は表面に金銅製責金具の破片（37A）が付着する。46 ～ 49 は刀身部幅 3.6cm、厚さ 0.8cm 程に復原できる刀身部片である。『旧報告』第 13 図 1 の残存長 89cm の大刀がこれに相当する可能性がある。46 は径 0.3cm の小孔があり、鏃元孔となる可能性がある。

刀装具　刀装具単体は 5 点出土した。50 は鉄製の無窓鍔であり、全長 9.4cm と大型で、倒卵形を呈する。『旧報告』第 13 図 1 の大刀に伴う鍔とみられる。51 は金銅製の切羽あるいは無窓鍔である。倒卵形で、裏面の内孔に責金具の痕跡と、柄木とみられる木質が残る。52 が金銅製責金具であり、法量、木質の付着箇所が 51 の内孔の痕跡と一致しており、同一の金銅装大刀の装具とみてよい。柄頭が失われているため推定の域は出ないが、本来は金銅装の圭頭大刀あるいは双龍環頭大刀の一部であった可能性がある。53 は断面が L 字形を呈する鉄製鏃であり、内面に柄木の木質が付着する。54 は鉄製の無窓鍔の一部とみられる。小型品であり、131 ～ 133 のやや大型の刀子に伴う可能性も考慮される。

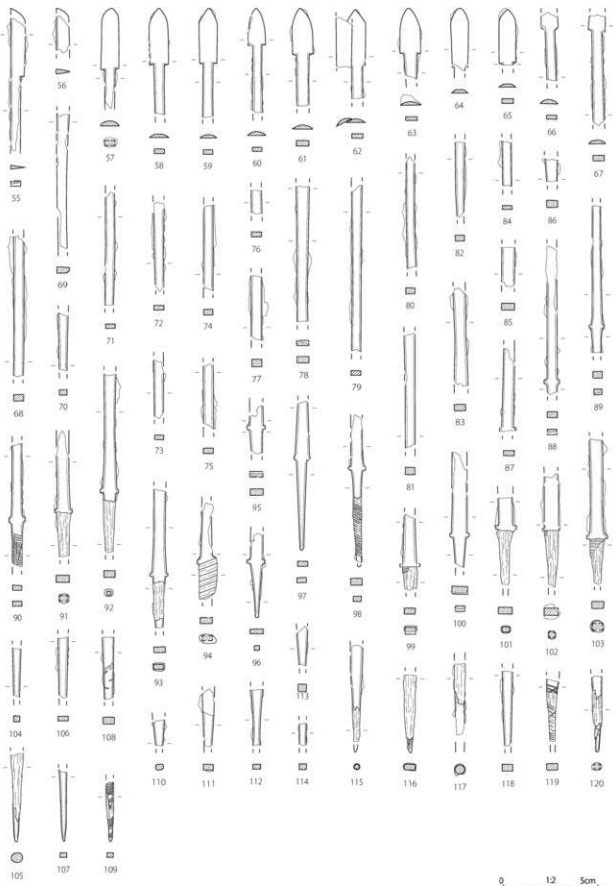
金銅装大刀やその他の大刀の帰属時期については、駿河東部地域における盛行時期から、TK209 型式併行期～飛鳥Ⅳ（遠江Ⅲ期後葉～Ⅳ期末葉）に収まるとみられる。

(2) 鉄　鏃　（第 77 図）

概　要　中里 K-99 号墳の鉄鏃のうち、今回報告する鏃身部の形状が確認できるものは 14 点、茎関が判明する資料は 17 点ある。さらに、所在不明となっている鉄鏃が、鏃身部ありのものが少なくとも 6 点あり、茎関ありのものが少なくとも 5 点ある。



第 76 図　中里 K-99 号墳　出土遺物実測図（3）



第 77 図　中里 K-99 号墳　出土遺物実測図（4）

副葬鏃の全体の本数としては、茎関を数えた22点以上という数に信頼性があるだろう。鏃身部の残る資料の内訳は、所在不明の平根系が5点、尖根系（長頸鏃）が所在不明1点、今回報告分14点である。尖根柳葉式鉄鏃は『旧報告』掲載資料との照合が全てできているわけではないが、今回報告するもののいずれかに該当するものと判断した。鏃身部形態の詳細は、平根系が三角形式2点（旧7・8）、腸抉柳葉式1点（旧9）、長三角形式2点（旧10・11）、尖根系が長三角形式1点（旧13）、柳葉式12点、片刃箭式2点である。以上のことから、中里K-99号墳の副葬鏃群については、総量が22本以上であり、内訳が多種・少量の平根鏃と、少種・多量の尖根鏃によって構成されるものと位置付けられる。

平根三角形式　『旧報告』第13図7・8は平根三角形式である。ともに大きくふくらが張る形態を呈するが、旧7は腸抉が長く、旧8は直角関である。ともに刺関を有する。

平根腸抉柳葉式　『旧報告』第13図9は平根腸抉柳葉式である。鏃身部はふくらが張り、短い腸抉を有する。矢柄と口巻きが遺存する。

平根長三角形式　『旧報告』第13図10・11は平根長三角形式である。ともに大きくふくらが張る形態を呈するが、旧10は浅い腸抉を有し、旧11は直角関である。後述する102の頸部～茎部片が、旧10に該当するとみられる。茎関は刺関である。

尖根片刃箭式　55・56は尖根片刃箭式である。ともに鏃身部先端が欠損するが、側面まで刃が形成される。55の鏃身関は直角関である。

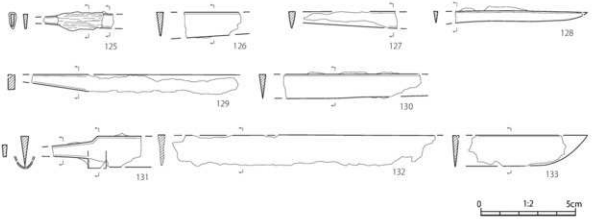
尖根柳葉式　57～67は尖根柳葉式である。鏃身部形態は多様であり、ふくらが張り、鏃身関がほぼ直角関となるもの（57・58・59・62・65）が主体とみられるが、鏃身が短小なもの（60・63）や関が撫関となるもの（66）も存在する。茎関の判明するものは、『旧報告』第13図12～14を見る限りすべて棘関である。

頸部～茎部片　68～86は頸部片であり、断面形は方形のものから長方形のものが認められる。87～103は茎関が遺存するものである。基本的にはすべて棘関であるが、頸部と茎部の境で直角的に突出するものや台形状のものが目立つ。97は台形関と棘関の中間のような形態を呈する。104～109は茎部片である。

有機質は94・98・99・102・103で矢柄の木質と樹皮巻き（口巻き）、90・108で樹皮巻きまたは下巻き、109・119で矢柄の木質と下巻き、91～93・101・105・115～117・120で矢柄の木質が確認できる。

多くは尖根系鉄鏃の頸部～茎部片であるが、幅広な作りの85・99～103は平根系の可能性がある。

帰属時期　平根三角形式・長三角形式と尖根片刃箭式・柳葉式を主体とする鉄鏃組成は、駿河東部地域ではTK43型式併行期にも僅かにみられるもの



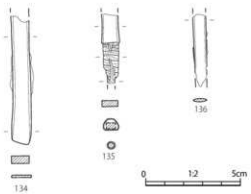
第78図　中里K-99号墳　出土遺物実測図（5）

の、横沢古墳（佐藤政ほか1981）、石川6号墳（鵜田ほか2006）、石川119号墳（沼津市2002）、的場3号墳（富樫2010）といったTK209型式併行期～飛鳥Ⅰ（遠江Ⅲ期後葉～末葉）の古墳に類例が多い（藤村2018）。平根腸抉柳葉式についても、飛鳥Ⅱ以降は見られなくなるので、上記の時期幅と整合的である。刃部の長い片刃箭式も同時期の特徴とみてよい。

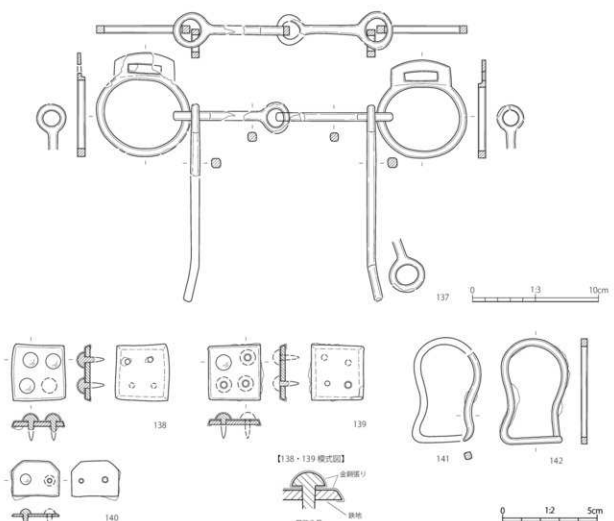
4 工 具

(1) 刀 子 （第78図）

121～133は鉄製刀子で、すべて破片で13点出土した。121は両関で刀身部幅1.1cmを測る。122は刀身部片で、121と幅が近似する。123・124も刀身部幅0.9～0.6cmと類似する破片である。125は



第79図 中里K-99号墳 出土遺物実測図（6）



第80図 中里K-99号墳 出土遺物実測図（7）

茎部片で、柄木の木質が遺存する。127は茎部片と判断した。131は両関であり、棟側は斜角関となる。刃部側は鉄製鏃が残存しており、関の形状は判別できなかった。133はふくらの張る切先付近の破片である。131～133はいずれも刀身部幅1.6cmと共通しており、同一個体なら刀身部長22cm以上のやや大型の刀子となる。

(2) 鉇 (第79図)

134～136は鉇の可能性がある破片である。134は図示した下方に向かって扁平となっていることから、鉇の茎部と判断した。135は頸部から茎部の破片とみられ、木柄と樹皮巻き(口巻き)が遺存する。平根系鉄鏃の破片の可能性もあり、そうであれば『旧報告』第13図9の一部かもしれない。136は茎部片とみられるが、表裏面ともに丸みを帯びており、こちらも刀子等になる可能性もある。

5 馬具

(1) 轡 (第80図)

137は大型矩形立聞環状鏡板付轡である。鉄製で、図面上での復原長19.8cm、幅は29.4cmを測る。本体は4片に分離しているため、復原して図化した。

鏡板は、大型矩形(回字形)の立聞が楕円形の円環に鍛接される。立聞の上辺は丸みをもつ。左鏡板は全高8.25cm、同幅7.45cm、右鏡板は全高7.8cm、幅7.2cmを測り、左鏡板が0.5cmほど高い。銜は二連銜で、復原全長17.4cm、左銜の長さは8.5cm、右銜の長さ8.2cmである。喞金は左右ともに銜先環よりも小さく成形されている。引手は一条線引手で、引手壺が鈍角に連接される。右側は引手の復原長15.6cmであり、銜と連結する円環はC字形に端部を接合することで成形される。

137の帰属時期については、第5章の大谷宏治の分析から、TK209型式併行期(遠江Ⅲ期後葉)に位置づけられる。

(2) 帯飾金具 (第80図)

帯飾金具は3点出土した。138・139は方形で4鋲となる鉄地金銅張の帯飾金具である。法量はいずれも全長2.9～3.0cm、幅2.8cmである。4辺が斜めに落とされた金銅張の方形鉄板の4箇所を穿孔し、金銅張の鋲によって革帯等を留めるものである。鋲頭は円形である。140は2鋲となる鉄製帯飾金具であり、上辺が隅切された爪形を呈する。138・139と比べて鋲頭が小さい。

(3) 鈴具 (第80図)

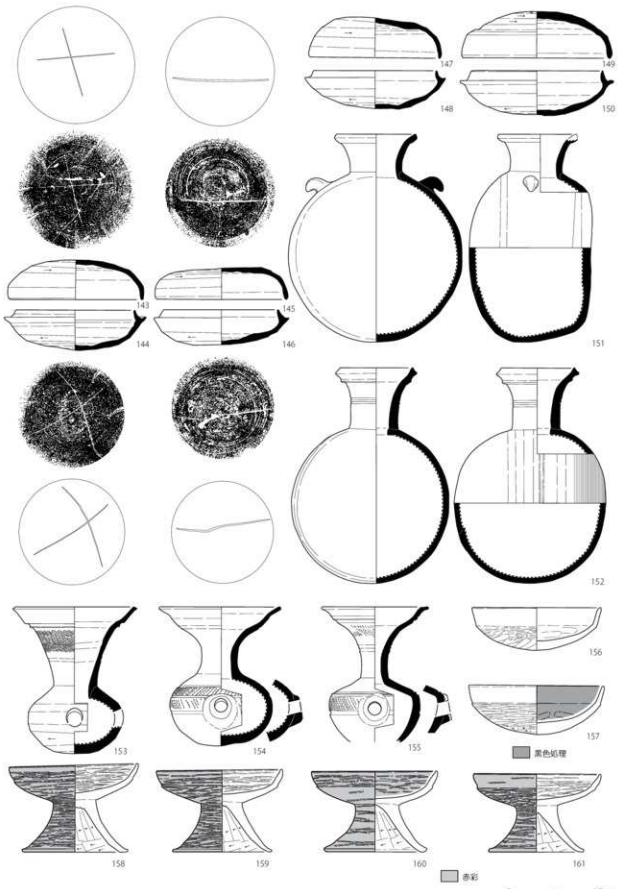
141・142は鉄製の鈴具の輪金である。141は輪金の2/3と刺金を、142は刺金を欠損する。ともに鈴具尾は円形で、側辺にくびれを有し、基部との境界部分で接合することで成形されている。

6 土器

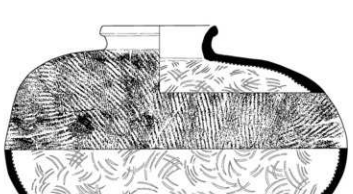
(1) 須恵器 (第81・82図)

蓋 坏 蓋・身がそれぞれ4点出土しており、出土状況は不明ながら、法量や窯記号からは143と144、145と146、147と148、149と150がセットになるとみられる。器径(最大径)で主体となるのは坏蓋が14cm前半台、坏身が14cm後半台となるが(143～148)、149・150のセットは16cm台である。坏蓋はいずれも天井部と口縁部の境界に沈線や段などはなく、屈折するもの(143・149)と丸みを帯びるもの(145・147)が存在する。口唇部は丸く収められる。坏身は口唇部の立ち上がりが短く内傾するが、端部は丸く収めるもの(144・146・148)と内傾面を形成するもの(150)がある。天井部・底部はいずれも回転ヘラケズリが施されるが、143・144が中心部まで比較的丁寧なのに対し、そのほかは中心部が粗い。窯記号は143・144が「十」、145・146が「一」である。143・144・149・150は胎土に0.5～2mm程度の白色粒子や黒色粒子を多く含む特徴的なものであるほか、145・146は外面の一部が暗赤褐色を呈し、酸化焔気味の焼成となっており、これらは駿河・甲斐地域などの在地製品の可能性がある。帰属時期は、遠江Ⅲ期中葉～後葉(TK43～209型式併行期)とみられる。

瓶 類 151は提瓶である。頸部から口縁部は外反して開き、口縁端部は下方へ折り返している。体部は成形時の底部側が平坦であり、反対側の内面には円形の粘土板による閉塞痕(擬口縁)がみられる。肩部の把手は丸みをもった鉤形である。体部外面は



第 81 図　中里 K-99 号墳　出土遺物実測図（8）



第 82 図　中里 K-99 号墳　出土遺物実測図（9）

底部側に回転ヘラケズリが施されるが、閉塞部側は摩耗や自然釉によって不鮮明である。自然釉は図示した正面の右上から背面側へと流れ落ちており、背面左下を床に接し、傾けた状態で焼成されたことが窺える。

152 は湖西窯産のフラスコ瓶である。頸部から口縁部は外反しながら開き、端部は断面三角形状に成形され、口唇部外側は丸く収めている。体部は楕円形で、成形時の底部側はやや平坦となっており、カキメが施される。反対側の内外面には円形の粘土板による閉塞痕（擬口縁）がみられるが、外面はナデ調整のみとみられる。126 の体部正面中央には、頸部接続位置の当たり線の可能性がある縦方向の 2 条の沈線がある。口縁部から体部上半にかけて、自然釉が付着する。

162 は横瓶である。俵形の体部に、短い広口状の口縁部が付く。体部は図示した左側が成形時の底部側とみられるが、判然としない。体部外面は平行文タタキ後カキメ、内面は同心円文当て具によって成形されるが、両腹部内面に当て具痕はみられない。腹部の外面は、図示した左側はカキメ、右側は平行文タタキが施される。

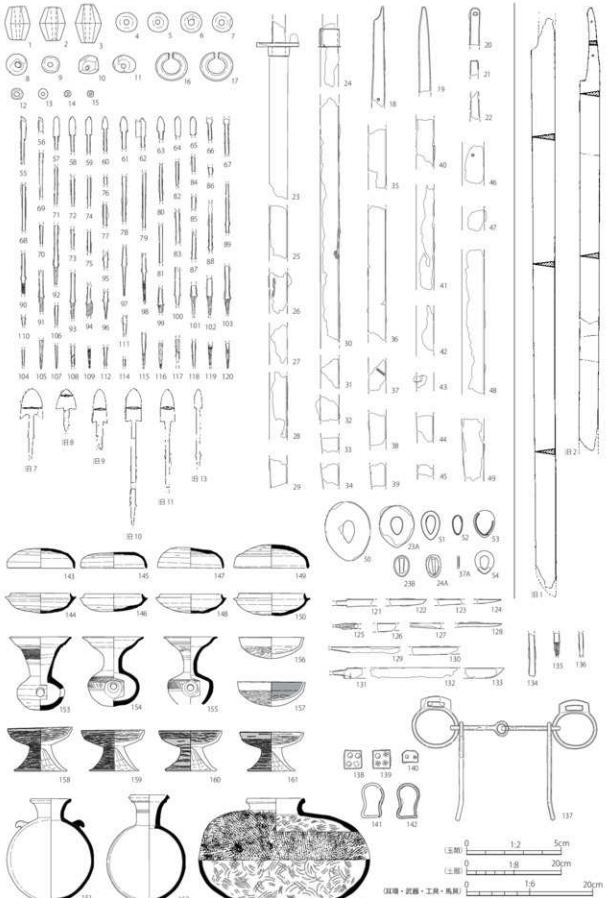
帰属時期は、提瓶・横瓶が遠江Ⅲ期中葉～後葉（TK43 ～ 209 型式併行期）、フラスコ瓶が遠江Ⅲ期末葉（飛鳥Ⅰ）とみられる。

甕　153 ～ 155 は甕である。153 は口頸部長が体部長よりもやや長く、比率は 1.2 : 1.0 である。口縁部下端に突帯が巡り、頸部には粗い波状文が施される。154・155 は口頸部長が体部長を下回り、比率は 0.9 : 1.0 である。口縁部は緩やかな二重口縁状に外反し、155 は頸部に斜位の列点文が施される。また 155 は肩部が若干張り、体部断面形は逆三角形状を呈する。154・155 は注口部が突出する形態である。帰属時期は、153 が遠江Ⅲ期中葉～後葉（TK43 ～ 209 型式併行期）、154・155 が遠江Ⅲ期末葉（飛鳥Ⅰ）とみられる。

（2）土師器　（第 81 図）

坏　156・157 は坏である。ともに須恵器坏蓋を模倣した坏で、157 は底部と口縁部の境界に突帯状の稜線をもつ。口縁部内外面はヨコナデ調整、底部はヘラケズリ後、横方向のヘラミガキによって整形される。157 は内面全体に黒色処理が施される。帰属時期は、安久Ⅳ新相～沢東Ⅰ古相（TK43 ～ 209 型式併行期）に収まると考えられる。

高坏　158 ～ 161 は高坏である。須恵器坏蓋を模倣した坏部に、ハの字形の脚部が付く。坏部の口縁部と底部の境界は稜を有し、内湾気味に立ち上がる口縁部はやや厚手のつくりである。坏部内外面ヨコミガキ、脚部は外面ヨコミガキ調整である。いずれも外面全体に赤彩が施される。帰属時期は、安久Ⅳ新相～沢東Ⅰ古相（TK10 ～ 209 型式併行期）の範囲に収まると考えられる。



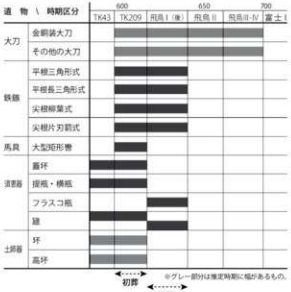
第 83 図　中里 K-99 号墳　出土遺物一覧

7 小 結

(1) 古墳出土遺物からみた埋葬時期

ここまでの所見をまとめ、中里K-99号墳から出土したそれぞれの副葬品の時期を示したものが第84図である。時期比定がし難い遺物は除外している。この図から判断するに、TK209型式併行期（遠江Ⅲ期後葉）と、飛鳥Ⅰ（遠江Ⅲ期末葉）の大きく2時期に遺物を区分することが可能である。耳環は現状2点しかないが、大刀の本数や須恵器の型式からも、追葬を想定してよい。したがって、初葬をTK209型式併行期、追葬を飛鳥Ⅰの時期とみることができる。

初葬に伴う副葬品としては、金銅装大刀（51・52）やその他いずれかの大刀、鉄鏃、馬具、土器類（143～162）が挙げられる。追葬に伴う副葬品としては、いずれかの大刀のほか、土器類（152・154・155）が挙げられる。



第84図 中里K-99号墳出土遺物の編年的位置

第6節 出土地不明の遺物

1 出土遺物の概要

本節で報告するのは、中里大久保古墳（K-95号墳）・K-97・98・99号墳の出土遺物として富士市で保管されてきた資料のうち、いずれの古墳に伴うのかが不明となっているものである。以下、装身具、武器、工具、馬具の順に報告する。

装身具	丸玉	3点
	斑点文ガラス玉	1点
武器	大刀	4点
	鉄鏃	14点
工具	刀子	2点
馬具	帯飾金具	2点
	円形金具	1点

2 装身具

(1) 玉 類 （第85図）

1～3はガラス丸玉の破片であり、色調は1・2が紺色透明、3が濃青色透明を呈する。1は巻き付け法、3は引き伸ばし法によって成形されたものとみられる。

4は斑点文ガラス玉である。1/2程欠損するが、法量は復原径1.2cm、長さ8.0cm、孔径0.3cmを測る。淡青色透明ガラスによって地となる丸玉を成形後、その表面に、別に用意した濃青色不透明のガラス丸玉を細かく砕いた破片を埋め込んだとみられる。

『旧報告』中において玉類が出土したことが明らかなのはK-95・99号墳であるが、そのうち、掲載していない玉類の破片の存在についての記述があるのはK-95号墳のみであり、「装身具としては、耳環6点・切子玉1点・丸玉19点・小玉7点を検出したが、ほかに数点分の玉類破片を得ている。」（13頁）と報告されている。K-99号墳にも紛失した玉類の記述がみられるものの、『旧報告』作成時点で既に所有者のもとから紛失していた遺物が、現在の富士市立博物館収蔵庫に戻ってきているということは考えにくい。したがって、1～4の玉類については中里大久保古墳（K-95号墳）に伴う蓋然性が高

い遺物として付言しておきたい。装飾付ガラス玉は極めて希少な副葬品であり、富士市城では国久保古墳の雁木玉（藤村・若林編2011）、船津L-207号墳の線状貼付文ガラス玉（藤村・石川編2013）に続く3例目となる。

3 武 器

(1) 大 刀 （第85図）

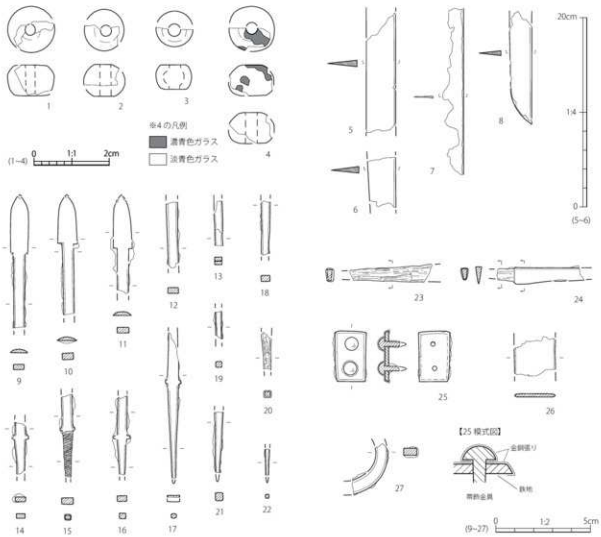
大刀はすべて破片であり、4点を図化した。すべて刀身部片で、8は切先である。5は『旧報告』図版第12「B K第99号墳 大刀身（1）」中段右から2つ目の大刀片に類似しており、同封の6とともに中里K-99号墳の大刀の可能性がある。また、8は同「B K第99号墳 大刀身（2）」中段右端の大刀片に類似しており、こちらも同封の7とともに中里K-99号墳の大刀の可能性がある。

(2) 鉄 鏃 （第85図）

鉄鏃はすべて破片で14点を図化した。

尖根柳葉式 9～11は尖根柳葉式である。いずれもふくらが張り、鏃身関がほぼ直角関となるものであるが、10はやや短小な鏃身部を有する。直角関主体であることから中里K-97・98・99のいずれかと考えられるが、平面形態の類似性からは、K-99号墳のものである可能性が高いとみられる。

頸部～茎部片 いずれも尖根系鉄鏃の頸部～茎部片とみられる。12～18は頸部片であり、断面形はいずれも長方形である。13は図示した下端が手前に折れて、錆着している。14～17は茎関が遺存するものである。すべて棘関であり、いずれも頸部と茎部の境で直角的に突出する。19～22は茎部片である。有機質は15で矢柄の木質と樹皮巻きまたは下巻きが、20で矢柄の木質が確認できる。



第85図 出土地不明遺物実測図

4 工 具

(1) 刀 子 (第85図)

23・24は鉄製刀子の破片である。23は茎部片であり、柄木の木質が遺存する。24は刀身部～茎部片であり、不均等両関の斜角関とみられる。こちらも茎部には柄木の木質が遺存する。刀身部は先細りとなる。

5 馬 具

(1) 帯飾金具・円形金具 (第85図)

25は長方形で2鋲となる鉄地金銅張の帯飾金具である。法量は全長2.7cm、幅1.65cmである。4辺が斜めに落とされた金銅張の長方形鉄板の2箇所を穿孔し、金銅張の鋲によって革帯等を留めるものである。鋲頭は円形である。26は厚さ0.2cmの板状の鉄製品であり、帯飾金具片と判断した。図示した上下が欠損する。27は円形金具(素環金具)の破片である。鉄製で、幅0.7cm程の扁平な鉄棒をC字形に加工することで成形される。

25・27は中里K-98号墳の同金具と法量や材質が共通しており、同古墳の出土品であった可能性が高いとみられる。

註

1 資料を実見された豊島直博氏には、本例が覆輪型の新しいタイプであることから、7世紀第1四半期～第2四半期の間の製品とのご教示をいただいた。

第1～4章の参考文献

井鍋誉之 2003a「富士川西岸～箱根山西麓地域」『研究紀要』第10号、(財)静岡県埋蔵文化財調査研究所

井鍋誉之 2003b「静岡県内の飾り弓について―両頭金具をもつ被葬者の性格―」『研究紀要』第10号、(財)静岡県埋蔵文化財調査研究所

井鍋誉之編 2008『原分古墳』(財)静岡県埋蔵文化財調査研究所

臼杵 勲 1985「古墳時代の鉄刀について」『日本古代文化研究』創刊号 PHALANX―古墳文化研究会―

大谷宏治 2010「出土遺物から見た秋葉林1号墳の被葬者像」『秋葉林遺跡Ⅱ』(財)静岡県埋蔵文化財調査研究所

大谷宏治 2011「遠江・駿河の頭部を呑み込む矢柄をもつ鉄鏃の意義―無茎式・短茎式鉄鏃との比較を通じて―」『研究紀要』第17号、(財)静岡県埋蔵文化財調査研究所

大谷宏治 2018「東平1号墳副葬馬具と大刀の特徴からみた被葬者像」佐藤祐樹編『伝法 東平第1号墳』富士市教育委員会

菊地芳朗 2010「装飾付大刀の系譜とその展開」『古墳時代史の展開と東北社会』大阪大学出版会

斎藤弘 1986「古墳時代の壺鐙の分類と編年」『日本古代文化研究』第3号、PHALANX―古墳文化研究会―

佐藤祐樹編 2016『伝法 中原古墳群』富士市教育委員会

佐藤祐樹編 2018『伝法 東平第1号墳』富士市教育委員会

佐藤政次ほか 1981『横沢古墳・中原1号墳 伝法遺跡群(伝法A～E地区) 天間地区』富士市教育委員会

静岡市教育員会 1962『駿河丸山古墳』静岡考古館

鈴木敏則 2004「静岡県下の須恵器編年」『有玉古窯』浜松市教育委員会

鈴木裕篤ほか 1990『清水柳北遺跡発掘調査報告書 その2』沼津市教育委員会

田村陸太郎 2016「駿河東部の横穴式石室と埋葬に関する検討」『研究紀要』第5号、静岡県埋蔵文化財センター

鵜田晴徳ほか 2006『石川古墳群』沼津市教育委員会

富樫孝志 2010『的場古墳群・的場遺跡』(財)静岡県埋蔵文化財調査研究所

中野国雄 1958「吉原市域の古墳―スルガのクニ西部地域古墳群―」後藤守一・中野国雄ほか『吉原市の古墳』吉原市教育委員会

中嶋郁夫 2021「遺骸処理からみた石棺の機能―静岡県の横穴式石室の石棺を中心に―」『向坂鋼二先生米寿記念論集 地域と考古学Ⅱ』向坂鋼二先生米寿記念論集刊行会

西澤正晴 2000「井田松江18号墳出土の金銅装主頭大刀について」滝沢誠編『静岡県指定史跡 井田松江古墳群―調査整備事業報告書―』戸田村教育委員会

西澤正晴 2002「遠江・駿河における鉄製板鐙の変遷と展開」『研究紀要』第9号、(財)静岡県埋蔵文化財調査研究所

沼津市 2002『沼津市史 資料編 考古』

土生田純之 2003「横穴式古墳構築過程の復元」土生田・右島和夫編『古墳構築の復元的研究』雄山閣

平林将信・植松章八ほか1975『中里大久保(K第95号)古墳 付載 K第97・98・99号墳の副葬品』富士市教育委員会

藤村翔・若林美希編 2011『平成13年度 富士市内遺跡・伝法国久保古墳』富士市教育委員会

藤村翔・石川武男編 2013『船津古墳群Ⅱ』富士市教育委員会

藤村翔 2018「東平1号墳出土鉄鏃の評価と意義」佐藤祐樹編『伝法 東平第1号墳』富士市教育委員会

水野正好 1970「群集墳と古墳の終焉」『古代の日本』5―近畿 角川書店

向坂鋼二 1964「古墳群の群別に関する概念規定」『考古学手帖』21

八木勝行ほか 1980『原古墳群白砂ヶ谷支群』藤枝市教育委員会

若林美希編 2008『平成17・18年度 富士市内遺跡発掘調査報告書』富士市教育委員会

渡井義彦 1988『富士市の埋蔵文化財(古墳編)』富士市教育委員会

第5章　考　察

第1節　須津古墳群における馬具副葬古墳被葬者の性格

大谷 宏治

はじめに

本書で報告される須津古墳群のうち千人塚古墳（須津J-第10号墳、以下「千人塚古墳」）、中里K-第95・98・99号墳（以下、本文中では「K-第」を取り、95、98、99号墳とする。また、富士市内の古墳も同様「アルファベット」と「-第」をとって表記する。）[註1]から馬具が出土している[註2]。ここでは、馬具出土古墳の被葬者像を明らかにするため、各馬具の時期的位置づけ、馬具の部品の可能性が高いが用途が明瞭ではない中里98号墳の円形金具の分析と馬装の復原、千人塚古墳出土馬具の位置づけ、東海地方の鉄製轡の分布状況からみる東駿河と須津古墳群の位置づけを明らかにした上で、馬具副葬古墳の被葬者像を考えたい。

1　中里古墳群の馬具について

（1）中里古墳群出土の馬具

報告の記載と重複するが、ここでは中里古墳群から出土した馬具とその時期的位置づけを確認したい。

中里95号墳（中里大久保古墳）　95号墳では、鉸具造立聞環状鏡板付轡（以下、環状鏡板付轡は「円環轡」とする）1組、轡の鉄製引手1点、木製壺鐙の吊金具である兵庫鎖2組が出土していることから、2組の馬具が副葬されていた。引手のみの轡は、金銅装辻金具、雲珠などが確認されていないことや、鐙が木製壺鐙の吊金具（兵庫鎖）のみであることを考慮すると円環轡であった可能性が高い。

中里98号墳　98号墳では、大型矩形立聞円環轡1組、鉄製円形金具8点以上（9点か、環状辻金具・雲珠か？）[註3・4]、金銅装方形帯金具（4鋲）14点、金銅装長方形帯金具（2鋲）11点（うち、責金具が伴うもの4点）が出土している。後述するとおり筆者は円形金具の位置づけにより馬具の組数が異なるが、98号墳には馬具1組のみが副葬されたと考える。

中里99号墳　99号墳では、大型矩形立聞円環轡1組、金銅装方形帯金具2点、鉄製隅切長方形帯金具1点、刺金のない鉄製鉸具2点が出土している。当古墳も1組の馬具が副葬された可能性が高い。

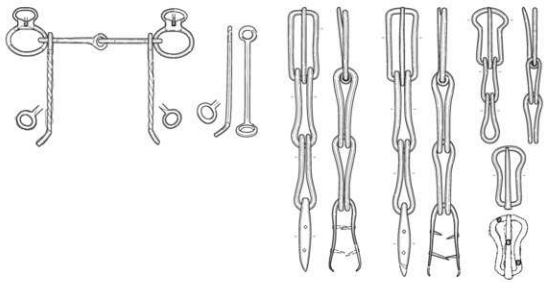
なお、今回報告する3基の古墳から、轡は計4点出土しているが、金銅装半球状鉢をもつ辻金具・雲珠が副葬された様子はなく、また鞍に伴う鞍、磯・海金具、杏葉は出土していないことを勘案すると、いずれも簡素な馬装であった可能性が高い。

（2）時期的位置づけ

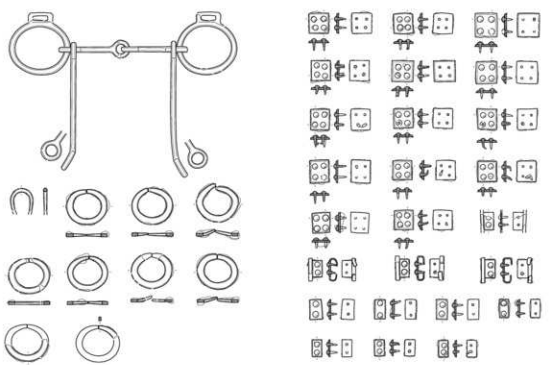
轡　鉄製円環轡の時期は、岡安光彦氏による編年（岡安 1984）では、環が大きなものから小さなものに変化すること、TK217型式併行期（遠江Ⅲ期末葉～Ⅳ期前半）[註5]は、鉸具造立聞円環轡は7.1×6.4cmのものが位置づけられ、この分析を参考にした大型矩形立聞円環轡は、縦7.1×7.0cmが当該期の基準とされる（岡安 1985）。この基準に従えば、これより大きい98・99号墳例はTK209型式期（遠江編年Ⅲ期後葉）以前に、95号墳例はTK217型式期（飛鳥Ⅱ期、遠江編年Ⅳ期前半）に位置づけることができる。

鐙　95号墳の木製鐙の吊金具である兵庫鎖は、おそらく兵庫鎖3連できのこ形の鉸具を有するものと、兵庫鎖が2連で長方形に近い鉸具をもつものの2組があり、前者は斎藤分類三D式、TK43～TK209型式（遠江Ⅲ期中葉～Ⅲ期後葉）併行期に、後者は三E式、TK209型式併行期に位置づけられる（斎藤 1986）が、富士市船津62号墳（富士市教委 2013）では飛鳥Ⅱ期にも用いられており、TK209型式～飛鳥Ⅱ期（TK217型式併行期）に位置づけておくのが妥当である。

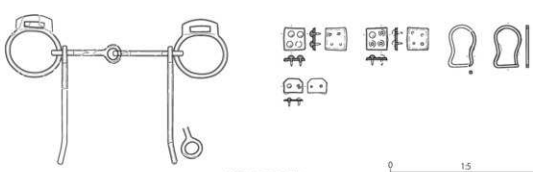
帯金具　帯金具は、岡安光彦氏の研究では、98・99号墳の正方形4鋲の帯金具は板状で金銅装であ



中里K－95号墳



中里K－98号墳



中里K－99号墳

第86図　中里古墳群出土馬具

ることから、TK209 型式併行期に位置づけることができる（岡安 1987）。

円形金具　98 号墳出土の円形金具の位置づけは後述するが、筆者は帯金具と組合されて辻金具・雲珠を構成すると考えるため、帯金具と同様 TK209 型式期に位置づけるのが妥当である。

したがって、98・99 号墳の馬具は、轡と帯金具から TK209 型式期に位置づけられる。95 号墳は、圭頭大刀が TK209 型式期に位置づけられることから、三 D 式鏡と型式不明の轡（引手のみ出土）の馬具セットは TK209 型式期の可能性がある。一方、鈕長造立聞円環轡、三 E 式鏡は飛鳥 II 期である。95 号墳は、TK209 型式期と飛鳥 II 期に位置づけることが妥当である。

各古墳の馬具の時期は、馬具以外の副葬品の時期的様相とも合致しており、整合的である。

(3) 中里 98 号墳出土馬具からみた馬装の復元

ア　鉄製円形金具について

上述したとおり、98 号墳から鉄製円環轡、金銅装帯金具、鉄製円形金具が出土している。このなかで 8 点以上の円形金具が確認されたことが特筆できる。馬具の部品と断定できないもの[註6]、ここで分析するとおり馬具の可能性が高いと考える。

当古墳では半球状鉢や板状の辻金具・雲珠は副葬されていないが、帯金具が 2 種 29 点と多いことから、円形金具に帯金具を組合せて環状辻金具・雲珠として用いたと想定できる。一方、同様の金具が出土した群馬県八幡観音塚古墳例における宮代栄一氏の検討では轡を伴わない「無口頭絡」[註7]に用いられた可能性が想定されている（宮代 2016）。

したがって、98 号墳の馬装を復原するにあたり、円形金具の機能を明らかにする必要があるため、円形金具の出土例を確認し、その位置づけを探る。

中里 98 号墳の鉄製円形金具　円形金具は、断面板状の鉄板（棒）を折り曲げて円形に成形したものであり、最低 8 点、最大 9 点出土している[註8]。改めて特徴を確認すると、図面上部に鉄板を円形に折り曲げた時の痕跡である鉄板の両端の合わせ目が確認できる。あたかも耳環のようにも見えるが、耳環と比較すると大きさは倍以上であり、先端はしっかりと合わせられ隙間はないことから耳環である可能性はない。

円形金具の特徴　出土状況が明確であれば用途が特定できるが、追葬や盗掘などにより当初の位置を離れてしまうと、円形という単純な形態だけに用途を明らかにするのは難しい。98 号墳例も出土位置は不明確である。上述したように円形金具は当古墳以外にも、群馬県八幡観音塚古墳など複数の古墳から出土している。

では、果たしてこの金具は何なのか？この課題に対し私案を示すため、まず集成を示す（**第 3 表、第 87 図**）。集成に際し、円形であること、断面が板状（長方形）であること、古墳時代後期後半に位置づけられるものを条件とした。これまでに集成図が公表されている埼玉県、群馬県、静岡県、愛知県、岐阜県、三重県、福岡県、佐賀県、熊本県、大分県、宮崎県などの事例を確認してまとめた。まだ多くの事例が遺漏している可能性が高い。

材質をみると、栃木県下石橋愛宕山古墳例（**第 87 図 8**）[註9][註10]と大阪府奥山 1 号墳例が金銅装である以外はいずれも鉄製である。直径は 4 ～ 5.5cm 前後（小型）、6 ～ 7cm 前後（大型）の 2 つの大きさに区分することができよう。

小型の島根県岡田山 1 号墳例（**第 87 図 5**）[註10]、金銅装で複数種類が出土している下石橋愛宕塚古墳では、金具に 3 条の帯が取り付けられていた痕跡が確認されており、帯の交点に取り付けられたものであることが明白である。また、1 段階古い段階の奈良県市尾墓山古墳例（高取町教委 1984）では 5 点の円形金具が出土し、1 点には別造りの帯金具と帯が錆着しており、4 条の帯が取り付けられていること、この他の 1 点にも 3 状の帯の痕跡が残ることから組合式環状雲珠である。同じく 1 段階古い三重県ツヅミ 2 号墳例（**第 87 図 3**）は円形金具に 4 つの兵庫鎖が取り付けられている。このような事例から判断して、円形金具は帯の交点に用いられたものであり、馬具で 3・4 条の交点に用いられたとすると、環状の辻金具あるいは雲珠の可能性が高い。

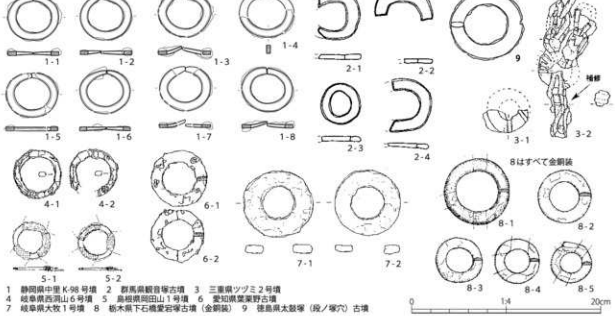
円形金具は環状辻金具・雲珠か？　環状辻金具・雲珠について、辻金具・雲珠を総合的に分析した宮代栄一氏は、別造りの脚部を組合せる（組合式）環

状辻金具・雲珠は中期後半から採用され、後期前半には半球状鉢の辻金具・雲珠の盛行により採用数が減少し、後期後半まで用いられる可能性は低いことを指摘する（宮代 1996a ほか）。また、宮代氏は円形金具と方形帯金具が出土した福岡県飯氏二塚古墳例、京都府物集女車塚古墳例[注11]を環状辻金具・雲珠に復元している（宮代 1995・1996a、第 88 図）。この復元例からみれば、中里 98 号墳例は飯氏二塚古墳の組合式環状辻金具の円形金具と同様の大きさであり、かつ共伴する方形帯金具は 4 鋲で同一であることから判断し、帯金具と組合せて用いられた環状辻金具と判断できる。この想定が正しければ、98 号墳同様方形帯金具、長方形帯金具が多数出土している岐阜県西洞山 6 号墳（第 87 図 4、第 88 図）は、円形金具の法量が 98 号墳と同一であり、且つ方形帯金具の鋲数が異なるだけであることから判断して、この古墳例も組合式環状辻金具である可能性が高い。

第 3 表　円形金具の類例

古墳名	所在地	墳形	規模	数量	帯金具	法量	轡	杏葉	雲珠・辻金具	文献
下石橋愛宕塚古墳	栃木県下野市	円	85	5	有	4.1 ～ 6.9	花形、大型矩形	花形	金辻・雲珠	栃木県教委 1974
古城稲荷山古墳	群馬県伊勢崎市	後円	55.2	6	有	詳細不明	楕円形？・花形轡	花形	金辻	群馬県古墳研 1996
八幡観音塚古墳	群馬県高崎市	後円	98	4	有	4.0 ～ 5.2	花形、鐏轡、大型矩形他	心葉形他	多数	宮代 2016
中里 K-98 号墳	静岡県富士市	不明	-	8+	有	5.2 ～ 5.6	大型矩形	-	-	本書
小幡茶臼山古墳	愛知県一宮市	後円	63	2	有	4.0, 不	十字文楕円形？	-	金辻	東海古墳文化研 2006
葉栗野古墳	愛知県一宮市	円？	-	2	有	5.6	不明	-	金辻	東海古墳文化研 2006
大牧 1 号墳	岐阜県各務原市	後円	30+	2	-	7.2	瓢形	三楕円	鉄雲・辻、金辻	東海古墳文化研 2006
西洞山 6 号墳	岐阜県各務原市	円	12	2	有	5.2 ～ 5.6	兵庫鎖素環・大型矩形	-	金無鐏雲珠	各務原市教委 1991
物集女車塚古墳	京都府向日市	後円	45	3	有	2.4 ～ 4.8	f 字形・大型矩形	剣菱・馬蹄他	金辻・雲珠	向日市 1988
奥山 1 号墳	大阪府寝屋川市	円	15	2	有	5.3 ～ 5.9	大型矩形	-	-	大阪府文化財セ 2007
岡田山 1 号墳	島根県松江市	後方	24	2	無	3.9	透十字文心葉形	-	金辻・雲珠	島根県教委 1987
太鼓塚古墳壺	徳島県美馬市	円	34	1	無	6.6 ～ 7.1	不明	-	-	天羽 1976
臼塚古墳	熊本県山鹿市	円	22	2	有	3.4,7.3	環状鏡板付轡	-	金雲など	宮代 1996c
★ツヅミ 2 号墳	三重県津市	円	9	2	不明	4.4,5.2	吊金具素環・変形内湾	-	-	安濃町教委 1999
★市尾墓山古墳	奈良県高取町	後円	65	5	有	4.8 ～ 6.8	不明	剣菱・花弁形	金辻	高取町教委 1984
★飯氏二塚古墳	福岡県福岡市	後円	49.6	2	有	5.0,6.4	-	-	-	宮代 1995

壺太鼓塚古墳＝段ノ塚穴古墳（天羽 1976）　★＝参考例　古墳時代後期前半
墳形　円＝円墳　後円＝前方後円墳　後方＝前方後方墳　不＝墳形不明
轡　f 字形＝f 字形環状鏡板付轡　花形＝花形鏡板付轡　楕円形＝楕円形鏡板付轡　大型矩形＝大型矩形立聞環状鏡板付轡　瓢形＝瓢形環状鏡板付轡
兵庫鎖素環＝兵庫鎖立聞素環環状鏡板付轡　吊金具素環＝吊金具付環状鏡板付轡　変形内湾＝変形内湾楕円形鏡板付轡
吊金具素環＝吊金具付素環環状鏡板付轡
杏葉　剣菱＝剣菱形杏葉　花形＝花形杏葉　心葉形＝心葉形杏葉　三楕円＝三葉文楕円形鏡板付轡
雲珠・辻金具　金＝金銅装　鉄＝鉄製　辻＝半球状鉢辻金具　雲＝半球状鉢雲珠



1　静岡県中里 K-98 号墳　2　群馬県観音塚古墳　3　三重県ツヅミ 2 号墳
4　岐阜県西洞山 6 号墳　5　島根県岡田山 1 号墳　6　愛知県葉栗野古墳
7　岐阜県大牧 1 号墳　8　栃木県下石橋愛宕塚古墳（金銅装）　9　徳島県太鼓塚（段ノ塚穴）古墳

第 87 図　円形金具の類例

ここで集成した後期後半に位置づけられる円形金具が出土した古墳について分析すると、中里98号墳、西洞山6号墳のように帯金具が多く出土した古墳は確認できないが、方形・長方形帯金具が10数点確認される場合は組合式環状辻金具・雲珠を構成すると考えてよい。また別造りの脚部（帯金具）を伴わないものも、岡田山1号墳例や下石橋愛宕塚古墳例から環状辻金具、雲珠と想定したい。

円形金具と轡形式の相関関係　中里98号墳例は大型矩形立聞円環轡と同一の組合せであり、西洞山6号墳では兵庫鎖立聞素環円環轡、大型矩形立聞円環轡が出土しているが、98号墳例と類似性が高いことから大型矩形立聞円環轡と同一馬装に用いられた可能性を想定する。さらに組合式環状辻金具ではないが、物集女車塚古墳は大型矩形立聞円環轡と組合式環状雲珠が同一馬装であった可能性が高い。TK43型式期以降の組合式環状辻金具・雲珠は大型矩形立聞円環轡と親縁性が高い。この組合は普遍的か。

第3表には円形金具が出土した古墳から出土している轡を示した。下石橋愛宕塚古墳例、奥山1号墳例は大型矩形立聞円環轡が出土しているものの金銅装であることから組合される可能性は低い。また、下石橋愛宕塚古墳例は花形鏡板付轡と組合される可能性が高い。この他では八幡観音塚古墳例が大型矩形立聞円環轡と組み合わされる可能性があるものの現状では不明である。

したがって、確実に組合せられたとは断定できないものの、大型矩形立聞円環轡と親縁性が高いことを述べておきたい。

イ　馬形埴輪に表現された円形金具

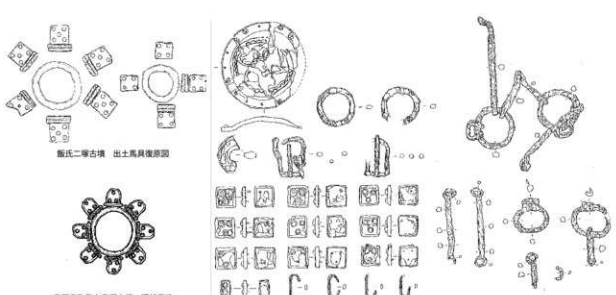
馬形埴輪に円形金具を表現したと想定できるものがあることから、馬形埴輪に表現された円形金具について確認しておきたい。

円形金具を用いた可能性のある馬形埴輪の面繋

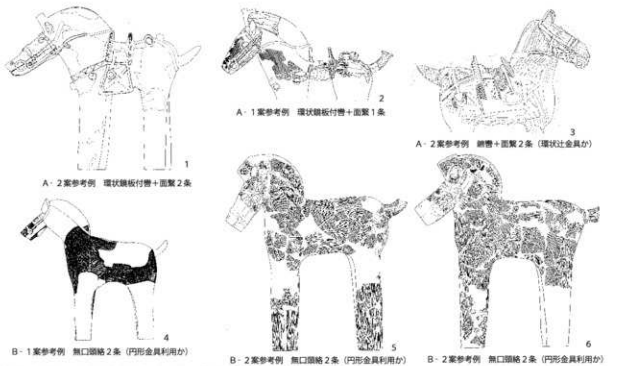
円形金具を表現したと想定できるものは畑沢埴輪窯出土馬形埴輪（第89図3）があり、轡は鏡轡であるが、円形金具は轡に繋がる帯ではなく、別の帯の交点に用いられる。この轡の面繋と繋索用の面繋を合わせて用いられた可能性があるものの、同一の面繋に用いられたといえる。

また、確実に円形金具を表現したとは断定できないものの、帯金具が十字に表現され、中央部を半球状に膨らませる表現がない馬形埴輪は、群馬県神保下條2号墳例（第89図1）、埼玉県中条2号墳例（同2）などがあることから、これらは帯金具の中央に円形金具が用いられ、組合式環状辻金具を表現したと想定したい。

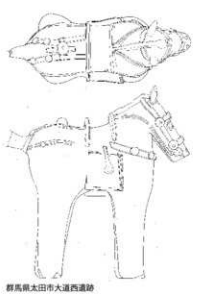
円形金具は「無口頭絡」の金具か？　円形金具を用いて面繋を表現しているが轡が伴わないものは、



第88図　環状辻金具・雲珠と中里98号墳出土例と類似する馬具の組合せ（西洞山6号墳）



第89図　円形金具が用いられた可能性が高い馬装が表現される馬形埴輪



第90図　中里98号墳の馬装を復原するための参考事例

無口頭絡を表現したと想定できる。こうした馬形埴輪は、いずれも鞍を伴わない、いわゆる「裸馬」で、大阪府伝仁徳天皇陵古墳出土例（堺市博1972）、奈良県荒蒔古墳出土例、栃木県甲塚古墳の2例（第89図5・6、下野市教委2014）などがある[註12]。

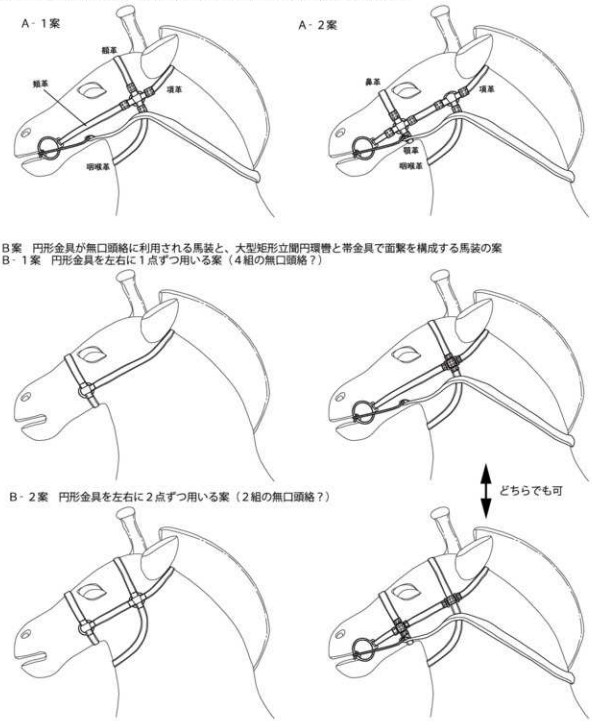
片側に2点ずつ用いる伝仁徳天皇陵古墳出土例、甲塚古墳出土2例と、片側に1点のみ用いる荒蒔古墳例があり、古墳時代の無口頭絡に両者が存在した可能性が高い。

なお、宮代栄一氏は、畑沢埴輪窯出土の馬形埴輪例（第89図3）の面繋の表現を参考に、徳島県太鼓塚古墳例や、群馬県高崎市八幡観音塚古墳例（第87図2-1～4）[註13]を轡を伴わない「無口頭絡」である可能性を指摘しており（宮代2016）、太鼓塚古墳例を、円形金具4点を用いた単条系辻金具4点装着として面繋を復原している（宮代1996b、第91図B-2案に近い状況に復元）。

上述した通り埴輪表現では、畑沢埴輪窯例のように轡の面繋とは異なる無口頭絡を組合せて用いた可能性も想定する必要があるが、現状で畑沢例のような埴輪表現は他には事例がないことから、ここでは組合式環状辻金具の可能性と、無口頭絡の辻金具であることを確認しておきたい。

ウ　中里98号墳馬装の復原

このとおり、中里98号墳の円形金具は帯金具と組合される環状辻金具・雲珠あるいは、無口頭絡の辻金具の可能性があることから、それぞれで想定さ



第91図　中里98号墳出土馬具から復原する馬装

れる馬装復元案を提示する（第91図）。

（ア）馬装復原A案　A案は円形金具と別造りの帯金具（脚部）で構成される組合式環状辻金具と大型矩形立聞円環轡で面繋を構成するもので、円形金具を2点（片側に1点ずつ）面繋に使用し、残りの6点の円形金具を尻繋に用いる馬装（A-1案）、円形金具を4点（片側に2点ずつ）面繋に使用で、残りの4点は尻繋に用いるパターン（A-2案）である。いずれも馬具は1組のみであると想定する。

A案が馬形埴輪に表現された事例として、A-1案では中条2号墳例（第89図2）、A-2案では神保下條1・2号墳（第89図1）、太田市世良田諏訪下23号墳

(太田市教委 2009)、埼玉県行田市酒巻 14 号墳(熊谷市教委 2004)などを挙げることができる。

A-2 案の場合は、正方形の帯金具を轡側は片側 4 個、耳側を 3 個利用すると想定した場合、正方形金具の必要数が出土していることになる。残りは、円環金具 4 点と長方形帯金具を尻繋で利用した可能性が高い。筆者は、A 案の場合は A-2 案の可能性が高いと想定する。

なお、円形金具が環状雲珠として用いられたと想定する A 案の事例として、群馬県太田市大道西遺跡(群馬県埋文 2011)出土の馬形埴輪が参考となる(**第 90 図**)。円環轡で面繋は 2 条であるが辻金具は円形に表現されるものの環状かは不明であるが、尻繋は鋲表現のある帯金具 2、円形 4、半球状鉢四脚雲珠の 7 点が表現されており、中里 98 号墳例はこのような馬装であった可能性がある。

(イ) 馬装復原 B 案 円形金具を無口頭絡の辻金具として用いるもので、円形金具を 2 点(片側に 1 点ずつ)用いるもの(B-1 案)で最大無口頭絡が 4 組副葬される。あるいは 4 点(片側に 2 点ずつ)用いるもの(B-2 案)で、2 組の無口頭絡が副葬される。さらに大型矩形立聞円環轡と帯金具の馬具セットが副葬され、3 ～ 5 組の馬具が副葬された可能性がある。

馬形埴輪の事例では、B-1 案については、奈良県天理市荒蒔古墳例(天理市教委 2011)、大阪府高槻市今城塚古墳例がある。B-2 案については、伝仁徳天皇両古墳出土例、甲塚古墳馬形埴輪、埼玉県深谷市割山埴輪窯例(**第 89 図 4**、宮崎 1987)などに確認できる。

なお、B 案に伴う、大型矩形立聞円環轡と帯金具の馬具セットの復元は、宮代氏の分類(宮代 1996b)による単条系(**第 91 図**右側中段)、複条系(同右側下段)のもののどちらでも成り立つ。

筆者の意見 中里 98 号墳の馬装復元について A 案、B 案ともに想定可能である。ただし、B 案の無口頭絡が副葬されたかどうかは、余程有機質の面繋の残存状況が良好な状態で出土しないことには証明しようがない。無口頭絡が副葬されていたかを判断するのに円形金具のみとなり、このような簡素な馬具が副葬されたかは研究者の考え方次第のところがあり、実際に副葬されたかの判断は非常に難しい。また、中里 98 号墳に限れば、騎乗用馬具 1 組、無口頭絡 2 組あるいは 4 組となると、はたして無口頭絡を騎乗用馬具よりも多く副葬するものだろうか?

筆者は後期前半に用いられた組合式環状辻金具・雲珠と法量、形態が同一であること、馬形埴輪にも円形金具を用いた可能性がある辻金具と円環轡を表現したものがあること、簡素な繋索用の頭絡金具のみが副葬された可能性は低いと考えることから、A 案、その中でも円形金具を片側各 2 点、両側計 4 点、それぞれに別造りの帯金具が組合される環状辻金具と判断し、A - 2 案の可能性が高いと想定している。

(4) 復原案から想定される馬装の意味

ここでは、A・B 案が成立した場合、どのような意味があるかを考えたい。

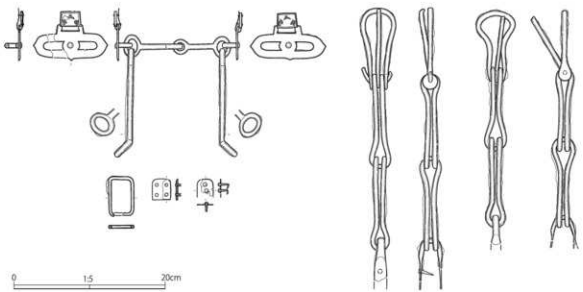
まずは A・B 案ともに規格性が高い大型矩形立聞円環轡を用いていることであり、畿内王権との関わり(大谷 2006)が想定できることは共通する。

A 案の想定される意味 A 案の場合、轡は新しい形式である大型矩形立聞円環轡を用いるものの、古墳時代中期後半から末葉に主に採用され、一部後期前半～後期後半まで用いられた、古い馬装を継承する組合式環状辻金具を利用していることとなり、伝統性を重視した馬装と把握することができようか。

また、A 案の場合は、組合式環状雲珠を用いた尻繋が用いられていた可能性が高いことから、面繋馬装よりもやや階層性が高い馬装であった可能性が高い。

B 案の想定される意味 B 案の場合、鉄製轡 + 帯金具の 1 組とともに、無口頭絡 2 組以上副葬したこととなる。無口頭絡の副葬が特徴的であり、厩舎や放牧時の馬の状況を表現しているとすれば、馬匹生産を象徴的に示している可能性がある。

筆者は上述したとおり、A 案の可能性が高いと考えており、伝統的な組合式環状辻金具と大型矩形立聞円環轡で構成される面繋の馬装と考え、古い時代の馬装を用いることで、伝統の継承やそれに基づく支配の正当性などを表現していた可能性があると考える。



第 92 図　千人塚古墳出土馬具

2　千人塚古墳の馬具について

(1) 千人塚古墳の馬具

千人塚古墳からは、金銅装吊金具付鉄製横長心葉形鏡板付轡（「方形鏡板付轡」と呼称される場合もある。以下、「横長心葉形轡」とする）1 組、鉄製鉸具造立聞円環轡 1 組、木製壺鐙の吊金具である鉄製兵庫鎖 2 組、金銅製帯金具 1 点、鉄製帯金具 1 点、腹帯金具と想定する長方形の鉄製金具 1 点が出土している（第 92 図）[註 14]。

全国的にみても類例が少ない横長心葉形轡が富士市内で千人塚古墳、東平 1 号墳（富士市教委 2018）と 2 例出土していることが特筆できる。

横長心葉形轡については、後述するとおり筆者の編年 I 段階（大谷 2018）、飛鳥 II 期（遠江IV期前葉）に位置づけることができる。兵庫鎖は鉸具の形状や兵庫鎖の長さが異なることから別個体である可能性が高いが、いずれも齊藤三 E 類（齊藤 1986）に分類できることから、TK209 型式期～飛鳥 II 期に位置づけることができる。帯金具についても飛鳥 II 期に位置づけることが可能である。鉸具造立聞円環轡は図化されていないため細部の特徴が不明確であることから時期を特定することは難しいが、鉸具の頭部と頭部の境界が不明瞭であることから、飛鳥 II 期に位置づけてよいと考える。

したがって、鐙金具を含め千人塚古墳出土馬具はいずれも飛鳥 II 期に位置づけられる可能性が高い。

(2) 千人塚古墳出土横長心葉形鏡板付轡について

筆者は東平 1 号墳の報告書作成に当たり、横長心葉形轡の分析を行った（大谷 2018）ため、それに基づき当古墳出土例の位置づけを確認したい。

特徴　轡の連結方法は、銜先環に遊環、引手を連結し、鏡板は遊環とリベット留めされる。この特徴は、松尾光晶氏（松尾 1999）による C 技法（筆者による「遊環リベット留・銜介在型連結」）であり、横長心葉形轡に共通する連結方法である（大谷 2018）。

鏡板は鉄製で、下と側面両側に突起がある。立聞は大型矩形立聞であり、この特徴も他の轡と共通する。

鏡板は吊金具により面繋と連結される。吊金具は帯金具は金銅板を箱形に折り曲げたものと金銅製吊脚とを金銅鋲 3 鋲で革帯に固定されるものである。吊金具には光芒文が 3 個刻まれている。この形状の吊金具は多くなく数例を数えるに過ぎない。埼玉県東松山市古凍 14 号墳、東平 1 号墳、愛知県豊橋市上向嶋 2 号墳出土の大型矩形立聞円環轡のものと共通する。また、この吊金具は、金銅装馬具では、滋賀県大津市中山古墳でも確認されており、この 3 者が近しい工房で生産された可能性が想定でき、当該轡は大型矩形立聞円環轡の生産と近い位置にある可能性が高いことがわかる（大谷 2018）。

銜は二連銜で、引手は一条線引手・く字形引手壺で、銜先環に連結される。

第4表　横長心葉形鏡板付轡一覧

遺跡名	所在地	墳形	規模	埋葬	分類	材質	連結	轡	花弁	文献
成田3号墳	茨城県行方市	円	18	横石	I	鉄	遊環リベット留・嵌合在	-	●	1
宮中野 99-1 号墳	茨城県鹿嶋市	-	-	土坑	II	鉄	遊環リベット留・嵌合在	鏡轡	●	2
六張王原古墳	千葉県市原市	後円	46	不明	II	金銅	遊環リベット留・嵌合在	-	-	3
塚原出土	群馬県みなかみ町	-	-	-	-	金銅	（未確認）	-	-	4
御門1号墳	群馬県昭和村	円	11	横石	II	鉄	遊環リベット留・嵌合在	双環式円板轡	●	5
若田B号墳	群馬県高崎市	円	14	横石	I	鉄	-	-	●	6
御崎古墳	山梨県笛吹市	古墳	-	横石	II	金銅	遊環リベット留・嵌合在	-	●	7
東一本柳古墳	長野県佐久市	円	10+	横石	I	鉄	遊環リベット留・嵌合在		●	8
御蔵上3号墳	静岡県長泉町	-	-	横石	II	金銅	遊環有？・嵌合在？	-	●	9
東平1号墳	静岡県富士市	円	13	横石	I	鉄	遊環リベット留・嵌合在	大型矩形円環轡※1	●	10
千人塚古墳	静岡県富士市	円	21	横石	I	鉄	遊環リベット留・嵌合在	鉸具造円環轡	-	本書
白砂ヶ谷D2号墳	静岡県藤枝市	円	10	横石	-	鉄	遊環リベット留・嵌合在	-	-	11

略記　墳形　円＝円墳　後円＝前方後円墳　埋葬＝埋葬施設　横石＝横穴式石室　花弁＝輪付花弁形杏葉の有無
※1　東平1号墳出土の轡は帯状吊金具付大型矩形立聞円環轡。

第5章　考察

編年的位置づけ　筆者は、佐藤信孝氏（佐藤2005）、白井久美子氏（白井2002）などの先行研究を参照し、前稿（大谷2018）で、横長心葉形轡を、鏡板の心葉形の隅角が丸みを帯びるもの（I類）、心葉形の形状から逸脱するもの（長方形に近いもの、半月形のもの、II類）に区分し、I類をI段階に、II類をII段階に位置づけた。千人塚古墳は鏡板の心葉形の隅角が東平1号墳同様丸みを帯びることからI類、I段階（飛鳥II期、遠江IV期前半）に位置づけることができる。

分布の特徴　既往研究（佐藤2005）や前稿（大谷2018）でも論じたが、横長心葉形轡の分布は、同一馬装に用いられた可能性が高い棘付花弁形杏葉が、西日本の広島県西本6号遺跡から出土していることから、西日本で出土する可能性を否定できないが、遠江（静岡県西部）、美濃以西の西日本では確認されていない。

分布は、青森県鹿島沢古墳から東海道側では静岡県白砂ヶ谷D2号墳、東山道側では長野県一本柳古墳まで散在しているが、茨木県（常陸）2例、群馬県（上野）3例、静岡県（駿河）4例（特に東駿河に3例）とやや集中する。

このように東日本に偏在するが、千人塚古墳では毛彫文様のある金銅製吊金具が伴うこと、共伴率が高い棘付花弁形杏葉は金銅製であり、仏教美術文様と関連性が高く（古川2015）、さらに横長心葉形轡II段階以降御蔵上3号墳、御崎古墳などが金銅製であることから、畿内王権により生産され、東日本の有力者層に配布された可能性が高い。千人塚古墳の被葬者は、古墳時代終末期に畿内王権と関係性を持っていたことが想定できる。

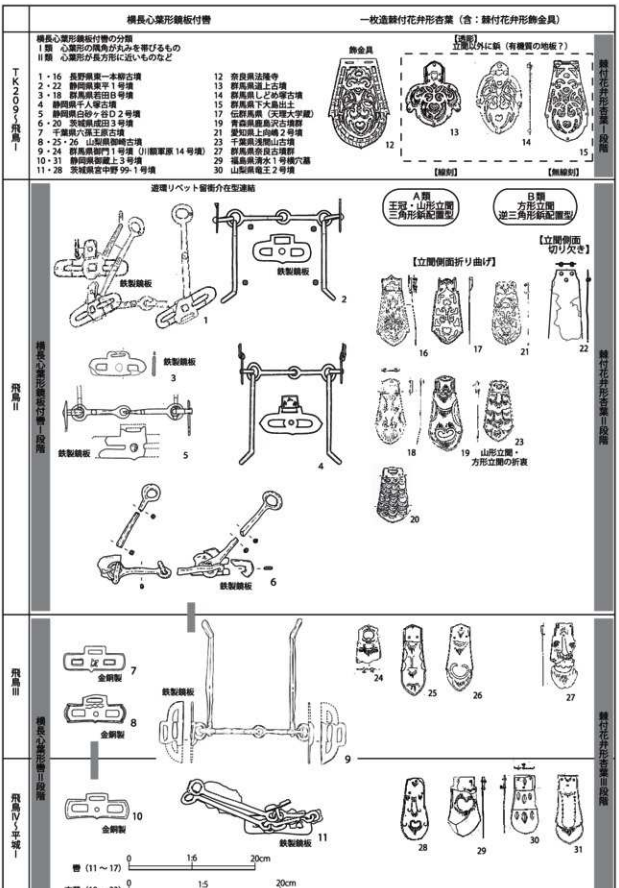
(3) 千人塚古墳の馬装復元と階層性

馬装復元　千人塚古墳では、横長心葉形轡と鉸具造立聞円環轡の2点が出土していることから、少なくとも2組が副葬されたことがわかる。

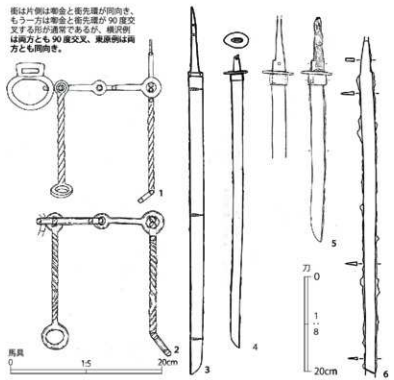
横長心葉形轡は、棘付花弁形杏葉が共伴することが多く、横長心葉形轡出土古墳14基に対し8古墳(3分の2)で共伴しており、同一馬装を構成する可能性が高い。千人塚古墳の石室内は完全に調査されたわけではないことから、今後棘付花弁形杏葉が出土し、横長心葉形轡と棘付花弁形杏葉が組合された馬装となる可能性を排除できない。

馬具からみた階層性　現状では、千人塚古墳では横長心葉形轡、鉸具造立聞円環轡とも鏡のどちらかと組合されて用いられた馬装であることのみしかわからないが、終末期に2組の馬具を副葬する古墳は、東駿河では、長泉町原分古墳と、富士市東平1号墳、中里95号墳しかない。これらの古墳は、馬具のほか装飾付大刀を副葬するなど階層的に上位の古墳であり、千人塚古墳も東駿河地域では同じような位置づけができる可能性が高い。

また、千人塚古墳は直径21mの円墳であるが、古墳時代後期後半以降で、20mを超える古墳は、富士市船津寺の上1号墳（202号墳）、長泉町下土狩西1号墳など数基しかなく、幅を広げて15m以上としても、長泉町原分古墳、富士市実円寺西1号墳など10基程度である。このことから考えて、副葬品全体の様相が未確定であるものの、墳丘規模、石室規模、馬具の複数埋葬など同時期の古墳の中では、頭一つ抜けており、須津古墳群を代表する有力者であった可能性が高いと考えられる。



第 93 図　横長心葉形鏡板付轡と辻金花弁形杏葉の変遷



1　富士市横沢古墳　2　沼津市東原1号墳　3　富士市須津J-6号墳
4　富士市船津L-210号墳　5　富士市船津L-62号墳　6　沼津市石川28号墳

第94図　東駿河における修理された可能性のある馬具と地域的特色のある刀

(4) 修理された馬具

千人塚古墳出土鐙は、兵庫鎖に鉸具を留めるための軸が鉸具の枠金具から飛び出しており、修理が行われたことが明らかである。また、中里95号墳の鉸具造立聞円環轡の鉸具部分には鉄板をU字形に折り曲げて嵌め込んだような痕跡があること、また98号墳の轡は引手が左右で長さが異なることが報告されており、修理の可能性がある[12,15]。ここではこれらの修理の位置づけを確認するため、東駿河地域で修理がされた可能性がある馬具をみた上で、修理を支える鍛冶技術について確認しておきたい。

東駿河地域における馬具の修理　上述した3古墳の事例のほかに、銜先環の向きが通常と90度異なる（通常は左右で同じ向きとなる）、富士市横沢古墳の大型矩形立聞円環轡、沼津市東原1号墳の円環轡[21,16]が確認できる。横沢古墳例、東原1号墳例ともに銜が左右で若干長さが異なることから、修理により短くなったか、あるいは別の轡の銜部品と交換した可能性がある。これ以外では、他地域で確認される銜や引手が片側のみ蕨手状である、引手壺の形状が異なるなどの特徴が確認されるものはなく、ここに示した4例のみであり修理の事例は多くはないものの、修理が行われたことが間違いないものが複数存在する。

東駿河における鉄器生産　では、東駿河の鍛冶技術はどうか。東駿河では、富士市中原4号墳で鉄鉗、三島市中島下舞台遺跡で鞴羽口が出土している（藤村2017）。また、沼津市的場3号墳及び富士市国久保古墳で、鉄器製作工人がその職業を象徴的に示すために利用したとされる鉄鐸が出土している（藤村2017）。いずれも後期後半以降に位置づけられることから、後期後半には東駿河に鍛冶工人が存在したことは明らかである（鈴木一2016、藤村2017）。

また、筆者は、須津古墳群（6号墳）、船津古墳群（62,210号墳）などで出土する茎が先細る鉄刀（第94図）がこの地域の特徴的なものであることから、東駿河で大刀・短刀の生産が行われたことを想定している（大谷2010）。さらに、尾上元規氏の30本以上の鉄鏃を副葬する古墳の被葬者は鉄器生産に関わっていたとする研究成果（尾上1993）を参考にして、筆者（大谷2004）、菊池吉修氏（菊池2016）、藤村　翔氏（藤村2018）らは、東駿河には鉄鏃を

30本以上副葬する古墳が多いこと、特徴的な鉄鏃の形態が東駿河にあることから、鉄鏃についても生産が行われていた可能性を想定する。

あくまで直接鍛冶生産の痕跡を示す資料は鉄鉗と轡の羽口しかないが、東駿河では修理された馬具、茎が先細る大刀・短刀、特徴的な鏃など製品の鍛冶生産が行われていた可能性が高いことがわかる。

つまり、後期後半から末に東駿河で鍛冶関連遺物や生産された可能性がある地域的な製品が存在することから鍛冶技術が導入されていた可能性が高いことから、千人塚古墳出土鎧は地元で修理された可能性が高く、上述した階層性から考えれば、千人塚古墳被葬者は、鍛冶技術を持つ集団を統率する有力者であった可能性が高い。

3　鉄製轡からみた須津古墳群

(1) 東海地方における鉄製轡の分布からみた東駿河

最後に馬具が出土した中里古墳群の位置づけを探るため、まずは東海地方での鉄製轡の分布状況から東駿河の様相を確認したい。

東海地方における旧国（伊豆、駿河、遠江、三河、尾張、美濃、飛騨、伊勢、志摩）の範囲を19地域に区切った状況で、鉄製轡の分布を確認すると、各地で一律に各種の鉄製轡が副葬されているわけでない。中でも東駿河は大型矩形立聞円環轡、鉸具造立聞円環轡が集中する地域とすることができることを論じた（大谷2006）。

その後15年が経過し、県内で新東名高速道路建設等に伴う新たに馬具が出土した古墳（静岡県埋文研2008・2010）や富士市の古墳の報告書（富士市教委2011・2013・2016・2018）の刊行が相次ぎ、また県外でも多くの古墳の報告書が刊行されたりしたこと、さらに既存資料の再検討（大谷2013など）が進んだことから、改めて東海地方（17地域に区分）における鉄製轡の分布状況を確認したうえで、東駿河の特徴を確認し、中里古墳群の馬具副葬古墳被葬者の性格を考えたい。

第95図には、主要な鉄製轡である内湾楕円形鏡板付轡、無立聞素環円環轡、兵庫鎖立聞円環轡、兵庫鎖付小型矩形立聞円環轡、吊金具付小型矩形立聞円環轡、無吊金具小型矩形立聞円環轡、甕形円環轡、大型矩形立聞円環轡、鉸具造立聞円環轡の9形式について東海地方における地域ごとの出土数を示した。

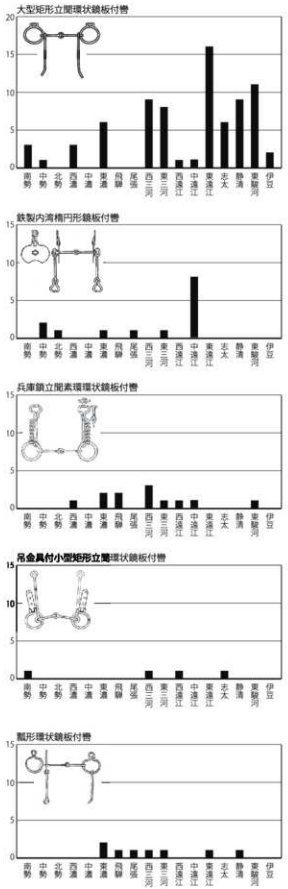
各形式の分布の特徴について詳述しないが、前稿（大谷2006）で述べたとおり形式ごとに分布が異なることが明白である。

東駿河の状況は、古い形式である内湾楕円形鏡板付轡、兵庫鎖付小型矩形立聞円環轡は現状で確認されておらず、基本的に後期前半までは馬具の副葬自体が限られている。また、後期後半に主に用いられる甕形円環轡、吊金具付小型矩形立聞円環轡も確認されていない。一方で、後期後半以降大型矩形立聞円環轡、鉸具造立聞円環轡の副葬が増加する。この出土数を他地域と比較すると、大型矩形立聞円環轡は東海地方では東遠江に次ぐ数量、鉸具造立聞円環轡は東海地方では最も出土する地域である。後期末以降に位置づけられるものが多く、後期末以降両者のうちのどちらかが副葬される古墳が増加することが特徴的である。

東駿河での副葬が多い大型矩形立聞円環轡、鉸具造立聞円環轡は、金銅装鞍金具や杏葉と組合されることが多く、規格性が高い轡とされること（岡安1984・1985）から、畿内王権との関係が深い鉄製轡形式であると考えられる（大谷2006）。また、中原4号墳で3組の鉄製轡が出土し、筆者は宮代栄一氏の研究（宮代2015）を参考に、馬具が3組以上副葬された古墳の被葬者は馬匹生産に関わっていた可能性が高く、中原4号墳の被葬者も馬匹生産を行っていたと想定した（大谷2016）。中原4号墳の後には東平1号墳などの被葬者がその生産を引き継いでいた可能性を想定した（大谷2018）が、今回の分析でも大型矩形立聞・鉸具造立聞円環轡という畿内王権との関係が深い轡を副葬する古墳が増加しており、古墳時代後期後半～終末期に、畿内王権との関わりで馬具が入手され、後期後半に東駿河で馬匹生産・飼養が開始され、終末期までそれが継続していたことの証左となろう。

(2) 鉄製轡からみた東駿河の中の須津古墳群

轡の種類による被葬者の性格差はあるか？　須津古墳群では、須津6・159号墳、中里98・99号墳で



第95図　東海地方における鉄製轡の形式別出土数

第 5 表　東駿河における環状鏡板付轡出土古墳とその出土遺物

古墳名	墳形	規模	環状鏡板付轡			金馬具	装飾大刀					主な副葬品
			大型	鉸具	他		圭	頭	双	単	その他	
夏梅木 6	円	11.1		●							双龍か？	
下土狩西 1	円	20	●					●			方頭	
原分	円	18		●●		鞍・心吉	●				鉄製銀象嵌円頭	
上ノ段 2	円	14			●							
上出口 1	円	-			●							
石川 2	円	9	●									
石川 T5	円	13		●								
東原 1	円	15.3										
東原 2	円	13.5										銅鋲
東本郷 3	円	-	○							●		
船津 L62	円	-		●								砥石
須津 J6	円	13	●									
須津 J159	円	10	●									
千人塚	円	21		●		横長心葉形轡						
中里 K95	円	12 ±		●				●				
中里 K98	不明	-	●									
中里 K99	不明	-	●					○				
鵜無ヶ淵・間門 E6	不明	-	●									
比奈 G40（かぐや姫）	円	15		●								鉄製杏葉車
国久保	円	8		●				●銀				雁木玉・鉄鐸
中原 4	円	11	●		●●						鹿角装・象鼻剣、象鐸	
東平 1	円	13	●			横長心葉形轡					鉄製円頭・象鐸 2	丁字形利器
横沢	円	16	●			金銅製鈴						金銅装飾金具
室ヶ谷 3	不明	-		●				●				砥縁車・砥石

※環状鏡板付轡　大型＝大型矩形立聞環状鏡板付轡　鉸具＝鉸具造立聞環状鏡板付轡　その他＝大型、鉸具以外の環状鏡板付轡
※金馬具　金馬具＝金銅装馬具　鞍＝鞍金具（海金具・鐵金具）　心吉＝心葉形杏葉
※装飾大刀　象嵌装＝象嵌装鐔付大刀　圭＝圭頭大刀　頭＝頭椎大刀　双＝双龍環頭大刀　単＝単龍環頭大刀

は大型矩形立聞円環轡、千人塚古墳、中里 95 号墳では鉸具造立聞円環轡が副葬される。東駿河では複数の円環轡が副葬され、両者とも形式がわかるものは少ない。唯一判明する原分古墳では 2 点とも鉸具造立聞円環轡である（註 17）。大型矩形立聞円環轡に時期が古いものが多いということも考慮すべきであるが、終末期前半には大型矩形、鉸具造立聞ともに副葬されているが、東駿河では現状で共伴することはない。また、古墳群ごとにその 2 種が排他的に副葬されているわけではなく、須津古墳群（須津支群、中里支群）、石川古墳群では同一古墳群中には大型矩形立聞円環轡を副葬する古墳もあれば、鉸具造立聞円環轡をもつ古墳もある。古墳群ごとに副葬される形式が固定されているわけではない。

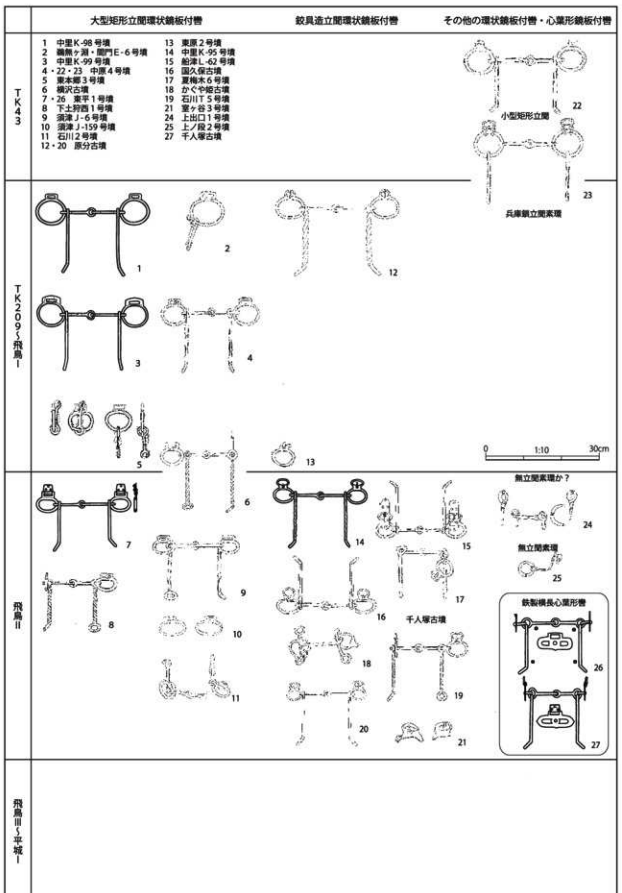
この違いは何なのか。大型矩形立聞・鉸具造立聞円環轡とも造付立聞であり、系譜的には関連すると考えられているが（岡安 1984）、被葬者の有する性格や出自などになんらかの違いが反映されている可能性がある。

第 5 表には、東駿河の円環轡出土古墳の主な副葬品を掲載しているが、鉸具造立聞円環轡出土古墳の中里 95 号墳、原分古墳、国久保古墳、室ヶ谷 3 号墳で圭頭大刀が出土しており、親縁性が高い。この 4 古墳は副葬品が豊富であることを考慮すると、東駿河では鉸具造立聞円環轡を副葬する古墳の方がやや階層的に優位である可能性がある。

須津古墳群の被葬者の性格　東海地方の鉄製馬具の副葬からみた東駿河の特徴と、東駿河における鉄製轡の特徴から、最後に須津古墳群馬具副葬古墳の被葬者像を明らかにしたい。

上述した通り、東駿河～富士川西岸・黄瀬川流域、箱根山麓まで～は、馬具が多く副葬される地域である（大谷 2006）。こうした馬具が多く副葬される東駿河において須津古墳群の馬具出土古墳の位置づけを探るため、東駿河における鉄製轡を時期ごとに表示した（**第 96 図**）。

副葬された轡の時期を確認すると、～盗掘などにより開口しており、すでに遺物が失われた古墳があることが予想されるため、現状で判明する限りであるが～、東駿河では、後期前半～中頃の沼津市松長 6 号墳、同荒久城山古墳に金銅装馬具が副葬され、つづいて TK43 ～ 209 型式期に富士市中原 4 号墳で 3 点の円環轡が、TK209 型式期に中里 98・99 号墳、鵜無ヶ淵・間門 6 号墳で大型矩形立聞円環轡、東本



第 96 図　東駿河における環状鏡板付轡・鉄製横長心葉形轡の編年的位置づけ

郷3号墳で大型矩形の可能性が高い円環轡が副葬され、中里95号墳で円環轡が副葬された可能性が高く、また同時期に、富士宮市別所1号墳の金銅装馬具、長泉町原分古墳の三葉文心葉形杏葉の馬具セット、鉸具造立聞円環轡が入手された可能性がある。

TK209型式期まではそれほど副葬数は多くはないものの、終末期前半（飛鳥Ⅱ期、TK217型式期）になると、鉄製轡の副葬が急増し、東平1号墳、須津6・159号墳などで大型矩形立聞円環轡、中里95号墳、千人塚古墳などで鉸具造立聞円環轡が副葬される。一方、東駿河では稀有な、無立聞素環円環轡が長泉町土狩五百塚古墳群の上出口1号墳、上ノ段2号墳に副葬される[21][18]。この時期には鉄製横長心葉形轡が富士地域で2例出土している。終末期後半には、馬具副葬は激減し、土狩五百塚古墳群中の御蔵上3号墳などに限定される。

また、東駿河では発掘調査された古墳が多いが、沼津市石川古墳群では新東名高速道路建設に伴い調査が行われた31基中1基（3%）、富士市伝法古墳群では19基中4基（21%）、富士市船津古墳群では16基中1基（6%）のみであり、副葬割合はそれほど多いわけではない。一方で、須津古墳群（須津古墳群、中里古墳群）では、調査された10基中（中里古墳群4基、須津古墳群6基）6基から轡が出土しており、概ね半数の古墳から馬具が出土している。これは非常に高い数値といえる。

このように須津古墳群は馬具副葬古墳が古墳時代後期末から終末期まで連続し、かつ同時期に複数存在し、さらに馬具副葬古墳が多い東駿河にあっても馬具副葬率が高いことを評価すれば、須津古墳群の被葬者集団は、馬匹生産を実際に行った主体であった可能性があり、平時においては馬匹生産・飼養（、馬匹を利用した運搬・交易）、軍事においては騎兵～岡安光彦氏による「東国舎人騎兵」の可能性がある（岡安1986）～として活躍した可能性を想定してよいのではないか。

中里98・99号墳の被葬者　中里98・99号墳例は、東駿河における円環轡としては古手に当たる。中原4号墳の検討の際、中原4号墳の被葬者が手工業生産、馬匹生産など各種の技術を総括するような立場であったことを想定したが、東駿河で馬匹生産が行われたとすれば、中原4号墳と同時期に位置づけられる中里98・99号墳、鵜無ヶ淵・間門6号墳の被葬者は、それに関わった可能性がある。

中里95号墳の被葬者　中里95号墳では、圭頭大刀と轡（円環轡の可能性が高い）がTK209型式期に位置づけられる可能性があり、鉸具造立聞円環轡は1段階後出することから、当古墳の被葬者はTK209～飛鳥Ⅱ期の2時期にわたり馬具を入手していた可能性が高い。墳丘規模や石室規模は不明確であるが、圭頭大刀、馬具の複数組の副葬など階層性は上位に位置づけられることから、98・99号墳など（馬匹生産）を支える集団を統率するような有力者像を描くことができる。

千人塚古墳の被葬者　千人塚古墳は、馬具からみれば特異な横長心葉形轡と鉸具造立聞円環轡を保有しており、両馬具とともに畿内王権との関係性が考えられる。また墳丘・石室規模ともに同時期では東駿河最大規模であることから、東平1号墳、実円寺西1号墳、原分古墳、下土狩西1号墳と並ぶ最上位の古墳の一つであることは間違いない。千人塚古墳は、古墳時代終末期に、中里古墳群、須津古墳群を傘下におき、馬匹生産や鍛冶生産を総括する被葬者と考えることができようか。

ただし、奈良時代以降富士郡の中心は、伝法古墳群の地にあり、須津古墳群の築造者集団が千人塚古墳の後、どのような変遷をたどるのか、伝法古墳群と比較しながら位置づけていく必要があろう。

謝辞

小論の執筆にあたり、検討の機会を与えていただいた富士市教育委員会　佐藤祐樹氏、藤村　翔氏に深謝いたします。

また、馬形埴輪（裸馬）の事例の収集、文献探索に当たり、河内一浩氏、栗林誠治氏、寺前直人氏、深澤敦仁氏、宮代栄一氏、村瀬　陸氏の御協力いただいた。

銘記して深謝いたします。

註

1　東駿河の古墳群は西から順にアルファベットが付加されており、例えば中里古墳群は「K」、須津古墳群は「J」であり、東駿河における K 古墳群は中里古墳群のことである。中里古墳群に A ～ K まで支群があるわけではないことから、ここではアルファベットを除いて表記する。

2　富士市教育委員会による集成（富士市教委 1988）では、本書で報告される中里古墳群 3 基のほか、76 号墳（先陣塚古墳）から馬具が出土したとされるが破片のため詳細不明である。また、第 2 章で報告する、狭義の須津古墳群では、千人塚古墳のほか、6・159 号墳（静岡県埋文研 2010）、神谷大塚古墳（30 号墳）から馬具が出土している。

3　円形金具は、刀剣の鍔の可能性があるが、平面及び内孔の形状が倒卵形ではないこと、中里 98 号墳例は鉄板（棒）を折り曲げて円形にした際の接着箇所が看取できること、鍔とすると幅が狭いことなど、鍔には確認できない属性が多いことから刀剣の鍔である可能性は極めて低い。

4　報告（図）では、9 点の可能性が指摘されているが、8 点目は半分ぐらいの破片であり、9 点目は先端の破片であることから 8 点目と 9 点目は同一個体の可能性が高いと想定するため、筆者は 8 点と考える。

5　本書では、須恵器における陶邑田辺編年（田辺 1981）、西弘海氏の編年（西 1978）、鈴木敏則氏の遠江編年（鈴木 2004）を用いる。

6　註 3 参照

7「無口頭緒」は、銜、引手を伴わない、荷馬などに利用された繋索用の頭緒である。

なお、轡を伴う面繋は両手綱であるが、無口頭緒で手綱がつくものは片手綱である。

8　註 4 参照

9　第 87 図の出典は第 3 表の文献より。

10　島根県岡田山 1 号墳の報告者である西尾良一氏は、「環状繋緒金具」とし、「革紐が結びつけられた痕が三箇所明確にみられ、馬装における金具であることが認められ」、「残る革銹の色も、黄色、赤褐色、黄褐色とあり、革紐も色鮮やかなものであったこと」、「残存する革紐の推定幅は 2.2 ～ 2.8cm であり、雲珠・辻金具 B の繋緒紐に結びつくものである」とした（島根県教委 1987）。

11　物集女車塚古墳では、横穴式石室玄室の家形石棺手前で f 字形鏡板付轡・剣菱形杏葉などとともに円形金具が出土するとともに、羨道から大型矩形立聞円環轡とともに帯金具、円形金具が出土している。f 字形鏡板付轡の馬装に伴う環状雲珠と大型矩形立聞円環轡に伴う組合式環状雲珠が用いられた可能性がある。

大型矩形立聞円環轡は TK43 型式期に位置づけられるものであり、少ないながらも組合式環状雲珠が用いられていた証拠となる。

12　これ以外で円形金具は確認できないが、裸馬の事例で、轡の表現がないことから、無口頭緒を表現した可能性があるものとして、埼玉県割山墳輪窯出土例（**第 89 図 4**）、群馬県太田市高林西原古墳群出土人物騎乗の馬形埴輪などがある。

また、甲塚古墳の馬形埴輪 5（報告書の 3、裸馬）・6（報告書の 4、裸馬）は円形の環（辻金具）が片面 2 点ずつ表現されている。ただし、5 が耳側は 4 条の革帯（宮代氏のいう複条系）を繋ぐのに対し、6 は 3 条（宮代氏のいう単条系）を繋いでいる。当該埴輪は、発掘調査中に口元部分の盗難にあい、出土時に撮影された写真を基に図化しているとのことであり、轡が表現されていなかったか若干不安な面があるが、手綱が片側のみの表現であり、乗馬に伴う面繋ではなかったことがわかる（日高 2014）。

13　親音塚古墳は、金銅装鏡板付轡をはじめ複数の轡が出土しているが、鏡板・銜・引手の連結が外れ、組合関係が明確ではなく、正確な出土数は、鏡板、銜や引手の数から 5 組以上であることしかわからない。宮代栄一氏は、鉄製円形金具を鏡板と判断し、轡の数量は 8 組と想定している（宮代 2016）。これに無口頭緒を含めると 9 ～ 10 組となる。

14　千人塚古墳は、開発行為が原因で発掘調査されたものではないため石室内部が調査されたものの床面までは掘り下げられていない。このため一部取り上げず現地保存した遺物があり、ここで報告する遺物が副葬品の全てではない。鉸具造立聞円環轡は取り上げられていないことから、**第 92 図**に図示していない。本書 37・38 頁を参照願いたい。

15　中里 95 号墳出土鉸具造立聞円環轡の頭部には中央部に透かある鉄板を U 字形に折り曲げて剣金を通し、頭部を補強したような状況として報告されているが、この部分の銹化が進行しており、100% 確実に修理が行われたとは言い難いことを明記する。

16　通常銜は喞金を 90 度で組合せることで外側の銜先環は向きが一緒になる（片側の銜は喞金と銜先環が 90 度異なり、もう片側は同方向になる）。横沢例は、銜の左右が両方とも同方向（8 字形）、東原例は両方とも 90 度で交差するものであり、通常と異なる。

銜の左右で向きが異なることで、引手の長さは一緒でも、連結が不自然となるとともに手綱の長さが異なる。

この 2 例のように銜先環の向きが異なるものを東海地方で確認すると、愛知県豊橋市上向嶋 2 号墳のみであり（東海古墳文化研 2006）、多くの轡が出土している東海地方でも 3 例しかない。

17　東海地方での円環轡が複数副葬された古墳は、三重県前山古墳（伊賀地域、大型矩形立聞 2 点）、山添 2 号墳（大型矩形立聞 2 点）、南山古墳（無立聞素環・大型矩形立聞各 1 点）、岐阜県西洞山 6 号墳（兵庫鎖立聞素環・大型矩形立聞各 1 点、**第 88 図**）、大牧 1 号墳（兵庫鎖立聞素環 1 点、甕形 2 点）、愛知県下山古墳（大型矩形立聞 2 点）、根川 1 号墳（兵庫鎖立聞素環 2 点、無立聞素環 1 点）、三ノ輪山 1 号墳（小型矩形立聞・大型矩形立聞各 1 点）、寺西 1 号墳及びとうて山古墳（大型矩形立聞各 3 点）、上向嶋 2 号墳（鉸具造立聞・大型矩形立聞各 1 点）、静岡県掛川市原 7 号墳（大型矩形立

間2点、鏡具造立間1点）、八幡2号墳（大型矩形立間2点）、賤機山古墳（大型矩形立間2点、甕形・鏡具造立間各1点）、中原4号墳（兵庫鎖立間・無吊金具小型矩形立間・大型矩形立間各1点）である。大型矩形立間と鏡具造立間は上向嵌2号墳と原7号墳、賤機山古墳の3基で共伴している。

18 報告の趣旨とは逸れるため詳述しないが、東駿河では上出口1号墳、上ノ段2号墳で、「江田船山型端環装飾」（岡安1984）のある引手・銜をもつ無立間素環円環轡が出土しており、両者ともに鏡板の断面は板状（長方形）であり、これは宮代栄一氏による北部九州型（宮代1998）とされるもので、九州との関係でもたらされた可能性がある。円環轡から考えると、土狩五百塚古墳群の特殊性が判明し、大型矩形立間・鏡具造立間円環轡とは入手経路が異なる可能性が高い。

参考文献

【論文等】

天羽 敏夫　1976「徳島県下における横穴式石室の一様相その2」『徳島県博物館紀要』8　徳島県博物館

内山 敏行　2011「栃木県域南部の古墳時代馬具と甲冑」『しもつけ古墳群』　壬生町立歴史民俗資料館

大谷 宏治　2004「東と西の狭間」『静岡県埋蔵文化財調査研究所設立20周年記念論文集』

大谷 宏治　2006「馬具の分布からみた東海古墳時代社会」『東海の馬具と飾大刀』　東海古墳文化研究会

大谷 宏治　2008a「原分古墳出土刀剣類の復元と被葬者の性格」『原分古墳』調査報告編　静岡県埋蔵文化財調査研究所

大谷 宏治　2008b「甕形環状鏡板付轡の特質」『静岡県考古学研究』40　静岡県考古学会

大谷 宏治　2010「古墳時代後期～終末期の古墳について」『富士山・愛鷹山麓の古墳群』静岡県埋蔵文化財調査研究所

大谷 宏治　2016「中原4号墳出土大刀と馬具からみた被葬者の性格」『伝法　中原古墳群』　富士市教育委員会

大谷 宏治　2018「東平1号墳の馬具と刀剣からみた被葬者像」『東平第1号墳』　富士市教育委員会

大谷 宏治　2019「東海地方における古墳時代の馬文化」『馬の考古学』　雄山閣

岡安 光彦　1984「いわゆる『素環の轡』について」『日本古代文化研究』創刊号　古墳文化研究会

岡安 光彦　1985「環状鏡板付轡の規格と多変量解析」『日本古代文化研究』2　古墳文化研究会

岡安 光彦　1986「馬具副葬古墳と東国舎人騎兵」『考古学雑誌』71巻4号　日本考古学会

岡安 光彦　1987「遺物編年の現段階（馬具）」『古墳文化研究会第7回研究発表・討論会発表要旨』（古墳文化研究会2010『日本古代文化研究』に所収）

尾上 元規　1993「古墳時代鉄鏃の地域性」『考古学研究』40巻1号　考古学研究会

川江 秀孝　1992「馬具」『静岡県史』資料編3　考古3

菊池 吉修　2016「中原4号墳出土鉄鏃について」『伝法　中原古墳群』　富士市教育委員会

群馬県古墳時代研究会　1996『群馬県内出土の馬具・馬形埴輪』

斎藤 弘　1986「古墳時代の壺鐙の分類と編年」『日本古代文化研究』2　古墳文化研究会

堺市博物館 1972『埴輪と鉄器具が語る巨大古墳とその周辺』

佐藤 信孝　2004「群馬県高崎市若田B号墳出土馬具の検討-毛彫馬具の雲珠について」『専修考古学』10　専修大学考古学会

佐藤 信孝　2005「終末期古墳出土馬具の変遷-長方形鏡板付轡の変遷」『電脳考古学』1

白井 久美子　2002「金銅装毛彫馬具」『印旛郡栄町浅間山古墳発掘調査報告書』　千葉県史料研究財団

鈴木 一有　2008「原分古墳出土馬具の時期と系譜」『原分古墳』調査報告編　静岡県埋蔵文化財調査研究所

鈴木 一有　2016「中原4号墳から出土した生産用具が提起する問題」『伝法　中原古墳群』　富士市教育委員会

鈴木 敏則　2004「静岡県下の須恵器編年」『有玉古窯』　浜松市教育委員会

田中新史 1980「東国終末期古墳出土の馬具」『古代探叢-滝口宏先生古希記念考古学論集』　早稲田大学出版部

田辺 昭三　1981『須恵器大成』

東海古墳文化研究会　2006『東海の馬具と飾大刀』

西 弘海　1978「土器の時期区分と型式変化」『飛鳥・藤原京発掘調査報告書』Ⅱ　奈良国立文化財研究所

日高 慎　2014「甲塚古墳の埴輪配列について」『甲塚古墳』　下野市教育委員会

藤村 翔　2017「駿河・伊豆地域における手工業技術の受容と集落動態」『東海地方における古墳時代の手工業生産の展開を考える』　考古学研究会東海例会

藤村 翔　2018「東平1号墳出土鉄鏃の評価と意義」『伝法　東平第1号墳』

古川 匠　2015「轡作止利の技術系譜と古墳時代の馬具」『同志社大学考古学シリーズXI　森浩一先生に学ぶ』　同志社大学考古学シリーズ刊行会

松尾 充晶　1999「上塩冶築山古墳出土馬具の時期と系譜」『上塩冶築山古墳の研究』　島根県古代文化センター

宮崎 由利江　1987『『裸馬』の埴輪に関して」『埼玉の考古学　柳田敏司先生還暦記念論文集』　新人物往来社

宮代 栄一　1995「飯氏二塚古墳出土の馬具」『飯氏二塚古墳』　福岡市教育委員会

宮代 栄一　1996a「鞍金具と雲珠・辻金具の変遷」『黄金に魅せられた倭人たち』　島根県立八雲立つ風土記の丘

宮代 栄一　1996b「倭人たちの馬装」『黄金に魅せられた倭人たち』　島根県立八雲立つ風土記の丘

宮代 栄一　1996b「熊本県出土の馬具の研究」『肥後考古』9　肥後考古学会

宮代 栄一　1998「古墳文化における地域性-九州地方出土の環状鏡板付轡を中心に-」『駿台史学』102　駿台史学会

宮代 栄一　2015「熊本県球磨郡多良木町赤坂古墳群出土遺物の研究」『熊本古墳研究』6　熊本古墳研究会
宮代 栄一　2016「群馬県高崎市観音塚古墳出土馬具の再検討」『埼玉考古』51　埼玉県考古学会
森田 安彦　2005「毛彫施文の金銅装鞍付花弁形杏葉の編年的位置付けについて」『立野古墳群』　江南町教育委員会

【報告書】
安濃町教育委員会　1999『西相野遺跡・ツヅミ遺跡発掘調査報告書』
大阪府文化財センター　2007『寝屋南遺跡・奥山遺跡』
太田市教育委員会文化財課　2009『世良田諏訪下遺跡』
各務原市教育委員会　1991『西洞山古墳群発掘調査報告書』
加藤学園沼津考古学研究所　1970『木宿上ノ段古墳』
熊谷市教育委員会　2004『武人還る』
熊谷市史編さん室　2015『新熊谷市史』資料編1　考古
群馬県埋蔵文化財調査事業団　1992『神保下條遺跡』
群馬県埋蔵文化財調査事業団　2011『大道西遺跡』
静岡県埋蔵文化財調査研究所　2008『原分古墳』
静岡県埋蔵文化財調査研究所　2010『富士山・愛鷹山麓の古墳群』
島根県教育委員会　1987『出雲岡田山古墳』
下野市教育委員会　2014『甲塚古墳』
昭和村教育委員会　1996『川額家原Ⅰ遺跡』
高崎市教育委員会　1992『観音塚古墳調査報告書』
高取町教育委員会　1984『市尾墓山古墳』
栃木県教育委員会　1974『東北新幹線埋蔵文化財発掘調査報告書』
千葉県史編さん委員会　2003『千葉県史』資料編3
千葉県史料研究財団　2002『印旛郡栄町浅間山古墳発掘調査報告書』
天理市教育委員会　2011『天理市埋蔵文化財センターたより』Vol.12　中国上陸記念荒蒋古墳の埴輪展
長泉町教育委員会　1974『上出口古墳』
沼津市教育委員会　2006『石川古墳群』
沼津市史編さん委員会　2002『沼津市史』資料編2
富士市教育委員会　1988『富士市の埋蔵文化財（古墳編）』
富士市教育委員会　1999『船津古墳群』
富士市教育委員会　2011『平成13年度富士市内遺跡・伝法国久保古墳埋蔵文化財発掘調査報告書』
富士市教育委員会　2013『船津古墳群Ⅱ』
富士市教育委員会　2016『伝法　中原古墳群』
富士市教育委員会　2018『伝法　東平第1号墳』
三島市教育委員会　2000『夏梅木遺跡群』
向日市教育委員会　1988『物集女車塚』
由比町教育委員会　1986『室ヶ谷遺跡群（室ヶ谷遺跡・室ヶ谷3号墳）発掘調査報告書』

図の出典

第86・92図　本書から引用

第87図　第3表参考文献による

第88図　飯氏二塚古墳（宮代1995）、物集女車塚古墳（宮代1996）、西洞山6号墳（各務原市教委1991）

第89図　1　群馬県埋文1992、2　熊谷市史編さん委2015、3　千葉県史編さん委2003、4　宮崎1987、5・6　下野市教委2014

第90図　群馬県埋文2011

第91図　筆者の指示のもと富士市教育委員会作成

第93図　1・16　土屋長久編1975『信濃佐久平古氏族の性格とまつり』　信濃佐久平古氏族の性格とまつり刊行会、2・22　富士市教委2018、3・18　佐藤2004、4　本書、5　藤枝市埋蔵文化財調査事務所1980『原古墳群白砂ヶ谷支群』、6・20　茨城県教育財団1998『北浦複合団地造成事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅰ』、7　千葉県史編さん委2003、8・25・26　山梨県1999『山梨県史』資料編2　原始・古代2、9・24　昭和村教委1996、10・12・13・15・31　田中新史1980、11・28　茨城県教育委員会1970『宮中野古墳群調査報告』、14　田中新史1980「東国終末期古墳出土の馬具」『古代探叢・滝口宏先生古希記念考古学論集』　早稲田大学出版部、石川正之助・佐藤信孝ほか2010「しどめ塚古墳」『穐名町誌』資料編　高崎市、17・19・23・27・29　白井久美子2002「金銅装毛彫馬具」『印旛郡栄町浅間山古墳発掘調査報告書』　千葉県史料研究財団、21　愛知県営開拓パイロット事業石巻地区埋蔵文化財調査団1976『二本松古墳群』、27　沼田市教育委員会2001『奈良古墳群』、30　山梨県教育委員会1979『山梨県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書 - 北巨摩郡双葉町地内 2-』

第94図　1　富士市教委1988、2　沼津市史編さん委2002、3　静岡県埋文研2010、4　富士市教委1999、5　富士市教委2013、6　沼津市教委2006

第95図　筆者作成。

第96図（第5表）　1・3・14・27　本書、2・9・10　静岡県埋文研2010、4・22・23　富士市教委2016、5・13・19　沼津市史編さん委2002、6・18　富士市教委1988、7・26　富士市教委2018、8　川江1992、11　沼津市教委2006、12・20　静岡県埋文研2008、15　富士市教委2013、16　富士市教委2011、17　三島市教委2000、21　由比町教委1986、24　長泉町教委1974、25　加藤学園1975

第4表　文献1　茨城県教育財団1998『北浦複合団地造成事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅰ』、2　茨城県教育委員会1970『宮中野古墳群調査報告』、3　千葉県2003、4　佐藤2005、5　昭和村教委1996、6　佐藤2004、7　山梨県1999『山梨県史』資料編2　原始・古代2、8　土屋長久編1975『信濃佐久平古氏族の性格とまつり』　信濃佐久平古氏族の性格とまつり刊行会、9　田中1980、10　富士市教委2018、11　藤枝市埋蔵文化財調査事務所1980『原古墳群白砂ヶ谷支群』

第2節　愛鷹山古墳群の被葬者集団とその生産基盤

—駿河東部地域の大型群集墳—

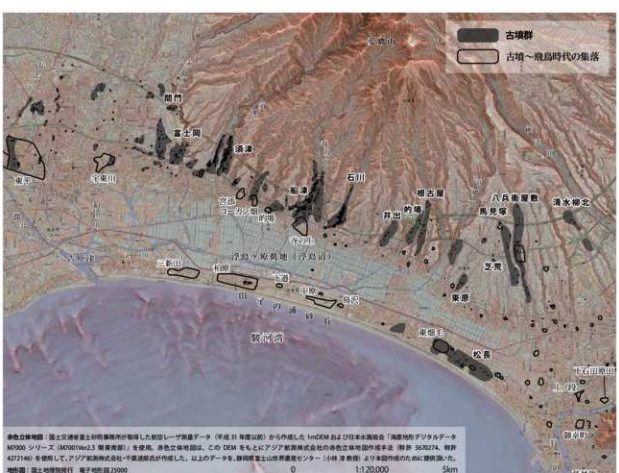
藤村　翔

はじめに

本書で報告した須津古墳群は、富士山南東に位置する休火山である愛鷹山の南西麓に立地する。愛鷹山の山体には、およそ10万年前の火山活動の停止以後、浸食により深い谷がいくつも刻まれ、その南方に広がっていた浮島沼（潟湖、ラグーン）に向かって張り出すように丘陵や河岸段丘が発達した結果、南麓の谷部や丘陵上には古墳時代後期から飛鳥時代にかけて、総数1,000基以上を数える多数の古墳群が並立して展開することとなった。

令和3年度は本書の整理作業と並行し、隣接自治体である沼津市との共同事業として「令和3年度沼津市・富士市連携 埋蔵文化財活用 特別展示・講演会『愛鷹山に眠る開拓者たち—東海最大級の古墳群と地域の再生』」が企画され、両市の市境付近に広がる愛鷹山南麓の各古墳群について、お互いのもつ情報を改めて整理して持ち寄る形で再構築していく作業を経ることで、改めて愛鷹山の古墳群を総体として評価する機運が担当者間で高まった。

本節では須津古墳群の範囲からやや視野を広げ、愛鷹山周辺に広がる大型群集墳の一角として捉え直すことで、東海地域の最東端に立地する当該古墳群の特質と想定される生産基盤について検討したい。



第97図　愛鷹山南麓周辺の古墳群と関連集落の分布

1 愛鷹山古墳群の概要

(1) 愛鷹山古墳群とは

範囲と規模 愛鷹山古墳群とは、古墳時代後期後半から飛鳥時代にかけて愛鷹山の南麓周辺に展開した古墳群の総称である（**第97図**）。西は愛鷹山西麓と富士山麓の境界を流れる赤淵川周辺、東は桃沢川までの範囲の河岸段丘や丘陵上に古墳群の顕著な広がりが認められ、沼津市教育委員会刊行の発掘調査報告書や『沼津市史』（菊池 2005）などでは1,000基を超えるとの認識が共有されていた[注1]。

今回、沼津市・富士市連携事業の準備作業の中で、改めて現状で両市によって把握されている古墳数を数えたところ、包蔵地登録数で811基（2022年3月現在）[注2]となることが判明した。そのなかには包蔵地範囲のみで捉えられた古墳群も含むので、実際の数はやはり『沼津市史』などで指摘されていた通り、1,000基以上になることが推定される。

「古墳群」の概念 古墳群の概念設定については、研究者により未だ意見の分かれる部分ではあるが（藤村 2018b）、その研究の目的に沿って群の規模を使い分けるべきという点については、共有されるところであろう。今回の連携事業や本稿では、愛鷹山麓から浮島沼ラグーン地帯に地盤をおいた地域集団の動向を明らかにすることを第一義とするため、その地理的恩恵を享受したであろう古墳のまとまりを、広義の古墳群として捉えたい。そうであれば、須津や船津、石川などの古墳のまとまりは「大支群」（鈴木敏 1988ほか）などの用語をあてるべきかもしれないが、ここではそれぞれを狭義の古墳群として従来の呼称を踏襲する。

これまでの分布・発掘調査の蓄積からみれば、南西麓の須津川、春山川、石川流域にそれぞれ展開した須津古墳群、船津古墳群、石川古墳群に全体の約6割の古墳が集中しており、古墳築造集団の生活圏を考える上でも示唆的である。

(2) 古墳群成立前史

浮島沼ラグーン沿岸の前・中期古墳 古墳群成立以前の古墳時代前期には、愛鷹山南麓から浮島沼沿岸部にかけて高尾山古墳（前方後方・62m）や神明塚古墳（前方後円・53m）、浅間古墳（前方後方・91m）、東坂古墳（前方後円・60m）といった単独立地の大型の首長墳が築かれたが、中期になると間門松沢1号墳（楕円・25m）や道尾塚古墳（不明）、船津ふくべ塚古墳（前方後円？・65m）がみえる程度で、古墳の内容や規模が大きく縮小する。

後期前半には再び浮島沼周辺において古墳築造が活発となり、天神塚古墳（前方後円？・51m）、子の神古墳（前方後円？・64m）、長塚古墳（前方後円・75m）、山の神古墳（前方後円・41m）、琴平古墳（円・30m）などの中小の前方後円墳や円墳が小地域単位で並立する状況となる。

その後、後期後半以降に横穴式石室を主体部とする群集墳の築造が愛鷹山麓周辺で広がるが、その中には、前期や中期、後期前半頃の古墳と立地を近しくする群も存在する。

古墳群と「始祖墓」 群集墳の墓域設定に際し、前・中期の大型首長墳の存在がどのように意識されたのかについては、擬制的同族関係の「結合の要」（白石 1973）や「始祖墓」（土生田 2010）といった概念によってその評価が試みられている。

当地域では特に浅間古墳と須津・船津古墳群（**第3図、本書3頁**）、東坂古墳と比奈古墳群、神明塚古墳と松長古墳群というように、前期古墳を意識した立地をとる群集墳も散見されており、目に見える氏族系譜・集団結合の象徴として、大型の前期古墳が群集墳被葬者集団によって利用された蓋然性は高い。

2 横穴式石室からみた被葬者集団

(1) 石室規模からみた集団の性格

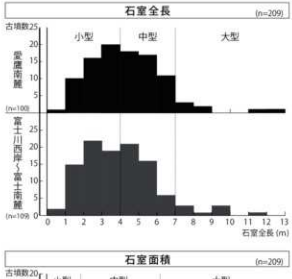
研究動向 駿河東部地域の無袖石室の階層構造については、石室全長10mを超える大型の無袖石室を頂点として、その下に中型石室や7世紀後半以降はこれに小石室も加わるヒエラルキーが想定されている（鈴木一 2001、井鍋 2003）。一方、最上位階層が同時期に複数存在する点も重要であり（菊池 2010）、少なくとも6世紀末頃（TK209型式併行期）には10m前後の大型石室と4～6mの中型石室の間に階層構造が生まれ、後者はさらに副葬品内容によっても分化するが、そうした階層構造が、各小地域の古墳群の集団単位で完結すると考えられる（藤村 2016・2018c）。

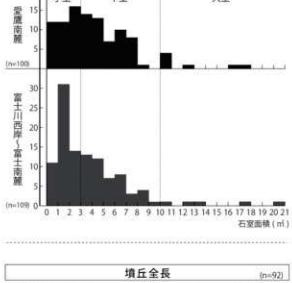
古墳の規模による階層分化　ここではかつて井鍋誉之氏によって行われた由比～箱根山西麓の 61 例の横穴式石室の規模による定量分析の知見（井鍋 2003）を確認するため、富士川西岸から愛鷹山南麓周辺までの新出資料を加えた横穴式石室を対象に、石室全長（前庭部含む）と石室面積（奥壁幅×石室全長）（ともに資料数 209 例）、さらに墳丘全長のヒストグラム（資料数 92）を作成した（第 98 図）。

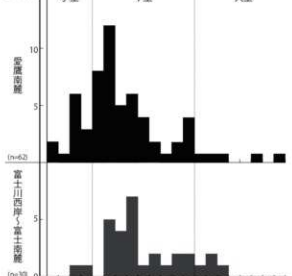
ここから、上位のグループについては概ね石室全長 7 m、同面積 10 ㎡を超えるものを大型石室として抽出することができる。また墳丘全長では 15 m を超えるものが上位グループとして抽出できる。この値で抽出した資料は、概ね墳丘全長、石室全長、石室面積の 3 要素でそれぞれ大型に位置づけられるので、この境界値の設定は妥当であると考える。一方、小型～中型石室の区分は便宜的な意味合いが強いが、ヒストグラムの傾向から、石室全長 4 m、石室面積 3 ㎡、墳丘全長 6 mにて境界値を設定した。ヒストグラムの形状からは、いわゆるピラミッド形ではなく、小型上位～中型の多い壺形分布を示す点が指摘できる。ここから、この地域の横穴式石室を築造した集団が、大型石室を築造する少数の指導者層の下、小型上位～中型石室を築造した中間層が多く古墳を築くことで、群集墳を形成していたことが窺える。石室全長 2m、同面積 2 ㎡以下の最小クラスの小型石室は、潤井川東岸の伝法古墳群のほか、富士川西岸の鈔見古墳群や山王古墳群といった富士郡家周辺と、郡家から富士川を挟んで対岸に顕著に分布することから、8 世紀初頭前後の官人層の個人墓と考えられる。

古墳群を単位とした階層構造　指導者層が築いた大型石室の分布をみると、特定地域に集中せず、富士南麓～黄瀬川流域の各地に分散する状況が明瞭である（第 99 図）。基本的には、各古墳群単位で、それぞれの集団をまとめる指導者が存在したとみるのが妥当であろう。

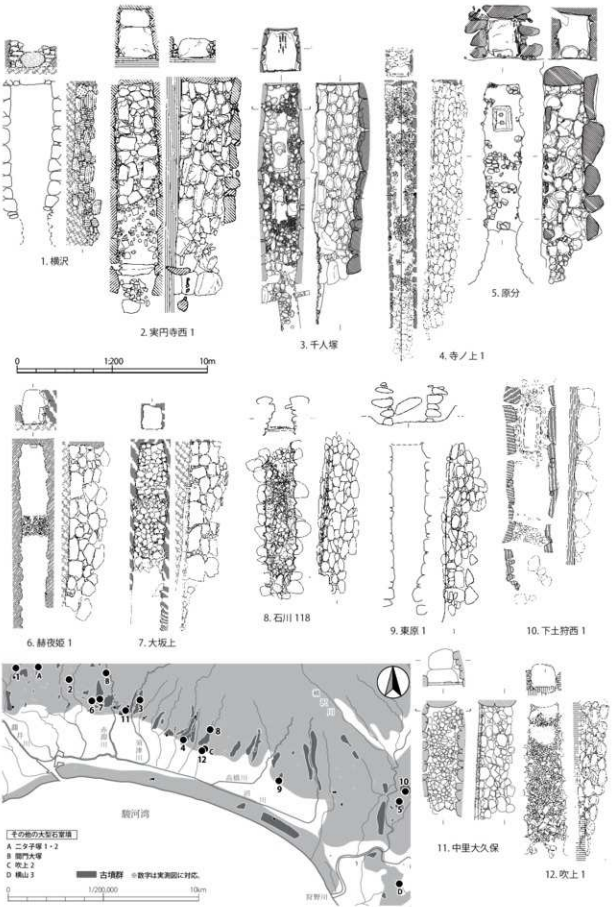
須津古墳群や船津古墳群の石室変遷図からは、こうした階層構造が少なくとも 2 ～ 3 世代に渡って再生産されていたとみてよい（第 100・101 図）。その傾向は、富士川～富士南麓と愛鷹南麓で大きくは変わらないとみられる[注3]。



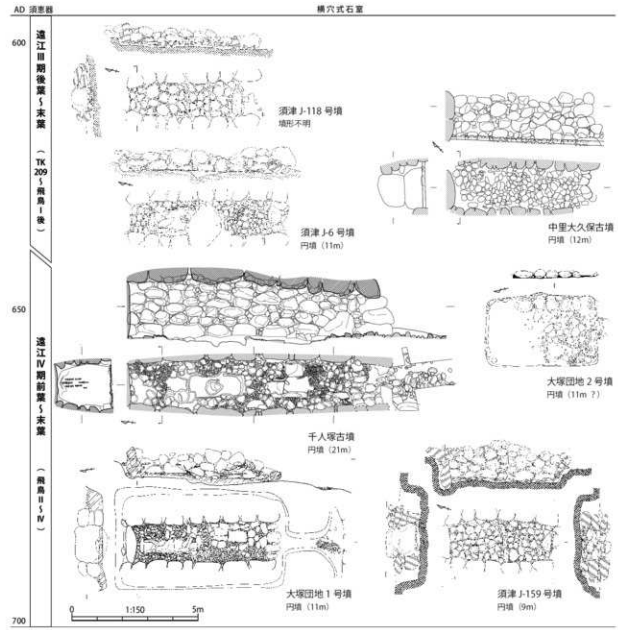




第 98 図　横穴式石室墳の法量ヒストグラム
（富士川西岸～愛鷹山南麓）



第 99 図　愛鷹山古墳群と周辺の大型横穴式石室



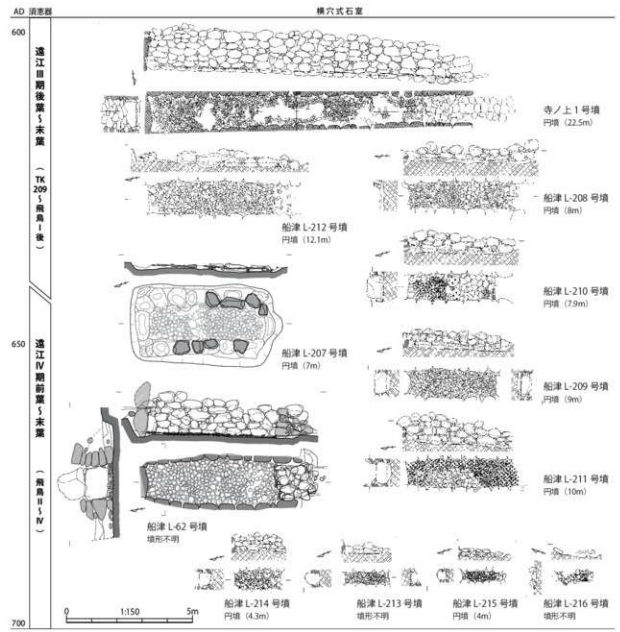
第 100 図　須津古墳群の横穴式石室

(2) 平面企画からみた集団の性格

集団間の関係を探る　それでは、上記の検討から導かれた並立する階層秩序を有した各古墳群の集団は、互いに閉鎖的な集団であったのだろうか。石室平面企画から導かれる回答は、否、である。

当地域の横穴式石室の床面平面図を比較すると、奥壁の幅や胴張りの具合によって、同じ無袖形でありながら、一定の平面企画が存在することが窺える（**第 102・103 図**）。本来であれば石室長まで同じ割合で合致するものこそ共通した平面企画と言えるのかもしれないが（松崎 2001）、無袖石室で対象とする石室長は、羨道的な空間も含めてのものであり、先述したような階層性や埋葬人数などによっても流動性が高くなることが想定されることから、ここではより幅をもった設計企画の抽出を目指した。

狭長形　狭長形とした平面類型は、井鍋誉之氏が「狭長な無袖式石室」として、関東地域の太平洋沿岸に分布が拡がる点が注目された形式である（井鍋 2003、植山 2020）。奥壁幅に対して開口部幅が直線的に狭まる点に特色があり、おそらくは 1 尺＝0.36cm で設計した際に、開口部幅を 1 尺分狭くしたものと考えられる。船津寺ノ上 1 号墳を基本型として、3/4 サイズのものが、吹上 2 号墳、松長 6 号墳、東原 5 号墳、清水柳北 2・3 号墳で採用される。

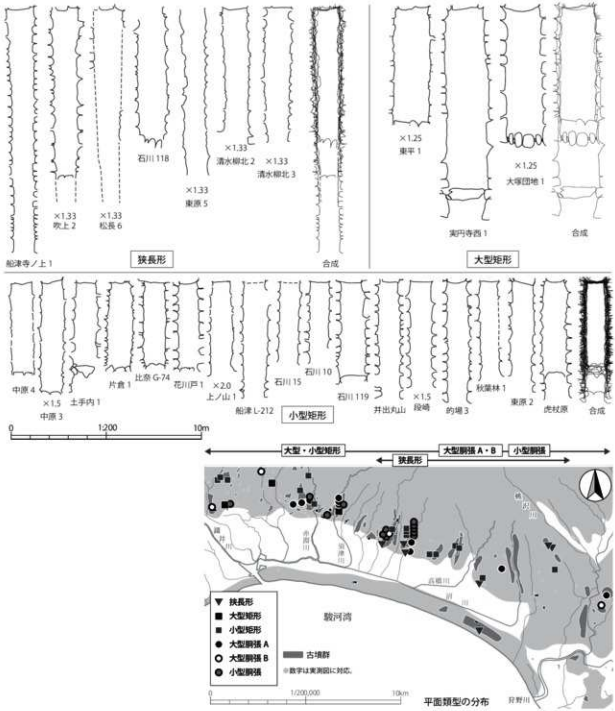


第101図　船津古墳群の横穴式石室

矩　形　矩形とした平面類型は、鈴木一有氏が「駿東系石室」とするもので（鈴木一2017）、開口部付近に段構造を伴うものも多い。平面形が直線的な矩形（長方形）となり、大型と小型に細分できる。

大型のものは実円寺西1号墳を基本型として、4/5サイズが東平1号墳、大塚団地1号墳で採用される。小型のものは中原4号墳や虎杖原古墳などを基本型に、2/3サイズが中原3号墳や段崎古墳、1/2サイズが上ノ山1号墳などで採用される。これらも1尺＝0.36cmとすれば、奥壁幅が実円寺西1号墳が5尺、東平1号墳が4尺、中原4号墳が3尺、同3号墳が2尺、上ノ山1号墳が1.5尺となっている。

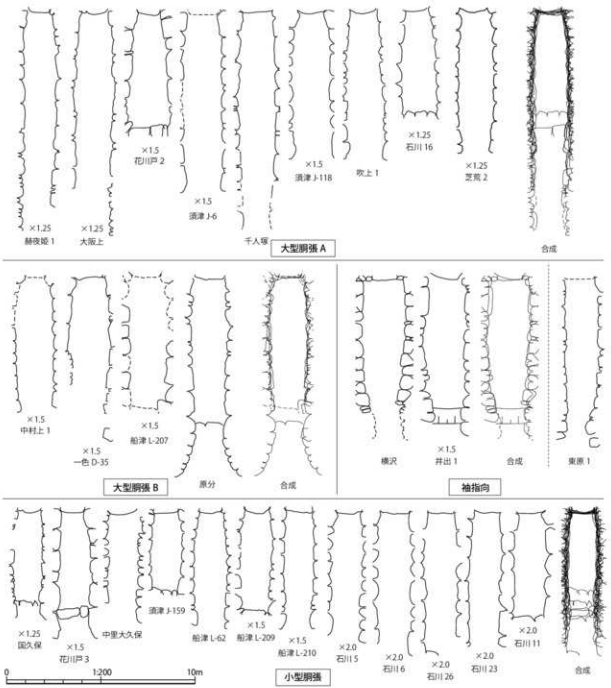
胴張形　胴張形とした平面類型は、平面形が胴張形のものである。こちらも大型と小型に細分できるほか、大型胴張については形状によって、やや直線的に幅を広げるものを大型胴張A、曲線的に幅を広げるものを大型胴張Bとした。大型胴張Aは吹上1号墳や千人塚古墳を基本型として、4/5サイズが赫夜姫1号墳や大坂上1号墳など、2/3サイズが須津J-6号墳や石川16号墳などで採用される。また大型胴張Bは原分古墳を基本型として、2/3サイズが中村上1号墳や一色D-35号墳などで採用される。小型胴張は大型胴張A・Bの双方の影響を受けたとみられるものであり、中里大久保古墳や船津



第 102 図　横穴式石室の平面類型（1）

L-62 号墳を基本型として、3/4 サイズが国久保古墳、2/3 サイズが花川戸 3 号墳や船津 L-209・210 号墳など、1/2 サイズが石川 5・6 号墳などで採用される。これらも 1 尺＝ 0.36cm とすれば、大型胴張 A の千人塚古墳で奥壁幅 5 尺、最大幅 6 尺となり、規模が小さくなるにつれて奥壁幅 4 尺（大坂上古墳、船津 L-62 号墳など）、3 尺（須津 J-6 号墳、国久保古墳など）、2 尺（石川 5・6 号墳）と減じている。

袖指向　袖指向とした平面類型は、一定の石室幅を有しながら、開口部付近で急速に幅を狭めるものであり、擬似両袖も含めた有袖形石室の間接的な影響のもとで設計されたとみられる当地域では特殊な類型である。横沢古墳を基本型とすれば、井出 1 号墳が 2/3 サイズとなっている。東原 1 号墳の石室は、後述するように近隣では廬原地域の神明山 4 号墳石室との類似性が注意される。



第 103 図　横穴式石室の平面類型（2）

古墳群のなかの平面企画　以上の分類から、それぞれの平面企画の採用古墳の分布をみると、近接した古墳群に企画が集中することなく、富士山麓～愛鷹山麓の広域で共有していた状況が看取される（**第 102 図下段**）。このことから、平面企画に象徴される石室の設計図や割付方法などといった石室構築に関わる技術が、各古墳群の集団間の相互交流によって共有されていた状況が推定できる。唯一、狭長形が現状では春山川流域から田子の浦砂丘も含めた、桃沢川流域までの浮島沼ラグーン周辺に集中する傾向にあるが、いずれも TK43 型式併行期～飛鳥 I までの当地域では古相の石室であり、群集墳形成の第一世代に採用されたのみとみられるが、これについても古墳群を隔てて分布することが確認できる。

墓坑の深さや裏込め礫の有無といった石室の細部の構造（菊池 2010）や屍障仕切石・箱式石棺といった使用法（大谷 2010b）には個別的な差異もみられるが、愛鷹山麓周辺の古墳築造集団が、石室の

構築技術とともに、無袖形石室という葬送儀礼の舞台装置に関わる大枠のアイデンティティを共有していたことが改めて確認できる。この点は、畿内地域周辺の大型群集墳において、同じ古墳群や支群内でも異なる石室形式を採用することがある状況（藤村2021b）とは異なり、集団の結合が一層進んだ証として評価することが可能である。

3　副葬品からみた被葬者集団

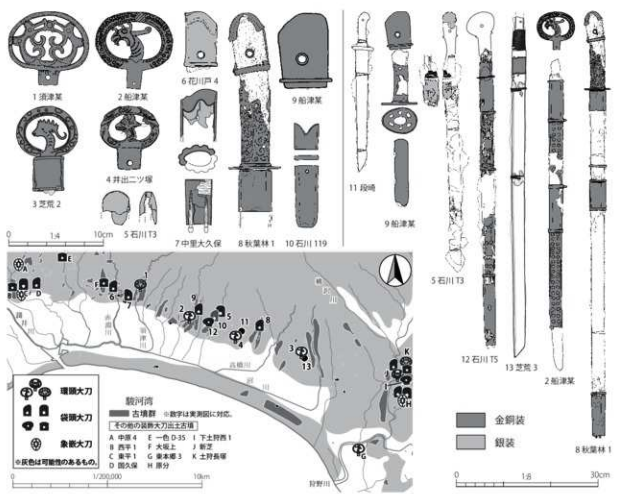
（1）武器からみた集団の性格

装飾付大刀　愛鷹山古墳群周辺の装飾付大刀については、単龍鳳環頭大刀が東海地域の中では比較的集中する状況が指摘されているが（岩原2005、井鍋2006）、近年の類例増加により、圭頭大刀も目立つ大刀形式になっている（第104図）。ただし、井鍋氏も指摘した通り、個別の事例を俯瞰すれば、あらゆる大刀形式が6世紀末～7世紀中頃に並立するという理解に大きな変更はない。

大刀形式によって表象される役割については、袋頭大刀を軍事活動、環頭大刀を外交・技術を掌握する職掌とみる見解が参考となるが（橋本2014、内山2018）、東海・関東諸地域の有力層においてはまず軍事が第一に重視されるという（内山2018）。

各古墳群単位でも各種の大刀形式がみられる点を重視すれば、一つの集団内に性格や職掌が異なる人格がモザイク状に参画していた状況を推察することができるが（鈴木一2006）、そのなかでもまず軍事的な役割が当古墳群の指導者層に期待されていたことが窺える。

鉄　鏃　続いて副葬鉄鏃の形式に注目すると、西部の富士川流域～愛鷹山南西麓では三角形式や五角形式などの平根系鏃を多く含む鏃群、東部の愛鷹南東麓～黄瀬川流域では柳葉式や鑿箭式、片刃箭式の尖根系鏃が多数を占める鏃群を採用する傾向があり（藤村2018a）、鉄鏃の実戦的機能や儀礼的側面、象徴性に関わる意識には地域性がみとめられる。



第104図　愛鷹山古墳群周辺の装飾付大刀

一方、鉄鏃副葬率をみると、富士川流域～富士山麓では約 33%（117 古墳中 39 例）、愛鷹山麓では約 56%（109 古墳中 61 例）と後者が比較的高い割合を占めている。後述するように、両地域ともに 30 本以上の多量の鉄鏃を副葬する古墳が多いことを鑑みれば（第 105 図）、富士川流域～富士山麓の鉄鏃保有率の少なさは、8 世紀の官人化した個人墓の割合が多いことに起因する可能性もある。ただ、先に見た東部の古墳により実戦的な実根系鉄鏃が多用される傾向からは、愛鷹山古墳群周辺の集団の方が、より軍事的な役割の比重が大きかった可能性も十分に考え得る。軍事的な役割については、幅広い階層の古墳被葬者が担っていたことが副葬鉄鏃の出土傾向から推定できる。

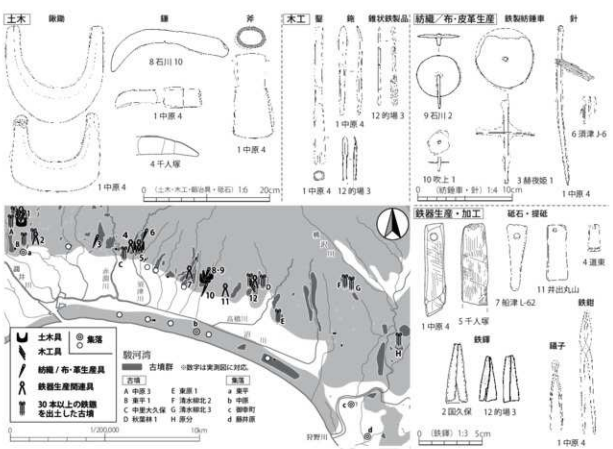
(2) 農工・生産具からみた集団の性格

農工・生産関連具の構成　愛鷹山古墳群の副葬品の特徴として、農工・生産具やその関連遺物が一定数の古墳に副葬される傾向がある（第 105 図）。

土木具は石川 10 号墳や千人塚古墳で鎌、木工具は的場 3 号墳で鉋や雛状鉄製品、紡織や布・皮革生産関連では石川 2 号墳や吹上 1 号墳で鉄製紡錘車、須津 J-6 号墳で針が出土する。

鉄製紡錘車は近接地域の赫夜姫 1 号墳でも出土している。また、鉄器生産や加工に関連する工具としては、千人塚古墳で砥石、船津 L-62 号墳や井出丸山古墳、道東古墳で提砥が出土するほか、鉄器製作に関連する祭祀具の可能性がある鉄鐸が的場 3 号墳でみられる（早野 2008）。30 本以上の鉄鏃が出土した古墳の分布も、近隣に鉄器製作に関わる技術者や工房の存在を推定できる要素である（尾上 1993）。

渡来系技術者の存在　愛鷹山古墳群においてみられた農工・生産関連具の特徴は、富士山南麓において土木開発や手工業生産を主導した伝法古墳群の中原 4 号墳や国久保古墳でみられた構成（鈴木一 2016、藤村 2018c）ともよく共通しており、愛鷹山麓周辺の集団内にも、同種の技術者や彼らを束ねる指導者が存在した蓋然性は高い。



第 105 図　愛鷹山古墳群周辺の農工・生産関連具

また先述した鉄鐸のほか、金銅製鈴や銅鈷、装飾付ガラス玉などの渡来系装身具類の副葬状況も顕著な点を考慮すれば（第 106 図）、こちらも伝法古墳群と同様に、集団内部に渡来系技術者が一定数存在した可能性がある。

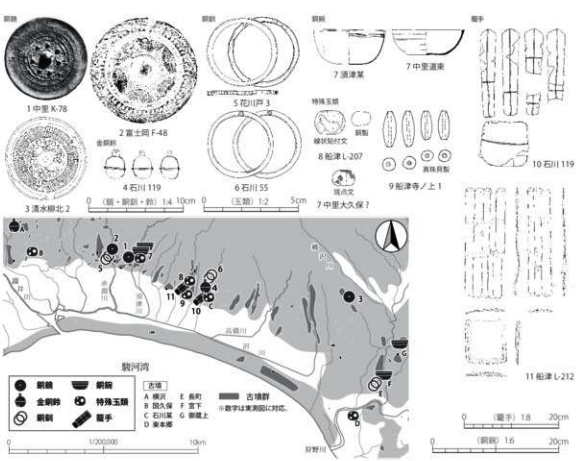
愛鷹山古墳群の集団は、渡来系技術者を含む多様な人材によって構成され、愛鷹山麓に広大な墓域や馬牧（大谷 2019）、そして後述する砂丘上の開発によって、その地に手工業生産の拠点となる大集落群を創出していったと考えられる。

4　浮島沼ラグーンの開発と愛鷹山古墳群

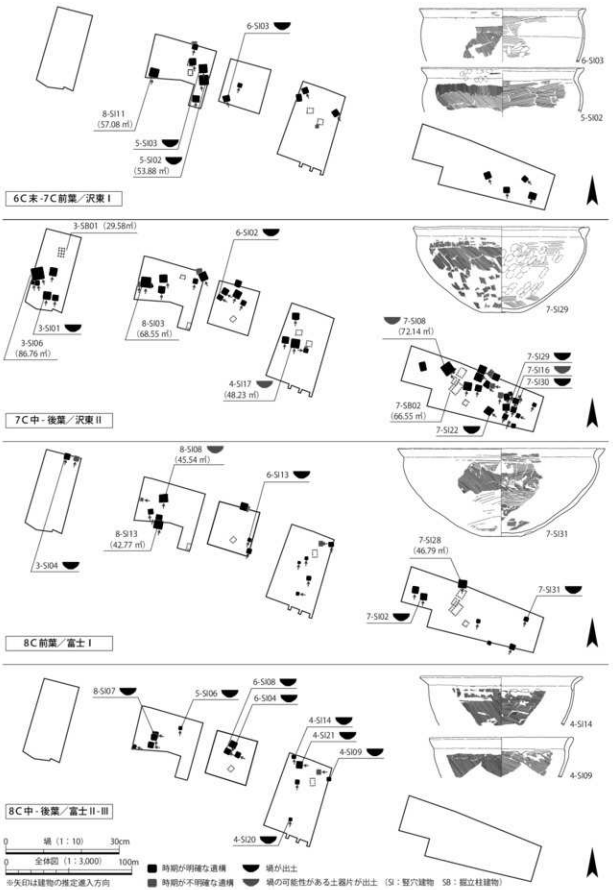
（1）田子の浦砂丘上の集落群と中原遺跡

かつて筆者は、古墳時代後期後半から飛鳥時代に田子の浦砂丘上に一直線上に並ぶ三新田遺跡、柏原遺跡、下道遺跡、中原遺跡、鳥沢遺跡、東畑遺跡などの集落が、同時期の愛鷹山南麓の集落よりも質・量ともに上回ることから、それらを愛鷹山南麓の船津古墳群や石川古墳群などの大型群集墳の被葬者集団の母体集落に比定したことがある（藤村 2013）。ただし、当時は中原遺跡の調査報告書が刊行される前であったため、その裏付けを十分に示すことができなかった。ここでは、中原遺跡の集落構造や生業活動を検討することで、田子の浦砂丘上の集落の特質を示したい。

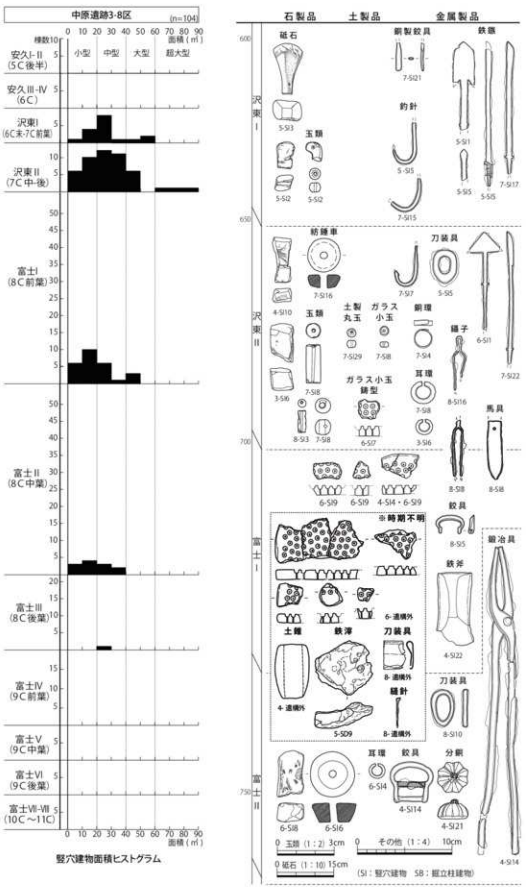
中原遺跡の集落構造　中原遺跡は駿河湾沿岸部の田子の浦砂丘上、浮島沼に面して立地する集落跡であり、これまでに 250 棟以上の竪穴建物が調査され、うち 100 棟強が報告されており、7 世紀代における駿河東部地域を代表する集落の一つである（木村編 2016）（第 107・108 図）。中原遺跡は竪穴建物の床面積についても、地域最大級の 70 ～ 80 ㎡台の超大型建物が継続的に営まれた同時期の富士山麓の拠点集落である沢東Ａ遺跡と比べても遜色がない。また倉や大型の屋とみられる掘立柱建物も 7 世紀後半には登場していることから、駿河東部地域では非常に先進的で、上位階層の建物群も含む田子の浦砂丘上の拠点集落とみてよい（藤村 2021c）。



第 106 図　愛鷹山古墳群周辺の特殊な装身具・銅製品



第 107 図　中原遺跡の集落変遷と主要遺物（1）



第 108 図　中原遺跡の集落変遷と主要遺物（2）

手工業関連遺物と水産加工具　出土遺物についてみると、7世紀代には豊富な手工業関連遺物（砥石、紡錘車、ガラス小玉鋳型）や、各種鉄製品（鉄鏃、刀装具、馬具）、玉類などが出土するほか、8世紀代に鍛冶具（鉄鉗）や鉄滓といった手工業関連遺物のほか、銅製鈸具、分銅が出土し、少なくとも集落が拡大する7世紀代には駿河湾沿岸部における中心的な手工業生産拠点として機能したことが窺える。

さらに、7世紀代より鉄製釣針や大型土錘などの漁具のほか、回遊性魚類の煮炊き用とされる土師器塝（瀬川・小池 1990など）がまとまって出土している点も特筆される。7世紀代の土師器塝については、田子の浦砂丘上の柏原遺跡や浮島沼西部の宇東川遺跡F地区などでもその存在が確認でき、田子の浦砂丘を含めた浮島沼ラグーン周辺にこの時期に急速に受容された状況が推定される（藤村 2021a）。

以上の調査成果から、中原遺跡の性格としては、水産・加工業に加え、全国的にも極めて珍しいガラス小玉生産を筆頭に、鍛冶や製糸・布生産なども担う、複合的な手工業生産・水産加工拠点集落として評価できる。

稚贄屯倉と砂丘上の集落群　このような田子の浦砂丘上の集落を評価する上で見過ごすことのできないのが、稚贄屯倉の問題である。『日本書紀』に登場する稚贄屯倉は、現在の田子の浦港から沼川周辺に7世紀前半頃に設置された、上宮王家（聖徳太子の一族）への堅魚製品の貢納拠点とみる説が有力であり、漁具や水産加工具が集中する中原遺跡の特徴とよく合致する。仁藤敦史氏は早くに、稚贄屯倉を「大王への大贄と対応し、有力な皇子（稚・ワカ）へ貢納物（贄・ニエ）を献上するために設定された屯倉」とし、「原初的なミツキ・ニエとして堅魚製品が（上宮王家へと）貢納された段階」に機能したことを推定した（仁藤 1996）。また、原秀三郎氏は稚贄屯倉を壬生部や膳氏といった上宮王家との関わりが深い集団によって駿河・伊豆の聖徳太子領の調物である荒堅魚を集積した交通拠点（倉庫施設）と捉え、潤井川と沼川の河口部、現在の田子の浦港東岸あたりに比定する（原 2005）。

王領の設置と大型群集墳　田子の浦砂丘上の複合的な手工業生産・水産加工拠点である中原遺跡周辺の調査成果によって、文献史学において重要視されてきた稚贄屯倉をはじめとする上宮王家関連伝承地との具体的な比較検討が出来るようになった点は大いに特筆される。砂丘上の一連の集落が、吉原津（現田子の浦港）の港湾施設と水運のみならず、砂丘上に想定される街道を通じて連結していたことも十分考えられよう（第97図）。そして、中原遺跡の高度な複合的生産集落が、浮島沼ラグーン沿岸の「王領」化の産物の一つであったとすれば、同集落から浮島沼を挟んだ対岸に展開した愛鷹山古墳群に葬られた集団こそ、まさにその王領を現地で経営した共同体構成員やその指導者層であったとみなせる。愛鷹山古墳群と浮島沼ラグーンは、東海における大型群集墳の偏在性と「王領」（中井・鈴木一編 2008）の観点からも、重要なモデルになり得る地域といえよう。

(2) 浮島ヶ原ネットワークと新しい陸上交通網

浮島ヶ原ネットワーク　佐藤祐樹氏が当地域の前期古墳を説明する上で提示した「浮島ヶ原ネットワーク」は、「（浮島沼）ラグーンの管理とその内海を中心として甲斐や相模へと続く路の中継地の管理などを通じて密接な関係を築いていた首長同士の繋がり」を指す（佐藤 2018）。古墳時代前期のそれは、外洋と接続する吉原津（現田子の浦港）から、浮島沼ラグーン各地を結ぶ水運（渡井英 2021）と、そこを起点とする北方や東方への陸路とのターミナル機能が重視されたネットワークであったといえる。

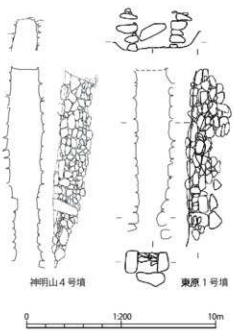
後期前半に浮島沼ラグーン周辺に並立する中小規模の首長墳は、古墳時代前期的なネットワークの再興を象徴する景観を古墳によって示していたことが想定される。それが、後期後半から飛鳥時代になると、田子の浦砂丘上に直線的に並ぶ集落景観が誕生する点に、前代からの大きな飛躍を見てとることができる。砂丘上には、古代・近世に東海道が敷設されることから、7世紀に大規模に展開した砂丘上の集落が、後の東海道設置への布石となっていた点も大いに想定される。

馬による陸上交通網の整備　田子の浦砂丘東側の前期の有力な首長墳である神明塚古墳の周囲には、6世紀以降に松長古墳群が展開する。30基以上の円墳で構成された古墳群のうち、発掘調査された松長

6号墳では、愛鷹山南麓の吹上2号墳と同大の平面企画とみられる狭長形の横穴式石室から、補修痕のある金銅装内湾楕円形轡とイモ貝装辻金具からなる馬具や大刀、20本程の鉄鏃などが出土した（池谷・北 2015）。一方、愛鷹山南麓に位置する荒久城山古墳でも金銅装の十文字楕円形轡と剣菱形杏葉のセットが出土しており、6世紀後葉（TK43型式併行期）に浮島沼ラグーンの南北で金銅装の馬具を保有する有力層が生まれている点は重要である。この段階に、駿河東部地域において新来の馬を利用した陸上交通網の萌芽をみとめることができる。

続く6世紀末～7世紀中頃には愛鷹山古墳群は最盛期を迎え、大型矩形轡や鈴具造轡の普及・集中のほか、馬具の補修事例も増加し（本書大谷論考）、愛鷹山麓への馬牧の設置（大谷 2019）も推定される。この段階に新しい通信・運輸・軍事手段として、馬の本格的な導入と陸上交通網の整備が進んだとみられる（松尾 2002、滝沢 2022）。富士川流域から狩野川流域へ至る主要な陸路には、吉原津と狩野川河口部を結び、中原遺跡などの新興集落群が展開した田子の浦砂丘上の街道が選ばれたとみてよい。

浮島沼ラグーンを通した水陸交通の結節　以上の検討から、古墳時代後期に再興された水運ベースであった浮島ヶ原ネットワークに、後期末から飛鳥時代に甲信・相模方面への馬が発着する高速陸上交通網が接続したことで、両交通網のターミナルとして浮島沼ラグーン地帯の重要性が改めて高まることとなったと考えられる。駿河中部地域から東部地域への運送手段としては、陸路は薩埵峠などの難所が存在することもあり、6・7世紀に至っても清水津―吉原津間の海路による沿岸航海が主流であった蓋然性が高い。清水津に近接する廬原川河口部に7世紀前半頃に築かれた神明山4号墳の擬似両袖形石室は、愛鷹山南麓の東原1号墳の石室に類似する（第109図）。東原1号墳は両側壁の開口部付近に立柱石を有し、伊豆半島基部の立柱石を有する石室と同じく、駿河中部地域の擬似両袖形石室の影響を受けて設計されたとみられる。伊豆凝灰岩製家形石棺の狩野川河口部―駿河中部地域間の輸送ルート（菊池 2008）も含め、駿河中部と同東部・伊豆地域を結ぶ海上交通の重要性を示す事例と捉えたい。



第109図　駿河中・東部地域の擬似両袖形指向の石室

船津寺ノ上1号墳や吹上2号墳、松長6号墳などの狭長形石室の類例が相模川流域から東京湾沿岸に分布する点（井鍋 2003）も、愛鷹山古墳群の集団が太平洋沿岸の海上ネットワークに影響力を有していたことの証左とみられる。

おわりに

愛鷹山古墳群の被葬者集団　些か雑駁ではあるが、浮島沼ラグーンを生産基盤とした集団の奥津城として愛鷹山古墳群を捉え直すことで、地域社会の変遷と大型群集墳の発生要因を検討した。

倭王権中枢へ海産物（贄）を貢納するための王領化に際し、水陸の新しい交通路の結節点として再整備が進められた浮島沼ラグーン周辺では、渡来人も参画した複合的手工業・水産加工拠点である中原遺跡などの砂丘上の集落を拠点に、馬牧の設置や古墳群造営を目的とした愛鷹山麓の開発が進められた。

また陸路で甲信・関東と繋がる軍事的要衝でもあったため、共同体構成員には武人としての役割も求められたことが古墳副葬品から窺える。

石室規模による階層構造からは、各共同体構成員の集団は、中型上位～大型石室の指導者層を上位とするタテの構造で統率されたことが明らかである。

ただし、集団同士は没交渉的なものではなく、石室平面企画の共有状況からは、墓域の異なる集団でも、古墳構築の際にはヨコ同士の活発な繋がりがあったことが推定された。このことは、集落などの生活域において、墓域の異なる集団同士が雑多に居住していた可能性も想起させる。

千人塚古墳の被葬者像　須津古墳群のなかでは新興の墓域である神谷（須津）支群に位置する千人塚古墳は、全長 11.4 m以上の大型横穴式石室を有し、その石室規模は富士山南麓の実円寺西 1 号墳、黄瀬川流域の原分古墳に匹敵する。金銅装毛彫馬具のセットを保有する千人塚古墳の主たる被葬者は、6 世紀末頃から 7 世紀中頃の駿河東部地域を代表する「3 強」の首長の一人であったことは疑いない。少なくとも、愛鷹山南麓を墓域とした集団のなかでは傑出した指導者であったとみられ、東海・関東の境界に設置された王領の現地経営や水陸交通の管理、軍備を担った地域首長として評価できるだろう。

浮島沼ラグーン周辺のその後と古墳群の意義　7 世紀代に隆盛を極めた田子の浦砂丘上の集落は、8 世紀後葉から 9 世紀にかけてその規模を大幅に縮小させるが、貞観 6 年（864）の柏原駅の廃止（『日本三代実録』）まで、古代東海道の重要な補給拠点として機能した。吉原津は中世に吉原湊（現田子の浦港）として一層発展し、近世の宿駅制度によって東海道が設置された後も、吉原宿の海の玄関口として、宿場とは常に水運で結ばれていた。水害などの影響もあり、地域の拠点となる場所は時代によって変化したが、港湾と内水運、そして街道（東海道）を基軸として展開する経済活動や生産基盤が、当地域の飛鳥時代以降の普遍的な特徴であったといえる。

愛鷹山麓に築かれた古墳群は、それ以後の地域展開の方向性を定めた画期となる記念碑として、末永く保存・活用していく必要がある。

謝辞

本稿執筆に際し、大谷宏治、小田裕樹、菊池吉修、庄田慎矢、滝沢 誠、三舟隆之、森川 実の各氏からご教示を賜った。なお本稿は、沼津市・富士市連携事業に際し、木村 聡、佐藤祐樹の両氏との有益な議論によるところが大きい。記して深謝いたします。

註

1　一方、富士市やその前身の吉原市の市史や発掘調査報告書では、一部の論稿を除き（木ノ内 1997）、市域外となる石川古墳群以東の古墳群を積極的に議論の遡上にあげることはほとんどなかった。想像をたくましくすれば、『静岡県東部古代文化総覧』をはじめ、広く県東部の考古資料を歴史的に評価しようとした小野眞一氏の問題認識（小野 1957a）や、同じく小野も関わった『沼津長塚古墳』における後藤守一氏の「スルガの国古墳群」といった古墳群の概念（後藤 1957）が、沼津市の報告書には長らくその根底に流れていた可能性がある。

2　本稿では、一部赤澤川の西岸に及ぶ鵜無ヶ淵・間門古墳群や富士岡古墳群のほか、浮島沼を挟んで対岸の田子の浦砂丘上に展開する東田子の浦砂丘 1 古墳群、松長古墳群も補足的にその範囲に含める。なお、木ノ内義昭氏も田子の浦砂丘上の古墳も含めた範囲で「愛鷹山南麓の古墳群」として捉えている（木ノ内 1997）。

3　富士郡の郡領氏族を輩出した集団の古墳群とみられる富士南麓の伝法古墳群では、副葬品内容から、一部の中型石室の被葬者が集団の最上位層を担っていた可能性がある。

4　『日本書紀』安閑天皇 2 年（535）5 月甲寅条に、諸国への屯倉の設置記事の末尾に、駿河国へ稚贄毛倉を置くとの記事がある。

参考文献

池谷信之ほか　1985『平沼吹上遺跡発掘調査報告書』沼津市教育委員会

池谷信之・北佳奈子　2015『松長 6 号墳発掘調査報告書』沼津市教育委員会

尾上元規　1993「古墳時代鉄鏃の地域性―長頸式鉄鏃出現以降の西日本を中心として―」『考古学研究』40（1）、考古学研究会

井鍋誉之　2003「東駿河の横穴式石室」『静岡県の横穴式石室』静岡県考古学会

井鍋誉之　2006「東駿河」『東海の馬具と飾大刀』東海古墳文化研究会

井鍋誉之編　2008『原分古墳』（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所

岩原　剛　2005「東海地域の装飾付大刀と後期古墳」『装飾付大刀と後期古墳』島根県教育庁古代文化センター・島根県教育庁埋蔵文化財センター

植山英史　2020「相模地域における横穴式石室の受容と展開」土生田純之編『横穴式石室の研究』同成社

内山敏行　2018「大刀・甲冑・馬具からみた関東と東海東部の首長墓」『境界の考古学』日本考古学協会 2018 年度静岡大会研究発表資料集（鈴木一有・田村隆太郎編『韮塊山古墳と東国首長』季刊考古学・別冊 30、雄山閣、2019 年所収）

大谷宏治編　2010『富士山・愛鷹山麓の古墳群』（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所

大谷宏治ほか　2010『秋葉林遺跡Ⅱ』（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所
大谷宏治　2010a「副葬品からみた無袖石室の位相―東海～関東を中心に―」土生田純之編『東日本の無袖横穴式石室』雄山閣
大谷宏治　2010b「古墳時代後期～終末期の古墳について」『富士山・愛鷹山麓の古墳群』（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所
大谷宏治　2019「東海における古墳時代の馬文化の様相」右島和夫監修『馬の考古学』雄山閣
小野眞一　1957a『静岡県東部古代文化総覧』蘭渓社書店
小野眞一　1957b「スルガの国東部古墳群」『沼津長塚古墳』沼津市教育委員会
菊池吉修　2005「山麓の古墳と海辺の古墳」『沼津市史　通史編　原始・古代・中世』沼津市
菊池吉修　2010「駿河」土生田純之編『東日本の無袖横穴式石室』雄山閣
木ノ内義昭　1997「須津のあけぼの」鈴木富男編『郷土誌須津』富士市須津地区まちづくり会議
木村　聡編　2016『中原遺跡発掘調査報告書』沼津市教育委員会
小崎　晋・北佳奈子ほか　2017『芝荒遺跡・芝荒古墳群』沼津市教育委員会
後藤守一　1957「スルガの国古墳群」『沼津長塚古墳』沼津市教育委員会
佐藤祐樹・若林美希編　2013『富士市内遺跡発掘調査報告書―平成22・23年度―』富士市教育委員会
佐藤祐樹編　2016『伝法 中原古墳群』富士市教育委員会
佐藤祐樹　2018「駿河・遠江における古墳出現期の様相―浮島ヶ原における首長系譜を中心に―」『東海地方における古墳出現期の様相2』第30回考古学研究会東海例会
静岡県　1930『静岡県史　第1巻』
静岡県　1990『静岡県史　資料編2　考古二』
静岡県　1992『静岡県史　資料編3　考古三』
白石太一郎　1973「大型古墳と群集墳」『考古学論攷』第二冊、奈良県立橿原考古学研究所（「畿内における大型群集墳の形成過程」『古墳と古墳群の研究』塙書房　2000年所収）
志村　博編　1981『横沢古墳・中原1号墳　伝法遺跡群（伝法A～E地区）　天間地区』富士市教育委員会
志村　博ほか　2003『花川戸第2・3号墳発掘調査報告書』富士市教育委員会
杉山　潤・大川敬夫　2002『神明山4号墳発掘調査報告書』静岡市教育委員会
鈴木一有　2001「東海地方における後期古墳の特質」『第8回東海考古学フォーラム三河大会　東海の後期古墳を考える』東海考古学フォーラム
鈴木一有　2006「東海の馬具と飾大刀にみる地域性と首長権」『東海の馬具と飾大刀』東海古墳文化研究会
鈴木一有　2016「中原4号墳から出土した生産用具が提起する問題」『伝法 中原古墳群』富士市教育委員会
鈴木一有　2017「東海地方における横穴系埋葬施設の多様性」『一般社団法人日本考古学協会2017年度宮崎大会　研究発表資料集』日本考古学協会2017年度宮崎大会実行委員会
鈴木敏則　1988「まとめ」『半田山古墳群（Ⅳ中支群―浜松医科大学内―）』浜松市教育委員会
瀬川裕市郎・小池裕子　1990「畜堅魚と場形土器・覚え書き」『沼津市博物館紀要』14、沼津市歴史民俗資料館・沼津市明治史料館
滝沢　誠　2022「愛鷹山麓の後期古墳を考える」『沼津市・富士市連携事業　愛鷹山に眠る開拓者たち―東海最大級の古墳群と地域の再生』講演会動画、沼津市教育委員会
滝瀬芳之　1984「円頭・圭頭・方頭大刀について」『日本古代文化研究』創刊号、PHALANX―古墳文化研究会―
鶴田晴徳ほか　2006『石川古墳群』沼津市教育委員会
富樫孝志　2010『的場古墳群・的場遺跡』（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所
中井正幸・鈴木一有編　2008『東海の古墳風景』季刊考古学・別冊16、雄山閣
中野国雄　1958「吉原市域の古墳―スルガのクニ西部地域古墳群―」『吉原市の古墳』吉原市教育委員会
仁藤敦史　1996「駿河・伊豆の駆逸貢進」静岡県地域史研究会編『東海道交通史の研究』清文堂出版
沼津市　2002『沼津市史　資料編　考古』
橋本英将　2014「金銅装頭椎大刀の佩用者と被葬者像」『兵庫県香美町村岡　文堂古墳』太田前大学史学研究所・香美町教育委員会
土生田純之　2010「始祖墓としての古墳」『古文化談叢』第65集、九州古文化研究会
早野浩二　2008「古墳時代の鉄鋌について」『研究紀要』第9号、（財）愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センター
原秀三郎　2005「王領の設置と壬生部・膳部」『沼津市史　通史編　原始・古代・中世』沼津市
平林将信ほか　1986『富士市指定史跡　実円寺西古墳保存修理工事報告書』富士市教育委員会
平林将信ほか　1987『船津寺ノ上第1号墳　発掘調査報告書』富士市教育委員会
藤村　翔・若林美希編　2011『平成13年度　富士市内遺跡・伝法 国久保古墳』富士市教育委員会
藤村　翔・石川武男編　2013『船津古墳群Ⅱ』富士市教育委員会
藤村　翔　2013「柏原遺跡の調査成果」『富士市内遺跡発掘調査報告書―平成22・23年度―』富士市教育委員会
藤村　翔　2016「中原4号墳の横穴式石室とその歴史的意義」『伝法 中原古墳群』富士市教育委員会
藤村　翔　2017「駿河・伊豆地域における手工業技術の受容と集落動態―6・7世紀を中心に―」『東海における古墳

時代の手工業生産の展開を考える』考古学研究会東海例会（『考古学研究会シンポジウム記録 12』考古学研究会、2021 年所収）
藤村　翔　2018a「東平 1 号墳出土鉄鏃の評価と意義」『伝法東平第 1 号墳』富士市教育委員会
藤村　翔　2018b「遠江・駿河地域における群集墳分析の視角」『東海考古学展望』東海考古学展望刊行会
藤村　翔　2018c「富士山・愛鷹山南麓の古墳群との形成と地域社会の展開」『境界の考古学』日本考古学協会 2018 年度静岡大会研究発表資料集（鈴木一有・田村陸太郎編『賤機山古墳と東国首長』季刊考古学・別冊 30、雄山閣、2019 年所収）
藤村　翔　2021a「駿河国富士郡における土師器の変遷　―飛鳥時代から平安時代前半期を対象に―」『向坂鋼二先生米寿記念論集―地域と考古学Ⅱ』向坂鋼二先生米寿記念論集刊行会
藤村　翔　2021b「横穴式石室からみた群集墳の集団原理―近江・畿内地域を中心に―」古代学研究会編『群集墳研究の新視角　群集墳からみた古墳時代の社会と集団』六一書房
藤村　翔　2021c「駿河国富士郡域周辺における古代集落の構造と変遷」『古代集落の構造と変遷 1』第 24 回　古代官衙・集落研究会報告書、独立行政法人　国立文化財機構　奈良文化財研究所
松尾昌彦　2002「古墳時代東国経営の諸段階」『古墳時代東国政治史論』雄山閣
松崎元樹　2001「瀬戸岡古墳群の再検討」『東京都あきる野市天神前遺跡　瀬戸岡古墳群　上貝多遺跡　新道通遺跡　南小宮遺跡』東京都埋蔵文化財センター
渡井義彦　1988『富士市の埋蔵文化財（古墳編）』富士市教育委員会
渡井義彦　1999『船津古墳群』富士市教育委員会
渡井英誉　2021「潤井川流域における弥生～古墳時代の集落と墳墓の動態」『向坂鋼二先生米寿記念論集　地域と考古学Ⅱ』向坂鋼二先生米寿記念論集刊行会

図の出典

第 97 図　赤色立体地図：国土交通省富士砂防事務所が取得した航空レーザ測量データ（平成 31 年度以前）から作成した 1 m DEM および日本水路協会「海底地形デジタルデータ M7000 シリーズ（M7001Ver2.3 関東南部）」を使用。赤色立体地図は、この DEM をもとにアジア航測株式会社の赤色立体地図作成手法（特許 3670274、特許 4272146）を使用して、アジア航測株式会社・千葉達郎氏が作成した。以上のデータを、静岡県富士山世界遺産センター（小林淳 教授）より本図作成のために提供頂いた。
地形図：国土地理院発行　電子地形図 25000
なお、沼津市域の遺跡分布図は、沼津市文化財センターの木村聡氏より提供いただいた。

第 98・102・103 図　筆者作成

第 99 図　横沢古墳：志村編 1981（平面図再トレース）、実円寺西 1 号墳：平林ほか 1986、千人塚古墳・中里大久保古墳：本書、寺ノ上 1 号墳：平林ほか 1987、原分古墳：井鍋編 2008、赫夜姫 1 号墳・大坂上古墳：渡井 1988、石川 118 号墳・東原 1 号墳・吹上 1 号墳：沼津市 2002（石川 118 号墳、東原 1 号墳は平面図再トレース）、下土狩西 1 号墳：静岡県 1990

第 100 図　須津 J-118・6・159 号墳：大谷編 2010、中里大久保古墳・千人塚古墳：本書、大塚団地 1・2 号墳：渡井 1988

第 101 図　寺ノ上 1 号墳：平林ほか 1987、船津 L-208 ～ 216 号墳：渡井 1999、船津 L-62・207 号墳：藤村・石川編 2013

第 104 図　1・2：静岡県 1992、3・13：小崎・北ほか 2017、4・5・10・11・12：沼津市 2002、6：佐藤・若林編 2013、7：本書、8：大谷ほか 2010、9：滝瀬 1984　以上掲載図に一部加筆。

第 105 図　1：佐藤編 2016、2：藤村・若林編 2011、3：渡井 1988、4：静岡県 1930、5：本書、6：大谷編 2010、7：藤村・石川編 2013、8・9：鶴田ほか 2006、10：池谷ほか 1985、11：沼津市 2002、12：富樫 2010

第 106 図　1：中野 1958、2：渡井 1988、3・4・6・10：沼津市 2002、5：志村ほか 2003、7：須津某／静岡県 1992、中里遺東／静岡県 1930、8・11：藤村・石川編 2013、9：平林ほか 1987

第 107・108 図　木村編 2016 を基に筆者作成。

第 109 図　神明山 4 号墳：杉山・大川 2002、東原 1 号墳：沼津市 2002

第3節　千人塚古墳石室奥壁の刻文について

井上 卓哉

はじめに

須津川東側の河岸段丘上および東側丘陵の斜面一帯には、須津（神谷）古墳群として120基を越える後期古墳が確認されており[註1]、なかでも千人塚古墳は、その規模から「神谷群の主をなすもの」と考えられてきた[註2]。

さらに、千人塚古墳の石室奥壁には、「本師釋迦如来・阿弥陀如来・大日如来・薬師如来・多寶如来」の仏名が刻まれていることが確認され、『吉原市の古墳』(昭和33年)や『富士市の埋蔵文化財(古墳編)』(昭和62年)において報告されているものの、「明らかに後世のものである」として[註3]、詳細な検討はおこなわれてこなかった。

しかしながら、千人塚古墳の保存整備事業に伴い平成14年（2002）に実施された調査のなかで、既知の仏名だけではない情報も確認されたことに加え、近年では横穴式石室の転用例としても取り上げられていることから[註4]、本稿ではその制作意図や制作者について若干の検討をおこないたい。

1　石室奥壁の刻文と制作意図

千人塚古墳の石室奥壁には、**第110図**に示したように、一枚石の上部に刻まれた「∧」型の下に仏名と紀年銘として「本師釋迦如来　于時承応四乙未年六月吉日」、向かって右側に仏名として「阿弥陀如来　大日如来」、向かって左側に仏名として「薬師如来　多寶如来」の仏名、さらに判読が困難ではあるものの、多寶如来の左下に、願主あるいは施主を意味すると思われる「[　] 造之」という刻文を確認することができる。

この刻文からは、江戸時代初期の承応4年（1655）に、釈迦如来を本尊とし、阿弥陀如来・大日如来・薬師如来・多宝如来を脇侍とする何らかの宗教行為がおこなわれていた状況が伺える。

これらの仏名が選択された背景として、中岡敬善氏は、富士山頂上の火口及び、火口を取り囲むように存在する8つの峰（八峰）にあてはめられた9体の仏、つまり近世において富士山に存在すると考えられた仏と共通するものが認められることから、近

第110図　千人塚古墳　奥壁刻文と関連遺物

世の富士山信仰に関係して制作されたものではないかと指摘している[注5]。そこで、ここでは、中岡氏の指摘も踏まえながら、あらためて富士山信仰との関わりについて検討してみたい。

近世において富士山に存在すると考えられていた仏であるが、固定化されていたわけではなく、時期や信仰主体により差異が見られる。

例えば、延宝8年(1680)に吉田口で制作された『八葉九尊図』では、大日如来・阿弥陀如来・文殊菩薩・釈迦如来・普賢菩薩・薬師如来・観音菩薩・勢至菩薩・地蔵菩薩が挙げられている。このうち、如来は4体であるが、すべてが承応4年（1655）の千人塚古墳の石室奥壁に刻まれていることがわかる。

いっぽう、享保18年（1733）に大宮・村山口登山道を用いて山頂に至った中谷顧山の『富士筆記』（西尾市岩瀬文庫蔵）では、8つの峰を地蔵嶽・阿弥陀嶽・観音嶽・薬師嶽・大日嶽・浅間ヶ嶽・剣ヶ峰・雷之嶽としている。そこから比定される如来としては、阿弥陀如来・薬師如来・大日如来の3体であるが、いずれも千人塚古墳の石室奥壁に刻まれたものと一致している。

さらに、上限が宝暦8年（1758）、下限が天明年間（1781～1789）の発行と考えられる『富士山禅定図』(富士山かぐや姫ミュージアム蔵、第111・113図)では、地蔵菩薩・阿弥陀如来・観音菩薩・釈迦如来・大日如来・弥勒菩薩・薬師如来・文殊菩薩・宝生如来が挙げられている。このうち、如来は5体であるが、宝生如来を多宝如来と同一と考えると、全てが千人塚古墳の石室奥壁に刻まれたものと一致する。

最後に、断絶していた時期があるものの、元禄期から幕末まで活動した富士山南麓の村山修験の山伏、大宝院が制作し、明治時代以降に大宝院を継承した秋山家に伝来した摺物『八葉九尊図』（富士山かぐや姫ミュージアム寄託、第112図）には、富士山に存在する仏として、大日如来・薬師如来・阿弥陀如来・千手観音・十一面観音・勢至菩薩・毘沙門天・文殊菩薩・不動明王の姿が描かれている。このうち、如来は3体であるが、いずれも千人塚古墳の石室奥壁に刻まれたものである。

このように、千人塚古墳に刻まれた仏のうち、阿弥陀如来・薬師如来・大日如来は富士山の仏について取り上げた資料に登場するものであり、釈迦如来・多宝如来についても、確認することができる資料が存在していることが明らかとなった。千人塚古墳の奥壁になぜ菩薩などの仏の名が刻まれていないのかという課題はあるものの、近世の富士山信仰と何らかの関係があったうえで刻まれたものと考えることは可能であろう[注6]。

2　石室奥壁刻文の制作者

前節では、千人塚古墳の石室奥壁の刻文について、富士山信仰に関係したものである可能性を指摘した。では、どういった性格の人物が制作に携わったのだろうか。

残念ながら、願主あるいは施主の名前を刻んだと思われる部分については判読ができないため、詳細については不明である。ただし、前述の中岡氏は、像容あるいは種子を刻んでいないことから、近世の富士講との関係を指摘している。

この近世の富士講について考える場合、戦国時代から江戸時代初期にかけての時期に富士山西麓の人穴の地で修行したとされる長谷川角行にルーツを持ち、江戸を中心に流行した富士講と、富士山南麓の村山の地を拠点とした村山修験の山伏達の活動に起因する富士講とを区別する必要がある。

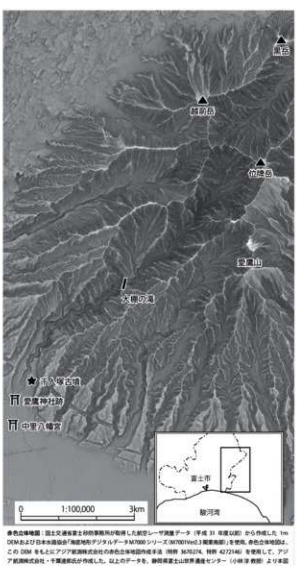
このうち、江戸を中心とする富士講の活動が活発になるのは富士講の指導者であった食行身禄が、享保18年（1733）に現在の吉田口八合目の烏帽子岩で断食入定して以降のことである。つまり、承応4年（1655）という石室奥壁の紀年銘とは時代が一致していないということ、さらに、千人塚古墳周辺の地で、富士講が組織されていたとの記録が確認されていないことから、長谷川角行にルーツを持つ富士講に関わる人物が制作したということは考えにくい。

そこで、村山修験の山伏達の活動に関連するという可能性について考えてみたい。村山修験は、富士山南麓の村山の地に所在した富士山興法寺に所属していた修験者の一派であるが、中世後期までは、村山を含めた富士郡上方地域（現在の富士宮市）に加えて、富士郡の下方地域（現在の富士市のうち、富士川以東の地域）にまでその勢力が広がっていたと想定されている[注7]。

第 111 図　富士山禅定図（部分）
【富士山かぐや姫ミュージアム蔵】

第 113 図　富士山禅定図
【富士山かぐや姫ミュージアム蔵】

第 112 図　八葉九尊図（大宝院秋山家資料）
【富士山かぐや姫ミュージアム寄託】



第 114 図　千人塚古墳と多門坊関連史跡

また、村山修験の重要な修行の一つであり、約1ヶ月に渡り富士山中で実施される富士峯修行にも、中世後期の天正年間には、富士郡の根方地区や加島地区から山伏が参加していたことが明らかとなっている[註8]。

こうした山伏の中に、当時、千人塚古墳から南に約1.3km離れた場所に所在する中里八幡宮の別当の地位にあった多門坊が含まれていた。多門坊は中里八幡宮の東側に別当屋敷を構えており、現在でも同地にお住まいの多門家に中世まで遡ることができる多門坊の資料群が遺されている。

これらの資料のうち今川義元の判物や徳川将軍家の朱印状により、多門坊は中里八幡宮周辺の支配を認められていたことが確認されている[註9]。富士山での修行をおこなうとともに、在地の支配を認められていた多門坊は、いわゆる「里修験」として、山地での修行に加えて、周辺の庶民への布教活動にも携わっていたと考えられる。

さらに、多門坊は中世後期から中里八幡宮の別当に加えて、富士山信仰とも密接に関連している愛鷹神社（現在は中里八幡宮に合祀されている）の管理もおこなっていたことが確認されている[註10]。

さて、この多門坊が別当を務めていた中里八幡宮西側の道は、須津川に沿って、合祀前の愛鷹神社、大棚の滝を経て越前岳を最高峰（標高1450m）とする愛鷹山連峰へと繋がっている。つまり、このエリアは、山伏としての多門坊の主要な活動範囲であったことが想像できる（第114図）。

こうした中で、千人塚古墳の石室が、多門坊第6代の頼翁（1617～1675）の代に、多門坊の修行の場（行場）として選択され、あるいは多門坊の檀家の人々が何らかの宗教的な活動をおこなう場所として選択され、多門坊に関わる人物によって奥壁に刻文が刻まれた可能性は十分に考えられるのではないだろうか。

おわりに

本稿では、千人塚古墳の石室奥壁に刻まれた刻文に関して、富士山信仰に関わるものである可能性と、その制作者として富士山での修行にも参加し、千人塚古墳周辺を活動エリアとしていた多門坊に関係する人物が挙げられるのではないかということを指摘した。

残念ながら、多門坊による修行の状況や、千人塚古墳周辺の行場の状況を知ることができる資料は伝来しないことから、あくまで可能性の域を出ない検討である。しかしながら千人塚古墳から発見された遺物の中には、刻文が刻まれた時期とほぼ同時期とされる陶磁器製の香炉の破片が含まれている（第110図114）。

こうした資料と、他地域の山伏による行場で用いられた祭具や祭壇の状況とを比較することにより、千人塚古墳の石室の転用に関する具体的な状況を明らかにすることが可能になると考えられる。

謝辞

本稿執筆に際し、刻文の判読や資料提供について、阿部泰郎、阿部美香、大高康正、狭川真一、中岡敬善の各氏からご教示を賜った。末筆ながら、記して謝意を表する。

註

1　富士市教育委員会　1988『富士市の埋蔵文化財（古墳編）』p107

2　吉原市教育委員会　1958『吉原市の古墳』p148

3　富士市教育委員会　1988『富士市の埋蔵文化財（古墳編）』p107

4　中岡 敬善　2021「補稿　横穴式石室と横穴墓の転用に関する一考察 - 石仏と種字が彫られた関東・近畿地方の転用例について」『市民の古代研究【古代の風】第304号』

5　前掲註4

6　阿部泰郎氏、阿部美香氏からは、釈迦如来・薬師如来・阿弥陀如来という過去現在未来の三世仏と密教の大日如来、法華経の多宝如来という組み合わせから、もっとも初期の富士行者とのかかわりを示唆するものであるとの指摘をいただいた。

7　大高 康正　2013『富士山信仰と修験道』p304

8　前掲註6、p302

9　前掲註6、p305

10　前掲註6、p304

第6章　総　括

1　千人塚古墳

墳　丘　千人塚古墳は開墾によって周囲を大きく削られていたが、墳丘の北側と西側で周溝の一部が検出された。周溝の位置と幅から、墳丘は直径約21.0m、周溝幅約3.0mの円墳と推定できる。

石　室　千人塚古墳の埋葬施設は、南南東に開口する無袖形横穴式石室である。前庭部を含めた全長11.4m以上、奥壁幅1.55m、中央部最大幅2.05mで、石室高は中央部2.35m、開口部1.51mを測る。天井高をやや高くすることで、奥壁側を「玄室」的な空間として設計している。床面には組合式箱形石棺3基が設置され、全面に礫床が敷かれるが、近世に石棺石材が抜き取られている。奥壁側の石棺1は推定外法長2.2m、同幅0.8～1.1mを測る。

出土遺物　石室内から装身具、武器、工具、釘、馬具、土器などの遺物が出土した。2組の馬具のうち、轡は横長心葉形轡に金銅製吊金具が付くものであり、仏教意匠とみられる毛彫文様が施される。分布や類例から、倭王権により生産され、東日本の有力者層に配布された優品であった可能性が高い。また鐙吊金具には明瞭な補修痕がみとめられた。

被葬者像　千人塚古墳の被葬者は、倭王権との関係が想定できる特異な横長心葉形轡と鉸具造立聞轡を保有し、墳丘・石室規模ともに7世紀中葉の古墳としては駿河東部地域で最大規模を誇る。また愛鷹山南麓に展開した1,000基以上の古墳からなる愛鷹山古墳群の分析を通じて、この古墳群の被葬者集団が、浮島沼ラグーン沿岸に倭王権によって設置された海産物の貢納拠点を運営し、愛鷹山麓の馬牧や田子の浦砂丘上の複合的生産集落の開発を推進したことを推定した。愛鷹山古墳群の集団でも最上位の有力者である千人塚古墳の被葬者は、東海・関東の境界の本地域に設置された王領の経営や水陸交通の管理、軍備を担った地域首長として評価できる。

近世の再利用　千人塚古墳の横穴式石室の奥壁には、江戸時代前期の承応4年（1655）に仏名が刻まれている。仏名の配置や香炉などの出土遺物から、石室内において釈迦如来を本尊、阿弥陀如来・大日如来・薬師如来・多宝如来を脇侍とする富士山信仰に関わる宗教行為が行われていた可能性がある。制作者は、村山修験の富士峯修行にも参加し、千人塚古墳周辺の愛鷹山麓を活動エリアとしていた中里八幡宮の別当・多門坊の関係者の可能性がある。

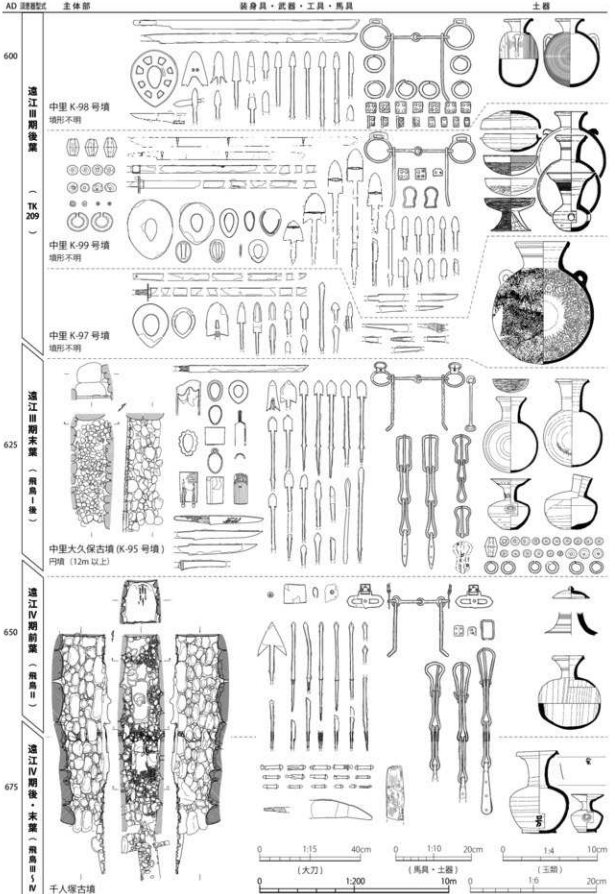
2　中里K支群の出土遺物

中里大久保古墳（K-95号墳）　石室内から装身具、大刀、鉄鏃、馬具、土器が出土した。装飾付大刀は2振存在したとみられ、圭頭柄頭は蟹目釘付鞘尻金具に伴うものと推定した。2組の馬具のうち、鉸具造立聞轡は立聞部が補修された可能性がある。被葬者は全長6.0m以上の大型横穴式石室に、圭頭大刀、複数組の馬具を保有する点から、7世紀前葉に中里支群の集団を統率した指導者とみられる。

中里K-97・98・99号墳　『旧報告』では一部の遺物しか報告されていなかったが、今回初めて遺物の全容を明らかにすることが出来た。特にK-98号墳の馬具は、轡に補修の可能性があるほか、伝統的な組合式環状辻金具を用いた面繋馬装に復元できる可能性があることが判明した。また須津古墳群の被葬者集団は、その馬具副葬率の高さから、馬匹生産を実際に行った主体であったとみてよい。平時においては馬匹生産・飼養や馬匹を利用した運搬・交易活動に従事し、有事においては騎兵として勇猛果敢に活躍する武人集団でもあったと考えられる。

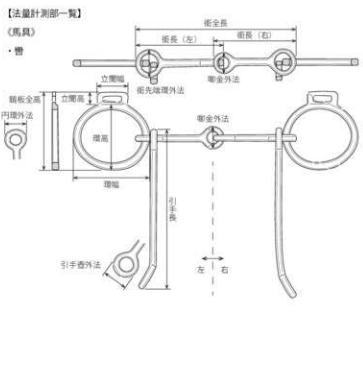
3　須津古墳群の歴史的意義

須津古墳群の千人塚古墳と中里K支群の分析を通して、大型群集墳である愛鷹山古墳群の重層的な集団構造の一旦を明らかに出来た意義は大変大きく、王領化を契機とする群集墳造営は、全国的なモデルにもなり得る素材である。また浮島沼ラグーンを舞台に、港湾・内水運・街道（東海道）を基軸として展開した経済活動は、古墳群が造営された7世紀に本格化した後、近世まで一貫し続けた当地域の大きな特色でもある。須津古墳群はその歴史的な記念碑として、永く保存・活用していく必要がある。



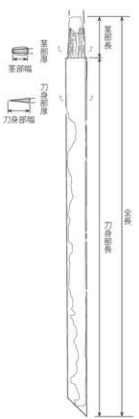
第 115 図　本書で報告した須津古墳群の遺構と遺物

出土遺物観察表

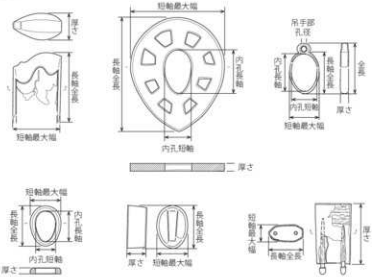

【法量計測部一覧】
《馬具》
・轡
銜全長
銜長（左）
銜長（右）
立聞幅
銜先端環外法
鏡板全高
立聞高
円環外法
環高
環幅
引手長
引手壺外法
左
右
・鐙吊金具
尻幅
鉸具長
剣金長
基部幅
兵庫鎖長①
兵庫鎖全長
兵庫鎖幅①
兵庫鎖長②
兵庫鎖幅②
吊金具幅
吊金具全長
全長
・帯飾金具
厚さ
長さ
全長
幅
・鉸具
尻幅
長さ
最小幅
基部幅
厚さ
・円形金具
幅
長さ
厚さ
・責金具・帯飾金具
幅
高さ
長さ
幅
厚さ

《武器》

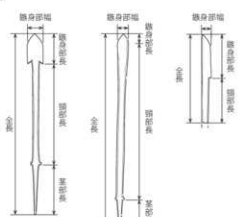
・大刀



・刀装具



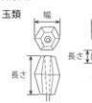
・鉄鏃



・弓金具

《装身具》

・玉類



・耳環

《工具》

・刀子

【千人塚古墳　出土遺物観察表】

《装身具》

・玉類

報告番号	挿図番号	図版番号	器種	出土位置	出土層位	素材	法量（mm） 長さ	径/幅	孔径	製作技法	色調	重量（g）	備考
1	第31図	PL.23	ガラス丸玉	石室内	開口部付近ふるい	ガラス	7.3	1.18	0.30～0.33	巻き付け技法？	濃緑不透明	1.37	

《武器》

・刀装具

報告番号	挿図番号	図版番号	器種	出土位置	出土層位	法量（cm） 長軸全長	短軸最大幅	厚	内孔 長軸	内孔 短軸	重量（g）	備考
2	第31図	PL.23	鞘口金具	石室内	堆積土中開口部付近	3.5	2.0	3.1	3.25	1.85	8.97	
3	第31図	PL.23	大刀鞘の責金具	石室内	堆積土中	(1.7)	0.8	0.25			0.39	

・大刀

報告番号	挿図番号	図版番号	部位	出土位置	出土層位	法量（cm） 全長	刀部 長	刀部 幅	刀部 厚	茎部 長	茎部 幅	茎部 厚	重量（g）
4	第31図	PL.23	茎部	開口部付近	堆積土中ふるい	(2.9)	-	-	-	(2.9)	-	-	9.07

・鉄鏃

報告番号	挿図番号	図版番号	形式（部位）	出土位置	出土層位	法量（cm） 全長	鏃身部 長	鏃身部 幅	鏃身部 厚	頸部 長	頸部 幅	頸部 厚	茎部 長	茎部 幅	茎部 厚	重量（g）
5	第32図	PL.23	平根腸挟三角	石室内	礫の間	(8.8)	(3.3)	(3.1)	0.4	4.1	0.6	0.35	(1.4)	0.4	0.35	17.03
6	第32図	PL.23	尖根腸箆	石室内		14.2	0.3	0.6	0.15	8.9	0.4	0.35	5.0	0.35	0.3	10.23
7	第32図	PL.23	尖根腸箆	開口部側	清掃中ふるい	(11.2)	(0.4)	0.7	0.2	8.7	0.5	0.35	(2.1)	0.35	0.3	10.04
8	第32図	PL.23	尖根腸箆	石室内	礫の間	(15.3)	0.5	0.6	0.15	8.6	0.45	0.3	(6.3)	0.35	0.3	11.31
9	第32図	PL.23	尖根腸箆	石室内	礫の間	(13.9)	0.5	0.8	0.2	8.7	0.4	0.3	(4.7)	0.3	0.25	9.71
10	第32図	PL.23	尖根腸箆	石室内	床直上	(11.7)	(0.4)	0.7	0.2	8.8	0.4	0.3	(2.9)	0.4	0.3	9.22
11	第32図	PL.23	尖根腸箆	開口部付近	堆積土中ふるい	(2.6)	0.6	0.8	0.25	(2.0)	0.5	0.25	-	-	-	1.55
12	第32図	PL.23	尖根腸箆	開口部付近	堆積土中ふるい	(2.6)	0.6	0.75	0.2	(2.0)	0.4	0.25	-	-	-	1.04
13	第32図	PL.23	尖根腸箆	石室内	床直上	(7.3)	-	-	-	(7.3)	0.3	0.3	-	-	-	3.49
14	第32図	PL.23	尖根片刃箭	石室内	礫床上	(8.0)	3.3	0.7	0.2	(4.7)	0.3	0.3	-	-	-	3.64
15	第32図	PL.23	尖根片刃箭	不明		(4.6)	3.1	0.7	0.15	(1.5)	0.5	0.25	-	-	-	2.68
16	第32図	PL.23	尖根片刃箭	不明		(4.8)	(2.0)	0.65	0.15	(2.8)	0.35	0.2	-	-	-	2.32
17	第32図	PL.23	尖根片刃箭	石室内	奥壁側礫床清掃中ふるい	(4.9)	(0.9)	0.55	0.2	(4.0)	0.4	0.25	-	-	-	3.10
18	第32図	PL.23	頸部	石室内	奥壁礫床上	(10.3)	-	-	-	(10.3)	0.4	0.35	-	-	-	9.26
19	第32図	PL.23	頸部	不明		(5.2)	-	-	-	(5.2)	0.6	0.25	-	-	-	3.65
20	第32図	PL.23	頸部	開口部側	石榴埋土ふるい	(2.2)	-	-	-	(2.2)	0.5	0.25	-	-	-	1.52
21	第32図	PL.23	頸部	石室内	礫の間	(3.4)	-	-	-	(3.4)	0.6	0.2	-	-	-	1.97
22	第32図	PL.23	頸部	不明		(3.6)	-	-	-	(3.6)	0.3	0.2	-	-	-	1.19
23	第32図	PL.23	頸部	石室内	床直上	(7.4)	-	-	-	(7.4)	0.4	0.2	-	-	-	3.97
24	第32図	PL.23	平根？頸部	不明		(2.3)	-	-	-	(2.3)	0.6	0.25	-	-	-	3.62
25	第32図	PL.23	頸部	石室内	奥壁礫床上	(5.2)	-	-	-	(5.2)	0.5	0.2	-	-	-	3.19
26	第32図	PL.23	頸部	石室内	奥壁側礫床清掃中ふるい	(1.8)	-	-	-	(1.8)	0.35	0.25	-	-	-	1.13
27	第32図	PL.23	頸部	不明		(3.2)	-	-	-	(3.2)	0.4	0.3	-	-	-	1.50
28	第32図	PL.23	頸部	不明		(3.2)	-	-	-	(3.2)	0.3	0.2	-	-	-	1.29
29	第32図	PL.23	頸部	開口部側	石榴埋土ふるい	(2.8)	-	-	-	(2.8)	0.5	0.25	-	-	-	1.43
30	第32図	PL.23	頸部	石室内	奥壁側礫床清掃中ふるい	(3.9)	-	-	-	(3.9)	0.5	0.25	-	-	-	2.38
31	第32図	PL.23	頸部～茎部	石室内	奥壁礫床上	(10.2)	-	-	-	(7.6)	0.35	0.25	(2.6)	0.4	0.3	7.44
32	第32図	PL.23	頸部～茎部	開口部付近	堆積土中ふるい	(3.8)	-	-	-	(3.4)	0.35	0.3	(0.4)	0.5	0.4	2.61
33	第32図	PL.23	頸部～茎部	開口部付近	堆積土中ふるい	(3.2)	-	-	-	(1.8)	0.6	(0.25)	(1.4)	0.35	0.25	1.45
34	第32図	PL.23	頸部～茎部	不明		(6.4)	-	-	-	(3.6)	0.3	0.2	(2.8)	0.3	0.3	3.05
35	第32図	PL.23	頸部～茎部	不明		(6.8)	-	-	-	(3.9)	0.3	0.25	(2.9)	0.5	0.25	5.35
36	第32図	PL.24	頸部～茎部	石室内	奥壁礫床上	(8.3)	-	-	-	(6.1)	0.3	0.25	(2.2)	0.3	0.25	5.96
37	第32図	PL.24	頸部～茎部	石室内	床直上　抜き取られた石榴材の下より検出	(11.6)	-	-	-	(6.8)	0.5	0.35	4.8	0.25	0.25	8.82
38	第32図	PL.24	頸部～茎部	石室内	床直上　抜き取られた石榴材の下より検出	(9.5)	-	-	-	(4.8)	0.35	0.3	4.7	0.25	0.2	4.94
39	第32図	PL.24	茎部	不明		(1.8)	-	-	-	-	-	-	(1.8)	0.25	0.25	0.55
40	第32図	PL.24	茎部	不明		(3.7)	-	-	-	-	-	-	(3.7)	0.3	0.25	1.21
41	第32図	PL.24	茎部	開口部付近	堆積土中ふるい	(2.5)	-	-	-	-	-	-	(2.5)	0.3	0.25	0.82
42	第32図	PL.24	茎部	石室内	礫の間	(4.1)	-	-	-	-	-	-	(4.1)	0.35	0.2	1.07
43	第32図	PL.24	茎部	不明		(2.3)	-	-	-	-	-	-	(2.3)	0.3	0.2	1.07
44	第32図	PL.24	茎部	不明		(3.9)	-	-	-	-	-	-	(3.9)	0.25	0.2	1.35
45	第32図	PL.24	茎部	不明		(2.6)	-	-	-	-	-	-	(2.6)	0.35	0.3	2.18
46	第32図	PL.24	茎部	不明		(3.2)	-	-	-	-	-	-	(3.2)	0.4	0.4	1.71

報告番号	挿図番号	図版番号	形式（部位）	出土位置	出土層位	法量（cm） 全長	鏃身部 長	鏃身部 幅	鏃身部 厚	頸部 長	頸部 幅	頸部 厚	茎部 長	茎部 幅	茎部 厚	重量（g）
47	第32図	PL.24	茎部	不明		(2.2)	-	-	-	-	-	-	(2.2)	0.4	0.25	1.02
48	第32図	PL.24	茎部	石室内	奥壁側礫床清掃中ふるい	(3.2)	-	-	-	-	-	-	(3.2)	0.35	0.3	0.71
49	第32図	PL.24	茎部	石室内	礫床上	(5.0)	-	-	-	-	-	-	(5.0)	0.25	0.25	1.81
50	第32図	PL.24	茎部	開口部付近	堆積土中ふるい	(3.5)	-	-	-	-	-	-	(3.5)	0.35	0.3	1.80
51	第32図	PL.24	茎部	不明		(4.7)	-	-	-	-	-	-	(4.7)	0.3	0.3	1.99
52	第32図	PL.24	茎部	不明		(2.5)	-	-	-	-	-	-	(2.5)	0.25	0.25	0.50
53	第32図	PL.24	茎部	開口部側	石榴埋土ふるい	(2.4)	-	-	-	-	-	-	(2.4)	0.35	0.25	0.98

・弓金具

報告番号	挿図番号	図版番号	出土位置	出土層位	法量（cm） 全長	弓幅	鉄状部径	材質	重量（g）	備考
54	第34図	PL.24	石室内	奥壁側礫床清掃中ふるい	3.5	(2.4)	0.5	鉄	2.75	
55	第34図	PL.24	不明		(2.8)	(2.4)	0.55	鉄	1.68	
56	第34図	PL.24	開口部付近	堆積土中ふるい	(3.2)	2.2	0.5	鉄	2.33	
57	第34図	PL.24	開口部付近	堆積土中ふるい	3.2	2.2	0.55	鉄	2.48	
58	第34図	PL.24	石室内	奥壁礫床上	2.9	2.2	0.45	鉄	2.10	
59	第34図	PL.24	石室内	奥壁側礫床清掃中ふるい	2.7	2.0	0.5	鉄	1.68	
60	第34図	PL.24	開口部側	石榴埋土ふるい	(3.1)	(2.0)	0.5	鉄	1.79	
61	第34図	PL.24	石室内	奥壁側礫床清掃中ふるい	(2.8)	(1.9)	0.5	鉄	1.85	
62	第34図	PL.24	開口部側	石榴埋土ふるい	2.5	1.7	0.4	鉄	1.04	
63	第34図	PL.24	開口部側	石榴埋土ふるい	2.2	1.6	0.35	鉄	0.91	
64	第34図	PL.24	石室内	奥壁礫床上	2.5	1.6	0.5	鉄	1.29	
65	第34図	PL.24	石室内	奥壁礫床上	(2.4)	1.6	0.4	鉄	0.99	
66	第34図	PL.24	石室内	奥壁礫床上	2.5	1.5	0.4	鉄	1.15	
67	第34図	PL.24	石室内	奥壁礫床上	(1.4)	(1.0)	0.45	鉄	0.57	
68	第34図	PL.24	石室内	奥壁礫床上	(1.2)	(0.9)	0.4	鉄	0.56	
69	第34図	PL.24	不明		(2.0)	-	-	-	0.39	

《工具・緊結金具》

・砥石

報告番号	挿図番号	図版番号	出土位置	出土層位	法量（cm） 全長	幅	厚	重量（g）	備考
70	第35図	PL.24	石室内	堆積土中	(8.6)	3.05	2.70	108.47	

・鎌

報告番号	挿図番号	図版番号	出土位置	出土層位	法量（cm） 全長	刀部幅	刀部厚	重量（g）	備考
71	第35図	PL.24	石室内	堆積土中	(10.3)	2.9	0.15	13.38	

・刀子

報告番号	挿図番号	図版番号	部位	出土位置	出土層位	法量（cm） 全長	刀部 長	刀部 幅	刀部 厚	茎部 長	茎部 幅	茎部 厚	重量（g）	備考
72	第35図	PL.24	茎部	石室内	床直上	(3.6)	-	-	-	(3.6)	0.6	0.2	1.82	

・釘

報告番号	挿図番号	図版番号	出土位置	出土層位	全長（cm）	重量（g）	備考
73	第35図	PL.24	開口部側	石榴埋土ふるい	2.9	1.11	

《馬具》

・轡

報告番号	挿図番号	図版番号	分類	出土位置	出土層位		法量（cm） 全長	銜 長	銜 銜金先端外法	銜 街先端外法	鏡板 全高	鏡板 心葉幅	鏡板 心葉高	鏡板 厚さ	立聞 高	立聞 幅	立聞 孔長辺	立聞 孔短辺	引手 長さ	引手 街側端外法	引手 茎外法	重量（g）
74	第36図	PL.25	心葉形轡	石室内		左	14.1	7.7	2.1	3.0	4.8	(9.8)	3.5	0.2	1.3	3.5	2.4	0.3	14.4	2.3	3.3	264.48
						右		7.6	2.0	2.9	4.6	10.0	3.5	0.2	1.1	3.8	2.4	0.3	14.3	2.4	3.4	

・帯飾金具

報告番号	挿図番号	図版番号	出土位置	出土層位	法量（cm） 全長	長さ	幅	厚さ	鋲間隔	鋲間高	鋲数	重量（g）	備考
74a	第36図	PL.25			2.5	2.0	2.7	0.3	2.5	1.5	3		
74b	第36図	PL.25			2.6	2.0	2.7	0.3	2.5	1.5	3		
75	第36図	PL.25				(2.6)	(1.0)	0.25	0.4	0.1	(2)	2.30	鉄製
76	第36図	PL.25	石室内			(2.2)	(1.7)	0.6	0.5	0.33	2	2.14	金銅製

・腹帯金具

報告番号	挿図番号	図版番号	出土位置	出土層位	法量（cm） 全長	幅	厚さ	重量（g）	備考
77	第 36 図	PL.25	石室内	礫の間	5.2	3.3	0.4	10.31	

・鐙吊金具

報告番号	挿図番号	図版番号	出土位置	出土層位	法量（cm） 全長	鞍具 長さ	鞍具 基部幅	鞍具 尻幅	兵庫鎖 全長	兵庫鎖 長さ	吊金具 幅	吊金具 全長	吊金具 幅	鋲数	重量（g）
78	第 36 図	PL.26			(31.0)	9.3	1.8	5.2	21.2	①11.0 ②11.9	①2.9 ②3.0	(3.9)	(1.3)		347.44
79	第 37 図	PL.25・26	石室内	壁際の礫の間 石積材の上	44.0	10.5	1.7	4.7	23.5	①12.6 ②12.5	①2.6 ②2.4	13.7	2.6 （最大幅）	(4)	377.29
80	第 37 図	PL.26	石室内		(36.2)	10.8	2.0	4.7	23.3	①12.5 ②12.5	①2.6 ②2.9	(5.7)	1.7	(1)	343.76

《土器》

報告番号	挿図番号	図版番号	種別	器種	出土位置	出土層位	法量（cm） 口径	底径	器高	つまみ径	つまみ高	内面色調 外面色調	焼成	残存率	備考
81	第 38 図	PL.27	須恵器	蓋	石室内	床直上	9.6		3.1	1.6	1.1	10YR6/1 褐灰 5Y5/2 灰オリーブ	良好	100%	
82	第 38 図	—	須恵器	坏蓋	石室内	堆積土中						5Y6/1 灰 5Y6/1 灰	良好	(25%)	
83	第 38 図	—	須恵器	有台坏身	石室内	堆積土中						N6/ 灰 N6/ 灰	良好	-	
84	第 38 図	PL.27	須恵器	高坏脚部	石室内	堆積土中						10YR6/1 褐灰 10YR6/1 褐灰	良好	(20%)	
85	第 38 図	PL.27	須恵器	フラスコ瓶	石室内	床直上	8.0		19.4			2.5Y7/1 灰白 2.5Y7/1 灰白	良好	85%	
86	第 38 図	PL.27	須恵器	長頸壺	石室内	床直上	10.5	9.1	21.7			2.5Y7/1 灰白 2.5Y7/2 灰黄	良好	100%	墨書2ヶ所 窯記号あり
87	第 38 図	PL.27	須恵器	甕	石室内	床直上	8.0	5.1	10.1			10YR7/1 灰白 10YR7/1 灰白	良好	100%	
88	第 38 図	PL.28	須恵器	甕	石室内	堆積土中						2.5Y7/1 灰白 2.5Y7/1 灰白	良好	-	
89	第 38 図	PL.28	須恵器	甕	石室内	堆積土中						2.5Y7/1 灰白 2.5Y7/1 灰白	良好	-	
90	第 38 図	PL.27	須恵器	甕	石室内	堆積土中						10YR6/1 褐灰 10YR6/1 褐灰	良好	-	
91	第 38 図	PL.28	須恵器	甕	石室内	堆積土中						2.5Y7/1 灰白 2.5Y7/1 灰白	良好	-	
92	第 38 図	PL.28	須恵器	甕	石室内	堆積土中						2.5Y7/1 灰白 5Y7/2 灰黄	良好	-	
93	第 38 図	PL.28	須恵器		石室内	堆積土中						N6/ 灰 2.5Y6/4 にぶい黄	良好	-	
94	第 38 図	PL.28	須恵器	甕	石室内	堆積土中						2.5Y5/1 黄灰 2.5Y6/1 黄灰	良好	-	
95	第 38 図	PL.28	須恵器	甕	石室内	堆積土中						2.5Y5/1 黄灰 7.5Y4/1 灰	良好	-	
96	第 38 図	PL.28	須恵器	甕	石室内	堆積土中						2.5Y5/1 黄灰 2.5Y5/1 黄灰	良好	-	
97	第 38 図	PL.28	須恵器	甕	石室内	堆積土中						N5/ 灰 N5/ 灰	良好	-	
98	第 38 図	PL.28	須恵器	甕	石室内	堆積土中						2.5Y7/2 灰黄 2.5Y7/2 灰黄	良好	-	
99	第 38 図	PL.28	須恵器	甕	石室内	堆積土中						N5/ 灰 N5/ 灰	良好	-	
100	第 38 図	—	須恵器	坏蓋	前庭部 トレンチ							2.5Y6/1 黄灰 2.5Y6/1 黄灰	良好	-	
101	第 38 図	—	須恵器	坏蓋	前庭部 トレンチ							2.5Y7/2 灰黄 2.5Y7/2 灰黄	良好	-	
102	第 38 図	—	須恵器	蓋	前庭部 トレンチ							2.5Y6/1 黄灰 2.5Y6/1 黄灰	良好	-	
103	第 38 図	—	須恵器	坏身	前庭部 トレンチ							2.5Y7/1 灰白 2.5Y7/1 灰白	良好	-	
104	第 38 図	—	須恵器	有台坏身	前庭部 トレンチ			[10.0]	(2.1)			2.5Y7/1 灰白 2.5Y6/1 黄灰	良好	(25%)	
105	第 38 図	—	須恵器	高坏	前庭部 トレンチ							2.5Y7/2 灰黄 2.5Y7/2 灰黄	良好	-	
106	第 38 図	—	須恵器	高坏	前庭部 トレンチ							5Y5/2 灰オリーブ 2.5Y7/1 灰白	良好	-	
107	第 38 図	—	須恵器	壺	前庭部 トレンチ							2.5Y6/2 灰黄 2.5Y7/2 灰黄	良好	-	
108	第 38 図	PL.28	須恵器	甕	前庭部							2.5Y6/1 黄灰 N3/ 暗灰	良好	-	
109	第 38 図	PL.28	須恵器	甕	前庭部							2.5Y7/1 灰白 2.5Y6/1 黄灰	良好	-	
110	第 38 図	PL.28	土師器	高坏	前庭部							7.5YR6/4 にぶい橙 2.5YR4/8 赤褐	良好	-	赤彩

《その他の金属》

報告番号	挿図番号	図版番号	時代	種別	出土位置	出土層位	法量（cm）									重量(g)
							全長	刀部 長	刀部 幅	刀部 厚	茎部 長	茎部 幅	茎部 厚	径	厚	
111	第39図	PL.28	古代以降	包丁	石室内	堆積土中	(19.7)	(6.5)	3.5	0.6	3.8	1.5	0.4			99.74
112	第39図	PL.28	古代以降	キセル	石室内	堆積土中	(4.2)									3.93
113	第39図	PL.28	古代以降	銭	石室内	堆積土中								2.3	0.1	1.89

《陶器》

報告番号	挿図番号	図版番号	時代	器種	出土位置	出土層位	法量（cm）			内面色調	外面色調	焼成	残存率
							口径	底径	器高				
114	第39図	PL.28	古代以降	鉢	石室内 前庭部トレンチ	石棺埋土堆積土中	〔14.7〕	〔10.4〕	7.4	5YR5/4 にぶい赤褐	2.5Y6/4 にぶい黄	良好	50%
115	第39図	PL.28	古代以降	甕	石室内	堆積土中				2.5Y6/1 黄灰	2.5YR4/1 赤灰	良好	-
116	第39図	PL.28	古代以降	甕	石室内	堆積土中				2.5Y5/1 黄灰	5YR3/2 暗赤褐	良好	-
117	第39図	PL.28	古代以降	甕	石室内	堆積土中				2.5Y6/1 黄灰	5YR4/2 灰褐	良好	-
118	第39図	PL.28	古代以降	甕	石室内	堆積土中				5Y6/1 灰	2.5YR4/2 灰赤	良好	-

【中里大久保古墳（中里 K-95 号墳）　出土遺物観察表】

《装身具》

・玉類

報告番号	挿図番号	図版番号	形式	素材	法量（mm）			製作技法	色調	重量(g)	旧報告書		備考
					長さ	径/幅	孔径				挿図	写真図版	
1	第47図	PL.29	切子玉	水晶	20.20	13.05	最小 1.55 最大 3.60	片面穿孔		4.37	第5図7	-	
2	第47図	PL.29	ガラス丸玉	ガラス	(5.0)	(9.5)	4.1		淡黄不透明	0.40	第5図8	-	一部欠損
3	第47図	PL.29	ガラス丸玉	ガラス	7.3	8.9 ～ 9.1	2.0		灰白不透明	1.52	第5図14	-	
4	第47図	PL.29	ガラス丸玉	ガラス	7.0	8.8 ～ 9.3	2.4	引き伸ばし？	濃青色透明（暗）	0.89	第5図9	-	
5	第47図	PL.29	ガラス丸玉	ガラス	6.4	7.5 ～ 7.8	2.0	引き伸ばし？	濃青色透明（暗）	0.58	第5図11	-	
6	第47図	PL.29	ガラス丸玉	ガラス	5.4	8.0 ～ 8.5	2.0	引き伸ばし	濃青色透明	0.59	第5図12	-	
7	第47図	PL.29	ガラス丸玉	ガラス	5.0	8.0 ～ 8.7	2.0	引き伸ばし	濃青色透明	0.53	第5図13	-	
8	第47図	PL.29	ガラス丸玉	ガラス	7.2	8.0 ～ 8.7	1.8	引き伸ばし	濃青色透明（暗）	0.74	第5図15	-	
9	第47図	PL.29	ガラス丸玉	ガラス	6.5	7.6 ～ 8.4	2.2	引き伸ばし	濃青色透明	0.63	第5図16	-	
10	第47図	PL.29	ガラス丸玉	ガラス	6.3	8.2 ～ 9.0	2.5	引き伸ばし	濃青色透明（暗）	0.68	第5図17	-	
11	第47図	PL.29	ガラス丸玉	ガラス	6.5	7.8 ～ 9.0	2.0	引き伸ばし	濃青色透明（暗）	0.72	第5図18	-	
12	第47図	PL.29	ガラス丸玉	ガラス	7.3	7.3 ～ 8.1	2.0	引き伸ばし	濃青色透明（暗）	0.70	第5図19	-	
13	第47図	PL.29	ガラス丸玉	ガラス	6.8	7.5 ～ 8.5	2.0	引き伸ばし	濃青色透明（暗）	0.73	第5図20	-	
14	第47図	PL.29	ガラス丸玉	ガラス	6.7	8.0 ～ 8.7	1.7	引き伸ばし	濃青色透明（暗）	0.75	第5図21	-	
15	第47図	PL.29	ガラス丸玉	ガラス	6.6	8.5 ～ 9.3	1.8	引き伸ばし	濃青色透明（暗）	0.83	第5図22	-	
16	第47図	PL.29	ガラス丸玉	ガラス	7.4	6.8 ～ 7.1	1.5	引き伸ばし	濃青色透明（暗）	0.58	第5図23	-	
17	第47図	PL.29	ガラス丸玉	ガラス	5.5	5.6 ～ 6.0	1.6	引き伸ばし	濃青色透明（暗）	0.24	第5図24	-	
18	第47図	PL.29	ガラス丸玉	ガラス	9.2	10.5 ～ 11.8	3.0	引き伸ばし？	暗オリーブ灰透明	1.46	第5図10	-	
19	第47図	PL.29	ガラス丸玉	ガラス	8.3	11.1	2.0	巻き付け？	濃青色透明（暗）	1.47	第5図25	-	
20	第47図	PL.29	ガラス丸玉	ガラス	8.9	11.0 ～ 11.5	2.0 ～ 2.5	巻き付け？	濃青色透明（暗）	1.51	第5図26	-	
21	第47図	PL.29	ガラス小玉	ガラス	1.7	3.0	0.8	引き伸ばし	淡青色透明	0.03	第5図29	-	
22	第47図	PL.29	ガラス小玉	ガラス	1.7	3.2 ～ 3.4	1.0	引き伸ばし	淡青色透明	0.03	第5図30	-	
23	第47図	PL.29	ガラス小玉	ガラス	2.2	2.9	0.8	引き伸ばし	淡青色透明	0.03	第5図33	-	
24	第47図	PL.29	ガラス小玉	ガラス	2.3	3.7	1.2 ～ 1.5	鋳型？	濃青色透明	0.04	第5図27	-	
25	第47図	PL.29	ガラス小玉	ガラス	3.0	3.7	0.9	鋳型？	濃青色透明	0.06	第5図28	-	
26	第47図	PL.29	ガラス小玉	ガラス	2.6	3.6	1.0	鋳型？	濃青色透明	0.04	第5図31	-	
27	第47図	PL.29	ガラス小玉	ガラス	2.6	3.7	1.0	鋳型？	濃青色透明	0.05	第5図32	-	

・耳環

報告番号	挿図番号	図版番号	法量（cm）			重量(g)	旧報告書		備考
			全長	幅	厚さ		挿図	写真図版	
28	第47図	PL.29	2.0	2.2	0.68	10.40	第5図1	図版第5　B	鈴地？　金銅アマルガム
29	第47図	PL.29	2.1	2.3	0.70	11.03	第5図2	図版第5　B	鈴地　金銅アマルガム
30	第47図	PL.29	1.9	2.0	0.56	2.25	第5図3	図版第5　B	銅地　金被せ
31	第47図	PL.29	2.0	2.1	0.55	2.19	第5図4	図版第5　B	銅地　金被せ
32	第47図	PL.29	2.1	2.3	0.41	5.60	第5図5	図版第5　B	銅地　金被せ
33	第47図	PL.29	1.95	2.2	0.38	4.74	第5図6	図版第5　B	銅地？　銀被せ

《武器》

・刀装具

報告番号	挿図番号	図版番号	形式	法量（cm）						重量(g)	旧報告書		備考
				長軸全長	短軸最大幅	厚さ	内孔長軸	内孔短軸	吊手部孔径		挿図	写真図版	
34	第48図	PL.30	圭頭柄頭	(5.5)	3.9	2.1				17.82	第6図2	図版第6　B	覆輪：金銅製、平：銀製
35	第48図	PL.30・31	花形切羽金具	(3.9)	(2.2)	0.16	(2.75)	(1.1)		1.99	第6図3	図版第6　C	金銅装（鉄地）
36	第48図	PL.30・31	小型鍔	3.75	3.09	0.8	1.84	1.45		12.96	第6図10	図版第6　C	

報告番号	挿図番号	図版番号	形式	法量（cm） 全長	法量（cm） 最大幅	法量（cm） 厚さ	法量（cm） 内孔長軸	法量（cm） 内孔短軸	法量（cm） 吊手部孔径	重量（g）	旧報告書 挿図	旧報告書 写真図版	備考
37	第 48 図	PL.30・31	貨金具	3.35	2.44	0.5	2.51	1.62		10.70	第 6 図 5	図版第 6 C	金銅装（鉄地）
38	第 48 図	PL.30・31	貨金具	3.07	2.1	0.4	2.88	1.87		2.15	第 6 図 4	図版第 6 C	金銅装（鉄地？）
39	第 48 図	PL.30・31	足金具	(1.9)	(2.3)	0.65	(1.0)	(2.0)	0.5	3.36	第 6 図 6	図版第 6 C	一部行方不明　金銅装（鉄地）
40	第 48 図	PL.30	足金具	(4.4)	(1.1)	0.5				2.41	-	-	鑢子の可能性あり
41	第 48 図	PL.30・31	鞆口金具	3.1	2.1	2.7	2.9	1.8		9.45	第 6 図 7	図版第 6 C	金銅製
42	第 48 図	PL.30	鐶 or 貨金具	(0.5)	(1.3)	0.4				0.28	-	-	鈴木富男旧蔵資料 金銅装の刺離片（銅地）
43	第 48 図	PL.30・31	鞆尻金具	2.8	1.4	4.75	2.6	1.2		12.68	第 6 図 9	図版第 6 B	蟹目釘有り　金銅製
44	第 48 図	PL.30・31	鞆尻金具	2.6	1.6	4.3	2.4	1.4		13.82	第 6 図 8	図版第 6 B	金銅製
45	第 48 図	PL.30・31	鞆本	2.1	1.0	(5.0)				1.49	-	-	44 の鞆尻金具のもの

・大刀

報告番号	挿図番号	図版番号	全長	法量（cm） 刀身部 長	刀身部 幅	刀身部 厚	茎部 長	茎部 幅	茎部 厚	旧報告書 挿図番号	旧報告書 写真図版	備考
46	第 48 図	PL.32	(51.5)	(46.1)	2.7	0.6	5.4	1.9	0.7	第 6 図 1	図版第 6 A	

・鉄鏃

報告番号	挿図番号	図版番号	形式	全長	法量（cm） 鏃身部 長	鏃身部 幅	鏃身部 厚	頸部 長	頸部 幅	頸部 厚	茎部 長	茎部 幅	茎部 厚	重量（g）	旧報告書 挿図番号	旧報告書 写真図版	備考
47	第 51 図	PL.32	短茎腸抉柳葉式	(4.0)	(4.0)	2.0	0.2	-	-	-	-	-	-	4.92	第 7 図 30	図版第 7 B	
48	第 51 図	PL.32	平根腸抉五角形式	(4.1)	(3.3)	2.5	0.15	(1.1)	0.6	0.15	-	-	-	4.47	第 7 図 14	図版第 7 A	
49	第 51 図	PL.32	尖根五角形式	(11.5)	2.5	1.3	0.2	7.8	0.5	0.3	1.2	0.5	0.3	14.49	第 7 図 2	図版第 7 A	
50	第 51 図	PL.32	尖根五角形式	(8.2)	(2.4)	1.4	0.25	(6.0)	0.5	0.3				10.11	第 7 図 1	図版第 7 A	一部なし
51	第 51 図	PL.32	尖根五角形式	14.3	2.4	1.2	0.25	8.0	0.45	0.35	3.9	0.4	0.3	16.64	第 7 図 5	図版第 7 A	
52	第 51 図	PL.32	尖根五角形式	(14.5)	(2.1)	1.4	0.2	8.3	0.5	0.3	(4.3)	0.55	0.4	16.40	第 7 図 6	図版第 7 A	
53	第 51 図	PL.32	尖根五角形式	(15.4)	(2.5)	13.5	0.25	8.4	0.5	0.4	4.7	0.4	0.3	18.48	第 7 図 7	図版第 7 A	
54	第 51 図	PL.32	尖根五角形式	(13.3)	2.2	1.5	[0.25]	8.2	0.65	0.35	(2.5)	(0.6)	[0.35]	20.49	第 7 図 10	図版第 7 A	
55	第 51 図	PL.32	尖根五角形式	(12.8)	(2.6)	1.4	0.2	8.1	0.5	0.3	(2.3)	0.45	0.3	15.21	第 7 図 8	図版第 7 A	
56	第 51 図	PL.32	尖根五角形式	(12.6)	(2.4)	1.4	[0.25]	8.0	0.5	0.4	(2.3)	0.4	0.3	15.78	第 7 図 9	図版第 7 A	
57	第 51 図	PL.32	尖根五角形式	(12.0)	2.5	1.35	0.2	8.0	0.5	0.3	(1.6)	0.45	0.4	15.69	第 7 図 4	図版第 7 A	
58	第 51 図	PL.32	尖根五角形式	(9.0)	2.2	1.2	0.2	(5.9)	0.5	0.3	-	-	-	7.58	第 7 図 11	図版第 7 A	
59	第 51 図	PL.32	尖根柳葉式	(9.8)	(2.3)	1.2	0.2	(4.7)	0.65	0.2	(3.0)	0.45	0.35	9.29	第 7 図 3	図版第 7 A	2 点あり同一個体
60	第 51 図	PL.32	尖根柳葉式	(10.4)	(2.2)	1.2	0.2	(8.3)	0.5	0.3	-	-	-	7.06	第 7 図 12	図版第 7 A	
61	第 51 図	PL.32	尖根柳葉式	(2.7)	(2.2)	1.1	0.2	(0.6)	0.6	0.2	-	-	-	1.62	-	-	
62	第 51 図	PL.32	尖根柳葉式？	(1.8)	(1.8)	-	-	-	-	-	-	-	-	0.63	-	-	
63	第 51 図	PL.32	尖根柳葉式	(7.2)	(2.5)	0.95	0.2	(4.7)	0.5	0.2	-	-	-	3.91	-	-	
64	第 51 図	PL.33	尖根鏑箭式	(15.0)	0.8	(0.8)	0.15	12.4	0.5	0.3	(1.8)	0.3	0.3	11.69	第 7 図 15	図版第 7 B	
65	第 51 図	PL.33	尖根鏑箭式	(10.7)	0.6	0.65	0.15	(9.7)	0.55	0.3	(0.6)	0.4	0.2	6.62	第 7 図 22	図版第 7 B	茎部なし
66	第 51 図	PL.33	尖根鏑箭式	(4.2)	(1.5)	0.8	0.2	(2.8)	0.5	0.2	-	-	-	2.18	第 7 図 23	図版第 7 B	頸部～茎部なし
67	第 51 図	PL.33	尖根鏑箭式	(3.2)	0.6	0.8	0.2	(2.6)	0.7	0.2	-	-	-	2.63	-	-	
68	第 51 図	PL.33	尖根鏑箭式？	(5.1)	-	-	-	(5.1)	0.55	0.25	-	-	-	3.34	-	-	
69	第 51 図	PL.33	尖根鏑箭式	(4.5)	(1.0)	1.1	0.16	(3.5)	0.5	0.2	-	-	-	1.40	第 7 図 29	図版第 7 B	
70	第 51 図	PL.33	尖根鏑箭式	(3.2)	0.9	0.9	0.15	(2.3)	0.6	0.2	-	-	-	1.58	第 7 図 28	図版第 7 B	
71	第 51 図	PL.33	尖根片刃箭式	(4.3)	(1.7)	0.7	0.2	(2.6)	0.55	0.3	-	-	-	2.24	-	-	
72	第 51 図	PL.33	尖根片刃箭式	(2.6)	2.3	0.85	0.15	(0.3)	0.65	0.2	-	-	-	1.35	第 7 図 26	図版第 7 B	
73	第 51 図	PL.33	尖根片刃箭式？	(8.5)				(8.5)	0.55	0.3	-	-	-	8.47	-	-	
74	第 51 図	PL.33	尖根片刃箭式	(3.4)	(2.7)	0.7	0.25	(0.7)	0.6	0.3	-	-	-	2.33	-	-	
75	第 51 図	PL.33	尖根片刃箭式	(1.3)	(1.3)	0.6	0.2	-	-	-	-	-	-	0.38	-	-	
76	第 51 図	PL.33	尖根片刃箭式	(1.4)	(1.4)	0.5	0.25	-	-	-	-	-	-	0.45	-	-	
77	第 52 図	PL.33	頸部？	(9.8)	-	-	-	(9.8)	0.5	0.3	-	-	-	6.61	-	-	
78	第 52 図	PL.33	頸部	(7.0)	-	-	-	(7.0)	0.5	0.3	-	-	-	6.31	-	-	
79	第 52 図	PL.33	頸部	(7.4)	-	-	-	(7.4)	0.45	0.3	-	-	-	3.76	-	-	
80	第 52 図	PL.33	頸部	(6.3)	-	-	-	(6.3)	0.5	0.3	-	-	-	4.27	-	-	
81	第 52 図	PL.33	頸部	(5.5)	-	-	-	(5.4)	0.4	0.3				4.38	-	-	
82	第 52 図	PL.33	頸部	(4.7)	-	-	-	(4.7)	0.5	0.3	-	-	-	3.44	-	-	
83	第 52 図	PL.33	頸部	(5.0)	-	-	-	(5.0)	0.5	0.2	-	-	-	2.05	-	-	2 点同一の可能性
84	第 52 図	PL.33	頸部	(4.4)	-	-	-	(4.4)	0.6	0.3	-	-	-	3.73	-	-	
85	第 52 図	PL.33	頸部	(4.6)	-	-	-	(4.6)	(0.6)	(0.3)	-	-	-	2.45	-	-	
86	第 52 図	PL.33	頸部	(4.3)	-	-	-	(4.3)	0.5	(0.1)	-	-	-	1.35	-	-	
87	第 52 図	PL.33	頸部	(3.4)	-	-	-	(3.4)	0.5	0.3	-	-	-	2.23	-	-	
88	第 52 図	PL.33	頸部	(3.5)	-	-	-	(3.5)	0.4	(0.3)	-	-	-	2.09	-	-	
89	第 52 図	PL.33	頸部	(1.5)	-	-	-	(1.5)	0.6	0.4	-	-	-	1.16	-	-	
90	第 52 図	PL.33	頸部	(2.0)	-	-	-	(2.0)	0.5	0.2	-	-	-	0.78	-	-	
91	第 52 図	PL.33	頸部	(7.6)	-	-	-	(7.6)	0.4	0.4	-	-	-	6.72	-	-	
92	第 52 図	PL.33	頸部～茎部	(5.5)				[4.3]	0.45	0.3	[1.2]	0.35	0.3	4.56	-	-	
93	第 52 図	PL.33	頸部～茎部	(7.6)	-	-	-	(4.3)	0.5	0.3	(3.3)	0.35	0.3	7.63	-	-	
94	第 52 図	PL.33	頸部～茎部	(7.9)	-	-	-	(6.8)	0.5	0.3	(1.1)	0.4	0.4	6.56	-	-	

報告番号	挿図番号	図版番号	形式	法量（cm） 全長	鏃身部 長	鏃身部 幅	鏃身部 厚	頸部 長	頸部 幅	頸部 厚	茎部 長	茎部 幅	茎部 厚	重量（g）	旧報告書 挿図番号	旧報告書 写真図版	備考
95	第52図	PL.33	頸部～茎部	(5.0)	-	-	-	(2.9)	0.65	0.3	(2.1)	0.45	0.45	4.30	-	-	
96	第52図	PL.33	頸部～茎部	(4.6)	-	-	-	(2.2)	0.4	0.35	(2.4)	0.4	0.25	2.36	-	-	
97	第52図	PL.33	頸部～茎部	(9.0)	-	-	-	(6.2)	0.5	0.3	(2.8)	0.4	0.3	-	-	-	石に鉄鏃が付着
98	第52図	PL.33	頸部～茎部	(9.0)	-	-	-	(8.0)	0.5	0.3	(1.0)	0.4	0.25	4.92	-	-	
99	第52図	PL.33	頸部～茎部？	(9.6)	-	-	-	(5.3)	0.6	0.3	(4.3)	0.4	0.25	7.36	-	-	
100	第52図	PL.33	頸部～茎部	(10.8)	-	-	-	(9.2)	0.35	0.3	(1.6)	0.25	0.25	6.58	-	-	2点同一の可能性
101	第52図	PL.33	頸部～茎部	(12.5)	-	-	-	(11.2)	0.5	0.5	(1.3)	0.4	0.4	13.63	-	-	
102	第52図	PL.33	茎部	(5.8)	-	-	-	-	-	-	(5.8)	0.35	0.35	4.67	-	-	
103	第52図	PL.33	頸部～茎部	(6.1)	-	-	-	(2.9)	0.5	0.3	(3.2)	0.4	0.25	3.73	-	-	
104	第52図	PL.33	頸部～茎部	(8.7)	-	-	-	(3.0)	0.5	0.2	5.7	0.4	0.2	4.66	-	-	
105	第52図	PL.33	頸部～茎部	(3.7)	-	-	-	(2.4)	0.6	0.25	(1.3)	0.45	0.25	3.36	-	-	
106	第52図	PL.33	頸部～茎部	(3.8)	-	-	-	(2.0)	0.5	0.4	(1.8)	0.4	0.3	2.02	-	-	
107	第52図	PL.33	頸部～茎部	(2.2)	-	-	-	(1.8)	0.65	(0.3)	(0.4)	0.5	0.4	1.32	-	-	
108	第52図	PL.33	頸部～茎部	(5.4)	-	-	-	(2.0)	0.5	0.4	(3.4)	0.2	0.2	3.36	-	-	
109	第52図	PL.33	頸部～茎部	(4.8)	-	-	-	(3.0)	0.6	0.25	(1.8)	0.3	0.25	2.60	-	-	
110	第52図	PL.33	頸部～茎部	(1.7)	-	-	-	(1.4)	0.5	0.35	(0.3)	0.5	0.35	1.12	-	-	
111	第52図	PL.33	茎部	(3.2)	-	-	-	-	-	-	(3.2)	0.4	0.4	0.90	-	-	
112	第52図	PL.33	茎部	(3.8)	-	-	-	-	-	-	(3.8)	0.45	0.3	2.50	-	-	
113	第52図	PL.33	茎部	(2.1)							(2.1)	0.2	0.15	0.33	-	-	
114	第52図	PL.33	茎部	(1.5)	-	-	-	-	-	-	(1.5)	0.35	0.25	0.52	-	-	

《工具》

・刀子

報告番号	挿図番号	図版番号	法量（cm） 全長	刀身部 長	刀身部 幅	刀身部 厚	茎部 長	茎部 幅	茎部 厚	重量（g）	旧報告書 挿図番号	旧報告書 写真図版	備考
115	第53図	PL.34	14.2	8.6	1.4	0.4	5.6	1.0	0.3	27.24	第6図12	図版第8 A	刀部に布付着
116	第53図	PL.34	(13.3)	(10.5)	1.3	0.3	(2.8)	1.1	0.3	23.18	第6図11	図版第8 A	
117	第53図	PL.34	(10.2)	(8.5)	1.5	0.35	(1.6)	1.1	0.3	15.35	第6図14	図版第8 A	
118	第53図	PL.34	(7.8)	(6.9)	1.2	0.35	(0.9)	0.8	0.35	11.28	第6図13	図版第8 A	
119	第53図	PL.34	(1.3)	(1.3)	0.5	0.1				0.52	-	-	

《馬具》

・轡

報告番号	挿図番号	図版番号		法量（cm） 全長	銜 長	銜 啣金外法	銜 銜先環外法	鏡板 全高	鏡板 環幅	鏡板 環高	鉸具／立聞 高	鉸具／立聞 幅	刺金 長	刺金 幅	刺金 厚	引手 長	引手 円環外法	引手 壺外法	重量（g）	旧報告書 挿図番号	旧報告書 写真図版	備考
120	第54図	PL.34	左	16.4	(8.8)	(1.3)	2.25	[6.4]	[5.5]	[4.1]	2.3	[5.5]	(0.6)	0.3	0.2	15.05	2.2	2.7	164.93	第8図6	図版第8 B	鉸具造立聞環状鏡板付轡
			右		8.4	2.15	2.55	6.55	5.4	4.3	2.25	5.4	(1.1)	0.3	0.2	14.7	[2.0]	2.6				
121	第54図	PL.34		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	(14.1)	[2.4]	2.85	33.12	-	図版第8 B	引手1点

・鐙吊金具

報告番号	挿図番号	図版番号	法量（cm） 全長	鉸具 長	鉸具 基部幅	鉸具 尻幅	鉸具 最小幅	刺金 長	刺金 幅	刺金 厚	兵庫鎖 全長	兵庫鎖 長	兵庫鎖 幅	吊金具 全長	吊金具 幅	吊金具個数	重量（g）	旧報告書 挿図番号	旧報告書 写真図版
122	第55図	PL.35・36	(34.6)	10.1	3.9	4.0	3.8	10.2	0.6	0.55	18.9	①10.7 ②10.1	①3.3 ②2.9	(9.5)	1.5	(3)	320.22	第8図1	図版第9 A
123	第55図	PL.35・36	(34.7)	10.4	4.0	4.3	4.0	10.3	0.6	0.6	19.0	①10.9 ②10.0	①3.0 ②2.9	(8.9)	1.6	4	337.90	第8図2	図版第9 A
124	第55図	PL.35・36	(17.9)	8.1	3.5	4.8	3.1	8.1	0.6	0.5	(11.4)	①6.2 ②6.6	①2.3 ②2.5	-	-	-	108.96	第8図3	図版第9 B
125	第55図	PL.35	(8.3)	(8.3)	3.4	4.5	3.1	(8.1)	0.6	0.7	-	-	-	-	-	-	44.59	第8図5	図版第9 B

《土器》

報告番号	挿図番号	図版番号	種別	器種	法量（cm） 口径	底径	器高	内面色調	外面色調	焼成	残存率	旧報告書 挿図番号	旧報告書 写真図版
126	第56図	PL.37	須恵器	フラスコ瓶	7.6	-	20.0	2.5Y4/1 黄灰	2.5Y5/1 黄灰	良好	95%	第9図3	図版第10 B
127	第56図	PL.37	須恵器	フラスコ瓶	8.0	-	23.2	7.5Y6/1 灰	2.5Y6/1 黄灰	良好	90%	第9図4	図版第10 B
128	第56図	PL.37	須恵器	𤭯	10.7	3.9	13.5	2.5Y7/1 灰白	2.5Y7/1 灰白	良好	75%	第9図2	図版第10 A
129	第56図	PL.37	須恵器	平瓶	5.0	4.0	14.6	2.5Y7/1 灰白	2.5Y7/2 灰黄	良好	99%	第9図1	図版第10 A
130	第56図	PL.37	土師器	坏	9.4	-	3.1	5YR6/6 橙	5YR6/6 橙	良好	50%	第9図5	図版第10 A

【中里 K-97 号墳　出土遺物観察表】

《武器》

・大刀

報告番号	挿図番号	図版番号	部位	法量（cm） 全長	刀身部 長	刀身部 幅	刀身部 厚	茎部 長	茎部 幅	茎部 厚	旧報告書 挿図番号	旧報告書 写真図版	重量（g）	備考
1	第 59・60 図	PL.39		(8.5)	(2.5)	(3.0)	0.6	(6.0)	2.1	0.6	-	図版第 12 A	65.90	鍔・鎺あり
3	第 60 図	PL.39	刀身部	(3.3)	(3.3)	(2.6)	0.6	-	-	-	-	図版第 12 A	8.08	
4	第 60 図	PL.39	刀身部	(5.8)	(5.8)	(2.9)	0.6	-	-	-	-	図版第 12 A	23.17	
5	第 60 図	PL.39	刀身部	(4.3)	(4.3)	(2.8)	0.6	-	-	-	-	図版第 12 A	13.75	
6	第 60 図	PL.39	刀身部	(3.8)	(3.8)	(2.8)	0.6	-	-	-	-	図版第 12 A	10.09	
7	第 60 図	PL.39	刀身部	(21.7)	(21.7)	3.0	0.6	-	-	-	-	図版第 12 A	117.08	
8	第 60 図	PL.39	刀身部	(4.9)	(4.9)	3.2	0.6	-	-	-	-	-	32.48	
9	第 60 図	PL.39	刀身部	(3.9)	(3.9)	(2.9)	0.6	-	-	-	-	-	6.88	
10	第 60 図	PL.39	茎部	(12.1)	-	-	-	(12.1)	2.7	0.5	-	-	88.57	
11	第 60 図	PL.39	刀身部	(15.9)	(15.9)	(2.9)	(0.4)	-	-	-	-	-	39.26	11 ～ 13 同一の可能性
12	第 60 図	PL.39	刀身部	(12.1)	(12.1)	2.8	0.5	-	-	-	-	-	40.59	11 ～ 13 同一の可能性
13	第 60 図	PL.39	刀身部	(13.3)	(13.3)	2.7	0.5	-	-	-	-	-	41.29	11 ～ 13 同一の可能性
14	第 60 図	PL.39	刀身部	(2.5)	(2.5)	2.5	0.4	-	-	-	-	-	6.49	
15	第 60 図	PL.39	刀身部	(2.6)	(2.6)	-	-	-	-	-	-	-	4.31	

・刀装具

報告番号	挿図番号	図版番号	部位	法量（cm） 長軸 全長	短軸 最大幅	厚	内孔 長軸	内孔 短軸	重量（g）	旧報告書 挿図番号	旧報告書 写真図版	備考
1	第 59・60 図	PL.39	鍔	3.7	2.8	1.0						
1A	第 59・60 図	PL.39	鍔	(5.7)	5.7	0.3	3.4	2.5				
2	第 59 図	PL.39	責金具（喰出縁）	(4.4)	3.7	0.55	(3.4)	2.6	8.69	-	図版第 13 A	

・鉄鏃

報告番号	挿図番号	図版番号	形式	法量（cm） 全長	鏃身部 長	鏃身部 幅	鏃身部 厚	頸部 長	頸部 幅	頸部 厚	茎部 長	茎部 幅	茎部 厚	重量（g）	旧報告書 挿図番号	旧報告書 写真図版	備考
16	第 61 図	PL.39	短茎長三角形式	(5.5)	5.4	3.4	0.2	(0.3)	0.8	0.25	-	-	-	12.63	第 12 図 1	図版第 13 A	
17	第 61 図	PL.39	尖根柳葉式	(6.8)	(2.7)	1.3	0.2	(4.1)	0.45	0.25	-	-	-	4.65	第 12 図 2	図版第 13 A	
18	第 61 図	PL.39	尖根柳葉式	(3.1)	(3.1)	0.8	0.2	-	-	-	-	-	-	2.33	-	-	
19	第 61 図	PL.39	尖根柳葉式	(4.2)	(0.9)	1.3	0.15	(3.3)	0.4	0.2	-	-	-	2.48	-	図版第 13 A	
20	第 61 図	PL.39	尖根柳葉式	(2.8)	(2.8)	0.95	0.2	-	-	-	-	-	-	1.48	-	-	
21	第 61 図	PL.39	尖根柳葉式	(4.7)	2.7	0.85	0.25	(2.0)	0.5	0.25	-	-	-	3.73	-	-	
22	第 61 図	PL.39	尖根柳葉式？	(3.9)	(1.4)	(1.1)	0.2	(2.5)	0.55	0.3	-	-	-	3.33	-	-	
23	第 61 図	PL.39	尖根柳葉式	(4.3)	2.7	(1.1)	0.2	(1.6)	0.4	0.25	-	-	-	3.94	-	-	
24	第 61 図	PL.39	尖根柳葉式	(3.4)	(1.6)	0.8	0.15	(1.8)	0.5	0.2	-	-	-	3.98	-	-	2 点付着
24	第 61 図	PL.39	尖根柳葉式	(1.8)	(1.8)	0.8	0.15	-	-	-	-	-	-				
25	第 61 図	PL.39	尖根柳葉式	(1.7)	(1.7)	0.8	0.2	-	-	-	-	-	-	0.73	-	-	
26	第 61 図	PL.39	尖根柳葉式	(1.2)	(0.5)	0.85	0.2	(0.7)	0.5	0.25	-	-	-	1.02	-	-	
27	第 61 図	PL.39	尖根腸箭式	(2.7)	2.0	1.0	0.2	(0.7)	0.5	0.2	-	-	-	1.46	-	-	
28	第 61 図	PL.39	尖根三角形式	(2.8)	1.1	(1.2)	0.2	(1.7)	0.5	0.25	-	-	-	1.80	-	-	
29	第 61 図	PL.39	尖根腸箭式	(4.0)	(0.6)	(0.9)	0.15	(3.4)	0.55	0.15	-	-	-	2.89	-	-	
30	第 61 図	PL.40	尖根腸箭式	(10.9)	0.55	(0.8)	0.2	9.8	0.5	0.25	(0.55)	0.4	0.25	8.65	第 12 図 3	図版第 13 A	
31	第 61 図	PL.40	頸部	(3.0)	-	-	-	(3.0)	0.55	0.35	-	-	-	2.98	-	-	木質　口巻き痕あり
32	第 61 図	PL.40	頸部	(2.9)	-	-	-	(2.9)	0.6	0.25	-	-	-	2.14	-	-	
33	第 61 図	PL.40	頸部	(3.1)	-	-	-	(3.1)	0.45	0.3	-	-	-	2.12	-	-	
34	第 61 図	PL.40	頸部	(2.0)	-	-	-	(2.0)	0.4	0.25	-	-	-	0.73	-	-	
35	第 61 図	PL.40	頸部	(2.1)	-	-	-	(2.1)	0.5	0.3	-	-	-	1.43	-	-	
36	第 61 図	PL.40	頸部	(1.6)	-	-	-	(1.6)	0.4	0.25	-	-	-	2.32	-	-	2 点付着
36	第 61 図	PL.40	頸部	(1.8)				(1.8)	0.45	0.25	-	-	-				
37	第 61 図	PL.40	頸部	(1.5)	-	-	-	(1.5)	0.5	0.3	-	-	-	1.15	-	-	
38	第 61 図	PL.40	頸部	(2.2)	-	-	-	(2.2)	0.5	0.25	-	-	-	1.39	-	-	
39	第 61 図	PL.40	頸部	(2.2)	-	-	-	(2.2)	0.5	0.3	-	-	-	1.05	-	-	
40	第 61 図	PL.40	頸部？	(4.6)	-	-	-	(4.6)	0.55	0.3	-	-	-	3.98	-	-	
41	第 61 図	PL.40	頸部	(3.5)	-	-	-	-	-	-	(3.5)	0.5	0.3	1.64	-	-	
42	第 61 図	PL.40	頸部	(8.4)	-	-	-	(8.4)	0.6	0.3	-	-	-	8.05	-	-	
43	第 61 図	PL.40	頸部	(9.2)	-	-	-	(9.2)	0.55	0.3	-	-	-	7.67	-	-	
44	第 61 図	PL.40	頸部	(4.8)	-	-	-	(4.8)	0.5	0.2	-	-	-	2.77	-	-	
45	第 61 図	PL.40	頸部～茎部	(9.9)	-	-	-	(7.5)	0.45	0.2	(2.4)	0.35	0.25	6.58	-	図版第 13 A	
46	第 61 図	PL.40	頸部～茎部	(7.6)	-	-	-	-	0.6	0.3	-	-	-	4.82	-	-	
47	第 61 図	PL.40	頸部～茎部	(5.5)	-	-	-	(2.9)	0.5	0.3	(2.6)	0.3	0.25	3.87	-	-	
48	第 61 図	PL.40	頸部～茎部	(3.6)	-	-	-	(0.7)	0.75	0.25	(2.9)	0.35	0.2	2.25	-	-	
49	第 61 図	PL.40	頸部～茎部	(3.2)	-	-	-	(2.8)	0.45	0.3	(0.4)	0.4	0.25	1.87	-	-	
50	第 61 図	PL.40	頸部～茎部	(3.2)	-	-	-	(1.3)	0.5	0.35	(1.9)	0.35	0.2	2.90	-	-	
51	第 61 図	PL.40	頸部～茎部	(5.9)	-	-	-	(5.9)	0.55	(0.15)	(0.8)	0.5	(0.15)	3.56	-	-	
52	第 61 図	PL.40	頸部～茎部	(6.4)	-	-	-	(5.4)	0.5	0.3	(1.0)	0.5	(0.2)	6.80	-	-	

報告番号	挿図番号	図版番号	形式	法量（cm） 全長	鏃身部 長	鏃身部 幅	鏃身部 厚	頸部 長	頸部 幅	頸部 厚	茎部 長	茎部 幅	茎部 厚	重量（g）	旧報告書 挿図番号	旧報告書 写真図版	備考
53	第61図	PL.40	頸部～茎部	(7.3)	-	-	-	(5.8)	0.5	0.2	(1.5)	0.4	0.2	5.61	-	図版第13 A	
54	第61図	PL.40	茎部	(4.9)	-	-	-	-	-	-	(4.9)	0.3	0.25	1.30	-	-	
55	第61図	PL.40	茎部	(4.3)	-	-	-	-	-	-	(4.3)	0.5	0.3	1.82	-	-	
56	第61図	PL.40	茎部	(3.7)	-	-	-	-	-	-	(3.7)	0.3	0.2	1.94	-	-	
57	第61図	PL.40	茎部	(3.7)	-	-	-	-	-	-	(3.7)	0.55	0.4	2.60	-	-	
58	第61図	PL.40	茎部	(2.9)	-	-	-	-	-	-	(2.9)	0.4	0.25	0.99	-	-	

《工具》

・刀子

報告番号	挿図番号	図版番号	全長	法量（cm） 刀身部 長	刀身部 幅	刀身部 厚	茎部 長	茎部 幅	茎部 厚	重量（g）	旧報告書 挿図番号	旧報告書 写真図版	備考
59	第62図	PL.40	(6.8)	(2.4)	1.2	0.25	(4.4)	0.65	0.2	6.39	-	図版第13 A	
60	第62図	PL.40	(2.2)	-	-	-	(2.2)	0.9	0.3	2.46	-	-	
61	第62図	PL.40	(3.4)	-	-	-	(3.4)	0.6	0.2	1.59	-	-	
62	第62図	PL.40	(4.0)	(2.5)	0.8	0.3	(1.5)	1.0	0.25	5.00	-	図版第13 A	
63	第62図	PL.40	(1.6)	-	-	-	(1.6)	0.4	0.3	0.41	-	-	
64	第62図	PL.40	(3.0)	-	-	-	(3.0)	0.7	0.3	2.69	-	-	
65	第62図	PL.40	(4.3)	(4.3)	0.7	0.25	-	-	-	3.46	-	-	

《土器》

報告番号	挿図番号	図版番号	種別	器種	法量（cm） 口径	底径	器高	内面色調	外面色調	焼成	残存率	旧報告書 挿図番号	旧報告書 写真図版	備考
66	第63図	PL.40	須恵器	提瓶	13.5	-	32.5	5YS/1 灰	10 Y 5/1 灰	良好	90%	第14図1	図版第16 B	

【中里K-98号墳　出土遺物観察表】

《武器》

・大刀

報告番号	挿図番号	図版番号	部位	全長	法量（cm） 刀身部 長	刀身部 幅	刀身部 厚	茎部 長	茎部 幅	茎部 厚	重量（g）	旧報告書 挿図番号	旧報告書 写真図版	備考
1	第66図	PL.42		(84.5)	(78.1)	3.7	0.7	(6.4)	2.9	0.7	740.80	第12図5	図版第12 A	
2	第66図	PL.42	茎部	(6.9)	-	-	-	(6.9)	2.1	0.6	35.73	第12図4	図版第12 A	刀身部欠損

・刀装具

報告番号	挿図番号	図版番号	部位	法量（cm） 長軸 全長	短軸 最大幅	厚	内孔 長軸	内孔 短軸	重量（g）	旧報告書 挿図番号	旧報告書 写真図版	備考
3	第67図	PL.42	鍔	9.0	7.5	0.6	3.5	2.1	101.33	第12図6	図版第13 B	鍛片付着

・鉄鏃

報告番号	挿図番号	図版番号	形式	法量（cm） 全長	鏃身部 長	鏃身部 幅	鏃身部 厚	頸部 長	頸部 幅	頸部 厚	茎部 長	茎部 幅	茎部 厚	重量（g）	旧報告書 挿図番号	旧報告書 写真図版	備考
4	第68図	PL.42	無茎腸抉柳葉式	5.6	5.6	4.1	0.35	-	-	-	-	-	-	15.80	第12図14	図版第13 B	重抉
5	第68図	PL.42	平根腸抉柳葉式	(4.9)	(4.5)	(2.0)	(0.15)	(1.0)	0.5	0.2	-	-	-	5.44	第12図13	図版第13 B	
6	第68図	PL.42	平根長三角形式	(8.3)	(4.3)	(1.4)	0.25	2.5	0.6	0.25	(1.5)	0.45	0.3	7.23	第12図11	図版第13 B	
7	第68図	PL.42	平根長三角形式	(1.9)	(1.9)	0.9	0.3	-	-	-	-	-	-	1.08	-	-	
8	第68図	PL.42	尖根柳葉式	(4.2)	3.15	0.8	0.25	(1.05)	0.6	0.3	-	-	-	2.70	-	-	
9	第68図	PL.42	尖根柳葉式	(3.4)	(3.4)	1.1	0.3	-	-	-	-	-	-	3.18	-	-	
10	第68図	PL.42	尖根柳葉式	(2.5)	(2.5)	1.0	0.2	-	-	-	-	-	-	0.94	-	-	
11	第68図	PL.42	尖根腸抉式	(8.5)	2.5	1.1	0.35	(6.0)	0.6	0.4	-	-	-	8.99	-	図版第13 B	
12	第68図	PL.42	尖根腸抉式	(10.0)	(1.8)	1.0	0.25	8.2	0.55	0.3	-	-	-	11.42	第12図8	図版第13 B	
13	第68図	PL.43	尖根腸抉式	(10.4)	2.7	(0.7)	0.2	(7.7)	0.5	0.3	-	-	-	6.88	-	図版第13 B	
14	第68図	PL.43	尖根腸抉式	(11.8)	2.5	1.1	0.3	8.2	0.6	0.35	(1.1)	0.5	0.25	12.01	第12図9	図版第13 B	
15	第68図	PL.43	尖根腸抉式	(10.9)	(2.2)	0.95	0.25	8.4	0.6	0.3	(0.3)	0.65	0.3	11.32	第12図10	図版第13 B	茎部なし 付着物あり
16	第68図	PL.43	尖根腸抉式	(4.5)	2.2	1.0	0.25	(2.3)	0.6	0.35	-	-	-	3.44	-	-	
17	第68図	PL.43	尖根腸抉式	(2.5)	(2.3)	1.1	0.3	(0.2)	-	-	-	-	-	1.94	-	-	
18	第68図	PL.43	尖根腸抉式	(6.0)	(1.1)	0.85	0.15	(4.9)	0.5	0.3	-	-	-	5.11	-	-	
19	第68図	PL.43	尖根腸抉式	(5.5)	(2.85)	0.85	0.15	(2.65)	0.6	0.3	-	-	-	7.20	-	-	2点付着
19	第68図	PL.43	尖根腸抉式	(4.4)	(3.1)	0.9	0.15	(1.3)	0.5	0.3	-	-	-				
20	第68図	PL.43	尖根腸抉式	(4.1)	(2.0)	1.15	0.3	(2.1)	0.6	0.3	-	-	-	3.25	-	-	
21	第68図	PL.43	尖根腸抉式	(7.4)	(0.5)	0.8	0.2	(6.9)	0.6	0.35	-	-	-	5.60	-	-	
22	第68図	PL.43	頸部～茎部	(7.2)	-	-	-	(6.6)	0.7	0.35	(0.6)	0.6	0.3	8.87	-	-	2点付着
22	第68図	PL.43	尖根腸抉式	(2.8)	(0.85)	1.25	0.3	(1.95)	0.65	0.35	-	-	-				
23	第68図	PL.43	尖根片刃箭式	(6.9)	3.4	0.75	0.25	(3.5)	0.55	0.3	-	-	-	4.93	第12図12	図版第13 B	

報告番号	挿図番号	図版番号	形式	法量（cm）												重量(g)	旧報告書		備考
				全長	頸部			胴部			底部						挿図番号	写真図版	
					長	幅	厚	長	幅	厚	長	幅	厚						
24	第 68 図	PL.43	頸部	(6.5)	-	-	-	(6.5)	0.65	0.4	-	-	-			5.85	-	-	
25	第 68 図	PL.43	頸部	(6.35)	-	-	-	(6.35)	0.55	0.3	-	-	-			5.89	-	-	
26	第 68 図	PL.43	頸部	(6.4)	-	-	-	(6.4)	0.55	0.35	-	-	-			5.75	-	-	
27	第 68 図	PL.43	頸部	(2.1)	-	-	-	(2.1)	0.5	0.35	-	-	-			1.40	-	-	
28	第 68 図	PL.43	頸部	(3.4)	-	-	-	(3.4)	0.55	0.3	-	-	-			2.58	-	-	
29	第 68 図	PL.43	頸部	(4.75)	-	-	-	(4.75)	0.6	0.35	-	-	-			4.67	-	-	
30	第 68 図	PL.43	頸部	(3.6)	-	-	-	(3.6)	0.6	0.4	-	-	-			2.62	-	-	
31	第 68 図	PL.43	頸部	(3.65)	-	-	-	(3.65)	0.65	0.35	-	-	-			3.13	-	-	
32	第 68 図	PL.43	頸部～茎部	(8.0)	-	-	-	(7.5)	0.6	0.3	(0.5)	0.55	0.15			9.10	-	-	
33	第 68 図	PL.43	頸部～茎部	(6.0)	-	-	-	(4.4)	0.5	0.4	(1.6)	0.45	0.3			4.70	-	-	
34	第 68 図	PL.43	頸部～茎部	(5.65)	-	-	-	(3.75)	0.6	0.3	(1.9)	0.5	0.3			4.43	-	-	
35	第 68 図	PL.43	頸部～茎部	(7.7)	-	-	-	(6.5)	0.6	0.4	(1.1)	0.5	0.25			8.87	-	-	
36	第 68 図	PL.43	頸部～茎部	(3.4)	-	-	-	(1.8)	0.65	0.4	(1.6)	0.5	0.35			2.57	-	-	
37	第 68 図	PL.43	頸部～茎部	(4.3)	-	-	-	(3.3)	0.6	0.3	(1.0)	0.5	0.35			4.42	-	-	
38	第 68 図	PL.43	頸部～茎部	(7.7)	-	-	-	(7.2)	0.6	0.3	(0.6)	0.55	0.25			7.94	-	-	
39	第 68 図	PL.43	頸部～茎部	(5.2)	-	-	-	(2.8)	0.6	0.35	(4.4)	0.55	0.35			5.45	-	-	
40	第 68 図	PL.43	頸部～茎部	(3.4)	-	-	-	(2.7)	0.7	0.5	(0.7)	0.6	0.4			4.36	-	-	
41	第 68 図	PL.43	頸部～茎部	(4.2)	-	-	-	(3.15)	0.55	0.3	(1.05)	0.4	0.3			2.95	-	-	
42	第 68 図	PL.43	頸部～茎部	(2.0)	-	-	-	(1.2)	0.65	(0.1)	(0.8)	0.6	(0.2)			0.85	-	-	
43	第 68 図	PL.43	頸部～茎部	(4.7)	-	-	-	(0.5)	-	-	(4.2)	0.6	0.3			2.38	-	-	
44	第 68 図	PL.43	頸部～茎部	(5.1)	-	-	-	(0.7)	0.7	0.25	(4.4)	0.4	0.3			2.36	-	-	
45	第 68 図	PL.43	茎部	(3.6)	-	-	-	-	-	-	(3.6)	0.35	0.3			1.70	-	-	
46	第 68 図	PL.43	頸部～茎部	(3.8)	-	-	-	(3.1)	0.6	0.3	(0.7)	0.7	0.3			4.19	-	-	
47	第 68 図	PL.43	茎部	(4.5)	-	-	-	-	-	-	(4.5)	0.25	0.2			2.68	-	-	
48	第 68 図	PL.43	頸部～茎部	(2.4)	-	-	-	(1.8)	0.6	0.4	(0.6)	(0.4)	0.3			1.88	-	-	
49	第 68 図	PL.43	茎部	(5.0)	-	-	-	-	-	-	(5.0)	0.35	0.3			1.70	-	-	
50	第 68 図	PL.43	茎部	(3.0)	-	-	-	-	-	-	(3.0)	0.25	0.2			1.01	-	-	
51	第 68 図	PL.43	茎部	(2.6)	-	-	-	-	-	-	(2.6)	0.4	0.3			1.39	-	-	
52	第 68 図	PL.43	茎部	(3.5)	-	-	-	-	-	-	(3.5)	0.3	0.25			1.22	-	-	
53	第 68 図	PL.43	茎部	(1.8)	-	-	-	-	-	-	(1.8)	0.25	0.2			0.62	-	-	
54	第 68 図	PL.43	茎部	(4.4)	-	-	-	-	-	-	(4.4)	0.3	0.3			1.87	-	-	
55	第 68 図	PL.43	茎部	(6.1)	-	-	-	-	-	-	(6.1)	0.4	0.25			3.84	-	-	
56	第 68 図	PL.43	茎部	(4.6)	-	-	-	-	-	-	(4.6)	0.45	0.25			1.64	-	-	
57	第 68 図	PL.43	茎部	(3.75)	-	-	-	-	-	-	(3.75)	0.45	0.3			1.34	-	-	
58	第 68 図	PL.43	茎部	(2.2)	-	-	-	-	-	-	(2.2)	0.3	0.3			0.60	-	-	

《工具》

・刀子

報告番号	挿図番号	図版番号	法量（cm）								重量(g)	旧報告書		備考
			全長	刀身部			茎部					挿図番号	写真図版	
				長	幅	厚	長	幅	厚					
59	第 68 図	PL.43	(4.2)	-	-	-	(4.2)	0.7	0.3		4.50	-	-	

《馬具》

・雪

報告番号	挿図番号	図版番号		法量（cm）														重量(g)	旧報告書		備考
				全長	脚			鏡板			立聞			引手			壺		挿図番号	写真図版	
					長	脚金外法	先端環外法	全高	横幅	環高	高	幅	長	円環外法	外法						
60	第 69 図	PL.44	左	17.0	9.4	2.35	3.0	(7.4)	8.1	7.0	(0.4)	(1.8)	16.9	2.3	2.65	328.72		第 12 図	図版	引手の長さ左右違う
			右		8.7	2.2	2.8	(7.9)	8.05	6.9	(1.0)	(1.9)	18.0	2.0	2.5			15	第 15 A	大型矩形立聞環状鏡板付轡

・鉸具

報告番号	挿図番号	図版番号	法量（cm）			重量(g)	旧報告書		備考
			全長	基部幅	尻幅	厚さ		挿図番号	写真図版	
61	第 69 図	PL.44	(3.0)	-	3.0	0.5	4.10	-	図版第 16 A	

・円形金具

報告番号	挿図番号	図版番号	法量（cm）			重量(g)	旧報告書		備考
			全長	幅	厚さ		挿図番号	写真図版	
62	第 69 図	PL.44	4.6	5.4	0.4	24.18	第 12 図 21	図版第 16 A	
63	第 69 図	PL.44	4.8	5.45	0.4	22.10	第 12 図 22	図版第 16 A	
64	第 69 図	PL.44	5.1	5.5	0.4	21.78	-	図版第 16 A	
65	第 69 図	PL.44	(4.7)	5.4	0.4	17.40	-	-	
66	第 69 図	PL.44	(4.5)	5.35	0.4	19.69	-	-	
67	第 69 図	PL.44	(4.45)	5.4	0.3	11.57	-	-	
68	第 69 図	PL.44	4.7	5.5	0.4	20.39	-	図版第 16 A	
69	第 69 図	PL.44	(2.9)	(5.7)	0.4	10.88	-	-	70 と同一の可能性
70	第 69 図	PL.44	(1.7)	(2.5)	0.3	2.70	-	-	69 と同一の可能性

・帯飾金具・貴金具

報告番号	挿図番号	図版番号	器種	法量（cm） 全長	幅	厚さ	断頭径	断頭差	脚数	重量（g）	旧報告書 挿図番号	写真図版		備考
71	第70図	PL.45	帯飾金具	2.7	2.6		0.25	0.7	0.3	4	11.22	第12図16	図版第16 A	4脚
72	第70図	PL.45	帯飾金具	2.8	2.6		0.25	0.7	0.3	4	10.04	第12図17	図版第16 A	4脚
73	第70図	PL.45	帯飾金具	3.15	2.95		0.35	0.8	0.3	(3)	14.83	-	-	4脚 金銅装
74	第70図	PL.45	帯飾金具	2.7	2.6		0.25	0.7	0.3	4	9.64	-	図版第16 A	4脚
75	第70図	PL.45	帯飾金具	2.8	2.85		0.25	0.75	0.3	4	9.72	-	図版第16 A	4脚 金銅装
76	第70図	PL.45	帯飾金具	3.0	2.8		0.25	0.75	0.3	4	13.26	-	-	4脚 金銅装
77	第70図	PL.45	帯飾金具	2.8	2.5		0.25	0.7	0.3	4	10.59	-	図版第16 A	4脚
78	第70図	PL.45	帯飾金具	2.6	2.6		0.25	0.75	0.25	(3)	9.95	-	-	4脚 金銅装
79	第70図	PL.45	帯飾金具	2.7	2.6		0.25	0.7	0.3	(3)	10.07	-	-	4脚
80	第70図	PL.45	帯飾金具	3.0	2.5		0.25	0.7	0.3	(3)	10.36	-	-	4脚
81	第70図	PL.45	帯飾金具	2.55	2.5		0.25	0.7	0.3	4	9.64	-	-	4脚
82	第70図	PL.45	帯飾金具	2.75	2.5		0.25	0.7	0.3	4	11.33	-	-	4脚 金銅装 裏面に鉄鏃？付着
83	第70図	PL.45	帯飾金具	2.7	2.4		0.25	0.8	0.3	4	12.60	第12図18	図版第16 A	4脚 金銅装
84	第70図	PL.45	帯飾金具	2.6	2.5		0.25	0.7	0.3	4	9.05	-	-	4脚
85	第70図	PL.45	帯飾金具	(2.0)	1.35		0.2	0.7	0.25	(1)	3.23	-	-	2脚貴金具あり
85	第70図	PL.45	貴金具	(2.1)	0.4	(0.2)	0.2							
86	第70図	PL.45	帯飾金具	2.2	1.35		0.2	0.7	0.25	2	5.80	-	図版第16 A	2脚貴金具あり 金銅装？
86	第70図	PL.45	貴金具	(2.1)	0.5	1.1	0.2							銀装（鉄地）
87	第70図	PL.45	帯飾金具	2.4	1.25		0.2	0.7	0.25	2	6.40	-	図版第16 A	2脚貴金具あり
87	第70図	PL.45	貴金具	(2.45)	0.5	1.0	0.2							
88	第70図	PL.45	帯飾金具	2.4	1.4		0.2	0.7	0.3	2	6.16	第12図20	図版第16 A	2脚貴金具あり
88	第70図	PL.45	貴金具	3.35	0.5	1.2	0.2							
89	第70図	PL.45	帯飾金具	2.7	1.7		0.2	0.8	0.25	2	5.78	第12図19	図版第16 A	2脚 金銅装
90	第70図	PL.45	帯飾金具	2.6	1.4		0.25	0.7	0.25	2	6.85	-	-	2脚 金銅装
91	第70図	PL.45	帯飾金具	2.65	1.5		0.2	0.75	0.25	2	4.99	-	図版第16 A	2脚 金銅装
92	第70図	PL.45	帯飾金具	2.4	1.25		0.2	0.7	0.25	2	4.74	-	図版第16 A	2脚
93	第70図	PL.45	帯飾金具	2.75	1.3		0.2	0.7	0.25	2	3.89	-	-	2脚 金銅装
94	第70図	PL.45	帯飾金具	2.15	1.35		0.2	0.65	0.25	2	5.05	-	-	2脚
95	第70図	PL.45	帯飾金具	2.2	1.3		0.2	0.65	0.2	2	5.26	-	-	2脚

《土器》

報告番号	挿図番号	図版番号	種別	器種	法量（cm） 口径	底径	器高	内面色調	外面色調	焼成	残存率	旧報告書 挿図番号	写真図版	備考
96	第71図	PL.45	須恵器	提瓶	7.2	-	18.1	10Y3/1 オリーブ黒	10Y5/1 灰	良好	95%	第14図2	図版第17 A	

【中里K-99号墳　出土遺物観察表】

《装身具》

・玉類

報告番号	挿図番号	図版番号	形式	素材	法量（mm） 長さ	径／幅	孔径	製作技法	色調	重量（g）	旧報告書 挿図	写真図版	
1	第74図	PL.46	切子玉	水晶	18.7	13.2	最小1.5 最大3.4	片面穿孔		4.35	第11図3	図版第11	B
2	第74図	PL.46	切子玉	水晶	18.2	13.7	最小1.0 最大3.3	片面穿孔		4.15	第11図4	図版第11	B
3	第74図	PL.46	切子玉	水晶	20.7	13.5	最小1.8 最大3.7	片面穿孔		4.33	第11図5	図版第11	B
4	第74図	PL.46	丸玉	褐色ガラスマor 蛇紋岩	9.0	10.5～11.0	3.0		浅黄色不透明	1.11	第11図6	図版第11	B
5	第74図	PL.46	丸玉	褐色ガラスマor 蛇紋岩	9.5	11.0	2.5		オリーブ黄色不透明	1.07	第11図7	-	
6	第74図	PL.46	丸玉	褐色ガラスマor 蛇紋岩	9.0	11.0	3.0～3.5		浅黄色半透明	1.01	第11図8	-	
7	第74図	PL.46	丸玉	褐色ガラスマor 蛇紋岩	10.0	10.5	3.0		浅黄色不透明	1.06	第11図9	-	
8	第74図	PL.46	丸玉	褐色ガラスマor 蛇紋岩	9.0	11.0	3.0～4.5		浅黄色不透明	1.01	第11図10	-	
9	第74図	PL.46	丸玉	褐色ガラスマor 蛇紋岩	9.0	9.0～9.5	3.0		灰黄色不透明	0.83	第11図11	-	
10	第74図	PL.46	棗玉	琥珀	11.5	10.0～10.5	2.0～2.5			0.82	第11図12	-	
11	第74図	PL.46	棗玉	琥珀	(15.0)	9.0～12.0	最小18 最大2.5			0.82	第11図13	-	
12	第74図	PL.46	ガラス小玉	ガラス	4.0	6.0～6.3	2.0～3.0	引き伸ばし	濃青色透明	0.19	第11図14	図版第11	B
13	第74図	PL.46	ガラス小玉	ガラス	4.3	5.5～5.8	2.0	引き伸ばし	濃青色透明（暗）	0.17	第11図15	図版第11	B
14	第74図	PL.46	ガラス小玉	ガラス	1.7	3.5	1.0～1.5	引き伸ばし	黄緑色半透明	0.03	第11図16	図版第11	B
15	第74図	PL.46	ガラス小玉	ガラス	2.7	3.5	1.0	引き伸ばし	黄緑色半透明	0.05	第11図17	図版第11	B

・耳環

報告番号	挿図番号	図版番号	法量（cm） 全長	幅	厚さ	重量（g）	旧報告書 挿図	写真図版	備考
16	第 74 図	PL.46	3.4	3.0	0.85	29.53	第 11 図 1	図版第 11　B	金銅被せ（錫地？）
17	第 74 図	PL.46	3.5	3.05	0.8	25.89	第 11 図 2	図版第 11　B	金銅被せ（錫地？）

《武器》

・大刀

報告番号	挿図番号	図版番号	部位	全長	刀身部 法量（cm） 長	幅	厚	茎部 法量（cm） 長	幅	厚	重量（g）	旧報告書 挿図番号	写真図版	備考
18	第 75 図	PL.47	茎部	(15.0)	-	-	-	(15.0)	1.7	0.7	77.68	-	-	
19	第 75 図	PL.47	茎部	(12.6)	-	-	-	(12.6)	1.6	0.55	46.09	-	-	
20	第 75 図	PL.47	茎部	(5.0)	-	-	-	(5.0)	1.5	0.3	14.13	-	-	
21	第 75 図	PL.47	茎部	(2.3)	-	-	-	(2.3)	1.2	0.5	5.0	-	-	22 と同一の可能性
22	第 75 図	PL.47	茎部	(4.3)	-	-	-	(4.3)	1.3	0.6	11.48	-	-	21 と同一の可能性
23	第 75・76 図	PL.47		(4.6)				(3.1)	2.0	0.5	66.27	-	-	鍔付近のみ確認　鍔・鎺あり
24	第 75・76 図	PL.47	刀身部～茎部	(9.1)	(6.4)	-	-	(2.7)	-	-	30.77	-	-	緑錆付着、金銅装？
25	第 75 図	PL.47	刀身部	(8.4)	(8.4)	2.9	0.6	-	-	-	34.77	-	-	
26	第 75 図	PL.47	刀身部	(6.6)	(6.6)	2.9	0.55	-	-	-	26.01	-	-	
27	第 75 図	PL.47	刀身部	(6.1)	(6.1)	(2.4)	(0.75)	-	-	-	21.14	-	-	
28	第 75 図	PL.47	刀身部	(10.4)	(10.4)	(2.5)	0.45	-	-	-	30.49	-	-	
29	第 75 図	PL.47	刀身部	(4.5)	(4.5)	3.0	0.7	-	-	-	20.11	-	-	
30	第 75 図	PL.47	刀身部	(38.8)	(38.8)	3.0	0.6	-	-	-	214.36	-	-	
31	第 75 図	PL.47	刀身部	(4.7)	(4.7)	3.1	0.7	-	-	-	15.25	-	-	
32	第 75 図	PL.47	刀身部	(3.8)	(3.8)	3.0	0.6	-	-	-	16.71	-	-	
33	第 75 図	PL.47	刀身部	(2.3)	(2.3)	2.75	0.7	-	-	-	9.52	-	-	
34	第 75 図	PL.47	刀身部	(4.4)	(4.4)	2.8	0.8	-	-	-	9.61	-	-	
35	第 75 図	PL.47	刀身部	(9.3)	(9.3)	2.8	0.7	-	-	-	30.06	-	-	
36	第 75 図	PL.47	刀身部	(21.3)	(21.3)	2.55	0.6	-	-	-	66.50	-	-	不明 8 と同一の可能性
37	第 75・76 図	PL.47	刀身部	(4.8)	(4.8)	2.6	0.5				7.16	-	-	金銅製責金具付着
38	第 75 図	PL.47	刀身部	(5.2)	(5.2)	2.6	0.6	-	-	-	18.54	-	-	
39	第 75 図	PL.47	刀身部	(3.7)	(3.7)	2.4	0.4	-	-	-	10.20	-	-	
40	第 75 図	PL.47	刀身部	(7.3)	(7.3)	2.7	0.7	-	-	-	20.48	-	-	
41	第 75 図	PL.47	刀身部	(16.6)	(16.6)	(2.0)	0.6	-	-	-	35.16	-	-	
42	第 75 図	PL.47	刀身部	(7.3)	(7.3)	(1.9)	(0.75)	-	-	-	17.65	-	-	
43	第 75 図	PL.47	刀身部	(1.9)	(1.9)	-	-	-	-	-	6.39	-	-	鎺が付着する可能性
44	第 75 図	PL.47	刀身部	(4.1)	(4.1)	2.7	0.7	-	-	-	13.62	-	-	
45	第 75 図	PL.47	刀身部	(2.0)	(2.0)	2.6	0.6	-	-	-	3.01	-	-	
46	第 75 図	PL.47	刀身部	(6.0)	(6.0)	(2.5)	(0.45)	-	-	-	24.45	-	-	
47	第 75 図	PL.47	刀身部	(3.2)	(3.2)	(2.6)	0.8	-	-	-	16.79	-	-	
48	第 75 図	PL.47	刀身部	(22.2)	(22.2)	(2.9)	0.8	-	-	-	135.16	-	-	
49	第 75 図	PL.47	刀身部	(9.9)	(9.9)	3.3	0.55	-	-	-	48.01	-	-	

・刀装具

報告番号	挿図番号	図版番号	部位	法量（cm） 長軸全長	短軸最大幅	厚	内孔長軸	内孔短軸	重量（g）	旧報告書 挿図番号	写真図版	備考
23A	第 75・76 図	PL.47	鍔	(6.3)	(5.4)	0.65	2.8	1.8				
23	第 75・76 図	PL.47	鎺	3.4	2.5	1.5						
24A	第 75・76 図	PL.47	鎺	〔3.2〕	〔1.9〕	1.9						
37A	第 75・76 図	PL.47	責金具									
50	第 76 図	PL.46	鍔	9.4	7.2	0.4	3.6	〔1.9〕	49.69	第 13 図 6	図版第 14　A	
51	第 76 図	PL.46	切羽	4.55	3.0	0.2	2.95	1.45	10.46	第 13 図 4	図版第 14　A	金銅製
52	第 76 図	PL.46	責金具	3.1	1.6	0.2	2.9	1.4	1.17	第 13 図 5	図版第 14　A	金銅製
53	第 76 図	PL.46	鎺	(4.0)	3.4	2.0			9.16	-		-
54	第 76 図	PL.46	小型鍔	(1.2)	(2.1)	0.2			1.80	-		-

・鉄鏃

報告番号	挿図番号	図版番号	形式	法量（cm） 全長	鏃身部 長	幅	厚	頸部 長	幅	厚	茎部 長	幅	厚	重量（g）	旧報告書 挿図番号	写真図版	備考
55	第 77 図	PL.48	尖根片刃箭式	(7.0)	(3.1)	0.8	0.25	(3.9)	0.5	(0.2)	-	-	-	5.14	-	-	
56	第 77 図	PL.48	尖根片刃箭式	(1.9)	(1.9)	0.6	0.25	-	-	-	-	-	-	1.20	-	-	
57	第 77 図	PL.48	尖根柳葉式	(5.3)	3.2	0.95	0.25	(2.1)	0.5	0.3	-	-	-	4.20	第 13 図 12	-	
58	第 77 図	PL.48	尖根柳葉式	(5.6)	3.0	1.0	0.2	(2.6)	0.5	0.25	-	-	-	3.68	-	-	
59	第 77 図	PL.48	尖根柳葉式	(5.8)	2.9	0.9	0.2	(2.9)	0.5	0.25	-	-	-	3.98	-	-	
60	第 77 図	PL.48	尖根柳葉式	(5.5)	1.9	0.9	0.2	(3.6)	0.5	0.2	-	-	-	2.51	-	図版第 14　B	
61	第 77 図	PL.48	尖根柳葉式	(5.2)	2.5	1.1	0.2	(2.7)	0.6	0.3	-	-	-	4.55	-	-	
62	第 77 図	PL.48	尖根柳葉式	(4.7)	〔3.0〕	(0.7)	0.2	(1.7)	0.6	0.25	-	-	-	4.10	-	-	2 片付着
62	第 77 図	PL.48	尖根柳葉式	(2.6)	(2.6)	0.9	0.2	-	-	-	-	-	-				2 片付着
63	第 77 図	PL.48	尖根柳葉式	(3.7)	2.4	1.1	0.2	(1.3)	0.6	0.2	-	-	-	3.45	-	-	
64	第 77 図	PL.48	尖根柳葉式	(3.3)	(3.15)	0.9	0.2	-	-	-	-	-	-	1.69	-	-	
65	第 77 図	PL.48	尖根柳葉式	(2.9)	2.8	0.9	0.2	0.1	0.6	0.25	-	-	-	1.95	-	-	

報告番号	挿図番号	図版番号	形式	法量（cm）										重量（g）	旧報告書		備考
				全長	頸部			胴部			基部				挿図番号	写真図版	
					長	幅	厚	長	幅	厚	長	幅	厚				
66	第77図	PL.48	尖根柳葉式？	(3.6)	(1.0)	0.9	0.2	(2.7)	0.5	0.2	-	-	-	1.82	-	-	
67	第77図	PL.48	尖根柳葉式？	(5.8)	(0.8)	0.9	0.2	(5.0)	0.6	0.3	-	-	-	4.78	-	-	
68	第77図	PL.48	頸部	(7.5)	-	-	-	(7.5)	0.5	0.35	-	-	-	7.32	-	-	
69	第77図	PL.48	頸部	(7.1)	-	-	-	(7.1)	0.7	0.3	-	-	-	5.06	-	-	
70	第77図	PL.48	頸部	(3.0)	-	-	-	(3.0)	0.4	0.3	-	-	-	1.57	-	-	
71	第77図	PL.48	頸部	(6.0)	-	-	-	(6.0)	0.5	0.25	-	-	-	3.70	-	-	
72	第77図	PL.48	頸部	(4.7)	-	-	-	(4.7)	0.5	0.25	-	-	-	2.83	-	-	
73	第77図	PL.48	頸部	(3.1)	-	-	-	(3.1)	0.5	0.25	-	-	-	1.84	-	-	
74	第77図	PL.48	頸部	(4.5)	-	-	-	(4.5)	0.5	0.3	-	-	-	3.59	-	-	
75	第77図	PL.48	頸部	(3.4)	-	-	-	(3.4)	0.5	0.3	-	-	-	3.02	-	-	
76	第77図	PL.48	頸部	(1.2)	-	-	-	(1.2)	0.6	0.3	-	-	-	0.69	-	-	
77	第77図	PL.48	頸部	(3.4)	-	-	-	(3.4)	0.55	0.4	-	-	-	4.13	-	-	
78	第77図	PL.48	頸部	(7.1)	-	-	-	(7.1)	0.6	0.3	-	-	-	6.50	-	-	
79	第77図	PL.48	頸部	(6.7)	-	-	-	(6.7)	0.5	0.25	-	-	-	6.42	-	-	
80	第77図	PL.48	頸部	(6.0)	-	-	-	(6.0)	0.5	0.3	-	-	-	4.61	-	-	
81	第77図	PL.48	頸部	(6.0)	-	-	-	(6.0)	0.5	0.4	-	-	-	6.04	-	-	
82	第77図	PL.48	頸部	(4.0)	-	-	-	(4.0)	0.5	0.3	-	-	-	2.49	-	-	
83	第77図	PL.48	頸部	(5.2)	-	-	-	(5.2)	0.55	0.35	-	-	-	4.78	-	-	
84	第77図	PL.48	頸部	(2.4)	-	-	-	(2.4)	0.5	0.2	-	-	-	1.48	-	-	
85	第77図	PL.48	平根（頸部）	(2.1)	-	-	-	(2.1)	0.7	0.35	-	-	-	2.32	-	-	
86	第77図	PL.48	頸部	(1.2)	-	-	-	(1.2)	0.6	0.4	-	-	-	1.43	-	-	
87	第77図	PL.48	頸部	(4.3)	-	-	-	(4.3)	0.55	0.3	-	-	-	3.32	-	-	
88	第77図	PL.48	頸部～茎部	(7.8)	-	-	-	(7.4)	0.5	0.3	(0.4)	0.4	(0.15)	5.03	-	-	
89	第77図	PL.48	頸部～茎部	(7.7)	-	-	-	(6.5)	4.5	0.35	(1.2)	0.4	0.3	5.45	-	-	
90	第77図	PL.48	頸部～茎部	(5.6)	-	-	-	(4.2)	0.5	0.25	(2.3)	0.5	0.25	6.03	-	-	
91	第77図	PL.48	頸部～茎部	(5.7)	-	-	-	(4.4)	0.7	0.4	(2.3)	[0.4]	[0.3]	5.42	-	-	
92	第77図	PL.48	頸部～茎部	(9.4)	-	-	-	(6.2)	0.6	0.35	(3.2)	0.4	0.3	8.93	-	-	
93	第77図	PL.48	頸部～茎部	(7.3)	-	-	-	(4.6)	0.6	0.3	(2.7)	0.5	0.3	6.32	-	-	
94	第77図	PL.48	頸部～茎部	(5.1)	-	-	-	(3.3)	0.65	0.3	(1.8)	0.9	0.5	4.21	-	-	
95	第77図	PL.48	頸部～茎部	(2.5)	-	-	-	(1.3)	0.7	(0.2)	(1.2)	0.7	0.35	1.81	-	-	
96	第77図	PL.48	頸部～茎部	(4.4)	-	-	-	1.6	0.7	0.25	2.8	0.25	0.25	2.58	-	-	
97	第77図	PL.48	頸部～茎部	(7.8)	-	-	-	(3.1)	0.55	0.25	4.7	0.5	0.25	4.53	-	-	
98	第77図	PL.48	頸部～茎部	(7.8)	-	-	-	(3.0)	0.6	0.35	4.8	0.45	0.25	5.57	-	-	
99	第77図	PL.48	平根（頸部～茎部）	(4.0)	-	-	-	(2.8)	0.6	0.35	(1.2)	0.6	0.3	4.70	-	-	
100	第77図	PL.48	平根？（頸部～茎部）	(6.1)	-	-	-	(4.5)	0.8	(0.35)	(1.6)	0.5	(0.15)	5.07	-	-	
101	第77図	PL.49	平根？（頸部～茎部）	(4.6)	-	-	-	(1.7)	0.7	0.4	(2.9)	0.4	0.25	4.03	-	-	木質あり
102	第77図	PL.49	平根（頸部～茎部）	(6.0)	-	-	-	(3.0)	[0.75]	[0.4]	(3.0)	0.4	0.4	6.63	第13図	10	頸円形開？
103	第77図	PL.49	平根（頸部～茎部）	(7.6)	-	-	-	(5.3)	0.65	0.35	(2.4)	[0.5]	[0.4]	9.84	-	-	木質あり
104	第77図	PL.49	茎部	(2.6)	-	-	-	-	-	-	(2.6)	0.35	0.35	1.50	-	-	
105	第77図	PL.49	茎部	(5.6)	-	-	-	-	-	-	(5.6)	0.6	0.5	2.01	-	-	木質あり
106	第77図	PL.49	茎部	(3.2)	-	-	-	-	-	-	(3.2)	0.55	0.25	1.67	-	-	
107	第77図	PL.49	茎部	(4.8)	-	-	-	-	-	-	(4.8)	0.4	0.25	1.26	-	-	
108	第77図	PL.49	茎部？	(3.3)	-	-	-	-	-	-	(3.3)	0.6	0.35	2.97	-	-	
109	第77図	PL.49	茎部	(3.1)	-	-	-	-	-	-	(3.1)	0.35	0.25	0.74	-	-	
110	第77図	PL.49	茎部	(1.3)	-	-	-	-	-	-	(1.3)	0.4	0.3	0.84	-	-	
111	第77図	PL.49	茎部	(3.0)	-	-	-	-	-	-	(3.0)	0.5	0.3	2.01	-	-	
112	第77図	PL.49	茎部	(2.9)	-	-	-	-	-	-	(2.9)	0.5	0.25	1.81	-	-	
113	第77図	PL.49	茎部	(2.0)	-	-	-	-	-	-	(2.0)	0.45	0.4	1.07	-	-	
114	第77図	PL.49	茎部	(1.1)	-	-	-	-	-	-	(1.1)	0.4	0.35	0.44	-	-	
115	第77図	PL.49	茎部	(5.1)	-	-	-	-	-	-	(5.1)	[0.3]	[0.3]	2.12	-	-	
116	第77図	PL.49	茎部	(4.1)	-	-	-	-	-	-	(4.1)	0.6	0.3	2.08	-	-	
117	第77図	PL.49	茎部	(3.7)	-	-	-	-	-	-	(3.7)	(0.55)	(0.5)	3.19	-	-	
118	第77図	PL.49	茎部	(4.0)	-	-	-	-	-	-	(4.0)	0.6	0.35	2.60	-	-	
119	第77図	PL.49	茎部	(3.3)	-	-	-	-	-	-	(3.3)	0.55	0.35	1.45	-	-	
120	第77図	PL.49	茎部	(4.0)	-	-	-	-	-	-	(4.0)	(0.5)	(0.4)	1.58	-	-	木質あり

《工具》

・刀子

報告番号	挿図番号	図版番号	全長	法量（cm）						重量（g）	旧報告書		備考
				刀身部			茎部				挿図番号	写真図版	
				長	幅	厚	長	幅	厚				
121	第78図	PL.49	(6.0)	(4.4)	1.1	0.25	(1.6)	0.75	0.3	4.41	-	-	
122	第78図	PL.49	(5.9)	(5.9)	1.0	0.2	-	-	-	2.90	-	-	
123	第78図	PL.49	(3.9)	(3.9)	0.9	0.25	-	-	-	2.83	-	-	
124	第78図	PL.49	(3.9)	(3.9)	0.6	0.2	-	-	-	1.19	-	-	
125	第78図	PL.49	(3.7)	-	-	-	(3.7)	(0.6)	(0.2)	2.33	-	-	
126	第78図	PL.49	(3.0)	(3.0)	1.3	0.3	-	-	-	3.46	-	-	
127	第78図	PL.49	(5.0)	-	-	-	(5.0)	0.8	0.3	3.57	-	-	
128	第78図	PL.49	(6.7)	(6.7)	0.6	0.2	-	-	-	3.42	-	-	
129	第78図	PL.49	(10.9)	-	-	-	-	-	-	10.33	-	-	
130	第78図	PL.49	(7.2)	(7.2)	1.3	0.35	-	-	-	8.16	-	-	

報告番号	神図番号	図版番号	法量（cm） 全長	刀身部 長	幅	厚	茎部 長	幅	厚	重量（g）	旧報告書 神図番号	写真図版	備考
131	第78図	PL.49	(4.7)	(2.6)	1.6	0.4	(2.1)	0.6	0.2	6.08	-	-	鏃含む
132	第78図	PL.49	(13.9)	(13.9)	(1.6)	(0.3)	-	-	-	23.80	-	-	
133	第78図	PL.49	(5.1)	(5.1)	1.6	(0.3)	-	-	-	7.58	-	-	

・鉇

報告番号	神図番号	図版番号	法量（cm） 全長	幅	厚さ	重量（g）	旧報告書 神図	写真図版	備考
134	第79図	PL.49	(5.8)	0.9	0.4	10.74	-	図版第14 A	
135	第79図	PL.49	(3.7)	0.85	0.3	4.19	-	-	木質あり
136	第79図	PL.49	(3.9)	0.7	0.2	1.98	-	-	鉋？ 刀子の可能性あり

《馬具》

・轡

報告番号	神図番号	図版番号	法量（cm） 銜 全長	長	銜金外法	先端環外法	鏡板 全高	環幅	立聞 環高	高	幅	引手 長	円環外法	壺外法	重量（g）	旧報告書 神図番号	写真図版	備考
137	第80図	PL.50	左 [17.4] 右	(8.5) (8.2)	(2.1) [2.4]	(2.6) 3.0	8.25 7.8	7.45 7.2	6.45 5.9	1.8 1.9	(4.0) 4.8	(5.7) [15.6]	2.3 2.1	- 2.9	218.77	第13図 20	図版第15 B	大型矩形立聞環状鏡板付轡

・帯飾金具

報告番号	神図番号	図版番号	法量（cm） 全長	幅	厚さ	脚頭径	脚張高	脚数	重量（g）	旧報告書 神図番号	写真図版	備考
138	第80図	PL.50	3.0	2.8	0.35	0.8	0.4	(3)	14.03	第13図21	-	4脚 金銅張り
139	第80図	PL.50	2.9	2.8	0.3	0.8	0.4	(1)	10.39	-	図版第15 B	4脚 金銅張り
140	第80図	PL.50	1.9	2.5	0.15	0.55	0.25	(1)	3.55	第13図22	-	2脚

・鉸具

報告番号	神図番号	図版番号	法量（cm） 全長	基部幅	尻幅	最小幅	厚さ	重量（g）	旧報告書 神図番号	写真図版	備考
141	第80図	PL.50	(5.0)	-	-	-	0.4	2.60	-	-	
142	第80図	PL.50	5.5	3.3	3.5	2.65	0.3	8.66	第13図23	図版第15 B	

《土器》

報告番号	神図番号	図版番号	種別	器種	法量（cm） 口径	底径	器高	内面色調	外面色調	焼成	残存率	旧報告書 神図番号	写真図版	備考
143	第81図	PL.51	須恵器	坏蓋	14.0	-	4.2	10Y6/1 灰	5Y7/1 灰白	良好	85%	第14図4	図版第18 A	144とセット
144	第81図	PL.51	須恵器	坏身	12.5	-	4.2	5Y6/1 灰	5Y6/2 灰オリーブ	良好	100%	第14図8	図版第18 A	143とセット
145	第81図	PL.51	須恵器	坏蓋	13.6	-	3.4	7.5Y4/1 灰	7.5Y3/1 オリーブ黒	良好	90%	第14図6	図版第18 B	146とセット
146	第81図	PL.51	須恵器	坏身	12.0	-	3.7	7.5Y4/1 灰	7.5Y4/1 灰	良好	100%	第14図10	図版第18 B	145とセット
147	第81図	PL.51	須恵器	坏蓋	13.8	-	4.2	7.5Y5/1 灰	5Y6/1 灰	良好	90%	第14図5	図版第18 B	148とセット
148	第81図	PL.51	須恵器	坏身	12.9	-	4.0	2.5Y7/1 灰白	5Y7/1 灰白	良好	90%	第14図9	図版第18 B	147とセット
149	第81図	PL.51	須恵器	坏蓋	15.5	-	4.9	2.5Y7/1 灰白	2.5Y7/2 灰黄	良好	85%	第14図3	図版第18 A	150とセットか
150	第81図	PL.51	須恵器	坏身	13.8	-	4.7	5Y7/1 灰白	5Y7/2 灰白	良好	90%	第14図7	図版第18 A	149とセットか
151	第81図	PL.51	須恵器	提瓶	8.4	-	22.0	10YR3/3 暗褐	10YR4/3 にぶい黄褐	良好	95%	第15図15	図版第17 A	
152	第81図	PL.52	須恵器	フラスコ瓶	7.7		22.8	10Y5/2 オリーブ灰	2.5Y6/1 黄灰	良好	90%	第15図16	図版第17 A	
153	第81図	PL.52	須恵器	甕	12.5	-	15.5	5Y6/1 灰	5Y5/1 灰	良好	95%	第14図11	図版第19 A	
154	第81図	PL.52	須恵器	甕	[12.7]	-	14.7	5Y5/1 灰	5Y7/1 灰白	良好	65%	第14図13	図版第19 A	
155	第81図	PL.52	須恵器	甕	11.4	-	(14.3)	5Y6/1 灰	7.5Y5/1 灰	良好	(65%)	第14図12	図版第19 A	
156	第81図	PL.52	土師器	坏	13.5	-	4.4	7.5YR6/4 にぶい橙	5YR6/6 橙	良好	65%	第15図22	図版第19 B	
157	第81図	PL.52	土師器	坏	14.2	-	5.2	5YR2/1 黒褐	5YR5/6 明赤褐	良好	95%	第15図21	図版第19 B	内面黒色処理
158	第81図	PL.53	土師器	高坏	13.5	11.0	9.2	10R4/8 赤	10R4/8 赤	良好	90%	第15図20	図版第20 B	赤彩
159	第81図	PL.53	土師器	高坏	13.1	10.2	8.7	10R4/8 赤	10R4/8 赤	良好	70%	第15図17	図版第20 A	赤彩
160	第81図	PL.53	土師器	高坏	13.1	10.2	8.5	10R5/8 赤	10R4/8 赤	良好	90%	第15図19	図版第20 B	赤彩
161	第81図	PL.53	土師器	高坏	13.2	9.9	8.3	2.5YR4/8 赤褐	2.5YR4/8 赤褐	良好	90%	第15図18	図版第20 A	赤彩
162	第82図	PL.53	須恵器	横瓶	12.0	-	23.6	N5/ 灰	N5/ 灰	良好	95%	第15図14	図版第17 B	

【出土地不明遺物観察表】

《装身具》

・玉類

報告番号	挿図番号	図版番号	形式	素材	法量（mm） 長さ	径／幅	孔径	製作技法	色調	重量（g）	備考
1	第85図	PL.54	ガラス丸玉	ガラス	(8.2)	(11.0)	2.7	巻き付け	紺色透明	0.73	K95？ 一部欠損
2	第85図	PL.54	ガラス丸玉	ガラス	(6.0)	(9.0)	3.0		紺色透明	0.43	K95？ 一部欠損
3	第85図	PL.54	ガラス丸玉	ガラス	6.5	10.0	3.0～5.5	引き伸ばし	濃青色透明	0.36	K95？ 一部欠損
4	第85図	PL.54	蜆点文ガラス玉	ガラス	8.0	(11.0)	3.0		淡青色透明（地） 濃青色透明（蜆点）	0.52	K95？ 一部欠損

《武器》

・大刀

報告番号	挿図番号	図版番号	部位	法量（cm） 全長	刀身部 長	幅	厚	重量（g）	備考
5	第85図	PL.54	刀身部	(12.6)	(12.6)	3.1	0.7	51.14	6と同袋 K99? 図版12BK第99号墳 大刀身（1）中段右から2片目？
6	第85図	PL.54	刀身部	(5.3)	(5.3)	2.95	0.7	26.97	5と同袋 K99?
7	第85図	PL.54	刀身部	(17.5)	(17.5)	(2.0)	(0.2)	18.87	8と同袋 K99?
8	第85図	PL.54	刀身部	(11.4)	(11.4)	2.3	0.5	51.12	7と同袋 K99? 図版12BK第99号墳 大刀身（2）中段右端？

・鉄鏃

報告番号	挿図番号	図版番号	形式（部位）	法量（cm） 全長	鏃身部 長	幅	厚	頸部 長	幅	厚	茎部 長	幅	厚	重量（g）	備考
9	第85図	PL.54	尖根柳葉式	(6.9)	(3.0)	0.9	0.2	(3.9)	0.6	0.25	-	-	-	6.14	K95～K99
10	第85図	PL.54	尖根柳葉式	(6.2)	(2.4)	1.0	0.2	(3.8)	0.6	0.35	-	-	-	5.57	K95～K99
11	第85図	PL.54	尖根柳葉式	(5.2)	[2.8]	1.0	0.2	[2.4]	0.6	0.3	-	-	-	4.43	K95～K99
12	第85図	PL.54	頸部	(3.5)	-	-	-	(3.5)	0.6	0.3	-	-	-	2.08	K95～K99
13	第85図	PL.54	頸部？	(2.4)	-	-	-	(2.4)	0.4	0.2	-	-	-	1.00	K95～K99
14	第85図	PL.54	頸部～茎部	(2.7)	-	-	-	(0.9)	0.55	0.25	(1.8)	0.4	0.25	1.20	K95～K99
15	第85図	PL.54	頸部～茎部	(4.4)	-	-	-	(2.0)	0.6	0.3	(2.4)	0.3	0.25	2.52	K95～K99
16	第85図	PL.54	頸部～茎部	(4.2)	-	-	-	(2.3)	0.5	0.3	(1.9)	0.35	0.3	2.76	K95～K99
17	第85図	PL.54	頸部～茎部	(7.7)	-	-	-	(2.7)	0.6	(0.1)	(5.0)	0.3	0.25	4.10	K95～K99
18	第85図	PL.54	茎部	(2.8)	-	-	-	-	-	-	(2.8)	0.45	0.3	1.63	K95～K99
19	第85図	PL.54	茎部	(2.0)	-	-	-	-	-	-	(2.0)	0.3	0.3	0.63	K95～K99
20	第85図	PL.54	茎部	(1.9)	-	-	-	-	-	-	(1.9)	0.4	0.4	0.90	K95～K99
21	第85図	PL.54	茎部	(3.2)	-	-	-	-	-	-	(3.2)	0.4	0.4	1.64	K95～K99
22	第85図	PL.54	茎部	(1.4)	-	-	-	-	-	-	(1.4)	0.2	0.2	0.17	K95～K99

《工具》

・刀子

報告番号	挿図番号	図版番号	法量（cm） 全長	刀身部 長	幅	厚	茎部 長	幅	厚	重量（g）	備考
23	第85図	PL.54	(4.4)	-	-	-	(4.4)	0.6	0.3	3.57	K95～K99 茎部木質あり
24	第85図	PL.54	(4.6)	(3.7)	0.9	0.3	(0.9)	0.6	0.35	2.55	K95～K99 茎部木質あり

《馬具》

・帯飾金具

報告番号	挿図番号	図版番号	法量（cm） 全長	幅	厚さ	鋲頭径	鋲頭高	鋲数	重量（g）	備考
25	第85図	PL.54	2.7	1.65	0.2	0.7	0.3	2	6.10	K98・K99か？ 金銅装
26	第85図	PL.54	(2.0)	2.1	0.2				2.67	K95～K99 馬具？ 帯飾金具？

・円形金具

報告番号	挿図番号	図版番号	法量（cm） 全長	幅	厚さ	重量（g）	備考
27	第85図	PL.54	(1.9)	(2.6)	0.4	4.99	K95～K99 K98の可能性